
孤独な魂 あたたかな軌跡

もじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な魂 あたたかな軌跡

【Nコード】

N2760L

【作者名】

もじ

【あらすじ】

地味で目立たない主人公と異世界の神様のお話。
幼い頃、近所のお姉さんからもらったお守りをずっと大事にしている。それがあったから、私は今まで何とかやってこれたのだと思う。
臆病で不器用な、けれどひたむきな二人の恋物語。

001（はじまりは、春の嵐）

今日も雨。

ここのところ、ずっと雨だ。せっかく咲いた桜の花も、今日か明日あたりには満開を通り過ぎて散ってしまうだろう。今朝のテレビのお天気コーナーでもそう言っていた。

片手で傘を開いて大粒の雨が落ちる世界へ足を踏み出す。

ぼつ、ぼつぼつぼつ……。

雨が傘を叩く音を聞きながら通い慣れた道を歩く。

高校を卒業してすぐに上京し、就職した職場へと向かう。早いものでもう五年目になる。電車を使わずに通う事が出来る距離に部屋を借りた。徒歩で二十分。満員電車には今でも乗れない。

途中で、あ、と思い、立ち止まり、鞆の中身を確かめた。

お守りを鞆の中へ入れたっけ。

ソフトボール大のまん丸の球体。真っ黒で艶やかで、多分、何かの鉱石を加工して作ったものだろう。鞆の中へ手を入れて、その表面を指先で撫でると、ひやりつるりと心地良い。

ああ良かった。持って来てる、ちゃんと。

軽やかな重みのある、これは私の大事なお守り。

幼い時に住んでいた町で、近所のお姉さんにもらったものだ。

それからずっと、肌身離さず持ち歩いている。

どこに出かけるにも必ず持ってゆき、帰宅したらテレビの脇の定位置に置く。思いついたように手に取って、両手でころころ転がして、寝る時には枕元に置いて眠りにつく。子供の頃は胸に抱いて眠

っていた。

落ち込んだりした時も嬉しい事があった時も、いつもこれに触れてこれを抱き締めた。

何故だかこれが傍にあるだけで心の底から安心して、自分の居場所がそこにあるような気になって、落ち着いた気分になれるのだ。このお守りがあつたお陰で、今まで何とかやってこれた。

とっても不思議な、黒くてまん丸の石。

落としても割れず、ひびや傷一つつかない。汚れてもタオルですと拭くだけで元通りのつやつやになる。

私の大事な大事な、お守り。

『もう唯音つたら、本当に泣き虫なんだから。あ、ねえこれあげる。これね、人外様のお守りなんだよ。これを持ったら何があっても大丈夫だから。もう泣いちゃだめだよ』

うん。もう泣いてないよ。大丈夫。お守りがあるから、大丈夫。

「おはようございます」

定時刻に出社。

*

「最近雨ばかりで気が滅入るわあ」

「ほんとー！　なんか天気、おかしいんだってね。今の時期にこんなに雨が降る事ってあんまりないんだって、テレビで言ってた」
「ね。早くランチ行こ。混んじゃう」

「あ、倉田さん。電話、お願い出来る？」

私は華やかな一団を振り返り、笑って頷いた。
すると矢崎さんがお財布を持ったままの手を、ぶんぶん振って
くれた。

「いつもごめんねえ。メルバースのプリン、買ってくるから！」

朝会社へ行く途中で寄ったコンビニのおにぎりをもそもそと食べる。本当は、お弁当を作って持ってきた方が安上がりなのだけど、
やっぱりこっちの方が楽なんだ。

人が減ったお昼時のフロアは、しんと静かではっとする。クレジ
ット系関連会社の三階、事務フロア。

今日は皆出払っていて、沈黙するパソコンの林の中でただ一人、
ぼつねんとおにぎりをもぐもぐ食べている。

ごおおお、と音がして窓へと顔を向けると、雨がまるで滝のよう
に流れてゆくのが見えた。それに風が出て来たようで、ここから見
える木々の緑が、ぶおんぶおんと左右に大きく揺れている。

うわあ、暴風雨。矢崎さん達大丈夫かな。

「ねえ」

風と雨と、パソコンのぶおおお、という音しか聞こえないフロア
に声が響いた。

私はおにぎりを両手で持ったまま振り返って、そして、息をのん
だ。

フロアの入り口に男の子が佇んでいる。

驚いて勢い良く立ち上がった。

男の子は事務所の内側にいる。もちろんだけど、ここは関係者以外立ち入り禁止だし、パスがなければ入れないようになっているはず……。

「ねえ」

男の子は私にじつと視線を合わせて、なおも話しかけてくる。勇気を振り絞って、小さく声を出した。

「あ、あの……ここ」

「どうして君がそれを持つてるの？ おかしいなあ……」

え？

その言葉にますます混乱してしまい、呆然と相手を見つめた。

男の子はとても綺麗な顔をしている。ストレートの短髪は茶色で、とっても柔らかそう。色白の肌に大きな黒目。灰色のパーカーにジーンズ。十四、五歳くらいだろうか。身長は、ええと、私よりも低い。両手はパーカーのポケットに入っている。

私は両手で持ったままの食べかけのおにぎりにちらりと視線を投げた。

「お、おにぎり？」

ふふ……。

男の子が笑った。

あ、可愛い。

「違う。珠だよ。真っ黒の」

ぞわ、と全身に緊張が走る。

……え？

プルルルルルル。

びくりと肩が震えた。

机の上にある電話機が、一斉に外線ランプを点灯させた。

慌てて席へ戻りおにぎりをコンビニの袋の上に置いて、受話器を取り上げ通話ボタンを押す。

条件反射のように社名を告げながら、フロアの入り口を振り返る。

無愛想なグリーンの壁。フロアを仕切るパーテーションが見える。そこに、男の子はいなかった。

幽霊だったのかも。ううん、あれは幽霊っていうより……天使？

終業のチャイムが鳴って、皆がいそいそとパソコンをシャットダウンしてゆく。今日は金曜。

「お疲れ様でしたー」

「おつかれー」

「お先に失礼します」

でもどっちにしたって、あれは絶対お守りの事を言っていた。

や……。考えすぎ。仕事のしすぎ？ いやいや、そこまでしてない。

寝不足？ 白昼夢。きっと、それだ。

ぼんやりと昼間の出来事を考えながら制服から私服に着替え、ロッカーに備え付けの小さな鏡に一瞬だけ自分を写す。くせつ毛の髪は、今日みたいに雨が降って湿気の多い日には私の意思とは関係なく、あらぬ方向に毛先が遊ぶ。いつも一つに束ねて右肩に垂らしている。横に流した前髪を、ちゃんと引っ張ってロッカーを締めた。

ざああああ。

表へ出ると盛大な雨に迎えられる。昼時よりは幾分風は収まっているみたいだ。傘を開いて歩き出そうとした時。

「倉田さん、お疲れえ」

振り返ると矢崎さんが手を振ってくれた。数人の女子社員を連れている。彼女はいつも陽気。茶色の長い髪は、湿度百二十パーセントの中にいても真っ直ぐで艶やかだ。

「あ、お疲れさまです」

「ねえ、今日これから暇？合コンあるんだ。一人急に来れなくなっちゃってさ、どう？」

ああ、だからか。

今日は朝から雨だったのに皆とっても綺麗な格好をしている。私とはいうと、黒のジャケットに灰色のカットソー、ジーンズに足元はスニーカーだ。雨でなくても普段からこんな格好。職場が家から近いと、おしゃれもおろそかになる。

「ほんとだねえ、お花見合コンのはずだったのに残念」

「イタリアンのお店になったんだって」

「相手の年齢って？」

「うちらと同じくらいって言ってたよ。だから二十三とか？」

「どう？行くでしょ？」

「ご、ごめんなさい。今日用事があって……」

矢崎さんは返事を聞いて、あら、と少しだけ目を丸くした。私はそれに慌てて、すみません、と付け足す。

「あ、良いの良いの。急だもんね。今度、皆で飲み会しよ。じゃ、お疲れ！」

ぼんぽん。傘を軽やかに開いて、賑やかにおしゃべりしながら雨に包まれた町に消えてゆく。

ほっと胸をなでおろし、皆の後ろ姿を眺める。

雨と風が強いから、気をつけてね。

繁華街と反対の道へ歩き出す。

「ごお、と風が吹いて傘が持つていかれそうになり、両手で支えた。耳には雨と風の音ばかり。まだ五時半過ぎだというのに辺りは真っ暗で、周りに誰も歩いていない。途中でコンビニに寄って惣菜パンとカップスープを買った。コンビニ袋を右腕に垂らして早足で家へと向かう。」

「本当は用事なんてないのだけれど……。初対面の人と気さくに話す事が出来ない私には、合コンなんてハードル、絶対越えられそうにない。うまく喋れなくて空気を悪くしてしまうに違いない。」

「たまに補欠で誘ってもらうのだけれど、本当に申し訳なく思ってしまう。」

「こんな私にまで声をかけてくれて、ありがとう。」

「先にマンションが見えて来た。住む部屋はお金を惜しまずに決めた。オートロックのマンション。」

「バシャバシャバシャ！」

「遠くから激しい足音。後ろから誰かが走ってくる。すごく急いでいるみたい。私は道の片側に寄った。」

「バシャッ！」

「どきっ、とする。すぐ背後でその誰かが立ち止まった。緊張してゆっくりと後ろを振り返る。」

「びっくりした。相手は傘を差しておらず、全身ぐっしりと雨に濡れている。しかも裸足。雨を含んで黒く見えるジーンズに身体にぴったりと張り付いた白のシャツ。」

「ゆっくりと傘を傾けて見上げる。なんて大きな人だろう……。」

顔に黒い髪が張り付いている。肩で大きく息をしながら、とても切羽詰まった表情をして、その大きな男の人は仁王立ちしていた。

はあ、はあ、はあ……。

あれ。これって。もしかして、へ、変質者。

「……見つけた」

ぎくり。

「見つけた、見つけたぞ……」

よろり。相手が一步、近づく。私は凍りついてしまった足を何とか動かして、後ずさった。

まずい。逃げなきゃ。

踵を返して走り出そうとした私の右腕が、がしりと掴まれる。

「ごおおっ。風が鳴った。

傘が風に煽られて、ひゅ、と空を飛んだ。どむ、と鞆が地面に落下する。

突然の、思わぬ温もりに身体が竦んだ。

大きな腕に抱き上げられ、ぎゅうつう、と締めつけられてゆく。

私はつま先立ちになり、息が思うように出来なくなる。顔に激しい雨を感じる。恐怖に声が出せない。

どうしよう、どうしよう。怖い。怖い。

「ああ……会いたかった」

男の低い声が、びりびりと身体を伝って届いた。
何、何の事……。

「会いたかった！ ヨーコ。俺の、ヨーコ……！」

……え？

ざああああ。

遮るものが何もない。どんどん雨に濡れてゆく。つま先だけがやっと地面についていたのも、今は完全に宙に浮いてしまっていた。締めつけられて苦しい。

相手は私の肩にぐりぐりと額を押しつけて、物凄い力で頬ずりを繰り返している。

からからの喉を開いて、必死の思いで声を出した。

「あ、あの……」

「ずっと、会いたかった」

「あの……」

「お前にもう一度会える日を、ずっと指折り、数えていた。ああ……ヨーコ」

「あの！ す、すみませんっ」

視界の端に、地面に落ちて無残にもぐしょ濡れになった鞆が見える。その口から私のお守りが顔をのぞかせていた。真っ黒のまん丸の、大事なお守り。

勇気を振り絞りぎゅっと目をつぶって、大声を上げた。

「ひ、人違いですっ!!」

相手の力が僅かに緩んだ。

「私の名前は倉田唯音です！ よ、ようこそさんじゃありませんっ！
」

私ののろまな頭は、ひどく冷静にこの状況を整理しようとそれなりに回転し始める。

ああ……そうだ。きっと外国人なんだ、この人。

だから会った途端にハグするし、裸足だし、雨なのに傘も差さないんだ。文化の違いだ、きっと。

「何っ！ な、何だ！ 誰だ、お前はっ」

地面に下ろされ、両肩を掴まれた状態で男が私の顔をまじまじと
のぞきこんできた。

今や全身が雨に濡れ、水滴が顔を伝って目を開けているのがやっ
とだった。

「何だ、この地味な女はっ！ お前は誰だっ」

目の前の大きな男が両目を見開いて大きな声を上げた。
強い力で身体をかくかくと揺さぶられ、よろよろと足元がふらつ
く。

ひいい。こ、怖い。

「すっ、すみません！ く、くらたですっ。倉田唯音です！」

「ユイネ！？」

「ひ、人違いなんです、ごめんなさいっ」

「女！ ヨーコはどこだ！？ ヨーコをどこへやった！？」

「え、ええと……」

「答えるー！」

「ごめんなさいっ！ 知りませんっ」

「テルッ！ どうなってる！？」

パシャン。一瞬、薄青い光が閃いた。

「や、それがさあ。僕にも分かんないんだ」

私はまた息をのむ。

天使……。

あの男の子がいつの間にかすぐ傍に立っていた。
何故だかほっとして、縋る思いで男の子を見つめる。天使みたいに綺麗な男の子は、苦笑して男に言った。

「離してあげなよ、その子」

両肩に鋭い痛みが走る。ぎゅつと眉根を寄せて相手を見上げた。
とんでもない力で肩を掴まれている。
いたい。

「す、すみません……あの、い、痛い」

「……何故だ」

男が低く呟いて、ぐらりと大きな身体が傾き、呆然と立ちつくす
私の足元にどうと倒れてしまった。

は、は、と浅い呼吸を繰り返して足元を見下ろす。ぴくりとも動かない身体に容赦なく雨が降り注いでゆく。

「あ、ああつ。あのっ！ 大丈夫ですかっ」

大変だ。救急車、警察……どっち。どっちも！？

ぐたりと地面に落ちている鞆に慌てて手を伸ばす。お守りを素早く鞆の中に収めて、震える手で携帯を探る。ぽたぽたと目の前に水滴が幾筋も落ちてきて前が見えづらい。空いている手で額を拭って髪を押さえつける。ああ、でもこんなに濡れてしまったら、携帯もダメになってるかも。

「……よいしょ。ねえ、君の家、このマンション？」

何だかひどく冷静な男の子の声が聞こえる。私は視線を鞆に向けたまま、反射的に答えていた。

「は、はい」

「何号室？」

「ええと、603」

「オッケー」

はっとして男の子を見る。驚いた事に、小柄なその子が、倒れていた大柄の男を抱きかかえていた。俗に言うお姫様だっこ。すごい……怪力。

その時、きいん、と耳鳴りが鳴った。あまりにも鋭く頭を突き抜けるような音だったので、思わずぎゅっと目をつぶった。次の瞬間、瞼を通り越して視界が真っ白に焼けた。激しい光に包まれる。

「な、なに……」

すると今度はかっと身体が熱くなった。サウナに入ったみたいに、周囲の空気が熱波を含んで、その熱が皮膚を浸透して芯まで温めてゆく。あつい。

もう何が何だか分からない。何が起こっているのか分からない。私はぎゅっと胸に鞆を抱き締めて、中にあるお守りを思い浮かべた。

「……もう目を開けて大丈夫だよ」

その穏やかな声に、おそろおそろ瞼を開く。
見慣れた景色。
なんで？

私の部屋の玄関に立っている。

「わわわっ」

「ベッド借りるね」

男の子がスニーカーを脱いで部屋へ上がり、大きな男を抱えたまま寝室に消えた。

見慣れたカーペット。青のカーテン。寝室にリビング。小さなキッチン。私の部屋。オートロックのマンションの、私の部屋。

一瞬にして、何故だか全員が私の部屋にいる。その上あれだけ雨に打たれてべったり濡れていたのに、そんな事があつたなんて嘘のように服も髪も乾いている。濡れていない。

「さて。お茶でも入れようか」

寝室から出て来た男の子は自然な動作でキッチンに立って、やかに水を入れてお湯を沸かし始める。

間抜けな私は鞆を胸に抱えたまま、それをぼんやりと見つめていた。

「ああ、コーヒー党ね」

「ごそごそと戸棚を物色し、慣れた手つきでインスタントのコーヒーを出し、食器棚からマグカップを二つ取り出す。私は一人暮らしなので、揃いのカップは持っていない。って……」。

「あ、私、やります」

男の子の大きな黒目がじっと私を見つめ、口元が綺麗に微笑んだ。
あ、綺麗。

何とかつていう女優さんにちよつと似てる。色素が薄くて清潔感のある雰囲気。

いそいそと部屋に上がり鞆をリビングのソファに置いて、ジャケツトも脱いでそこにかけてキッチンに立つ。並んで立つと良く分かった。テル君の頭が私のちょうど、あごの辺り。身体つきは華奢な方だ。

「君つて面白い。ユイネ？」

「あ、はい。ええと……テル、君？」

「うん。普通さ、警察呼ぶわよ、とかなったりしない？」

やかんからお湯を注ぐと、マグカップからふんわりとコーヒーの香りが漂う。天使のようなテル君が先に歩いてテーブル席に向かった。その背を追いかけて言葉をかける。

「あの、外国の方ですよね？ 外国からいらつしゃったんですよ？ そ、それで、誰かと会う約束をしてて、ようこさんて人と間違われたんでしょう？」

「ふふ……」

「あの、あの男の人、大丈夫なんですか？」

「大丈夫。少し疲れてるだけだよ。ここに来るのに飲まず食わずで、力も使いすぎた」

「それは大変……。あ、お砂糖とミルクは……」

「いらない。僕はブラック派」

……大人だ。そう言う私もコーヒーはブラック。だけど、そうやって飲むようになったのはつい最近の事。

テル君と私は向かい合わせの席について、無言でコーヒーを啜った。

壁にかかっている時計を見ると、今は六時を少し回ったところ。

総菜パンとカップスープは残念な事に一緒に運ばれなかったみたい。
晩御飯、どうしよう。

「ふう。ねえユイネ。このまま話を進めて良い？ 説明をしなくちゃ。それに、君からも聞かなくちゃね。どうしてユイネが、あの黒い珠を持っているのか」

「あ！ そ、それは私、別に盗んだとか、そんなんじゃないかって……」

言い訳をしようと慌てて口を開いた私に向かって、テル君はにっこりと微笑んだ。エンジェルスマイル。
私の胸がきゅん、と鳴った気がした。

「良いよ。分かってる。まずは僕らの事」

「……はい」

これじゃあどっちが年上だか分からない。

「僕らは、君達が住むこの世界とは違う世界から来たんだ。同じ時を刻み同じ命を育む。並行して存在しながら決して重ならない世界。空間を共有しない異世界。そういう世界が、ここと、僕らの世界と、あと三つ存在してる」

その話の入り口から、私の頭はショート寸前だった。

テル君と、あの大きな男の人が住んでいる世界はガルクループという世界？ 星？ らしい。

そこは私のいるこの場所と対して変わらないのだという。

「人も動物も万物の流れもだいたいが似てる。人は食べて寝て、仕事をして人を愛する。寿命も八十年くらいかな。見ての通り、姿形も機能も一緒さ。ただ一つ、違う点があるんだ。僕らの世界の住人達は、自分達が生きている世界の他にも、全く異なる空間がある事を知っている」

四つの世界とつながっている扉が、その世界には存在している。

「異世界とつながる扉も、四つある。その扉を守る者が、四人いる。別の世界で良からぬ事をしようと企む奴もいるし、何より簡単に行き来しちやまずいんだ。秩序が乱れバランスが崩れ、世界の消滅を引き起こす要因になってしまうから。力の均衡を調整し監視する役割を持つ者。特別な力を与えられし一族の末裔。それがもりびとと呼ばれる存在」

「もりびと？」

「うん。守り人。こつちの世界では、人外様って呼ばれていた時期もある」

はっとした。

じんがいさま。

それは私が生まれた場所、母の故郷にあった。その村の古ぼけた神社に祀られていたかみさまの名前だ。

「今ユイネのベッドで眠っているのが、それだよ」

「か……かみさまっ!？」

「うーん。そんなに上等な奴じゃないけど」

守り人と呼ばれる四人は、それはそれは特別で、特殊で異端で、異能の人々なのだそうだ。

テル君達の世界でもかみさまのように、もしくはそれ以上に讃えられ崇められる偉大な存在だという。

「寿命はざつと千年。特殊な力を使って扉を管理し、世界のバランスを整える。あいつが守らなくちゃいけないのが、この世界と、ことつながっている扉。いつもはガルグループにいて、この世界を管理してるんだ」

どうしよう……もうついていけない。

私は湯気の立っているコーヒーをすすず、と囁いた。テル君はそんな私にお構いなしに淡々と話を続ける。

「四つの世界の全てを創ったといわれるガリオレス一族の末裔である彼らは、想像もつかないような絶大な力を持つてるんだ。その力が一番強くなるある一定の年齢から、時の流れが変化する。だいたい十八才くらいから驚くほどゆっくりにしか年を取らなくなる。普通のごく真つ当な巡りから外れて、千年という気の遠くなるような永い年月を、扉と世界を守る為に生き続けるんだ」

それって……。何だか少し可哀そう。

テル君は私の考えている事を読み取ったようにこっくりと頷いた。

「その守り人には、半身がいるんだ。対というのかな、ユイネの世界では伴侶って言葉が近い。守り人は伴侶を持つ事によって、守り

人自身の均衡を保つ。心と身体と力のバランスを保つ為には、伴侶の力が必要なんだ。……力というか、気というか、生命力みたいなもの」

「愛の力？」

「ぷっ……。可愛い発想だね」

じわ、と顔が熱くなってもじもじとして俯いてしまう。いい年した大人が、少年にからかわれて顔を赤くするなんて、と思うと余計に恥ずかしい。

「でもそういう事。守り人だって元は人間だもん。一人では折れてしまうよ。伴侶は本人が決める。魂の好みがあるからね。ただその伴侶は一族の者ではないから短命だ。だから、新しい命を授ける。それが漆黒の珠」

ぎょっとして目を見開く。まさか、まさか……。

「伴侶として選んだ相手に珠を渡して、相手が了承すれば契約成立。伴侶に選ばれた者も、その時点で人としての輪廻の輪から外れる事になる。漆黒の珠は、守り人のもう一つの命。たった一つしかない、唯一無二のたった一人に、託すもの」

私は慌てて立ち上がり、ソファに置いた鞆の中からお守りを取り出した。ううん、これは私のお守りなんかじゃなかった。大事な大事な、守り人さんの命。

手の中にある黒くてまん丸で、すすすべの珠を、テル君に差し出した。

「ご、ごめんなさい。そんな大事なものだとは知らずに、私、私ったら！ これ、返しますっ」

テル君は刹那、大きな瞳を更に大きくして、それから笑った。

「うん。どうも。ユイネって何でもすぐに信じてしまうの？ 危なっかしいなあ」

長い指をした繊細な手が伸びて、その珠を受け取った。

そういう訳ではないんだけど……。信じるしかない気がする。

だって瞬間移動とか、一瞬で服が乾いてしまったりだとか、マンガみたいな事ばかり起きてる。

「あともう少し。座って、ユイネ」

テル君の右手にある私のお守り……。いや違った、漆黒の珠をじっと見つめていた私は、おずおずとまた腰を下ろした。

「次に僕の事。僕は人間じゃない。守り人でもない。この世に肉体の存在しない存在」

な、なんと！？

愕然として、目の前に座っているととても綺麗な男の子の顔を凝視する。

え、でも……。確かに存在してる。その茶色の髪も色白の肌も、きちんと現実に、ある。テーブルに肘をついているテル君の腕に、私は無意識に手を伸ばしていた。

灰色のパーカーに包まれた腕は、確かに存在してる。その腕に私の指先が触れるか触れないか、と言う時。

無音のまま、テル君は消えた。

一瞬にして目の前がからっぽの空席になった。それこそ忽然と。

向こうの窓が見え青色のカーテンが見える。テーブルの上の二つのマグカップから、ぼんやりと湯気が立っている。その横にころんと漆黒の珠。置いてけぼりをくったように私一人が、ぽつんとそこにいた。

「……テル君？」

情けない程に、掠れた声しか出なかった。

どたんばたんと音がして、ぬつと大きな影が現れた。呆然としつつそちらへ顔を向ける。

「腹が減ったな。女、何かないか」

一瞬にして身体が強張る。あの大きな男の人がずかずかとリビングを横切ってキッチンへ歩いてゆく。

私は椅子から腰を浮かせたまま、口を開いて何とか空気を吸い込んで息をする。酸欠寸前の金魚。

テル君といい、この男の人といい、初対面の他人の部屋で、どうしてこんなにも自然に振るまえるだろうか……。彼は冷蔵庫を開き中を物色して、その上で舌打ちした。

「何もないぞ」

咎めるような言い方をしてぎろりとこちらを睨みつける。

身長は百九十センチはあるだろうか。身体つきも立派で、大きい。白のシャツにジーンズという出で立ちで佇んでいる彼は、外国のモデルみたい。彫の深い顔立ちで男らしい顔つきに黒の瞳は鋭い。それに今時の日本では見ないような、肩までの黒の長髪。でもそれがよく似合っている。

さっきテル君に聞いた話ではこの人が人外様で守り人で、長い長い時を生きる神様なのだ。

でも見た目はどちらかというと、悪魔。

「あ、あの。テル君が、テル君が……」

人外様は眉間にしわを寄せて私を睨みつけて、言い捨てた。

「女。何か食うものを寄せ。寄せないとお前を頭から食うぞ」
「……い、今すぐ用意します」

ああ……テル君。どこに行ってしまったの。
食べられてしまうのは困るので、ピザのデリバリーを頼む事にした。

異世界という場所からやって来た神様が何を食べるのかちっとも分らないし、ピザがお口に合うのかも分からないが、それを聞く事さえ出来ない。人外様はリビングのソファにどすんと腰を下ろして腕を組み、異様なオーラを放ち続け、無言。恐ろしい事この上ない。消えてしまいたい衝動に駆られる。

そろりとテーブルに戻って、気配を消したくてなるべくうつすらと息をする。

テーブルの上にある黒くてまん丸の私のお守り……いや違った、漆黒の珠が私の良心をちくりと刺した。

それを手に取って今年最大かと思われる程の勇気を振り絞って、声を出した。

「あの……これ」
「何故お前がそれを持つてる」

人外様は真っ直ぐに前を向いてこちらも見ずに、鋭く詰問する。
その横顔は、とつてもとつても、怒っているように見えた。

私の額にじわりと冷や汗が滲む。手の中の珠をきゅっと握り締めた。怖い。

「ち、違うんです」
「何が違う!」

「す、すみませんっ。こ、これ、人からもらったもので……」

「どもるな！」

「は、はいい」

「さっさと説明しろ！」

恐ろしすぎてくらくらしてきた。倒れてしまえたらどんなに良いだろう。だけど残念な事に私はそれ程繊細には出来ていないようで、気を失う気配はない。からからになった喉を開いた。

「私、小さい時、人外様が祀られている神社の近くに住んでいましたっ。そこでいつも遊んでくれてたお姉さんがいたんです！ 私が引越す時にそのお姉さんからもらったんですっ」

「嘘をつくな！」

「う、嘘じゃっ」

「どもるな！」

「すみませんっ」

……あれ。じゃあもしかしてあのお姉さんが、人外様の言うよう
こさん？でもそれじゃあ……。

人外様は盛大に苛々オーラを放って私を威嚇しつつ、低く呟く。

「それはいつの事だ」

「ええと……私が五つの時だから……十八年前になります」

「……ヨーコ……何故だ」

両肘を膝に寄せ頭を抱えてぐんと俯き、呻き声のような呟きをこぼした。人外様はまた重い沈黙の底へと沈む。どうしたら良いのか分からず、手の中の珠を無意識に撫でながらそろそろと後ずさった。

私がこのお守りをもらったのは、あの場所を引越す事になった五歳の時。引越さなくてはならなくなって、知らない場所へ行くのが嫌でめそめそ泣いていた私に、お姉さんは人外様のお守りだといってあの珠をくれたのだ。泣き虫の私を励ます為にくれた、お別れの品。とっても優しくて強くて楽しい人だった気がする。そういえば人形のように可愛い顔をしていた気もする。

人外様の神社でよく遊んでくれたお姉さん。でもお姉さんといつても、その当時の私から見たら「お姉さん」であっただけで、今思い返してみても私とそんなに年が離れていなかったように思う。

多分七歳から十歳くらいだったんじゃないだろうか。まだまだ少女だ。

それって……。

うなだれてソファーに座っている人外様に、ちらりと視線を向ける。今は大きな身体をしておしおとしおれさせて落ち込んでいる様子。しかしどう見ても成人男性。何百年生きてらっしゃるのかは分からないけど、見た目だけだったら二十代半ば。

か、かみさまってロリコン。ああ……何て事。

ピンポーン。

インターホンが鳴らされ、いそいそと壁にかかっている電話を取り上げる。モニターに白黒の映像。

「ピザラビットですー！」

とにかくご飯を食べて血糖値を上げよう。何だか倒れてしまいう。

足りないよりも余るくらいが良いかと思い、Lサイズのピザを二枚。結構高くつく。それがあつという間になくなってしまった。人外様は猛然と、とてつもない勢いで全てをたいらげた。テーブルには空になった箱。向かいの席に不機嫌な表情のまま、もぐもぐと口を動かしている人外様。私の目の前にはピザが一切れ。一応、私の分らしい。…… たった一切れ。素晴らしいお慈悲です。

人外様はテル君の飲み残しのコーヒーを一口飲んで、のたまった。

「くそまずい。インスタントなど飲めるか。女、俺はコーヒーよりも日本茶が好きだ。用意しておけ」

日本の事をよくご存知らしい。

空腹が満たされれば少しは機嫌を直してくれているかも知れない。私は身体中の力を総動員して、この身体はどこかにあるであろう勇氣を何とか振り絞り、声を出した。

「…… あの、かみさま」

「俺はそんな名ではない」

「…… 人外様？」

「よせ。虫唾が走る」

「じゃあ…… も、もりびと様？」

「死にたいのか、女」

泣きそう。

かみさまがこんなに横暴だなんて、ルール違反の気がする。子供の教育上にも良くない気がする。どうしたらコミュニケーションがとれるんだろう。きちんと日本語を話すし、自分の言葉も通じてい

るはずなのに、地球一周分くらい、距離があるみたい。

「あの、じゃあ、お名前を教えてください……」

人外様がぎろりと睨みつけてきた。彫の深い顔立ち。とてつもない目力。……怖すぎる。

「何故お前に名乗らねばならんだ」

無理かもしれない。会話をしようだなんて。だって、もともと地球人ではないんでしょう。宇宙人なんでしょう。あ……そうか。

よわよわと静かに深呼吸をして、おそろおそろ人外様を見つめた。

「ぴぽぽ。ぽぽぽ。ぴ？」

人外様の眉間のしわが、ぐっと深くなる。

「俺を愚弄するか！」

「ち、違いますっ。だ、だって、会話が全然出来ないから、もしかしたら宇宙語とかなのかなあって……」

じわじわと顔に熱が集中してゆく。こんなに恥ずかしい思いまでして歩み寄ろうとしているのに、相手は私の事を「女」よばわり。いまだきそんな風に女性の事を呼ぶ男性なんて、あり得ない。どんなに顔が良くっても、かみさまでも、性格が悪かったら駄目なんだから。

あまりの理不尽さにだんだんと腹が立って来た。

「も、もう良いです！ あの珠、きちんとお返しますから、もう帰ってください。お願いします」

私は席を立ち、リビングのテレビに向かった。いつもの定位置に置いてある漆黒の珠を両手ですくうように持ち上げる。今までと変わらない、軽やかな重み。ひやりつるりとした感触。大事なお守りだった。だけどこれは私のものじゃなかったんだ……。手の中にある珠をじっと見つめる。

最初にこれを返してさっさと帰ってもらえば良かった。

「あのねえ、勝手に僕をひっこめないでくれる？」

優しい声音に勢い良く振り返った。テーブル席に座る人外様の隣に、綺麗な男の子が佇んでいる。

「テル君っ」

また突然現れた天使のテル君に慌てて近づいた。テル君は私を見上げ、にこっと微笑む。その柔らかな表情に、何だかとてもほっとしてしまう。

「ごめんね、ユイネ。びっくりしたよね。可哀そうに。そんな顔しなくて良いよ。こいつ怖いでしょ？」

「テル君……よ、良かった」

「おい、テル」

「分かってるって。ユイネ、こっちで続きを話そう？」

腕を組んでむっつりとしている人外様をそのままに、テル君は私の手を掴んでソファへと足を向けた。テル君の手は白くてすべすべしていて、少しひんやりとして、あのお守りの肌触りに良く似ていた。ちゃんと触れられる。なのに、テル君は存在しない存在。

「僕はね、彼の力の一部なんだ。あいつが生まれた時に生まれ、あいつが死ぬ時に、一緒に消える。今はあいつの力がとても弱っているから、いつになく不安定な状態になってるんだよ。さっきのはあいつの意思が働いて僕を身体に戻したんだ。……かなり弱ってるみたいで、僕を保つ事も危うい」

ソファ越しにそろりと振り返る。人外様は椅子に座って腕を組んだまま、目を閉じている。眠っているのだろうか……。

「でも、お腹はいっぱいになったはずだけど……」

「うん。だけど、力が足りないんだ。自分以外の人間の力が必要なんだよ。彼はもう二百年の間ずっと、半身ともいうべき伴侶を持たずにいて不安定なままだ。昔はもつと温和な奴だったんだけどなあ。精神的にも、荒れてるみたい」

人さし指でぼりぼりとほつぺをかきながらテル君はちらりと私を見て続ける。

「ユイネの疑問も無理はないけど」

「え？」

「あいつは今、守り人としての異能力と生命力が弱ってきてるんだ。だから余計な力は使えない。この世界の均衡と、扉の結界をぎりぎりです保ってる状態だからね。……漆黒の珠がヨーコからユイネに渡った事も気付けないくらいだよ。自分の魂の伴侶として選んだ相手を見失うなんて、滑稽だよな」

本来ならば、一足飛びで伴侶の元に行く事も可能なのだ。けれどその力さえ残っていない。でも、だったらどうして……。

「ふふ。おかしいよね。何百年も生きてる奴が、十八年前に出会っ

た少女を伴侶に選んだんだ。でもね、僕らは時の概念には縛られない。相手の容姿がいくつでも構わないんだ。魂そのものを見つめるから。ヨーコの魂は、あいつのお気に入りだった。

ヨーコも伴侶になっても良いと言ってくれた。だからあの珠を渡したんだ。それにその時すぐに伴侶にしたら良かったんだけど、ヨーコが言ったんだ。大人になったら迎えに来てって」

テル君が綺麗な顔をぐつと近づけて来た。私は少しどきどきしてしまう。つやつやで柔らかそうな茶髪にくりつとした黒目。まつげも繊細で長い。ふつくらとした唇が薄く開いて、声をひそめて囁いた。

「ヨーコはあの時十歳だった。子供の口約束だよ。そりゃ、その場限りのもんさ」

深く考えずに、そんな約束を交わしたのだろう。いや、もしかしたら変なお兄ちゃんだなあ、くらいにしかその当時のお姉さんは思っっていなかったに違いない。現に伴侶の命になる漆黒の珠を、私にぽんとくれたくらいだから。私は思わず苦笑した。人外様はその約束を真面目に守ったのだ。

「迎えに来るのが、ちょっと遅かったみたいだ」

「あの……この珠、お返ししますから。本当にすみませんでした」

何となく手にしたままの黒くてまん丸の漆黒の珠を、テル君に向かっておすおすと差し出した。そんなに大きくもないソファに並んで座っているので距離が近い。すぐ傍に天使のような男の子がいるっていうだけで、何だかどぎまぎしてしまう。意味もなく赤面。でももう限界。喉からからだし、お腹もすいてるんです。

とりあえずこれを返して謝って、ひとまず帰ってもらおう。

テル君は私が差し出した漆黒の珠に視線を落として見つめてはいるが、手に取るうとしない。

「ユイネ」

ぎくつと肩が震えた。珠を持つ私の両手を、包み込むようにしてテル君の白くてすべすべの手が添えられる。

「テ、テル君？ あの……」

「ユイネ。お願いがあるんだ」

「は、はい？」

ぐい、とテル君が身体を近づける。反射的に私は身を引いた。

「僕らを救えるのは君しかいない。あいつに、気を分けて欲しいんだ」

うつうつとしたテル君の瞳が、じっと私を見つめている。心臓がばくばくと物凄い勢いで全身に血液を送り続けている。混乱してシ

ヨートしそんな頭を何とか回転させて、私は掠れ声を出した。

「え……と。その、それって、伴侶の愛の力でしょう?」

「うん」

「わ、私は伴侶ではないと思うんです……」

「うん」

「だから、その、それってどうなんでしょう」

「くそっ! まどろっこしい!」

大きな声に驚いて、ひゃつと飛び上がりそうになった。振り返ると人外様が仁王立ちしてこっちを睥睨していた。背が高いだけにやけに恐ろしい。

「どういう訳か、お前の魂はヨークのそれと良く似ている。容姿はちつとも似ても似つかないがな!」

そ、そうですか。地味に傷つく。

「そのせいで俺はヨークを見失ったのだ。漆黒の珠から流れてくる気が、ヨークのものだとずっと思い込んでいた。今まで珠から微量ながら送られていたあの気は、お前のものだったのだ」

え……。それって、どういう事?

「ねえユイネ。守り人は特殊な異能の力を保つ為に他人の気が必要なんだけど、誰でも良いってわけじゃないんだ。お互いに好意を持っていなくちゃ気は送られない。相手を好きじゃなきゃ、心を開いた相手同志じゃなきゃ、成立しないんだ。だから守り人の半身であり伴侶と呼ぶんだよ」

はい。

「今までずっと、あの漆黒の珠を大事にしてくれてたでしょ？　そのお陰で僕らは何とか生き延びてこれたんだ。ユイネの気が、珠を通じてガルクループにいた僕らに届いていたんだよ。すっごくわずかなものだっただけ、それがあつたから僕らはどうにか、扉とこの世界を守ってこれた」

テル君の綺麗な顔が、涼やかな声が、まるでドラマの世界で見るような現実感のないものとして私の目と耳に届く。

「僕らはずっと、繋がっていたんだよ。ユイネ」

じゃあ私がお姉さんからあのお守りをもらった五歳の頃から……ずっと？

そんな、馬鹿な。

もやがかかった頭の中で、ちかちかと小さな星が瞬いている。窓を叩く雨音が激しくなってきた。ごおおつ、と不気味な風の音が通り過ぎていった。

蛍光灯の白い光の下、普段と変わらない私の部屋に、二人の男性。一人は宇宙人で、一人は人でもないのだ。良く分からない状況に、良く分からない話。どうやら私の頭はパンクしたようで、ただただテル君の綺麗な顔をぼんやりと眺めていた。

「お前は俺を好いている」

モデルのように容姿の整った大男が断言した。
そんな、馬鹿な。

「ち、違いますっ。私、別に……。私、あの珠はお守りだと思って大事にしていただけで！」

「口応えするな！」

「そんな無茶なっ」

人外様が席をたち、ずかずかとソファに近づいてくる。鋭い視線が私に突き刺さり、両手はテル君に握られたまま、身動き出来ず。人外様は両手でむんずとソファの背を鷲掴み、顔をずいと近づけて言い放った。

「とにかく今すぐ気を寄せ！ 女！」

「いやですっ。困りますっ。それに私、女、なんていう名前じゃありません！」

自分で自分に驚いた。人外様の言葉に、間髪入れずに反論をした自分に。よっぽどいやだったみたい。

「な、なにいいっ」

ぎゅうと人外様の目がつり上がった。怒られるっ！ そう思ってたつさに目をつぶる。けれど、予想していた恐ろしい衝撃はやって来なかった。

人外様はソファの背に寄りかかるようにしてぺしゃんと座り込んでいた。肩までの黒髪が表情を隠しているけど、何だか苦しそうだ。

「くそ……。お前なぞ、弱っていなかったら片手で握りつぶしてやるところだ」

弱々しい声で恐ろしい事を言う。

「ねえユイネ。最近、ずっと雨が続いているでしょ？この春の時期に、ひどい長雨だ」

突然話題が変わった。私はテル君に向き直り何度か瞬きを繰り返して、こくりと頷く。

「農家の人達が、大変で……テレビで色々……外国で竜巻とか台風とか、大変で……」

はっとした。まさかと思う。

「もう限界なんだ。気が足りない。世界のバランスが崩れかけてる」「う、嘘でしょう？」

テル君がくしゃりと笑った。

「ほんとう。あいつが、秩序を乱してる。守り人の力が弱まってる。気が必要なんだ。もうガルグループに戻る力も残ってない。……お願い！ ユイネ！ この世界を救えるのはユイネしかないんだっ」

そんな、馬鹿な。

何て勝手に、考えなしのかみさまなんだろう。何かもつとこう、計画的に、力が足らなくなる前に伴侶を見つけた事はある出来なかったのだろうか。二百年も生きているんだから、上手い具合に出来なかったのだろうか、色々。

ごうごうと風が叫ぶ。ざぶざぶと滝のような雨が降り続く。

目の前にいる天使のテル君は漆黒の珠を私の両手ごと包み込んで、それに額をつけて俯いたまま。ちらりとソファの背後を見やるとぐったりと座り込んでいる人外様。

ああ……もう……。

「わ、私、どうすれば良いの」

ぱっとテル君が顔を上げた。きらきらと輝く笑顔。

あ、眩しい程の可愛さ。思わず目を細める。

「ユイネ！　ありがとうっ」

握られたままの両手に力がこもり、そのままテル君につられるようにして立ち上がった。

「気をもらっただけだから、別に身体には何の支障もないよ。大丈夫」
「全く、初めから大人しく言う事をきけば良いものを」

ぶつぶつと言いながらふらりと人外様も立ち上がる。テル君に両肩を掴まれ身体がくると反転すると、目の前にやけに容姿の美しい大男が迫る。

「あの、気ってどうやって送れば良いん……ぐっ」

突然、大男の太い腕が伸びて思い切り抱き締められた。大きくて厚い胸板に押しつけられ窒息しそうになり、慌てて顔を横へ向ける。両手で珠を持ったままがつちりと抱き固められているおかげで自由が効かない。痛い。苦しい。

異性にこんなに情熱的に抱き締められるのは初めての経験だったけれど、全然良いものじゃなかった。

「うつ……」

「おいっ。さっさと心を開け！ そうせんと気が流れん！」

そんな事言われて、はいよ、と心許せる程器用ではないです。そんな人、いません。

「む、むり……」

もはや既に、抱擁なんていう甘ったるいものではない。ぎりぎり
と締め上げられて力任せにぎゅうぎゅうされて、つま先は床を離れ
背が反りかえって……あ、お花畑が、見える……。

「馬鹿っ！ ユイネが死んじゃうつ」

テル君の慌てた声が遠くで聞こえた。途端に解放され、地に足がついてふらふらと二、三步後ずさって、すんとソファに座り込んだ。胸一杯に大きく空気を吸い込む。こ、殺されるところだった。

「ちっ。だめか」

「当たり前でしょ。ちよつと乱暴すぎ。ユイネ、大丈夫？ こいつ馬鹿だから。許してやって」

そう言いながらテル君が私の前に膝をついてしゃがみ、心配そうな顔を向けてくる。

綺麗な男の子に上目使いで見つめられ、またしてもどきりとしてしまった。

「ごめんなさい。うまくできなくて。でも、急に心開けて言われても……」

「だよ。ごめん」

ふわりと細い腕が私の首に回り、柔らかい感触に包まれる。灰色のパーカーがすぐ目の前にあった。

華奢な男の子の身体がぴったりと私に寄り添う。

「あ、テ、テル君」

「……しばらくこのままで。お願い」

囁くような声。テル君の身体は柔らかくて温かくて、良い匂いがした。あまりの心地良さに目を閉じる。そういえば、人の温もりをこうやって感じるのはいつ以来だろうか。遠い昔の幼い頃……。

「ありがとう、ユイネ。僕には心を開いてくれたね。本当は直接氣を送るのが一番なんだけど、僕を介してもあいつに届くから、大丈夫」

そっか。テル君は人外様の一部だから……。私ってば、人外様には心を開けないけど、テル君になら全開みたい。背後で人外様の舌打ちが聞こえた。

そっと柔らかな温もりが離れ、テル君が私の顔をじっと見つめてきた。無表情のような、きょとんとしているような、不思議そうな

表情。

「……………テル君？」

どうしたんだろう。うまく気が送れなかったのかな。不安になる。

その時、ごおおおつ、と凄まじい風の音が部屋を満たした。音と同時に青色のカーテンが舞い上がり、髪も舞い上がり、テーブルの上のピザの空箱まですっ飛んでゆく。

見ると人外様がベランダの窓を思い切り、両手でがばつと開け放っていた。艶やかな黒髪が揺れ、白のシャツがばたばたと暴れている。当たり前だけど、雨と風が部屋の中にこれでもかと降り注ぐ。

「なつ、なにしてるのっ」

あまりの事に咄嗟に叫んだが、荒れ狂う暴風にかき消されていった。ソファの背に手について片手で髪を押さえて立ち上がる。

人外様は仁王立ちで開け放した窓に向かい、両手をそのまま水平に広げた。指先にまで力が込められている。それから見えない何かをぐつと両手で押さえつけているかのように、左右の腕がゆっくりと動き、胸の前で両手がぴったりと合わさった。人外様は俯いて何かを呟いている。風がやんだ。静寂が訪れる。

雨が、上がった。

「……………うそ」

本当の本当に、彼がこの世界の均衡を守っているのかも知れない。

ふつと大きく息をついて、人外様は颯爽と髪を掻き上げ振り返り、のたまった。

「腹が減ったな。女、食うものを寄こせ」

*

それから嵐が通り過ぎていったような無残な状態の部屋の中をテル君の力（人外様の異能の力ともいう）で片付けてもらい、その間に私はまた近所のスーパーへと走り食料を調達した。雨雲の去った夜空には控えめな星達がほつとしたように小さく瞬いていた。

「ユイネのおかげで何とか破綻の危機は避けられた。一時的だけだね」

ありがとう、とテル君がまた私に微笑んでくれる。その笑顔を見られるだけで、こんな私でも役に立てて良かったと思ってしまう。エンジェルスマイル。

テーブルには唐揚げやらポテトサラダやらのお惣菜やおにぎりがずらりと並んでいてとっても賑やか。

「でもなあ。ガルグループに戻るのにはまだ力が足りない」

「え。そうなの？」

「うん。全然。本来の守り人としての力の五分の一も戻ってないよ。……どうするつもりなんだろ」

猛然と料理をもぐもぐ食べ続けている人外様に視線を向ける。私はピザで学習をしていたので、自分の分はあらかじめ手前にとっておいた。テル君といえば、ペットボトルのお茶をちょこつと口にするだけ。食べなくても良いのだそうだ。便利かもしれないけれど、

ちょっと寂しいと思ってしまふ。食べる喜びって、幸せに生きていく上で、とっても大きな割合を占めている。

「でも早く帰らないといけないんでしょう？ 扉も守らなくちゃいけないもんね」

「ああ、扉なら大丈夫。がっちがちに固めて来たから。だけど早いと何とかしないと……」

「あつ！ そういえば私、お守り……じゃなかった、漆黒の珠、どこに置いたっけ」

すっかり忘れていた。たしか両手でしっかりと持っていたはずなのに、いつの間になくなっていた。どうしよう。大事なもののな

に。

「あれは俺の中だ。ヨーコがいなければ意味がない」

人外様はぶつきらぼうに告げ、ペットボトルに口をつけてごくごくとお茶を飲んだ。私はぼんやりとその姿を眺めて、急に泣き出しそうな程心細くなってしまった。

あの黒くてまん丸の不思議な石。あれは確かに人外様のもう一つの命で、魂の伴侶であるお姉さんが持つべきものだった。だけど……。

5歳の時からずっと、お守りとして肌身離さず持ち歩いていた私としては、やっぱり寂しい思いもある。分かってる。仕方のない事だ。

「とりあえずしばらくは、ここにいるしかないな」

……い、いま何と？ あまりの事にぽかんと口が開く。

「いざとなればこいつから氣を得るとしてだな」

鋭い黒の瞳。彫の深い顔立ち。うーん、と口元をとがらせて思案している人外様。私の事情や心情やらをそっちのりで、考え込んでいる。

「とにかくヨーコを見つけ出さない事には……」

「あ、あの。ちょっと待ってください。そんな、困ります」

鋭い視線が突き刺さる。人外様は無言で睨みつけ、黙れオーラを放ってくるが、ここは私も踏ん張りどころだ。頑張れ、私。

「もう珠もお返ししましたし、氣も送りましたよね」

「それで済むと思うか、女」

「女って言うのやめてくださいっ」

「ユイネ！」

ひい。こ、怖い。

「お前に口応えする権利はないっ。何故が分かるか」

ぶるぶると首を左右に振った。

「俺が神だからだ！」

な……なんですと！？

「ヨーコを探すのを手伝え。お前も当事者の一人だろうが」

ふぬ、と鼻から息を吐き出して、この上なく不遜で短気なかみさ

まは私にぐいと人差し指を突き付ける。その勢いに気押されて、う、と身を引いた。

「良いか、拒否する事は許さん。世界がどうなっても良いのか！？ 頭から食われたいか！？ その覚悟があるんなら、いやだと言え！」

それからテーブルの上のおにぎりをむんずと掴んで口の中に放り込んだ。

あ、私のおにぎり……。

あわあわとする私の手の上に、テル君の綺麗な手がそつと重なる。

「これからよろしくね。ユイネ」

ああ……そうだったのか。

この微笑みに、騙されてはいけなかったんだ……。何て事。

目の前の照明がすうと一段暗くなったように感じたのは、私の気のせいだったのだろうか。

008（後書き）

はじめまして。こんにちは。もじといいます。

読んでいただき、ありがとうございます。

不器用な二人の恋のお話、になる…はず。うむ。
ゆるりと進んでゆきます。

感想等くださるととても嬉しいのですが、いかがでしょう？と、聞
いてみる。

今後も立ち寄っていただけるとありがたいです。

009 (ヨークを探せ)

今日の空は快晴。

昨日までの雨が木々の緑を瑞々しく潤して、世界は朝日にきらき
らと輝く。雨続きで溜まっていた洗濯物がずらりとベランダに並び、
気持ち良さそうに揺れている。テレビでは休日仕様の情報番組が流
れ、お天気コーナーで天気図を背にした綺麗なお姉さんが全国の天
気を伝えていた。ここ一帯に幾日にも続き雨を降らせていた前線が、
昨夜のうちに突如消え去ったと解説を付け足す。太平洋沖に発生し
ていた季節外れの台風も唐突に消失し、世界規模の穏やかな晴天。
いよいよ川が氾濫し、甚大な災害に発展しようとしていた地域の人
々もほっと胸をなでおろしている事だろう。

やっと春らしい陽気になってきましたね、とお天気お姉さんは屈
託なく朗らかに微笑んでいた。

「おい、早く食え。そして早く出かけるぞ」

その声にテレビに向けていた顔を元に戻し、慌ててお味噌汁をず
ずずと啜る。とっても美味しい。

いつぶりだろうか、朝食らしい朝食を食べるなんて。

テーブルの上には白いご飯にきのこのお味噌汁。納豆に卵焼き、
ほうれん草のおひたし、焼き海苔が並んでいた。ここに焼き魚なん
てあったら完璧だ。これは朝早くにテル君が作ってくれたもの。驚
いてしまった。テル君の料理の腕はプロ並みだった。どのおかずも
いちいち美味しい。そして、かみさま達の朝は早かった。

「もう。そんなに急かしたら可哀そうでしょ。ユイネ、ゆっくり食
べていいからね」

テル君は私の隣の席に座ってにこつと微笑む。今日は紺色のニットにジーンズ。気分で洋服を変えるのだそうだ。思念を飛ばすだけで着替えられるなんて、うらやましい。テル君の美しく中性的な可愛らしさに私はつい、はにかんでしまう。両手でマグカップを持つ仕草まで可愛らしい。マグカップの中身は、日本茶。

「テル君、ほんとに美味しい。すごいね」

私はぼさぼさの頭で上下はスウェットのまま朝の食卓についていた。

「ふふ。だろ？ この大男も僕の手料理で育ったようなもんだよ」

昨日は寝室のベッドに人外様とテル君が仲良く寄り添って眠り、私はリビングのソファで朝を迎えた。そして今日、早朝五時に叩き起されたのだ。

人外様がお腹がすいたと私を引っ張り起こし、ぼうつとする頭のまま二十四時間営業のスーパーへテル君と食材を買いに行った。少し遠い場所にあるスーパーなのだけど、何と、一瞬で連れて行ってくれたのだ。力の無駄遣いと言えなくもなかったけど、かみさまが空腹で御立腹だったので仕方なく。毎食惣菜や外食ものだと身体に良くないから、とテル君が料理を請け負ってくれ、私は洗濯を済ませ、現在朝の7時。

「ここからだどれくらいかかる」

人外様はとつくに朝食を平らげて、結構高くついた高級日本茶を味わいつつ、じろりと私を睨む。

「ええと、新幹線で三時間……そのあと普通電車に乗り継いで、一

時間半くらい、です」

人外様はこれから私の母の故郷に行く算段を立てている。私がお姉さんにあのお守りをもらった場所だ。今のところ、魂の伴侶であるヨーコさんの手掛かりといえはそれくらいしかない。

私に漆黒の珠をくれたお姉さんが、イコール人外様のいうヨーコさんである、というのが自然な流れで得た回答だった。だけどそれも定かではない。なおかつヨーコさんがその後引越していない事を願うのみだ。とりあえず、母の生家を訪ねれば何かもつと手掛かりが掴めるはずだ。あの頃、人外様のまつられていた古ぼけた神社でよく遊んでいた間柄だからきつと繋がりが残っているはずだ。

「ちつ。面倒だな。飛ぶか」

「だめだよ。距離が遠いと力を使いすぎる」

「あ、今すぐ用意しますから。あと三十分待つてください」
「早くしろ。うすのろめ」

いちいち、偉そう。

むっとしつつ、しかし相手を睨みつける勇氣もなく、私は食べ終わった食器を手に席を立った。

とにかく何だか色々と腑に落ちない事ばかりだけれど、私はヨーコさん探しを手伝う事にした。

だって、いつまでもいてもらったら破産してしまう。こんなに大食らいで短気なかみさまとずっと生活するのは辛すぎる。ヨーコさんが見つかれば人外様も幸せだし、世界も秩序を取り戻すし、私もびくびくせずに暮らせる。万々歳だ。

それにしても……。ちらりと人外様に視線を投げる。

黒の長髪は今は一つに束ねられている。それを束ねているのは私

の持っている真っ白のシュシュ。鋭い目つきの大男に、あるまじきファンシーな装飾品。その上シャンプーやリンスも私のを使っている。お花の香りをほんのりとさせている。色んな意味で、恐ろしい。それによれよれの白シャツに擦り切れそうなジーンズ。足元なんか、裸足である。

これは一番に衣料品量販店に向かわねばなるまい。

「ユイネっ。早くしろ！」

「は、はいっ」

とりあえず、ビーチサンダルを履いてもらうしかない。

用意をととのえ、私は天使のように綺麗な男の子と外国人モデルのような大男を連れて、晴天の土曜の街へと繰り出した。繰り出して、はたと思い至る。

め、目立ちすぎる……。

「倉田さん？」

自宅のマンションから最寄り駅へと向かう途中の道で、聞き覚えのある声に呼び止められた。振り返ると見覚えのある形。茶色のサラヘアをなびかせ、少し撫で肩気味の穏やかな風貌の男性。薄青のシャツにカーゴパンツという普段着姿の彼に、少しだけ違和感を覚えつつ、ああ、と私はお辞儀を返した。

「こんなところで会うなんて、珍しいですね。早くからお出かけですか？」

黒ぶち眼鏡の奥の瞳は、いつもと変わらず大型犬みたいな柔和さだ。

「あ、はい。ちょっと用事があったて」

「土曜はお仕事お休みでしたよね」

「あ、はい。笹本さんは……」

「僕はこれから学校です。土日は夜のシフトなんです」

とりあえず笑顔を作って、そうなんですか、と口の中で呟く。

笹本さんは私が仕事の行き帰りによく立ち寄るコンビニで、アルバイトをしている人だ。私がしょっちゅうそのコンビニを利用するものだから、いつの間にか顔なじみになり、挨拶を交わすようになった。もうかれこれ一年程になるだろうか。しかしこれといった会話を交わした事はなく、相手の情報といえば、笹本さんは専門学校生が本業の、コンビニでアルバイトをする真面目な好青年。年齢も聞いた事はない。同じように彼も私の事といったら週休二日の会社

で働く、いたって平凡な社会人というデータを知っている程度だろう。……とはいっても、それくらいで全てを語り終えても良いくらいの私だけけど。

だからコンビニのレジ前以外でこうしてお互いの顔を見るのとても珍しい事だ。

よりによつて、それがどうして今日なのか。

「今日はとても良い天気ですね。しばらくぶりだよなあ、こんなに晴れるの」

「そ、そうですね」

にこにこ笑いながら話しかけてくる笹本さんを通り越した先に、ちらちらと人外様とテル君が見える。

何とか笹本さんにあの二人の存在を知られずに、この場をスルーしたい。私は内心であわあわと右往左往して慌てる。人外様が苛々した様子で腕を組んで、ふぬ、と鼻から息を吐き出した。まずい。

「あの、ごめんなさい。ちょっと急いで……」

「あつ。す、すみません。呼びとめちゃって」

笹本さんが眉を下げて頭をかいたので、ますます慌ててしまった。こんな私にわざわざ声をかけてくれたのに、と思うと申し訳ない気持ちで一杯になる。

「あ！ いえつ。良いんですそんなつ。あのっ勉強頑張ってください
い」

「え、あ……ありがとうございます」

「おい！ 早く行くぞ！」

しまった。

笹本さんがぎょつとして、背後を振り返る。そこには男前な大男と、天使のような男の子が、いる。

のたのたとしたやりとりに苛々を募らせた人外様が、不遜な態度でこちらを見据えていた。

笹本さんのひよろりとした身体が数秒固まる。それからぎこちなくまた私に顔を向け、

「お知り合いですか？」

と、目線で聞いてきた。その顔は完全に驚いている。私の頭はいまだかつてない程に猛スピードで回転しはじめ、わたわたとテル君の隣に行きながら口を開いた。

「えと、あ、親戚なんです」

「いつもユイネがお世話になってます」

テル君がにっこりと微笑んで、すかさず挨拶をしてくれた。

「う、わあ。びっくりしたあ。倉田さんの親戚の方ですか。芸能人かと思いましたよ」

「あは。よく言われます。あの、ユイネとはどういう？」

「ああ、すみません。俺、笹本っていいいます。倉田さんがよく立ち寄ってくれるコンビニでバイトしてるんです」

「へえ。なあんだ、彼氏かと思っちゃった」

「えっ……」

ああ、笹本さんが困っている。テル君、テル君。そんなにフランクに話さなくて良いんだけど……。

「ええと……。こちらの方も、倉田さんの？」

苛々オーラ全開の人外様にちらりと視線を投げて、笹本さんは少し怪訝な表情になる。まずい。何やら怪しまれてる風だ。

テレビか雑誌から抜け出てきたような日本人離れした容姿の大男。しかも長髪を可愛いシュシュで束ね、服はよれよれ、足元はビーチサンダル。そして盛大に不機嫌そう。誰だって、怪しむ。

「そ、そうなんです！ 実は普段アメリカに住んでて、久しぶりにこっちに来て。ええっと、その」

「……そう、ですか」

あ、まだ怪しんでる。変な汗がひやひやと背筋を伝ってゆく。

「ね、テル君」

「うん。久しぶりだなあ、日本」

「くだらん。ぐずぐずするな、早くしろ」

ちつ、と舌打ちする人外様。ひいいつ。頼むから、何も喋らないでください。

笹本さんの眉間にしわが寄った。

「あの、お名前を聞いても？」

どうやら笹本さんの中で、危険人物の認定が下された模様。私の心臓は、この衝撃に縮み上がった。

「何故、お前に名乗らねばならんだ」

ドスの聞いた低い声が答える。人外様は名前を聞かれるのが好きではないらしい。困った。名前……。

ええい、と私は捨て身で、声を上げた。

「太郎さんっ。そういう言い方は日本では失礼なんですよ!? ごめんなさい、笹本さん。太郎さんね、日本語を映画とかで覚えたみたいで、なんか、ちょっと変なんです」

「なっ……」

「ああもうつ。分かりましたっ。行きますからっ。じゃあ、また」

ぐいぐいと両手で人外様とテル君を先へと押しやり、呆然とする笹本さんにお辞儀をして、逃げるようにその場を後にした。

すぐ目の前の角を曲がり、ほう、と息をつく。長い人生のうちで使うであろう半分くらいの勇気を、たった今使い果たしてしまったかもしれない。

テル君がふふふ、と声をもらし、あははと笑い出した。

「タローは良かったね。うん、可愛い名前。今度からタロちゃんって呼ぼうっ」と

「……ひどいセンスだ。最悪だぞ」

「だ、だって、名前教えてもらってなかったから……。すみません」

咄嗟に出した名前とはいえ、さすがに安直すぎたと思う。でも日本では昔から、太郎君花子さんって、とっても親しみのある名前なのだ。

「ふん。まあ良い。俺の名などあってないようなものだ。勝手にしろ」

人外様が意外にあっさり引き下がったので、怒られると思っていた私は、はあ、と間の抜けた返事を返した。

「あの、ちょっと待ってください」

先を急ごうとする人外様（命名・タロさん）とテル君に声をかけた。凄みのある鋭い視線が突き刺さる。この恐ろしい目つきにも、だいぶ怯まなくなってきた。……いや、でもやっぱり怖い。

「……目立ちすぎると思っんです。母の故郷へは私一人で行ってきますから、あの、留守番してもらえませんか」

「馬鹿な！ お前一人に任せておけるか！」

「ちゃんと探してきますから」

「反抗する気か」

「ち、違います。この日本だとタロさんとテル君みたいに綺麗な人って目立つんです。それにその、タロさんの格好、ひどいです……」

むつとしたタロさんが両手を腰に当てて怒る体勢をととのえ、私が首をすくめ目をつぶって怒鳴られる体勢をととのえた時だった。

「え……どうして」

唐突に、テル君の愕然とした表情が耳に届いた。おそろおそろ目を開けてテル君を見やる。潤んだ黒色の瞳は中空をぼんやりと見つめていた。

「くそつ。どうなってる！」

次いでタロさんの大声。二人とも、ここではないどこかを見つめている。タロさんの表情が険しく曇った。今までにないような緊張感が辺りに漂い始め、私の緊張も高まってゆく。

「ど、どうしたの」

ぼんやりとした表情のまま、テル君が私に視線を合わせた。

「扉にほころびが出来てる。……誰かが、明らかな意図を持って、ガルクループからこっちの世界に侵入した」

えっ！？

「ありったけの力を使っただけで閉じてきたんだぞ。あり得ん。こんな事を出来るのは限られた者だけだ」

「うん。とにかくすぐにほころびを直さないと、まずい」

私達のいる世界と、テル君達の住むガルクループを繋ぐ扉。それが開いてしまったという事だろうか。だとしたら一大事だ。だって、世界の力のバランスや均衡が崩れてしまう。悪い人がこっちに入ってきてしまったのかもしれない。ええっ！　そ、それは大変。

目の前の二人が、示し合わせたようにゆっくりと私に顔を向ける。

「ユイネ」

あれ。何故だか嫌な予感。

「この世界とガルクループを繋ぐ扉は、ここよりもずっと遠くにあるんだ」

「一刻を争う。すぐに閉じねばならん」

「今のままのタロちゃんじゃ、守り人の力が弱すぎる。気が必要なんだ」

「ユイネ。お前の気を寄せ」

タロさんとテル君が言い募りながら迫ってくる。大きなビルとビルの狭間の細道で、後ずさりした私の背はすぐに壁に阻まれてしまった。

「あ、あの、昨日ですよ。ならテル君に……」

繊細な眉を寄せて、私を見上げて切ない表情を向けるテル君。当然のように私の胸がときめく。

「ユイネが僕に心を開いてくれるの嬉しいよ。僕もユイネの事、好きだよ。ユイネの魂はすごく気持ち良いし、ユイネの気はとっても優しいんだ」

突然の告白に、一瞬で赤面する。

「だが全然足りん！ お前が俺に心を開くのを待っていたのでは、遅すぎる」

ぐわし、とタロさんの大きな両手が私の肩を鷲掴みした。ぐっと大木のような身体が近づき、影が出来る。

こ、今度は何っ。

「気は心を開かないと送られないって言ったよね。守り人には好意を寄せ合う相手が必要なんだ。ユイネはこいつの事は嫌いだけど、漆黒の珠は小さい時から大好きだったでしょ？ それにユイネの魂はヨーコにそっくりだ。だから僕らにとってユイネはうんと特別なんだ」

どこかしら焦っているような声でテル君が横から説明をする。だけれどそれは昨日聞いた事だ。説明の意図が分からない。

「だけど例外がある。心を開いていなくても、好き同士じゃなくても、たくさんの気を得る手段があるんだ。それはこういう緊急事態の時には最善の手段だよ」

「……それって、どんな？」

「お互いの体液を交換する事」

一瞬、何の話が分からなかった。

鋭い黒の瞳。彫の深い顔がぐっと迫ってきて、私は咄嗟に両手で相手の太い首を掴んだ。いつの間にかタロさんの太い両腕が私の身体を抑え込んでいる。

ぞわ、と全身に寒気が走った。

本能が身の危険を感じている。

「ちょ、ちょっと待って。なに、何をっ」

「抵抗するな。すぐに終わる」

まさか。

「たたた、体液って、なにっ」

「五月蠅い奴だ！　ディープリスクくらい、した事あるだろうが！」

あやうく失神しそうになった。

ぐぐぐ、とタロさんが力づくで迫り、私は両手に渾身の力を込めて拒絶する。

何て事。

かみさまが、こんなセクハラをするなんてっ。

「くっ……。き、さま……。逆らっ、か」

「む、ムリですっ……。そんな」

私は相手を絞め殺す勢いで首を押さえ続け、タロさんは顔を真っ赤にさせて迫り続ける。お互いにありったけの力をふるっての攻防。ぎぎぎ、ときしんだ音が出そうな状況に勝利したのは私の方だった。突然タロさんが身体をひるがえし、よろよろと後ずさった。片手で私に締められていた首を押さえ、苦しさで目には涙が浮かんでいる。

「阿呆っ！　こ、殺す気かつ」

「こんなの、は、犯罪です！」

「俺は神だぞ！」

「かみさまだつて、やって良い事と、悪い事があるでしょうっ」

「扉を守らねばなんのだ！」

「それは分かりますけど、でもっ」

「待った待った！」

肩で息をしつつ言い争う私とタロさんの間に、テル君が割って入った。

「もう時間がないよ。ごめん、ユイネ。ごめんね。もうしないから」
しゅんとしたテル君の姿を見て、何とか冷静さを取り戻す。

「わ、分かった。テル君、昨日みたいので良いなら、協力するから」

そう言うと、テル君は情けなさそうな、寂しそうな表情で微笑んだ。私の胸がきゅっと詰まる。

とても綺麗で、儂い微笑みだった。

「ありがとう、ユイネ……」

そつとテル君の華奢な身体が私に寄り添い、静かに抱き締められる。私はまだ乱れがちな呼吸を落ち着かせ、目を閉じた。

この世界を守る為に、扉を守る為に守り人としての力が必要なのは分かる。全くの部外者でもないの、私に協力出来る事なら、もちろん手伝いたいと思う。

あのお守りは、あの漆黒の珠は、今までずっと私のよりどころだったのだ。あの黒くてすべすべの、ひんやりとした丸い石のおかげで、何とか今まで頑張ってこれたのは嘘じゃないから。

だけど初対面に近い異性に心を開いたり、ましてや濃厚キッスなんて、どう考えても私には無理だ。

確かにタロさんは異性といっても宇宙人だしかみさまだし普通とは色々違うけれど、でもやっぱり出来ない。せめてこの手段でうんと気を送ってあげる事くらいだ。

たくさんたくさん、テル君に気が届くように念じる。

「俺だとして鬼畜ではないぞ。嫌がる女に無理矢理して喜ぶような趣味はない。勘違いするな」

遠く、ふてくされたようなタロさんの眩きが聞こえた。

それからタロさんとテル君は私にヨーコさん探しを言いつけて、一瞬でその場から消え去った。

気をつけてね、と心の中で囁いて駅へと足を向ける。

とにかく、ヨーコさんを見つけ出さなくては。一日でも早く。

*

速いスピードで後ろへと飛び去ってゆく景色をぼんやりと眺める。新幹線の車中で、私はおぼろげな記憶を必死になって思い出そうとしていた。

母の故郷は山に囲まれた小さな農村。近頃は道路も整備されてだいぶ便利になってきてはいるけれど、私が幼い頃に暮っていた時とたいした変化はないだろう。この場所を引っ越してからも、幾度となく私はここを訪れている。上京した今も変わらない。ここに母が眠っている。

母の月命日には必ずお参りに行くようにしているのだ。

新幹線を降りて私鉄に乗り継ぎ、そこからまた一時間半。ドアのすぐ近くの座席に座った。土曜の昼時で下りの列車にはまばらにしか人が乗っていない。背を丸めたおばあちゃんに、制服姿の女子高生。小さな男の子と若いお母さん。のどかだ。

何だか昨日から嵐のような日々だったので、こうして一人きりになつてぼんやりしているとどつと疲れが押し寄せて来るようだった。とりあえず考えをまとめて、お姉さんについても色々思い出して、これからの事を模索しなくては。

あの不思議な二人組、タロさんとテル君が言っている事は無条件で信じる事にする。

あれこれ疑っても疲れるだけだし、確かに説明のつかないような不思議な事も起きている。だからタロさんは二百年以上生きているかみさまで、テル君はのかみさまの一部だというのは信じよう。

そして漆黒の珠と、魂の伴侶であるヨーコさんの事。

タロさんはガルクールプ生まれのかみさまで、ガルクールプには四つの世界に通じる四つの扉がある。その四つの扉と、そこから繋がる世界を守っている四人の異能者。四人は守り人で千年という永い時を生きる神と呼ばれる存在。だけれども彼らは元々人間だ。

扉と世界を守る為には守り人の特別な力が必要で、その守り人自身の力と心を保つ為に他人の気が不可欠。そしてその気というもの、お互いに心を開き合った相手でないと成立しないものだったのだ。

そこで伴侶という存在が意味を持つ。

守り人の伴侶は彼らに気を送り、彼らを守り人として保たせる為の重要な役割がある。だからこそ誰でも良いというわけにはいかず、魂の好みで選び、なおかつお互いに好意がなければならぬ。

タロさんはその相手に当時十歳だったヨーコさんを選んだ。

そしてヨーコさんも、伴侶になる事を承諾して珠を受け取った。

伴侶は守り人のもう一つの命である漆黒の珠を受け取り、守り人とともに永い時を生きてゆくパートナーになるのだ。

突然、人生八十年という概念から外れて、そんな途方もない時間を生きていくというだけの決心が、子供だったヨーコさんにあつたわけではないだろう。おそらくそのヨーコさんが、幼い私とよく遊んでくれたお姉さんで間違いない。ヨーコさんは大事な漆黒の珠をお守りだと言って私にくれたのだ。

今でも良く覚えている。

あれは私が五歳の時、母が病気で亡くなり、父とともにあの場所を引っ越す事になった出来事が関係している。

あの日、人外様の祀られている神社で最後のお別れをした。泣き虫だった私はぐずぐずといつまでも泣き続けてお姉さんを困らせた。そして、お姉さんは私にあの珠をくれたのだ。人外様のお守りだよ、と。

これがあれば何があっても大丈夫。だからもう、泣いたらだめだよ、と言って……。

そこまで考えて、あつ、と声を上げそうになった。

今の今まで、ヨーコさんを見つける事が出来れば問題解決だと思っていた。何て浅はかなんだろうか。たとえ運よくヨーコさんとすんなり会える事が出来ても、本当に大変なのはもしかしたら、それからなのではないだろうか。

その時十歳だったヨーコさんは、今は二十八歳だ。

結婚していてもおかしくない年頃。子供だっているかも知れない。独身でいたとしても、彼氏がいる可能性だってある。くりつとした大きな瞳で、とっても可愛らしい顔をしていて、性格も明るくて面倒見が良かったと思う。異性がほっとく訳がない。

今更、タロさんの伴侶になって欲しいなんて、どうやって言ったら良いんだろう。

車内のアナウンスが、懐かしい土地の名を告げた。

閑散とした古ぼけた駅から、一時間に四本通っているワンマンバスに乗る。これでも増えた方だ。以前は一時間に一本あるかないかだった。

午後の穏やかな日差しに遠くの山が青々と輝いている。田植えの時期にはまだ少し早いため、田んぼはがらんとしていた。急に出向く事になってしまったので、電話を入れておいたせいか停留所にはおじさんが迎えに来てくれていた。

「唯音^{ゆいね}、よく来たね。今日はどうした？」

ほによ、という笑顔を見せておじさんが私の肩をぽんと叩いた。もう七十を超えているのだが、背筋もぴんと伸びていていつも元気そう。

「急に来ちゃってごめんなさい。たいした用事じゃないんだけど……」

「いつ来たって良いんだよ。こっちはばあさんと二人きりだろう？ しわしわの顔見るの、飽きちゃってさあ。そしたら鏡見たら自分の顔もしわしわで、びっくりしてんだ」

おじさんの冗談に二人でうふふと笑い、こじんまりとした一軒家に向かって歩いた。

「まあまあ、唯ちゃん、いらっしやい」

玄関口でおばさんとも挨拶をして、居間に通されすぐに麦茶とお菓子が出て来る。

「ありがとうございます。あの、本当に急で悪いんですけど、今日こっちに泊めてもらえますか？　ちよつと会いたい人がいて……」
「もう何泊でもしてったら良いよ。倅なんてちつとも来やしないんだから」

言い終わらないうちに、おばさんがそう言っただけで笑顔を向けてくれた。

この古き良き日の昭和の時代そのままのような土地が、母の故郷だ。母は私を産んでからこの場所へ戻って来た。私は母の身内といえど、この二人しか知らなかった。両親は母が高校生の頃に相次いで亡くなっており、年若い母は赤ん坊の私を連れて、おじさんとおばさんを頼ってここへやって来たのだった。

母の母の、妹であるおばさんは快く私達を迎えてくれた。本当の娘や孫のように大事にしてもらい、今でもずっと優しくしてくれる。おじさんとおばさんには一人息子がいるのだが、今は結婚して隣町に家族と住んでいる。毎月ここを訪れるのも、母の墓参りの為でもあるけど、この温かな二人に会いたいからなのかも知れない。

本当に、感謝してもしきれない。

「私がうんと小さい頃に、よく遊んでくれてたお姉さんがいたんです。ヨココって名前の、十歳の女の子。その人に会えればと思って」
「ううーん。あの時期なあ。何人かおんなじような年ごろの子供達がいいたよなあ」

「裏の山の上に神社、あるでしょう？」

「ああ、あったねえ。ちっちゃい神社でしょ。もう古ぼけちゃってねえ」

「あそこでいつも遊んでたんです。私が引越す時まで」

「そうねえ。ようこねえ……。あつ！　佐々木さんとお孫さん、

たしか女の子だったよねえ」

「ありゃあ、ありさつていう名前の子だよ。ハイカラな名前だったんで覚えてんだ。顔は地味な日本人顔なのになあ」

もう十八年も前の事だ。これはなかなか難しい探し物である。私は二人に礼を言つて席を外し、次にアルバムや写真に向かった。もしかしたら、ヨーコさんと映っている写真があるかも知れない。

淡い期待を抱いて探したけれど、やはり一枚もなかった。多くはおじさんとおばさんの二人の写真。温泉や山のぼりに行った先での記念写真のたぐいだ。古いアルバムには赤ちゃんだった私やよちよち歩きの私、その傍らに若い母の笑顔。この家には父の写真はない。

「唯ちゃん。そしたらね、あの喫茶店あるでしょ、ヒロつていう」

隣の居間から、おばさんの大きな声。私はそちらへ向かいつつ返事をする。

「あ、はい。ヒロさんがやってる喫茶店」

「そうそう。そのヒロさんね、多分おんなじような年だったと思うんだよ。もしかしたらほら、小学校一緒だったかもしれないよ。ここにはいつこっきゃないもんね」

「あ！ そうか」

また玄関でスニーカーを履く。黒のジャケットは羽織らなくても大丈夫なくらいの温かな陽気。青のポロシャツとジーンズ姿で玄関口に立った。

「おばさん。裏の神社の由来って知ってますか？」

「ええ？ はあ……。もうずっと昔の、おとぎ話みたいな話ならねえ。いつの頃だか知らないよ」

「はい」

「昔にね、村の子供がね、原因不明の病にばたばた倒れていったんだよ。医者も城主もお手上げで、村自体どこから見放されてね。それで村の親達が変わりにも縋る思いでさ、裏の山の上にあったお地藏さんに毎日毎晩、お参りに行っただよ。そうしたらある夜にほとけさまが現れて、お前達の願いを叶えてやるうって言って、次の日の朝、子供達の病がけろっと治ったって話だよ」

確かにどこにでもありそうな昔話だ。

「それがどうして人外様って呼ばれてるんですか？　ほとけさまじやなくって」

おばさんがうーん、と唸ってげんこつでこつこつと頭を叩いた。そうすれば昔の記憶がころりと出てくるみたいだ。

「出て来たほとけさまがさ、あんまりほとけさまっぽくなかったんだよ。まったく人間にそっくりで、でもそんな不思議な事が出来るんだから人間じゃないはずだろ？　だから、じんがい。人外様って言っただんじやないのかねえ」

この小さな町のメインストリートにある唯一の喫茶店「ヒロ」に行く前に、裏の山に登ってみた。

小さい頃にはこれがとても大きな山だと思っていたけれど、階段を数十段登ればすぐに色あせた鳥居が見えた。鬱蒼とした杉の木が日差しを遮り、薄暗い。砂利の間から草がぼうぼう伸び放題で荒れ放題。

何だか不思議でならない。ここに昔から祀られている人外様が、今うちに来ているあのタロさんの事だなんて。凶暴で怒りっぽくて強引で、かみさまほとけさまって印象がかけらもない。全くとって

正反対なのだ。

あの昔話が本当ならばタロさんはその昔、この地球の、この日本に来て、病に苦しむ村の人達を助けた事になる。

どうしてそんな事をしたのだろう。一体、何を思っただろう。いつか聞いてみようか……。

あ、やめておこう。ぎろりと睨まれて、何故お前に言わねばならんだ、と、怒られそうな気がする。

*

「いらっしやい！ あれ、唯ちゃん。珍しいね」

喫茶店「ヒロ」のお客さんは今日もよぼよぼのおじいさん一人だった。この人はいつ来ても、カウンターの一番隅っこで、うずくまるようにして座っている。

カウンターの奥からマスターのヒロさんが健康的に日焼けをした顔でにこっと笑った。昔、空手をしていたとかで、とても大きくていかつい身体をしている。髪は五分刈り、太い眉毛。もしかしたら美形の部類に入るのかもしれないけれど、体育会系の雰囲気の子か、全然そうは感じない。

「あ、はい。ちょっと人を探してまして」

「人探しい？ なんだい、それ」

隅っこに座るおじいさんの席から三つ先のカウンター席に座った。すると横からヒロさんの奥さんが現れて、お水を出してくれた。大きなお腹をしている。たしか来月が出産予定だった。

「順調ですか？」

「もう、順調すぎるくらい！ 中からぼっこぼこ蹴ってくれてさ、多分男だね、こりゃ」

奥さんは子リスみたいな可愛らしい顔で、小鼻にしわを寄せて笑った。

この町唯一の喫茶店「ヒロ」はその昭和っぽい名前には似つかわしくない程にセンスの良いカフェだった。レトロな装飾の店内に緩やかにジャズが流れ、お洒落な都会にあってもおかしくないようなお店。

何故名前が「ヒロ」なのかといえば、現マスターのヒロさんのお父さんの代から受け継いだお店だからだ。そのお父さんの名前が「ひろたか」で、息子のヒロさんも「ひろし」。お父さんからお店を継いだ時に、ヒロさんは同じ「ヒロ」だからそのまま良いや、と言って、現在に至る。

「昔、私が小さい時によく遊んでもらってたお姉さんを探しているんです。最近思いつく事が多くて。何だかどうしても、お礼を言いたくて」

「ふうん。今もここにいるかなあ。引越してった人結構いるから」「その時十歳だったから、今二十八歳になっているんですけど……」

「あら。じゃあ、ヒロシと同年じゃない」

「ああ、本当だ」

実を言えば、あんまり記憶には残っていないのだけれど、このヒロさんにも小さい頃によく遊んでもらっていたと聞いた。ヒロさんとは何度目かの母の墓参りにこの町へ来た時に、再会したのだ。

そう考えると当時五歳だった私が、お姉さんとの事をちゃんと覚えてるのが不思議だった。きつとそれだけお姉さんが大好きで、

あのお守りをもらった事が、私の中で大事な思い出なのだろう。

「ほらほら、小学校のアルバム、あれ見せたげたら？」

「ええつ。どこにやったかな」

「あ、すみません、大変ですよね」

「見つかなかつたら、ごめんだよ」

そう言い置いて、ヒロさんが二階へと上がっていった。ここは一階が喫茶店で、二階は居住スペースになっている。自分の頼みで手を煩わせてしまった事に恐縮しつつ、私はアイスコーヒーを一口飲んだ。

それからしばらくして、ヒロさんが片手にアルバムを持って現れた。硬い背表紙のそれは、開くと古い紙の匂いがした。

「ゆっくり見てって。あ、いらっしやい！」

私はお礼を言っ、カウンター席を陣取り丁寧に一ページごめくっていった。運動会や学芸会の写真、教職員の写真に続いて六年生の生徒達の一人ずつの写真のページに入った。やはり小さな農村だけあって、ニクラスしかなかった。それでももしかしたら、生徒数が多い時代だったのかもしれない。

女の子の顔写真を一人ずつじいっと見ていった。そしてがつくりきてしまった。

私の記憶にあるお姉さんの顔が、その中になかったのだ。

続いて名前を一人ずつ読んでゆく。六年生の中に、ヨーコさんは三人いた。「洋子」「陽子」「葉子」……。またしてもがつくりきてしまう。そういえばこの日本で、ようこ、という名前は珍しい方ではない。

その三人のヨーコさんの写真を見たけれど、やっぱりあのお姉さんではなかった。私の記憶違いだろうか。ううん。そんな事ない。

ヨーコさんは少し茶色がかった綺麗な長い髪で、くりつとした大きな焦げ茶の瞳だった。口元もきゅっと可愛らしくて、鼻筋もすつと通っていたのだ。

はあ……。どうしよう。ここに来れば何かしらの手掛かりが掴めると思っていたのだけれど……。

この土地にある学校の生徒ではないとすると、もうどこをどう探したら良いのか分からない。

「どう？ いた？」

接客がひと段落したヒロさんが、カウンター越しに太い腕をついて聞いてきた。私はよわよわと苦笑してそれに答える。

「それが、どうもないみたいです……。すみません、アルバムも出して来てもらったのに」

「そんなのは全然良いんだけどね。そっかあ、じゃあ、こっちに田舎がある子だったのかなあ。

ちなみに何て名前の子？」

「苗字は分からないんですけど、ヨーコさんっていうんです。私が五歳の時に裏の神社でよく遊んでもらってて……」

ぎくりとした。ヒロさんの表情が、凍りついている。驚いているような、恐れているような表情。

あれ。どうしたんだろう。

「……その子探してどうするの」

「え？ あ、お礼を言いたくって」

「そんなの、もう良いんじゃないかな。だって子供の頃の話だろ？ その子だってもう忘れてるよ」

不自然に視線をそらし、ヒロさんは急にそわそわし出した。様子がおかしい。明らかに。私がヨーコさんの名前を出してからだ。

「で、でも、私の他にも会いたって言うっている人がいて……」

私がそう続けると、ヒロさんはますますびくついて、やんわりと私の手からアルバムを取り上げた。

「でもこのアルバムにいないんじゃないね。もう探しようないね。ごめんね、力になれなくて」

「あ、良いんです。私の方こそすみません。あの、ヒロさん」

「いらっしやい！」

ヒロさんはヨーコさんの事を何かしら知っている。なのに、それを隠そうとしている。そう思えた。

でもそんな風に見えただけで、ヒロさんを捕まえて詰問する勇気が私にはなかった。明日、もう一度ここに来て、その時に聞いてみよう。私は会計を済ませて、奥さんに挨拶をして喫茶店を後にした。

*

「はあ……。タロさんに何て言おう」

闇に溶ける板張りの天井を見上げながら、もんもんとして私は深いため息をついた。

でも、見つかったら見つかったでまた大変だから、もしかしたら見つからなかった方が良かったのだろうか？ いやいや、それじゃあ私がずっと気を送り続けなくてはならなくなる。

懐かしい匂いのする布団の中で寝返りをうつ。

そうだ。タロさんの力が元に戻れば良いんじゃないだろうか。守り人の力が百パーセント戻ったら、きっと魂の伴侶なんてすぐに見つけ出せるはずだ。それなら私が協力しなくても大丈夫。

あ、だめだ。その為には私がタロさんに心を開くか、た、体液を交換しなくてはいけない。

むり……。

「はあ……」

あのお守りを思い出す。するとどうしてもそれに触れなくなった。だけど、それはもうタロさんの中に戻ってしまった。それに元々、あれは私のものでもなかった。少し悲しい。

そういえば……。気つていうものは心を開かないと送られないしお互いに好意を抱いている間柄じゃないとだめだって事は再三聞かされた。

私はあの黒くてまん丸の漆黒の珠を、お守りだと思って大事にしていた。それこそ大好きだった。

タロさんはタロさんで、その珠を持っているのがヨーコさんだと思っ込んでいた。私の魂がヨーコさんとそっくりだから。こっちに来てそれが私だったと判明してとっても落ち込んでいた。けれどタロさんは今でも私には心を開いているって事になる。そうじゃないと氣を届けられないから。

不思議だ。

とにかく明日、もう一度ヒロさんの喫茶店に行こう。ああ、せっかくの土日が、これでつぶれてしまった。

タロさんとテル君は大丈夫だろうか。きちんと扉を閉じる事は出来ただろうか。

ぼんやりと考え事をしながら、私は眠りについた。

*

翌朝、大事件が起こっていた。

朝の七時に携帯の目覚ましが鳴つてのろのろと起き出して身支度

をととのえ、居間へ向かった。

「おはようございます」

「おはよう」

「おはよう、唯音。すごい事になってるよ」

「え？」

おじさんが小動物みたいなちっちゃい目を見開いて驚いた表情を作り、テレビの方を指差した。それを受けておばさんがテーブルにご飯を運びながら、リモコンでテレビの音量を上げた。

「太西洋の向こうっかわにある海底火山が噴火したんだって」

ぎょつとしてテレビを凝視した。一面真っ青な海の画面。その中央が盛り上がり、黒と灰色の煙が膨れて弾けた。大きな水柱が上がる。まるで爆弾がそこで大爆発したような光景。

「それが一個じゃないみたいなんだよ」

「う、うそ」

「なんとか火山と、なんとかってやつと、なんとかベラって、三つの海底火山が同時に大噴火だって」

テレビの映像が中継に変わり、切迫した周囲の状況を伝えている。飛行機は全て欠航。もちろん船舶侵入禁止。国の軍隊が出動して津波の影響も懸念されている。

「やあつと雨とか台風がなくなっただっていうのに、次は火山なんて、地球はどうなっちゃうんだろうねえ」

ばくばくと心臓が激しく鼓動を打ち始める。軽いめまいを覚えた。

そんな。

「あれじゃないか、温暖化。人間のせいだろうよ」

タロさんのせいだ。さあつと血の気が引いた。

013（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
次話より、やっと話がぐうつと進む予定です。

孤独な魂の音色、ご覧いただければ、嬉しいです。

慌てて荷物をまとめ、挨拶もそこそこに呼んでいたタクシーに乗り込む。おじさんとおばさんに謝ってお礼を言つて、今度またゆつくり来るからと言い置いて急いで駅へと向かった。それから私鉄に乗っている時も新幹線に乗っている間も、携帯でニュースを逐一チェックして気が気ではなかった。幸いに死者はまだ出ていないようだ。火山の活動は現在小康状態を保っていると最速ニュースが伝えた。

早歩きが最後には駆け足になって自宅のマンションへと飛び込む。帰ってきていると良いのだけれど……。はやる気持ちを抑え、玄関のドアを開いた。そこには見覚えのあるビーチサンダル。部屋の青色のカーテンは閉め切ったままで室内は薄暗く、つきつばなしのテレビの光がちらちらと辺りを照らしている。リビングのソファに小さな頭が見えた。ソファにテル君が座っている。

「テ、テル君っ」

はっと息を飲んだ。勢い込んで傍にしゃがんだ私にゆるゆると顔を向けたテル君。その顔や身体が、透き通っていた。華奢な身体を通り越して部屋の景色が滲んで見えている。白魚のようなテル君の手に触れた。まるで心もとない。薄いガーゼみたいな存在しかなかった。

「どうしたのっ。これ、透けてるっ」

「……扉はきつちり閉じて来たよ。だけど、そこであいつの力が尽きちゃった。ここに帰ってくるので精いっぱいだった」

そんな……。

「こつちに侵入した奴は一人だ。誰かも分かっている。でももう無理だ。急すぎるよ。まさかこんな事になるなんて……。ユイネ、どうしよう」

テル君の綺麗な黒の瞳から、ぽろりと一粒、涙がこぼれた。全てがうつすらと透けていて、これは夢なんじゃないかと頭の片隅で思う自分がいた。

「テル君」

「ああ……。もうだめだ。あいつは死ぬよ。扉を閉じただけでも良かった……。きっとガルクループにいる残りの守り人達が気付いてくれる。それまでこの世界がもってくれれば」

「そんな、テル君っ！ どうすれば良いのっ」

どんどんテル君が薄くなってゆく。消えてしまふ。テル君の瞳が涙で濡れている。天使が泣いている。

そんな。何も出来ないなんて。ただ消えてしまふのを見ているなんて！

テル君の薄くなった身体を、私は両腕でかかえて抱き締めた。

「気、気をあげるからっ！ ね、気をっ」

「ユイネ……」

「ねえ、どうすれば良いか教えてっ。私が出る事、するからっ」

テル君の薄く透き通った両手が私の背中を包んだ。

「もう直接タロちゃんに気を送らなくちゃ、ダメージは回復しないよ。ユイネ、本当に？ 本当に僕らを救ってくれるの？」

「うんっ」

「……お願いだよ、ユイネ。あいつに、気をやって。たくさんの気が必要なんだっ」

あ……。

昨日のやりとりを思い出す。

『心を開いていなくても、好き同士じゃなくても、たくさんの氣を得る手段があるんだ。それはこういう緊急事態の時には最善の手段だよ』

『……それって、どんな？』

『お互いの体液を交換する事』

ゆるりと私の腕の中から顔を上げたテル君は、辛そうな表情で声を上げた。

「ユイネ、僕らには君しかないんだ。お願いだ、僕らを見捨てないで」

今度は逆にテル君の両手が私の腕を掴み、怯んで身を引いた私を逃すまいと縋りつく。

「ど、どうすれば良いの？」

透き通っても美しく可愛らしいテル君の口から、似つかわしくない言葉が飛び出した。

「ユイネ、あいつとまぐわって！」

氣を失いかけた。

「テ、テル君。それはちょっと……ほ、他の方法はないの!？」

視界の隅にテレビの画像がちらつく。噴火し続ける海底火山。右往左往する人々。

テル君の両目から、ぼろぼろと涙がとめどなく流れている。

「ユイネ、ユイネ。僕らを助けて……お願い……」

眩いて、テル君が私の胸に顔を埋めて震えた。
その時。

テル君の身体が白く光ったように見えた。次の瞬間、視界が真っ白に焼けた。

「うあっ」

眩しい!

ぎゅっと固く目をつぶった。目を閉じているのに全てが白くて、目が痛くなる程だ。

いたい……。

「ユイネ。あいつは自分の名を、ずうつと昔に捨ててしまった。だけどヨーコがつけてくれた名前がある。

あいつの名前は、カラス」

ぷつん、と光と音が途絶えた。次にぞつとするような暗闇がやって来た。

*

ぼおん、ぼおおおん。

音が聞こえる。

低くて大地が共鳴するような、大音響。

ぼおおん。ぼおおおん。

それが、鐘の音だと気付いた。

突然に視界が開ける。青白い月夜。薄暗い部屋。天蓋つきの大きなベッド。レースの天幕。

その真つ白のベッドの上にいる。感覚が戻る。ふわりとしたシーツの感触。

息を飲む。

自分の目の前に、女性がいた。

金色の長く美しい髪。ゆるやかなカーブを描き、華奢な肩に垂れる。女性は薄いキャミソールドレスを着て、ベッドの上で、私の隣で俯いている。肩が小刻みに震えていた。

彼女は、泣いている。

視界の端に手が映った。指が長くて大きな手。男の人の手だ。

それが私の手だと、なぜか思った。

そつといたわるように、その手が痩せた肩に触れると、びくつと女性の身体が震える。怯えている。

私に、怯えている。

「——様。……お許し、ください……」

絞り出すような悲痛な囁きが、耳に届いた。

引き裂かれるような胸の痛み。全身がきしんだ。痛い。

いたい、いたい、いたい。
心が引きちぎれてしまう。
いたい。くるしい。

もうやめて。いたい。いやだ！

助けて！

また意識が飛んだ。

*

俺には、全てが不要のものだった。

絶るような数多の目は、俺をイラつかせた。

たくさんの者らが媚び諂い、俺に取り入ろうと躍起になって猫撫で声を出す。そのくせ嫌な仕事は全て押しつけてくるのだ。人を裁いてくれと人が言う。人を救ってくれと人が言う。

吐き気がした。

もうたくさんだ。うんざりする。やめてくれ。俺を呼ぶな。俺を頼るな。

解放してくれ。何が扉だ、世界がどうした。知った事ではない。

ああ、最初からそうすれば良かった。

壊してしまおう。

俺をこの世に縛りつける世界など。

015（彼の名を）

次に視界が開けた時、私は胸いっぱい孤独をかかえていた。
つらい。苦しい。

気が狂ってしまいそうな程の、恐怖感。変に喉が渇くような、深い絶望。

セピア色をした風景が目の前に広がってゆく。なだらかな山の曲線。緑深い森。ふもとに広がる田園。張り付くように建てられた藁ぶきの民家。

ずっと照明が落ちる。無数の星空。月明かりが照らす背の低い山に、画面がクローズアップするみたいにぐんと近づいてゆく。

真つ暗闇の中、ちらちらとオレンジ色の光が見える。たいまつだ。粗末な格好をした村人が何人も石の階段を上がってゆく。時代劇で良く見る、村人みたいな格好だ。

映像に声が入った。

「助けて下さい。お願いします。どうか、村の子らを。どうか」

最初は一人の男性の声だった。それに女性の声が重なり、幾人もの声に膨れ上がり、最後には耳を覆いたくなる程の大声になった。苦しくて苦しくてたまらなくなる。両手で耳を塞いだ。

その時に、自分に身体がある事を知った。我慢出来ずに私は声を上げる。

「おいっ！ 五月蠅すぎるぞお前らっ！ もう聞こえている！ 黙れっ」

自分の声にぎよっとした。それは男の声だった。

小さな原っぱにくすんだ色の服を着た村人達がいて、私を愕然と見上げ、それから全員がひれ伏した。たいまつが炎が辺りをオレンジ色に照らしている。

「あああつ。ほとけさまほとけさまつ。どうか私らをお助け下さい！　どうか村の子らをお助け下さい！」

「ほとけさまつ！　おねげしますつ」

「ほとけさま」

彼らの感情が、一気に私に向かってぶつけれ、あやつく吐きそうになった。胸をつぶされる。

いたい。もうやめて。分かったから……。

「くそつ！　もうよせつ。俺を殺す気かつ」

村人達がはつとしたような顔を上げて、両手を激しくこすり合わせて叫び声を上げた。

「そんな罰あたりな事つ！　あたしらただ、子供達の病気を治していただきたいくてつ」

「おねげえますほとけさまつ！」

「ぐうつ。もうやめろと言っただろうが！」

「何でもしますから、村の子らを助けてもらえるんだったら、何だつてします！」

何を言っても「お願い」をやめてくれそうになかった。これではこつちが参ってしまう。私は両手を大きく振って中止の合図を送る。

「分かった分かった！　ガキ共の病気を治せば良いんだろう！？　分かったからもうやめろ！」

村人達は地面に額をこすりつけたまま、むせび泣いた。

「あああ、ありがとうございます！　ありがとうございますっ」

「ああ、ほとけさま」

「ありがとうございます」

恐れをなしてその場を逃げるように後にした。ちらりと振り返り、村に向かって片手を突き出し、指を広げ、ぎゅっと空を掴む。

「この地より、災いよ去れ」

身体に鋭い痛みが走った。ぐっと息を止めて衝撃をやり過ごし、ため息をつく。

この世界を壊そうとやって来たはずなのに、命を救ってどうする
というのだろう。

気がついてみると、この土地に住む人々は私と同じ髪の色をしていた。ガルクループでは私のような黒髪は珍しいのだが、ここには黒髪の者達ばかりだった。

そこで、あれ、と思った。

私って誰だっけ……。

まあ良いや。

だってもう誰も、私を見ようとはしない。

私には何も必要ないのだ。この世界も扉も。縋りつく者達も。半身でさえも、必要ない。

もうあんな思いはごめんだ。

ならばいっそ、独りでいた方が良い。

それからまた闇が訪れる。ひどく冷たくて寒くて、悲しい闇だった。

そこにずぶずぶと沈んで、どれくらいの年月が経っただろうか。覚えていない。四肢が凍えて動かない。

眠い。

眠いの、誰かが私を呼び起すのだ。

*

「あのねえ、いつまでそうやって寝てるつもり？　いつまで僕に代りをさせる気なの」

艶やかな茶色の髪に美しい顔をした子供が見える。また俺を起こしやがって。

「……こうして寝ていれば、少ない気でも扉と世界の均衡は保たれる。俺が出ずともお前が人間どもの相手をしていれば良いだろうが」「もうへとへと。いやだよ。ちよっとさ、気晴らしにあっちの世界にいかない？」

嫌味たらしく舌打ちをして、鉛のように重たくなった身体を起こした。するとどこからか鈴の音が鳴り響く。寝台から片足を下ろす時には周囲に神官や巫女達がぞろぞろと集まっていた。途端に胸やけがする。

「お目覚めでございますか。――様」

白の法衣に身を包んだ神官の一人が、一歩前に出てひれ伏す。

「……セウンリヒ。お前以外の全ての者達を下がらせる」
「はっ」

衣擦れの音がしてあつという間に人が消えた。円形の空虚な空間が姿を現す。魚の腹のような白い石壁。神殿という名の牢獄。身体を伸ばし着替えに腕を通していると、足下にかしずいた男が声を上げた。

「おそれながら。御召し替えにございますれば、巫女達をお呼び致しますが」

「セウンリヒよ。お前は何代目だ」

「はっ。十六代目にございます」

寝台に腰をかけて両足をぶらぶらとさせている子供が、ふふふ、と笑った。神官はちらと顔を上げてこちらの様子をうかがう。

「ではお前は知らんようだ。俺を昔の名で呼ぶ事は許さん。今度その名を口にしたら、即刻職を解任する」

男ははつとしたような表情で、両膝をついたまま引き下がり、両腕の長い裾を翻し地に額を押しつけた。それを見た子供が、こらえ切れない様子で声を上げて笑い出す。

「あはは！ ちょっと苛め過ぎ。可哀そうだよ。ねえ、セウンリヒ。こいつの言う事いちいち真に受けなくて良いんだよ。顔を上げて」
「ティエルフェイス様……。ありがたき幸せにございます」

眉を下げ情けない顔をしたセウンリヒは、それでも颯爽と立ち上がり、もう一度正式な礼をして寄こす。

「し、しかし。それではどのようにお呼びすれば……」

全く。先代よりもかたぶつのような。年若いくせに融通がきかん。

「通り名で呼べ」

「はっ。……『漆黒』の守り人様。御就寝中に『白銀』『紅蓮』『

青藍』、それぞれの守り人様が御挨拶に来られました」

「知っている。わざと起きなかった」

「は……？」

着替えを済ませ、邪魔くさい黒髪を一つに束ね上げる。セウンリとは口を開けて棒立ちになった。

「も、守り人様。その御召し物は一体……」

「これはね、あっちの世界の服なんだ。僕が調達して来たんだよ」

「時代が変わったようだな。着物ではないのか」

「うん。今はね、洋服ってのをみんな着てるんだ」

「おいセウンリヒ。ぼさっとするな。風呂の後に食事をする。用意しておけ」

「はっ」

久しぶりの湯を堪能し、だだっ広い空間に場所を移す。無駄に長いテーブルの上に並べられた料理を片っ端から腹の中に収めてゆく。空になったグラスに酒を注ぎながら、遠慮がちに男がまた口を開いた。遠慮するなら話しかけるなと言いたいが、ティエルファイスにあまり苛めるなと先回りして釘を刺されたばかりだ。

「守り人様。今年も巫女達の選定は既に終了しております。どうか僅かばかりでもお目通りの程を」

「ああ。そのうちな」

セウンリヒは沈黙したままその場から下がらずに突っ立っている。俺は料理を頼張りながら相手を睨みつけた。

「おい。なんだ。言いたい事があるならさっさと見え」

「はっ。おそれながら。……何と申し上げたらよろしいのか」

「なら下がれ」

「はっ……いや、その。守り人様、正直に申し上げます。どうか御無礼をお許してください」

「回りくどい奴だ。慣れぬ言葉など使おうとするな。さっさと言わんとお前を食うぞ」

「ありがたき幸せにございます！」

……こいつは冗談でも言っているつもりか？ うんざりしつつ、グラスを傾ける。

セウンリヒは一つ咳払いをして、多少砕けた口調で説明を始めた。

「わたくしめは下の者達から再三せつかれているのでございます。ここに集い、おそれ多くも守り人様のお世話をさせていただく神官達は全て古来より忠誠を誓い、子子孫孫未来永劫にお傍にお仕えさせていただく者達にございます。この無上なる喜び、身命を捨てての奉仕にて、非力なりともお伝えしてゆきたい所存でございます」

頭痛がしそうだ。

「しかし巫女達は、少し勝手が違うようなのです」

吐き気がしてきた。

「毎年候補者の中から数名の巫女を選定致しますれば、その者達は全て、飛びあがらんばかりに狂喜乱舞致します。無理もありますまい。守り人様の巫女になれるというのですから、その者の出身地は富と栄誉が約束されます。その者を育て上げた父母達もまた、一生を優雅に暮らす保障を得られます。そして巫女に選ばれた当人は、かの偉大なるガリオレス一族の末裔、異能と美貌を携えた神、守り人様の御寵愛を約束されるのです。これが喜ばずにはいられまじょうか」

「……今すぐ用件を言え」

一段低い声で告げると、生真面目な神官は一步退き、深々と頭を垂れて早口で続けた。

「この地におわします『漆黒』の守り人様は、巫女達から氣を得る事を致しません。あつたとしても数年に一度きり。それもたつた一人に、しかも交接をしていただけない。これでは巫女達があまりにも不憫でございます。ならばもう半身をお決めになつていただきたいのです。さすればいたいけな乙女達の心も安らかになりましょう。それが叶わぬのならば『紅蓮』の守り人様のように、どうか巫女達に御寵愛を……」

「セウンリヒ。顔を上げろ」

「はっ」

じつと男の顔を見つめる。なるほど、先代に似て精悍な顔つき。己の忠誠を信じ己の道を疑わぬ目だ。実に愚かで、滑稽である。この俺は、お前が命を賭して仕える程の器もない、くそ野郎だというのに。

目の前の愚かな男を見据え、口を開く。

「いよいよお前を殺したくなつてきたぞ」

男はさつと顔を蒼ざめ慌ててその場にひれ伏した。背後でティエルファイスのため息が聞こえた。

「……一人連れて来い」

「あ、ありがたき幸せにございます!」

胸くそ悪い。くそつたれめ。

しかし、向こうの世界に行く為には気が必要だ。

何が神だ。ただの鬼畜だ。

俺は一体何だ。

「……『漆黑』の守り人様。お呼びいただき、感激至極でございます」

見目麗しい女。薄化粧の口元をほころばせ、頬を桜色に染めている。

「名を何と言う」

「スワナルと申します」

しずしずと女が近づいて来る。高級な生地で仕立てられた薄手のドレスが、その肢体に張り付いてゆらゆらと揺らめく。窓辺に佇む俺に向かって、極上の微笑みを見せる。

女から放たれる激情の気配にめまいがした。弱っているせいで跳ね返す力も出ない。

何度言ったら分かるのか。容姿の美しさなど何の意味もない。皆、年若ければ瑞々しく、年月を経て老いてゆく。神官共は何を基準に巫女を選んでいるのか。

「お目にかかれて、嬉しゅうございます。守り人様」

女の白い手が俺の腕に触れ、俯いて胸に寄り添う。

真つ赤な魂の旋律が聞こえる。とげとげしく煌びやかな、鼓動だ。分かっている。女達に非があるわけではない。やすやすと心を開けずにいる俺がいけない。

だがどうしろというのだ。

気合を入れ直し、銀色の長い髪に触れた。ゆるりと女が顔を上げ、俺を見つめる。

恍惚とした表情。震えながら吐息をこぼす。

「ああ……。何とお美しいお方」

その目は、俺を見ていない。

俺は女に微笑みながら完全に心を閉ざした。小さな顎に指をかけ、氣を得る為の儀式を行う。

心を閉ざしていなければ相手の真っ赤な欲望に、こっちの心が食われてしまう。

女の口から甘ったるい吐息がもれた。ゆっくりと顔を離す。長いまつ毛が震え、女の頬に涙が伝った。

「スワナルよ。お前は何を望む」

俺は人ではない。このような外道が、人であって良いわけがない。

「わたくしは……」

女は目を閉じて俯き、また俺の胸に寄り添った。

「今宵限りの夢を見とunggざいます。どうか、どうかわたくしを……」

お前は一体何だ。どこを見ている。

お前が信じている神は、醜悪な畜生だというのに。

妄信。

人のおぞましき業だ。

*

この星はこちら側の世界を形成している要だった。

これさえ壊せば真空の闇が急激に膨れ上がり、ひずみが生まれ、引きつれて星々がぶつかり合い世界は消失する。その為この場所には莫大なエネルギーが集中し、すぐに歪みが生まれる。何度となくほころびを直していかなくてはならない。

世界の均衡を保つ為に、この星はなくてはならない存在だった。

「あーあ。やつぱりね。さぼってばかりいるから、あちこちにはころびが出来てるよ。あ、ほら、そこにも『負』が生まれてる」

中空に浮かんだままのティエルファイスが広大な海原の一角を指差した。そこからかげろうのような『負』がぐねぐねと立ちのぼっていた。この薄気味悪い『負』が集まり歪みを作り出す。そのまま見過ごすと天変地異が起こる。生物の中に入れば病や悪意となる。

守り人は永い時を生き続け、特異な能力でこの『負』を握り潰し、扉と世界を守り続ける。

それだけの為に存在している。

「一気に片付けるぞ。戻れ」

「あれ。そんな事して平気？ 気が足りないんじゃない？」

無言で睨みつけてやると、綺麗な顔をした子供は肩をすくめ、は

いはい、と呟いて俺の中に戻った。

一度は壊してやろうと思った世界だった。
しかし消してしまうには、あまりにも美しすぎる世界だった。
それに放っておけばここに住む人間共が、勝手に壊してくれるだろう。

空を仰ぐ。無数の星々。黒い闇に浮かぶ銀色の月。海のさざ波の音。吸いこまれそうな、海原の呼吸音。

目を閉じ両手を広げる。髪が風になびく。意識を高めると、目視している時よりもはつきりと『負』を感じる。至るところにそれはあった。逃げようと蠢くそれを両腕にかかえ、ひとまとめにし、小さく圧縮してゆく。全身に鈍痛が走る。捉えた。『負』が暴れ、腕がもがれるような痛みが走るが、動じない。

「この地より、災いよ去れ。嘆くなかれ。次なる生を与えん」

俺の中で『負』が昇華し消滅した。同時に身体がぐらりと傾く。

———そういう自暴自棄なやり方って、僕は賛成しかねるなあ———

俺の中で、ティエルファイスがぼそりと呟いた。

「小五月蠅い奴だ」

ゆるやかな速度で身体が落ちていく。残った力を振り絞り、あの場所へ移動した。

「ヤケになって、何が悪い」

がさん、と枯れ草の上に両膝をついて着地した。古ぼけた鳥居に朽ちかけた社。立ちこめる緑の香り。

一時期この周辺の村人達が俺を祀っていた場所だ。あの時に俺を差す名がひとつ増えた。

この世界に住む人間達の賛嘆すべき点は、忘却する能力に長けている事だろう。

仰向けに寝転がると、背の高い木々が静かに見下ろしてくる。荒い呼吸をととのえている間に、眠気に襲われた。

耳元の騒がしい音で目覚めた。があがあとてつもなく五月蠅い。数羽の鴉に、たかられていた。

左腕にちくりと痛みが走る。

「くそつ。つつくな！」

上体を起こすと、鳥達は真っ黒の翼を広げ飛び上がり、計算された距離に着地した。があ、と鳴いて顔を傾ける。

死体と勘違いしやがって。気安くつつくな。阿呆が。

「あ。生きてる」

近い所で声がして、俺は驚いて視線を足元に向けた。気配に気づかなかった。俺の足元にしやがみ込んでいる二つの小さな影。ひとつはティエルファイスだ。

「もう少しで警察呼んじやうところだった」

そう言ってもうひとつの影がティエルファイスに顔を向けると、二人はくすくすと笑い合った。

愕然とする。見た事もない少女に、あれがなっている。

茶色がかった長い髪が陽に輝き、大きな茶の瞳が俺を真っ直ぐに見つめていた。小さな口元は楽しそうに微笑んでいる。

俺の心臓が、大きく鼓動を打った。唐突に喉が干上がってゆく。

「こんな所で何してるの？ 変質者？ あ、ホームレスか」

全身の感覚が蘇り、あたたかな色彩が心に流れ込んでくる。静かな闇を内包し、薄く光り、影を作る。柔らかく力強い旋律。思わず腕を伸ばしそうになった。

その魂は、一瞬で俺を魅了した。

「この子ね、ヨーコっていうんだ。近所に住んでるんだって」

上機嫌のティエルファイスが弾んだ声を出す。

ヨーコ。ヨーコ。ヨーコ。

俺は忘れまいと心の中で何度もその名を呼んだ。

「テルがそばにいなかったら、とつくに警察呼んじゃってたけど。だっておじさん、死んでるみたいに寝てるんだもん」

ぱっと少女が立ち上がった。花柄のワンピースが風に揺れる。

「……今、何時だ」

「お昼の一時すぎ」

低く呻いた。目が回るくらい腹が減っているし、喉もからからだ。立ち上がる体力さえ残っていない。

「おい。ティエルファイス」

「僕、そんな長つたらしい名前じゃないよ。テルっていうんだ」

何だと？ 訳が分からん。

「おじさん裸足？ 靴どうしたの」

「こいつすつごいお腹空いてるんだ」

「あ！ ちょっと待ってて！」

「おいっ」

声をかける暇もなく、少女の背が遠ざかってゆく。細い両足がしなやかに大地を駆け、すぐに見えなくなった。

「ふふ。何その名残惜しそうな顔。やらしいなあ」

「あれは、何だ」

「何って女の子だよ。こっちの世界の」

あれに触れたい。あれを抱き締めたい。あの魂を、もっと近くで感じたい。

きっとあたにかいに違いない。きっと全てが満たされるだろう。積み重なった暗い思いさえ、溶かしてくれるのではないか。

否。そんな事をしてどうしようというのだ。

あれは俺が手にして良いものではない。

ゆるりと頭を振ってその思いを切り捨てようとする。

「ティエルファイス」

「テルだっば」

じろりと睨みつけると、美しい顔を傾けて肩を竦めた。

「ヨーコがつけてくれたんだよ。長すぎて覚えられないからって」
「なつくな」

「だって分かるでしょう？ ヨーコは僕らが求めてた子だ」
「言っな」

「ヨーコが僕らを救ってくれるかも……」
「やめろ！」

大声を出したせいでめまいがして世界が回った。咳き込みながら
仰向けに寝転がる。

「……いくじなし」

拗ねた呟きが聞こえた。

「……俺を野良犬と間違えてないか」
「何で？」

戻ってきた少女が手にしていたのは牛乳パックと五枚切りの食パンが入った袋だった。

まあ良い。ないよりましだ。

「わあ！　すごっ。ほんとにお腹空いてたんだ」

ヨーコが物珍しそうに見てくるので、食パンを頬張りつつ片手を振って向こうに行けと合図を送る。少女は軽やかに立ち上がりぴょんぴょんと飛び跳ねて、ティエルファイス（改め、テル）の傍へと向かった。

「ここ人外様の神社だよ。こんな所おうちにしたら罰が当たるかもよ。橋の下が良いんじゃないの？」

「大丈夫だよ。だってそれ、こいつの事だもん」

「はあ？」

ヨーコは間の抜けた声を出して、少し背の高いテルを見上げる。テルは俺を指差して続けた。

「人外様ってこいつの事」

「うっそだあ」

「ほんと。僕も人間じゃないし」

「ええー」

「ほんとだよ」

「うそーお」

「ほんとだつて」

美しい少女と少年は楽しそうにくすくすと笑っている。俺はヨーコの魂を感じていたくて、感覚を研ぎ澄ませた。

ヨーコはテルを相手に「あっちむいてほい」をして遊んでいる。あたたかな魂の鼓動。

その少女は、心に何らかの悲しみを抱いていた。しかしそれを包み込む命の力強さを感じる。深い悲しみに負けまいと、必死に立ち上がろうと、健気にも前を向いて生きようとしている。

美しい音色だ。

味気もなくでもない食パンを全て腹におさめ、ごくごくと牛乳を飲み干し立ち上がった。

「うわあ！ でかつ。カラスって身長何センチ？」

足元までやって来たヨーコが顔を真上に向けて俺を見上げる。

「カラス？」

「おじさん名無しで可哀そうだから、名前つけてあげてってテルが」

「……どうしてカラスなんだ」

「さっきつつかれてたし」

カラス。俺の名前。ヨーコがつけてくれた、俺の名前。

冷えきった心にじわりと嬉しさが広がってゆく。

「あ。笑ったー」

ヨーコが愛らしい笑顔を作った。真上を向いているせいでぽかんと口が開いている。

俺の心はますます喜びに満たされてゆく。

「カラスって笑ってればカワイイじゃん。今何歳？」

「忘れた」

「自分の年なの？」

「もう何百年も生きているからな。いちいち数えてられん」

「へーんなのお」

ヨーコの笑顔を見て、俺も笑った。

満たされてゆく。穏やかな温もりと優しい鼓動に包まれる。

ああ……幸せだ。

もう死んでも良い。死ねるものならば、今すぐに死んでしまいたい。この時が永遠に続けば良い。このあたたかな魂をずっと感じていたい。

ああそうだ。

ヨーコが傍にいてくれたら。俺の傍にいてくれたら。

辛く苦しいだけの永い時も、もう怖くない。気が狂うかと思う程に大嫌いな夜の闇にも、もう怯えなくて済む。女達のむせかえるような恐ろしい気を、吐きそうになりながら飲み込む事もしなくて良いのだ。心の底から凍りつき身体を凍えさせる孤独さえも、ヨーコといれば忘れられる。

ヨーコが欲しい。俺の傍にいて欲しい。

「カラス！ 腕、こうやって」

心地の良い声にはつと我に振り返り視線を下げると、ヨーコが細い腕を横にして可愛らしい顔の横で拳を作っている。意味が分からないままその通りにしてやると、その俺の腕にヨーコが飛びついてぶら下がってきた。一瞬よろけ、体勢を立て直す。ヨーコが足をぶらぶ

らさせて、きゃっきゃと喜んでいる。

ああ……俺の腕も、捨てたもんじゃないな……。

軽やかな重みに思わずため息がもれる。触れた部分から僅かにヨ
ーコの気が流れ込んできた。

ヨーコが俺に心を開いている。

そう思った途端、我慢がきかなくなつた。

「わあ」

軽々とヨーコを片腕で抱え上げる。視界が高く開けたせいか、ヨ
ーコが楽しそうな声を出した。

「いい眺め！ カラスっていつもこんな景色見てんの？ 背が高
いって得だなー」

ああ……俺の無駄にでかい図体も、たまには役に立つんだな……。
流れてくるヨーコの優しい氣に心がふつくらと膨らんでゆく。力
が漲る。随分と久々の感覚だ。

「さっきの自制は形だけ？ 罪深いなあ」

テルがぼそりと呟いた。満足そうに笑っている。こいつも久しぶ
りに力に満たされて嬉しそうだ。

「そうじゃない。……今だけだ」

そうだ。今、この時だけで良い。それで十分だ。

それからヨーコの言う様々な遊びに付き合つて過ごした。大半は意
味の分からないものだったが、ヨーコが楽しそうに笑うだけで、俺

とテルはだらしなく口元を緩めた。満ち足りた時だった。
夕闇が迫る。

神社の鳥居から続く古びた階段に三人で腰を下ろし、世界を朱に
染め上げる夕日を見つめた。

「もう帰んなきゃ」

ヨーコが思いついたように、ふと呟いた。

「帰っちゃうの？」

テルが縋るような視線をヨーコに送ると、少女は腕を伸ばしテル
の頭をなでた。優しい手つきだった。

「うん。テルもあるでしょ？ 自分んち」

「あるけど帰りたくない。ヨーコがいないとつまんないよ」

「うーん。カラスは？ 家あるの？ほんとにホームレスなの？」

「家はあるが帰りたいと思う場所じゃない。ヨーコがいなければど
こだって地獄だ」

「うっーん」

ヨーコは立ち上がり、腕を組んで考え込んだ。

「でもさあ、家あるんなら良いじゃん。いやだって思っ事たくさん
あるけど、でも、やっぱり家があるのはありがたい事でしょ」

その通りだ。ヨーコは賢い。ヨーコは強く、優しく、美しい。

「また明日あそぼ」

ばいばい、とヨコが俺達に手を振った。花柄のワンピースが翻る。

目の前が真っ暗になった。知ってしまったあたかな存在は、あまりにも大きい。

「ヨーコ」

思わず呼び止めていた。数段下がった場所でヨーコが振り返る。

「俺の名を呼んでくれ。ヨーコが付けてくれた名だ」
「カラス」

可愛らしい口元が、俺の名を紡ぎ出す。何て良い名だ。心に染みるようだ。俺は正直に、自分の気持ちを伝えた。

「嬉しい。もっと呼んでくれ」

「カラス！」

「ああ……最高だ。生き返るようだ」

「カラス、カラス、カラス、カラス！ カラースッ！ カーラース
う……！」

最後はやけくそのように叫び、それから楽しそうに笑った。

「あーおっかしい！ほんとに変なお」

つられて俺も笑った。

「もう良い。十分だ。暗くなる前に帰れ」

もう良い。これで良い。ゆっくりと目を閉じる。

ヨーコがこの世界にいると分かっただけで、俺は生きていける。
この世界を守る意味がある。

階段を駆けてゆく音。愛おしい命が遠ざかってゆく。ヨーコ。ヨ
ーコ。ヨーコ……。

「もう。困ったな」

すぐ近くで声が聞こえた。驚いて目を開く。花柄のワンピースが
見えた。

「それじゃあ帰れないよ」

困ったような声が聞こえ顔を上げると、ヨーコが俺を見下ろして
いた。一瞬でまた目の前に灯がともる。

「どうした」

ヨーコは俺の前にしゃがみこんで、人差し指を突き出す。

「だって、泣いてる」

言われて初めて気がついた。俺は泣いていた。自分でも知らずに、
涙を流していた。

自分自身が涙を流すのは、あれ以来初めての事だった。数百年ぶ
りだ。

両手で顔を覆い、俯いた。するとヨーコが頭をなでてくる。涙が
止まらない。肩が震え出す。呼吸が乱れ、胸が締め付けられたよう
に痛む。息を吸い込むとまた胸が痛んだ。

あたたかい。

「ヨーコ……」

情けない程に震えた声しか出なかった。

「なあに」

「お、俺の傍にいてくれ……。ずっと傍にいて、俺の名を、よ、呼んでくれ……」

醜悪な、神。

求めてはいけない。その温もりを。

なのにあまりにも愛おしい。もしかしたらもう一度、全てを愛せるようになるかもしれない。あの頃のように。ヨーコがいてくれれば、俺は。

「それってケッコンするって事？」

「うん。ヨーコ、こいつとケッコンして。こいつ馬鹿だけど一途だから」

テルがささず答える。

闇に蠢く人ではない孤独な化け物が、あたたかく光に満ちた獲物をじりじりと追い詰め、捕らえようとしている。

「良いよ」

即座に答えが帰ってきた。顔を上げて呆然とヨーコを見つめる。

屈託のない幼い表情。

「でもすぐには出来ないよ。それじゃハンザイシャだよ。だから大人になつたら、良いよ」

「ほんとうつ!？」

テルが立ち上がってヨークの両手を掴んだ。うん、と少女は素直に頷く。

「ヨーク! ありがとう!」

テルは瞳を輝かせ、ヨークに抱きついた。少女はおどけたように声を上げる。

「ぐえっ」

そして俺はヨークに漆黒の珠を手渡した。お守りとして持つていくれと告げると、物珍しそうに珠をにかけて、目をまん丸に見つめていた。これがあればヨークと繋がっていられる。どこに行ってもヨークを見つけられる。何年経とうが、どれだけ力が弱まっていようが、これを頼りに探しにいける。

「大人になったら迎えに来てね。ばいばーい」

小さな背が薄闇の階段を駆け、小さくなってゆく。俺とテルは無言でその背を見送った。

ヨーク。

俺の、ヨーク。

*

それからガルクールプに戻り、すぐさま布令を出した。

『漆黑』の守り人は半身を得た。毎年行われていた巫女達の選定も廃止だ。神殿には神官と身の回りの世話をする女官達だけが残った。

守り人の力がこれ程漲っているのも随分と久しい。統治している土地の隅々にまで、その恩恵は届けられた。大地は豊穡をたたえ、人々は歡喜に湧いた。人の王が挨拶に来て、長々と讃嘆の口上を述べて帰っていった。

浮かれる皆を尻目に、俺はまた長い眠りにつく。セウンリヒが半身はどこに、と慌てて聞いてきたが、それを無視した。もう余計な力は使えない。ヨーコに再会する為に、力を残しておかなくては。あの世界を大事に守っていかなくては。もう巫女達から氣を得るつもりはない。あの美しい魂の旋律を知ってしまった後では、もうどんな人間の氣も受け付けられない。ヨーコ以外の氣を、この身体に入れたくはないのだ。

ヨーコ。お前にまた会える日が待ち遠しい。しかしたったの十数年だ。今までの年月を考えれば痛くもかゆくもない。

今度こそ、俺は間違えない。

ヨーコ。

俺の愛しい半身。失いかけた希望。

俺のヨーコ。

俺の、全て。

*

弾かれたように両目が開いた。見慣れた部屋の景色が飛び込んで

くる。

あれ……。ここは、私の部屋。

「ユイネ。あいつはもう死にかけだから、きっと相手が誰だか分からないよ」

その声に意識がだんだんと覚醒してゆく。今までののは、なに？

……。あれは、記憶だ。どういう事か分からないけど、タロさんの記憶と感情が、私に流れ込んできたのだ。

「ユイネ、聞ってる？」

「あ、はい」

透けたまんまのテル君が私の両腕を掴んでいて、至近距離で顔をのぞきこんでいた。テル君の可愛い両目から、まだ涙がぼろぼろと流れ続けている。

「だからきつと、ユイネをヨーコと間違える。ユイネ、ヨーコのふりをしてあいつに直接気を送って」

泣いているのにテル君はとても大胆な提案をしてくる。私の思考は一向に追いつかず、ただテル君を凝視するしか出来なかった。えーと。どうしよう……。

「キスでも何でも良いから。体液を交換して。本当はまぐわって欲しいけど。ただの儀式だと思えば良いから」

「ちょ……。その、あの、やっぱりその方法しかないの？」

完全に怖気づいた私に気付いていないのか、テル君はこつくりと頷いた。私の髪留めをとり、繊細な指先で梳きながら続ける。

「あいつの名前はカラスだよ。名を呼ぶんだ。それ以外は話さなくて良いから。あ、あと、どもっちゃだめ」

追いうちをかけるようにつきっぱなしのテレビの画面から、臨時ニュースの警告音が聞こえた。

慌ただしい雰囲気の中、完璧なメイクをした女性キャスターが射るような眼差しをこちらに向けて口を開く。

「番組の予定を変更いたしましたして、臨時ニュースをお伝えいたします」

大西洋沖で活発化している三つの海底火山がいよいよ本格的に噴火を始めた。太平洋沖では史上かつてない程の大型台風が四つ、同時に出現し、世界の専門家達が召集され早急な対応策の検討に入った。

……ああ。だれか嘘だといって。

まとまらない頭をぶんぶん振って、むしろ何も考えないように決めて、すつくと立ち上がる。

「ユイネ。世界を救えるのは、僕らを救えるのは、君だけだよ」

世界の危機を救う、主人公。

そんな場面は映画の中でなら、たくさんある。だけどこんなシナリオ、見た事も聞いた事もない。その上私は、主人公なんていう役柄には全然向いていない。最初の方で殺される役のはずなのに。

張り裂けそうなくらい鼓動を打ち続ける心臓の音を聞きながら、寝室のドアをそつと開いた。

ベッドの上にタロさんが仰向けで眠っていた。一度大きく息を吸って吐き出す。

女は、
度胸。

018 (後書き)

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
次話より、唯音さんの奮闘。

操を引き換えに、世界を救うのか！？ (笑)

まるで息をしていないみたいだった。じいっと目を凝らして見つめると、僅かに胸のあたりが上下しているのが分かる。綺麗な横顔でも顔色は真っ青だった。

タロさんの記憶で再確認した。やっぱりヨーコさんは、私の知っているお姉さんだった。

さらりと明るく、あっけらかんとした可愛らしい少女。悲しんだり落ち込んだりしている相手を放っておけない、優しい少女。

ヨーコさんはきつと深く考えずに承諾をした。泣いているタロさんをなぐさめたくて、結婚の申し出を受けたのだ。あのお守りを私にくれた時もそうだ。泣いている私を励まそうとして、あの珠をくれた。

心の優しい少女。

ぎゅっと胸が苦しくなる思いがした。

ヨーコさんにとつたらあの約束はそれ程の事ではなかったのかも知れない。だけどタロさんはそれを唯一の光として、ヨーコさんの思い出をずっと大事に胸にしまってきたのだ。

力を削りながら必死になってやって来たこの世界で、再会出来るはずだった半身はそこにいなかった。かわりに見た事もない地味な女がいたってわけで……。そりゃあ不機嫌にもなるはず。

真っ黒の闇に沈んでいた時の孤独を思い出すと、身震いしそうな程だ。気の遠くなるような長すぎる時を、あんな思いを抱えたまま生きていくなんて……。とてもじゃないけど正気ではいられない。

そりりそりりとベッドへ近づく。何の変化も起きない。とても静かだ。ぐずぐずしていたら決心が揺らいでしまう。私はベッドの上に腰を下ろし、そっとタロさんの腕に触れた。その身体の冷たさに驚くが、何とか手を離さずに済んだ。ぴくりと形の良い眉が動く。

ゆつくりと大きく空気を吸い込んで、喉を開いた。

「……カラス」

それが、彼の本当の名前だ。

タロさんの睨みが僅かに揺れた。しかし起きる気配がない。私は指先にぐつと力をこめ、タロさんの腕を掴んだ。

「カラス」

薄く目が開いた。どきりとする。世界を守るかみさまは、絶世の美貌をお持ちなのだ。

「……ヨ……コ？」

私は覚悟を決め、ひとつ、頷く。……どうか、ばれませんように。

「ああ」

感嘆の声がもれた。タロさんが片腕をついて上半身を起こし、もう一方の手で私の背を包んだ。逆らわずそれに従うと、倒れ込むように太い腕の中に抱き締められた。壊れ物を包むように、柔らかくタロさんの腕が動く。以前私をぎゅうぎゅうにしたやり方とはまったく違っていた。

「ヨーコ……。やっと、会えた」

ぎゅつと力がこもる。頬にタロさんの厚い胸板が、白いシャツ越しにびったりとくっついた。ひんやりとしている。あのお守りみた

いだ。ほんのりと花の香り。

「ああ……ヨーコ。ヨーコ」

タロさんは私を抱き締めて、時折背中をさすり頭に口付けてくる。何度も何度も名前を呼んで繰り返す。優しい優しい、感触。

「カラス。あなたは弱ってる。だから、私の気をあげる」

とてつもない棒読みだけれど、仕方ない。私は自分がヨーコさんではないとばれやしないかという不安と、異性に抱き締められてよしされている緊張とで、もう何をどう考えれば良いのやら分からない状況だった。ただ一心に、任務遂行に取り掛かる。

「ヨーコ。俺の名を、もう一度呼んでくれ」

「カ……ラ、ス」

もうすこしでもってしまふところだった。緊張のせいで掠れ声しか出てこない。

「もっと呼んでくれ」

「カラス」

「もっと」

「カラス。カラス……。カラス」

低い呻き声が聞こえた。ぎゅうと力強く抱き締められ、私の胸は苦しくなった。

もう耐えられない。

こんな風にタロさんを騙している事も、こんな風にヨーコさんのかわりに抱き締められる事も。

こんな風にして優しい温もりに包まれたのは初めてだから。心がきしむ。

私はタロさんの大きな背をとんと叩いた。

「気を、あげるから」

「いいんだ。俺は、もう」

よ、よくない。

「お前に名を呼んでもらえただけで、いいんだ。ああ……幸せだ。もう、なにも……」

タロさんの力が弱くなった。おそろおそろ顔を上げると、タロさんの長い指が私の頬をなでた。とても愛おしそうに。

タロさんの薄い唇がゆつくりと微笑んでいく。今までいつだって眼光鋭く私を睨んでいたその目は、見た事もないくらいに、優しい。初めて見たタロさんの笑顔は、美しくて、儚い微笑みだった。

……苦しい。息が、とまりそう。

「ヨーコ……お前に、会えて、嬉しい。もう……満足だ」

ぐらりと身体が傾き、タロさんはまた仰向けでベッドへ沈んでしまった。焦った私は覆いかぶさり、少し強めにタロさんの身体を揺らした。だめ。このままじゃ。気を送らないといけないのに。

「カラス。気を」

そう告げても、瞳を閉じたままゆるゆると首を振るばかり。私は愕然とした。

死ぬ気かもしれない。

ちょっと待って。

そんなの、だめ。だって世界はどうなるの。地球はどうなっちゃうの。どうしよう。どうしたら良いの。ああ！何をどうすれば良いの！

幸せそうな表情で眠りに落ちていこうとしている美しい大男。

そうじゃないでしょう！

ぶつつんするっていうのは、こういう事なのかと私はその時理解した。怒りに頭が沸騰するのだ。

次の瞬間には相手の首元をむんずと両手で鷲掴み、ありったけの力を込めて引っ張りながら、大声を張り上げていた。

「い、いい加減にしてくださいッ」

通常では考えられないような馬鹿力を発揮し、私は弱り切っている相手の上半身を引っ張り起こして両手に力を込め、勢い良く揺さぶった。

「タロさんタロさんっ。寝ないでくださいっ！」

タロさんの眉間に深いしわが寄り、黒い瞳が剣呑に睨みつけてくる。

「……やめる。せつかく良い夢を見ていたんだぞ」

「いつまでそうやってるつもりですか！ 海底火山が噴火しちゃってるんです。何とかしてもらわないとっ」

「目の前で大声を出すな……阿呆が。俺にはもう守り人の力は残っていない。無理だ」

声を出すのも辛そうで、また目を閉じようとする。長い黒髪が顔半分を隠している。

「もうすっかりしてください！ じ、自分ばかりが辛くて寂しい思いをしてるだなんて、思わないでくださいっ」

「……何？」

私はタロさんの彫の深い顔をじつと見つめ、また大きく息を吸った。

「この世界にはご飯が食べたくても食べられない人がいっぱいいるんです！ だけどそれでも一生懸命に生きようとしている人達がい

るんです！ 農家の人達だって、雨が長引けばそれだけで大変な思いをするんです！ タロさんにとつたらどうでも良い世界なのかもしれないけど。これじゃあんまりにも無責任です！ それにこの世界にはヨーコさんもいるんですよ」

「……きさま。俺に意見する気が」

だんだんとタロさんから恐ろしい気配が漂い始める。ああどうしよう。やっぱり怖い。

あやうく震えそうになる両手にもう一度ぎゅっと力を込めた。その手はタロさんの首元を掴み上げたままだ。

「タ、タロさんはずるいです！」

「何だと！」

「だって、まわりに神官さん達や巫女さん達がいて、自分の事を大事にしてくれる人達がいるのにつ」

がつ、とタロさんの大きな両手が私の肩を掴んだ。そのまま強い力でぎりぎりとは締め上げられる。

い、いたい。だけど、負けられない。

「それが何だ！ あいつらは俺に仕えているんじゃない！ 俺が神だから、俺の守り人の力が必要だからそうしているだけだっ」

「そ、そんなのどっちだって同じ事です。タロさんは勝手に自分から心を閉ざして、相手を無視してるだけです！」

鋭い黒の瞳が怒りでぎらぎらと光っている。その怒りは一直線に私にぶつけられる。怖すぎて直視出来ない。私は両目をぎゅっとつぶってまた声を上げた。

「タロさんは子供ですっ。何百年も生きているのに、拗ねてばかり

いて！」

「五月蠅いッ。では何かっ！ 俺はいやな事もいやと言えずに生きていかなばならんのかっ。己を滅して延々と生きていけというのか！」

がくがくと力任せに身体を揺すられて、目が回りそうになる。

「そんな事言つてませんっ」

「じゃあどうしろというのだ！ お前に何が分かる！ こんな世界などくそくらえだっ！ さっさと壊れてしまえば良い！！」

ぎっと思ひ切り歯を食いしばった。こんなに激しい怒りをぶつけられるなんて、初めての事だ。

「うっう」

怖くて怖くて仕方なくて、思わず呻いてしまった。でも、言わなきゃ。

「タロさんはいやだつて言つてばかりで、卑怯です！ 自分のやるべき事もしないで言うだけなんて、子供と一緒にですっ。タロさんしか出来ない事なのに、そんなに立派な使命があるのに、どうして投げ出そうとするんです！」

ぐぎぎ、と私の肩を掴むタロさんの両手にまた力がこもる。

「いつ」

痛すぎる。もう力が入らず、私の両手は力無く垂れていった。あまりの痛さに俯いてしまふ。でも、ま、負けるもんか。

「タロさんは、そ、そうやって壊れてしまえとか、い、言うけど、いざとなったら出来ないくせに」

「なにいつ!？」

「だ、だってそうでしょう。この世界を壊すつもりだったのに、む、村人達のお願いをきいてあげたりして……。ヨーコさんの事だつてそうです。そんなに必要なら、あの時にすぐ伴侶にしてみえれば良かったのに、ヨーコさんの言う事を素直にきいたりしてっ」

そう。タロさんは優しいのだ。きつと根っこがうんと優しくて、だからずつと傷つきやすいのだ。どれだけ凶暴で横柄で強引でも、最後の最後には相手の意を汲もうとする。でもだからこそ、私は言わなきゃいけない。タロさんの悲しい過去を見てしまったからこそ、言わなくちゃ……。

「そ、そんなの、優しさじゃない。そんなのは、臆病っていうんです」

一瞬、タロさんの力が弱まった。しかしまた次の瞬間には万力にでも挟まれているかのようにぎりぎり両肩を締め上げられる。

「きさまっ。俺を愚弄するか！ 俺を臆病者だと罵るのか！ 顔を上げるッ！」

タロさんの声が掠れている。衰弱しているのに怒鳴っているからなのか、私の言葉に傷ついて動揺しているからなのか、もう分からなかった。

「や、役目も果たせない臆病者に臆病だと言って、な、何が悪いんです」

「くそっ！ 黙れッ！ 俺は……俺はッ」

掴まれている肩が、痛い。それになんだか目も痛いし胸も痛い。もうどこもかしこもズキズキといたい。

「お、臆病者じゃないんなら、ちゃっちゃんと私から気でも何でもって世界を安定させれば良いんです！ そんな事も出来ないで、偉そうな事言わないでくださいっ」

「随分と立派な心がけだ！ 良いだろうっ。お前がいくらいやだと言って泣き叫んでもやめてやらんぞ！ どれだけ詫びても許さん！ お前の身も心も引き裂いてやるぞっ！」

私は顔を上げ、でも目はぎゅっとつぶったまま、最後の力を振り絞って怒鳴った。

「のぞむところですよッ！」

怖いし、痛いし、もうだめかもしれない。怒り狂ったタロさんに八つ裂きにされるかも……。でも、氣を送らなければいけない。そうしなければこの世界が終ってしまう。タロさんにしか出来ない事なのだから、何としても、やってもらわなければならない。犠牲になりたいわけじゃない。ただ、何とかしたい。

何の役にも立たない、何の力もない私だけれど、私の持つ魂は、私の持つ気は、ヨーコさんに似ているのだから。テル君に微笑んでもらえたから。特別だと、ありがとうと言ってもらえたから。

あ、でもやっぱり怖い……。泣きそう。

「……馬鹿者」

タロさんの両手から力が抜けてやつと肩が解放された。その途端にぐにやりと前のめりに倒れそうになり、太い腕に抱き止められる。自分の身体なのに思うように力が入らない。

「震えすぎだ」

情けない事に、私は肩で息をしながら、がたがたと震えていた。ぐ、と身体が締め付けられる。ほんのりと花の香り。息苦しくて何とか顔を上げて目を開けると、白いシャツが視界に入った。艶やかな黒髪が頬に触れている。ひんやりとした身体が密着していて、タロさんの腕の中なのだと言付いた。

タロさんが私の肩に顔を埋めて、ふてくされた声で呟いた。

「最初から、素直に心を開いていれば良かっただろうが。……この阿呆め」

ぎゅうと抱き締められ、私はまた目を閉じた。

そうか……。私はタロさんに心を開く事が出来たみたいだ。どうやらこうしているだけで、ちゃんと私の気がタロさんへと直接届けられているようだ。良かった……。

タロさんの冷えた身体から鼓動が伝わる。それは、タロさんの記憶の中にある、ヨーコさんの優しい気の感触にとても良く似ていた。タロさんの魂は、優しくて寂しくて、切ない音色だった。

ああ……知ってしまった。

この世界をたったひとりで守っている怒りんぼうのかみさまは、強くて弱くて、きちんと人を慈しむ事が出来る「人」なのだという事を。

「う……」

私は数年ぶりに、涙を流した。

「……何故、お前が俺の過去を知ってる」

心なしか穏やかな低い声が聞こえる。冷静さを取り戻したらしいタロさんは、もっともな質問をした。

「わ、分かりません。すみません」

「テルだな」

タイミングを計ったように部屋の扉が開く音が聞こえた。私は身動きの取れない体勢で、首を曲げる。テル君がおそろおそろ、部屋に入ってくるのが見えた。その身体はもう透けていない。良かった……。

「ユイネっ」

天使のような男の子がぱっと駆け寄ってきてベッドへ上がり、私の背中にしがみついた。

「ユイネ。ごめんね、怖い思いさせて。ごめんね……。こんな鬼畜で外道で、最っ低な奴と二人つきりにさせて、ごめんね」

テル君が私の背に頬ずりをしている。訳の分からない状況になってきた。

「おいテル。言いすぎだ」

「何が違うっていうの。大人げなく怒鳴ったりして」

「お前こそ、こいつに俺の過去を見せるような姑息な手段を使っただろうが」

「タロちゃんがいけないんだろ。いつだって僕がいないとダメなくせに」

「なにいつ」

「あ、あのっ！　ちょ、ちよつと離れてくれませんかっ。それから、あの、早く何とかしてください」

なんかもう、色々ありすぎて、気絶しそう……。

*

その夜、テレビでは特別番組が放送された。深刻な表情をした専門家達がそれぞれに、前代未聞の不思議な現象について検証を行っていた。いよいよ甚大な被害を免れないだろうと予測されていた三つの海底火山は突如としてその活動を停止し、気象レーダーに不穏な影を落としていた四つの大型台風も忽然と姿を消した。大きなパネルを中央に、難しい解説を繰り広げる人々。

私はリモコンを取り上げてチャンネルを天気予報に切り替えた。

何だかどつと疲れが押し寄せてくる。そこでいやな事を思い出した。今日は日曜。明日は月曜。……仕事です。

そんな馬鹿な。金曜の夜からあり得ない程スリルに溢れる怒涛の週末を過ごしたのだ。くたくたで休んだ気がしない。映画であれば、世界を救ってハッピーエンドで終われるのに。

ため息についてテレビの電源を消し、思いついて寝室へ向かった。そうつと扉を開いて足音を忍ばせ、薄暗い部屋へと入る。ベッドにはすやすやと眠るタロさんとテル君がいた。

複雑な思いで美しい二人を見つめる。

あの、私はいつまでソファで寝ないといけないんでしょう……？

きつとヨーコさんを見つけ出そう。世界の為に。この寂しくて美しい、二人の為に。

そしてヨーコさんが見つかるまでは、出来る限り私が二人の力になろう。ヨーコさんに恋人や家族がいた時は、何とかみんながうまく落ち着けるような形を考えよう。

私もその寂しさを、僅かなりにも知っているから。

020（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
これにて第一部完結です。

『ユイネ』地味で気が小さいが、度胸はある模様。現代人は強し。
『タロさん』精神的にかなり子供。おいおい、いったい今いくつだ
い。

『テル君』一番のくせもの。必殺技はエンジェルスマイル。

以降更新はゆるやかペースになるやもです。

では、またお会い出来ますように。

021（さらば、平穩の日々）

明け方に目覚め、やかんに水を入れ湯を沸かす。昨日帰ってから作っておいた煮物を冷蔵庫から取り出してレンジに入れ、庫内にある食材にざつと目を通して献立を決める。

今日はお豆腐とわかめのお味噌汁に野菜炒め、ほうれん草のからし和え……。

料理を作るのは昔から好きだった。食べる事には一切興味が無い（というか、食べる必要もない）のだけれど、いつも味のイメージをととのえてから料理にとりかかる。すると出来上がったものの匂いを嗅いだだけで、イメージどおりのものが出来たかどうか分かるのだ。いまだかつて失敗した事はない。

「おはよう」

控えめな声に顔を上げると、スウェット姿のユイネがソファから立ち上がったところだった。僕はにっこりと彼女に微笑む。

「おはよう。随分早いね」

「今日仕事だから」

「あ。今日って月曜」

「うん」

寝起きのユイネはいつにも増してのんびりしている。ぼさぼさ頭でぼうっとしたままふらふらと洗面所へ消えた。昨日の今日なのに、彼女はもう普段の生活リズムを刻んでいるみたい。うん。ユイネの為にとっても美味しい朝ごはんを作っただけよう。

漆黒の珠を頼りに彼女を見つけた時は本当に驚いた。何せ、今ま

ですつとあの珠から送られてきていた気が、ヨークのものだとばかり思っていたから。

ヨークとユイネの魂はとても良く似ていた。僕ら好みの魂の持ち主がヨーク以外にもいた事にまず驚いたし、その相手がヨークと知り合いで、十八年も前に珠を譲り受けていたなんて。びっくり仰天だ。

「うわ。美味しい。テル君、すごい」

「ふふ。このだし巻き卵も傑作だよ」

ユイネが、ほによ、としか形容出来ないような可愛らしい笑顔を見せた。つられて僕も微笑む。

「タロさんは？」

「まだ寝てるよ。あいつ今日は夜にならないと起きないと思うよ。」

昨日、これでもかかってくらいたくさんの『負』を昇華させたからね」

「……それって、大丈夫？」

「へーきへーき。起きて来たらうるさいから、寝てもらった方が
良いよ」

「ガルグループからこっちに侵入した人って……」

「ああ。それもへーきだよ。悪さをする奴じゃないし、そのうち自分から来るでしょ」

「そ、そうなの」

一生懸命にもぐもぐと口を動かしているユイネを眺める。初めて会った時も今もそうだけど、彼女は食事をする時、すごく一生懸命だ。とっても真摯に、目の前の料理と向き合ってる感じ。美味しそうに食べるんだけど、それが全身全霊で味わっているように見えるのだ。向き合う料理がおにぎり一個でも定食でも、その姿勢は変わらない。人間が赤ん坊から幼児に成長し、歯が生えて固形の食事が

とれるようになった頃の反応と良く似ている。

それからユイネが色んな質問をして、僕がそれに答えた。最後に、彼女がぽつりと言った。

「平日はちよつと無理だけど、また土日になったら母の故郷に行ってくるから。ヨーコさんを知ってるかもしれない人がいて」

僕はユイネをじつと見つめる。焦茶色の髪は細くて柔らかい。いつも左肩に垂らすようにしてまとめている。これといって美人ではないけれど穏やかな表情は見ていてほつとする。濃すぎない化粧にシンプルな服装。何となく全体的に控えめな印象で、それがほぼそのままユイネのイメージだ。

少し耳を赤くしてもじもじと下を向いたので、僕が見つめすぎていたと分かった。くすりと笑う。

「きつとヨーコさんを見つけるから」

小さく呟かれた言葉に、思わず微笑んでしまう。僕はそつと手を伸ばしてユイネの小じんまりとした手に触れた。触りたかったから。

「ユイネ。ありがとう」

ユイネはおずおずと僕に顔を向け、耳を赤くしたままはにかんだ。

ねえユイネ。君ってとってもお人好しだ。本当は君がそこまでの義理も、必要もないんだ。

昨日僕が選んだ手段は最高に卑怯なものだった。ユイネの性格を知り、ユイネの優しさを利用したのだから。タロちゃんの過去を見せたのもその為だ。案の定、彼女はあいつに気を送る為に自分を犠

牲にしようとした。何とか心が通じ合ってうまくいったけど、それだつて彼女が捨て身でタロちゃんの弱虫根性に喝を入れてくれたからだ。

ユイネは優しくて気弱で、頼られたら嫌とは言えないタイプ。しかし本当は芯の強い女の子なんだと分かった。ヨーコとユイネの魂が似ているのも頷ける。それに僕には見えてしまった。彼女の過去が。

彼女の相手を受け入れる許容範囲は広い。異世界の話や人外の僕らをすんなり受け入れてくれたり、少し控えめな部分があるのは、辛かった過去があるからだ。

でも僕らはその頃から、本当はずっと繋がっていたんだ。漆黒の珠が大好きだった幼いユイネ。あの頃に出会っていたらどうなっていただろう。

柔らかくてあたたかくて、闇を含んでいる穏やかな魂。優しい音色。きつとユイネは僕とタロちゃんにとって、かけがえのない存在になる。

ヨーコが彼女に漆黒の珠を渡した事実には正直ショックを受けたけど、それがユイネで良かったと思う。

玄関口で、思い出したようにユイネが言った。

「タロさんの服、あれじゃちょっと、アレだから。替えもないし。これで適当に買える？」

「うん。ありがとう。ねえユイネ、晩ご飯何が良い？ ユイネの好きなもの作って待ってるよ」

お金を受け取りながら、少し背の高い彼女を見上げて質問する。ユイネはちよつと驚いた顔をして、それから照れ笑いをして、うーん、と少し考えた。

「え、えと、ハンバークとか」

「ふふ。可愛い」

「……子供っぽい？」

僕は笑ってユイネに抱きついた。抱き締めたかったから。心地の良い優しい気が流れてくる。

可愛いユイネ。可哀そうなユイネ。僕らに好かれたばかりに、これからうんと大変な目にあうかも知れない。

「いつてらっしゃい」

だから僕はせめてものお返しに、君の好きなものを作って帰りを待つよ。

パソコンで入力業務をこなしながら、頭の片隅で今朝テル君から聞いた話をぼんやりと考えていた。

昨日私が体験したタロさんの記憶は、タロさんの力の一部であるテル君の中に残っているものだと言った。テル君自身が人ではない為、人であれば当然あるであろう感情や蓄積された記憶というものがあまりなく、まっさらな状態に近いらしい。だからタロさんの記憶はもちろんの事、人の過去や記憶を図らずも見てしまうという事もあると説明してくれた。

テル君には強い感情の波がない。人が持つ「激情」がないのだ。昨日、テル君のつぶらな黒の瞳からぼろぼろと流れていた涙は、タロさんの悲しい感情に共鳴した為のものだった。

タロさんはあの威圧的な容姿に似合わず、実は泣き虫のようだ。

「すみません、倉田さん。これってどうやるんでしたっけ」

数か月前にやって来た派遣の山下さんが、書類を手に傍らに佇んでいた。私は返事をしてざっと書類に目を通し、手順を伝えた。

「あ、そっか。ありがとうございます」

私なんかよりよっぽど飲み込みが早く、的確に仕事を覚えて作業をこなす。そしてそつなく円滑に、周囲の人と良い関係を作っている。きつと人の賢さって、こういうところにもあらわれるんだろうなあ。

自分のふがいなさに少しだけしょんぼりつつ、またパソコンに向かう。

私が見たタロさんの記憶は、全部で四つだった。とてつもなく大きな音で鳴り響く鐘の音に金髪の女性。母の故郷にある人外様が祀られている神社の由来となった出来事。ガルクループでのタロさんと神官さん達。そして、ヨーコさんとの思い出だ。ヨーコさんとの記憶以外、終始全体を満たしていた感情は、胸がぐつと痛んで泣けてしまう程辛く苦しく、絶望しそうなくらいの寂しさと悲しみだけだった。

一つ、ひっかかる事がある。それは一番最初に見た、一番短いタロさんの記憶。あの女性がどうして泣いていたのかテル君に聞いたけど、テル君は驚いた顔をして絶句しただけだった。

あんまりにもデリケートでナイーブな内容なので、それ以上質問を重ねる事が出来なかった。本当は私が見てはいけないものだったのだろうか……？

それからテル君は私の過去の記憶を見てしまったと告白してくれた。それは、最初に私がテル君に気を送った時の事だという。その事に少なからず動揺してしまった。何だか下着姿を見られてしまったようで、恥ずかしいのだ。

私の過去を見たのはテル君だけで、タロさんは知らないという。守り人の異能の力は万能で、人の記憶をどうこうする事も容易らしい。しかしタロさんは元々そうだった他人の記憶を感じ取る事が苦手なのだそうだ。他人の記憶を見る為には自分の感情をぐつと薄く保たないといけない。確かに激情家のタロさんには難しい事なのだろう。

終業のチャイムが鳴った。

「昨日のニュース見た？ カズヤとメイって付き合ってるんだって」「うそ〜！ ショックウ」

華やかな一団が楽しそうに芸能ニュースで盛り上がりながら着替えを済ませ、ロッカーを閉める。

「火山とか台風とかさ、もう地球やばいって感じ」

「ほんとお。やっと最近天気良くなってきたのにね」。お疲れ様でえす」

「お疲れ様です」

ぼんやりと考え事をしつつ夕暮れに包まれた空を見上げた。最近
は雨ばかりだったのであまり実感はしていなかったけれど、こうし
てみると随分と日が長くなってきたようだ。着々と季節は巡る。今
日はテル君が夕食を作ってくれるというので、私はうきうきしながら
家路を急いだ。

テル君達という魂や氣つて、どういふものなのか私なりに考えて
みた。きっと魂はその人のオーラとか雰囲気みたいなもので、氣は
人の身体を巡っているものなんじゃないだろうか。氣功とかって聞
いた事もあるし。そしてその氣は、相手の身体はどこかに触れる事
で伝わるものなのだ。

玄関を開けると、とても美味しそうな匂いがした。それだけで私
の胸はじーんとしてしまった。

「おかえり！ もうちょっとで出来るよ」

姿は見えないけれど、テル君の声が聞こえる。それだけで私の胸
はときめいてしまった。

「あ、た、ただいま」

少し照れくさい。靴を脱いで振り返って驚いた。すぐ目の前にタ
ロさんが仁王立ちしている。近すぎてよく見えないが、黒のＴシャ

ツにカーキ色のカーゴパンツを着ているようだ。良かった。ちゃんと着替えをテル君が買ってきてくれたみたいだ。次の瞬間、私の両足は宙に浮いていた。

「うぐっ」

思い切りタロさんに抱き締められている。訳が分からずも、命の危険を感じて両手を突っ張った。大変だ。まさか昨日の事、まだ怒っているんじゃないだろうか。早く謝らなければ。こ、殺される。

「す、すみませんっあの……」

「おい。どうしてまた心を閉ざすんだお前は」

……はい？

「気を寄こせ、気をっ」

あ、そうか。

「ええと……」

あれ。心を開くってどうやってやるんだっけ？ 昨日の事は必死すぎてよく覚えていない。

ちっ、と舌打ちが聞こえて両足が床についた。

「お前はことごとく俺に齒向かう奴だな」

「そ、そんなつもりは……。えっ」

ぎよっと身体が硬直した。タロさんの腕が背中に回り長い指で顎を掴まれている。瞬間に背筋が凍りついた。いやな予感。当然のよ

うに整った顔が迫ってきた。

「ちょ、ちょっ!?!」

考えるより早く私の手が動き、タロさんの美しい顔面を真正面から押さえつける。

「むっ!」

ぐっと力がこもる。指の間から見える黒い瞳が、私を睨みつけている。こ、怖すぎる。

「ユイネ! なんだこの手はっ」

ふがふがとタロさんが怒鳴った。

「だ、だから、むりですって!」

「無理もくそもあるかつ。お前が心を開かんから悪い!」

「気ならテル君に送りますからっ」

「往生際が悪いぞ! お前は俺に、身も心も捧げたはずだろうが」

……い、いま何と?

「バカバカ。タロちゃんが乱暴すぎるんだよ」

玄関口にテル君が姿をあらわして、ばしんとタロさんの背中を叩いた。

「ちょっと、何の事ですか」

解放されてほっとする暇もなく、タロさんを見上げて問いたです。何だかものすごく不吉な事を聞いた気がする。美しい大男は両手を腰に当て、ふぬ、と鼻から息を吐き出した。

「忘れたとは言わせんぞ。ユイネ」

さあつと血の気が引いた。まさかとは思つ。まさかあの言い争いの時の、やりとりを言っているんじゃない……。

「良いか。ヨーコがいない今、俺にはお前の気が必要なのだ。お前の気以外受け付けるつもりはない！」

な、なんてわがままな。

「お前は这个世界が壊れるのがいやなんだろう？ お前は自分の身より、这个世界の存続を選んだのだ」
「そ、それはそうですけど、でもっ」

ずい、とタロさんの顔が近づく。ものすごい眼力に息が止まりそうになった。

「世界を救いたいのなら、さつさと俺を受け入れろ。ユイネ、お前に他の選択肢はない」

ゆっくりと薄い唇が弧を描く。私に初めて向けられたタロさんの笑顔は、意地悪この上ない微笑みだった。

まさしく、悪魔。

こんなかみさまがいて良いのだろうか。理不尽すぎる要求。単なる普通の一般人にすぎない私は、世界を人質に強請られているのだ。じわじわと顔に熱が集中してゆく。

「とりあえずさ、晩ご飯にしようよ。ユイネの好きなハンバーグ、作っただよ」

白シャツにジーンズ、黒のエプロン姿のテル君がにっこりと微笑んだ。ああ……可愛い。

そうして私はこの微笑みに、また騙されてしまうのだった。

事態は複雑にこんがらがってきている。恐ろしい事に、今日はまだ月曜日。こんなに週末が待ち遠しいのは何故だろう。

ヨーコさん探しは私にとっても、目下の急務となった。

火曜日。普段通りに仕事を終えて帰宅すると、普段ではあり得ない状況が私を待ち構えていた。

玄関に見慣れないスニーカーがある。大きさからいって、男の人のものだ。おや。タロさんのだろうか。昨日買ってきたものとは違うようだけど……。

まあ良いか、と深く考えずリビングに向かった。だって今日も美味しそうな匂いがしてる。テル君何を作ってくれたんだろう。ああ、ヨダレが出そう。

「あ、おかえりなさい。倉田さん」

はっと目を見開いた。

「お邪魔してます。すみません」

相手は私の驚いた顔に恐縮し、頭をかいて笑った。茶色の短髪、サラサラヘア。黒ぶち眼鏡の柔和な瞳。ここはコンビニではないはず。しかし彼はそこに立っていた。

「さ、笹本さん!？」

「はい」

どうしてうちにっ!？ 何故か分からないけれど、一瞬で赤面してしまった。

「おいっ。コーイチ! 早くしろ! 続きをやるぞ」

ソファに座っているタロさんの背中が見え、その先のテレビ画面に唾然とする。マリオがいる。マリオがテニスをしている。

自分の家だと思っていたその場所が、急に他人の家のようによそしく見え出した。だって、うちにはそんな最新のテレビゲームなんてなかったはずだ。タロさんと笹本さんが手にしてるのは一体何ですか。白くて長方形の、片手でぶんぶん振って、それがテレビの画面とリンクしているそれは。

「タ、タロさん！ 何やってるんです」

「見て分からののか。テレビゲームだ」

タロさんはゲームに夢中でこっちを見ようとしもない。完全に笹本さんが付き合わされている状況に達しない。というか、そのゲーム機、まさか買ったの。……一体いくらしたの。そのお金、どうしたの。

次々に疑問が浮かぶが、とりあえず落ち着こうと思いジャケットを脱いで手を洗いにキッチンに立った。

「今日ね、昼間にちよつと出掛けたんだ。それで駅前であれ見つけて、どうしてもやってみたくなっちゃって……」

テル君が少し首をかしげて私を上目で見つめる。なんて可愛い仕草。あ、だめだめ。

「それでお金どうしたの？ 渡してる分じゃ足りなかったでしょう？」

「うん。それで諦めようと思ったんだけどね、ちよつどそこにコーイチが通りかかって」

「コーイチって笹本さん？」

「うん。それでね、色々あって」

……どうやら笹本さんのお金で買ったようだ。その上今までゲームの相手をさせていたに違いない。タロさんだったらやりかねない。私はめまいを起こしそうになった。

「ごめんね。ユイネ」

華奢な肩を落としてしゅんとするテル君。つやつやの茶色の頭が俯いている。今日はパスタのようで、あとはお皿に盛るだけみたい。テーブルには大盛りのサラダやお魚料理も並んでいる。

「ううん。今日も美味しそうだね、ありがとう。みんなで食べよう？」

ぱつとテル君が顔を上げた。眩しい笑顔に、思わず目を細める。これはいけません。中毒になりかねない。

それから笹本さんを含め、皆でテル君の美味しい手料理に舌鼓をうった。笹本さんはその美味しさに感動しつつ、若いのにすごいねとテル君をベタ褒めし（テル君が微笑みを返すと、笹本さんの頬が赤く染まったのは不可抗力で）、ものすごい勢いで料理をたいらげるタロさんに目を丸くして笑った。私は少しだけ緊張して高揚し、落ち着かない気分ですれを見守った。

「笹本さん、今日は本当にありがとうございました。あの、バイトとか学校とか、平気でした？」

マンションの下まで見送りに出たところで、私は頭を下げた。

「そんな、良いんです。ちょうど今日はバイトも学校もなくて暇してたんです。俺の方こそ長居してしまってますみません。いやあ、太

郎さんて面白い人ですね。最初すごく怖い人かと思っていたんですけど……」

あ。やっぱり。

「何だか実家にいる弟を思い出してしまいましたよ。……失礼ですね」

思わずぶつと吹き出して笑ってしまった。すると笹本さんもあはは、と笑った。まさかあの大男が、うん百年も生きているかみさまだとは逆立ちしたって思わないだろう。

「あの、それでお金……」

途端に慌てた様子で両手をぶんぶん振って、私の言葉をさえぎった。

「良いんです、それは」

「だ、だめですっ！ そればかりは！ 金額大きいですし、それじゃ申し訳なくて夜も眠れませんっ」

一瞬ぼかんとした笹本さんは、また穏やかな笑顔になる。

「そうですか。それなら、きちんといただきます」

「ありがとうございます」

そんなこんなで私はお財布からなけなしのお札を数枚、笹本さんに献上した。もしよかったら携帯のアドレス交換しませんか、と笹本さんが提案してくれ、私達はその場でアドレスを交換した。タロさんとテル君は、笹本さんをコーイチと呼び捨てにする程お気に召

したようだったので、また彼に迷惑をかけてしまうおそれがある。
連絡先を知っておくのはとても重要に思えた。

「じゃあまたコンビニで」

「はい」

笹本さんは爽やかに手を振って帰っていった。私は急に気恥しくなり、手の中の携帯に視線を落とした。知らず口元が緩んでしまう。何だか心が弾んでいる。

「ユイネ」

声に振り返ると、テル君が黒のエプロン姿のままマンションのエントランスに佇んでいた。

「遅いから迎えにきちゃった」

「あ、ごめんね」

エレベーターに乗り込み、六階のボタンを押す。

「ユイネ。嬉しそうだね」

「えっ」

驚いて少し背の低いテル君を見やった。

「にやけてるよ」

いたずらっ子のようなにんまりとした笑顔を向けられ、そこで初めて自分の頬が緩みっぱなしだった事に気付いた。

「ち、違つよ」

何故だか否定して、あわあわと慌てて難しい顔を作ってみる。テル君はくすりと笑って、私の手に白くてすべすべの手をすりと滑り込ませ、きゅつと握ってきた。途端にどどど、と私の心臓が走り出す。

「……テ、テル君」

「何？」

「もう笹本さんにおねだりしたら、駄目だよ」

「……あ、バレてた？」

とっても可愛らしい男の子は、赤い舌をちらりと出しておどけてみせた。

その夜、携帯に笹本さんからのメールが届いた。【あらためまして、笹本紘一です】から始まる文面は、穏やかで真面目な彼らしい内容のメールだった。

真つ暗な部屋の中で、携帯から漏れる明かりに顔を不気味に光らせ、むふふと笑ってしまった。だって仕方ない。こういうふわふわとしたのは初めての経験で、私にとっては舞い上がってしまうような大事件だったのだから。

*

水曜の朝、意を決して声を上げた。

「いいですか。うちは貧乏なんです。無駄遣い禁止ですっ」

目の前にいるのは外国人モデルのような美しい大男と、天使のように綺麗な男の子。その二人にじいっと見つめられるだけで怯んしまい、一歩後ずさりしかけて何とか踏ん張った。

「ふん。まあ仕方ないな。庶民の生活とはそんなもんだらう」

肩まである艶やかな黒髪に、彫の深い男らしい顔立ち。腕を組んで仁王立ちしているタロさんは、居候のくせにとっても偉そう。タロさんの片眉がぴくりと持ち上がった。

「何やら不満のありそうな顔だな、ユイネ」

しまった。顔に出てしまっていたようだ。素早く伸びてきたタロさんの片手に、ぐに、と頬が挟まれ、む、と口がとんがった。私は急いで言い募る。

「ないです、ないない。も、大満足ですからっ」

「おおそうだろう。素直にそう言えば良いのだ。それにしても変な顔だ」

タロさんは顔をくしゃつとさせて笑い、私を解放した。そういえば昨日から、タロさんはよく笑うようになった。かみさまは笑うと意外に可愛らしい表情になるのだ。そうやってずっと笑っていてくれたら、私もびくびくしないで済むんだけどなあ。

「ユイネ、僕頑張るね。節約料理も得意なんだ」

テル君の頼もしい一言。素敵です。

「いつてらっしゃい」

「さつさと稼いで来い」

口々に見送られ、会社へ向かった。

その日、つつがなく業務を終え帰宅した私はあやうく絶叫しかけた。何故ならテーブルの上に、札束がどんと置かれていたのだ。ドラマや映画の中でしか見た事のない札束の山。何がどうなってこうなってるの。

「……ぎ、銀行強盗？」

「阿呆かお前は。俺はこの世界を統べる神だぞ。そんなもの簡単に作れる」

「偽札？ 偽造は犯罪なんですけど……」

「本物だ」

なぬ！？ 守り人の力はどれだけ万能なんだろう。すごすぎる。
私は一夜にして、大金持ちになった。

木曜の早朝、私は突然に目覚めた。

ソファを寢床にしているせいで寝苦しかったからだだろうか、とぼんやり考えつつ傍に置いてある携帯に手を伸ばす。五時十分。まだ眠れる。……ん？

視界の隅に何かが見えた気がして、もう一度目を開く。その何か、私に近づいてきた。とんでもなく整った顔だ。黒の瞳と目が合った。瞬間的に私の脳は覚醒したが、寝ぼけたままの感覚が追いつかない。身体はまだ夢の中でまどろんでいて、まるで金縛りにあっているかのように硬直した。

「おい、起きろ」

驚く程近くで、低い囁き声が聞こえる。ぞわりと悪寒が走った。ぎよっと両目を見開く。

「……何ですか。お腹すいたんですか」

驚きつつも、何とかカスカスの声で返事を返した。部屋の明かりがついていてソファのすぐ近くに、タロさんが座っている。横を向いている私にぎりぎりまで顔を寄せてタロさんがまた囁いた。

「来るぞ」

え？ 何が？

次の瞬間、部屋全体が大きな衝撃に揺れた。どおおお、と低い唸り声のような地響きがそれに続く。私は文字通りソファの上に飛び

起きた。

「じ、地震っ」

動転しつつ周囲を見回す。

え……。何も揺れていない。

蛍光灯も棚の上にある置物も、本棚の本も、微動だにせず鎮座している。私の部屋はいたって平静で、何の変化もなかった。ついさっきの衝撃と地響きは気のせいだったのだろうか、と首を傾げた時、この部屋の内部でありえない事が起こっているのに気付いた。

リビングの中央、すぐそこに、見知らぬ人が手を腰に仁王立ちしている。

私は驚愕のあまりただその人物を食い入るように見つめた。こちらに背を向けて立つ男性。背はタロさんよりは低く、身体つきも細身ですらりとしている。目をみはったのが髪の色だった。つんつんと空に向かって逆立っている頭髮は燃えるような赤。その色は薬剤で染めて出るようなものではなく、内側から燃え上がるような、綺麗な赤色だった。全身黒の服装にシルバーのアクセサリが光る。十代の女の子達が熱狂するヴィジュアル系バンドの一員のような侵入者は、土足で部屋のリビングに突っ立っていた。

「もうちょつと静かに来てもらえない？」

寝室から出てきたテル君が、欠伸をしながら相手に告げた。

「よ！ ティエルファイス、元気そうじゃねえか」

「君が扉をこじ開けてこつちに來たせいで、タロちゃんが死にかけたんだからね」

「ああ？ 何だよタロちゃんって。野良犬か」

「俺の事だ」

タロさんがむっくりと立ち上がると、その気配に気付いてヴィジュアル系のその人が振り返った。そこで私はまた息を飲む。彼の瞳は、髪よりはやや暗めの赤色をしていた。タロさんを見上げて大っぴらな笑顔になる。

「おおつ。『漆黑』の！ えらく久しぶりじゃねえかよ！ お前が起きたって聞いてよ、すぐ神殿に行ったのにもういないっていうじやねえか。だから後追っかけて来てやったんだぜ」

「何の用だ。『紅蓮』」

『紅蓮』と呼ばれたその人は、がははと笑ってタロさんの肩をばしばしと叩いた。『紅蓮』。どこかで聞いた名前……。あ、ガルクループにいる四人の守り人様。そのうちの一人だ。

た、大変だ。かみさまだ。私の部屋にかみさまが二人……。

「おうおう、つれねえなあ！ お前の半身にご挨拶に来たんじゃねえか！ 十数年ぶりの御対面ってやつだろ？」

ひやりと背筋に冷や汗。透明人間になってこの場から逃げ出した。私は自分の存在を何とか薄くしようと、息を止めた。しかしその無謀な試みは当たり前前だけど失敗に終わる。『紅蓮』さんはすぐに私に気付き、目と口を見開いて大声を出した。

「へええっ！ これが噂のヨーコ？ ほおおっ！ ……ふうん？」

ぐつと『紅蓮』さんの顔が近づきまじと見つめられ、私の身体は完全に硬直した。その麗しき面立ちは、まさにヴィジュアル系のトップスターといったところ。タロさんとはまた違う系統だが、美形である事は間違いない。

「ふんふん。なるほどなあ、『漆黑』好みの魂だ！ ま、見た目は可もなく不可もなくつてところか。俺は凡庸も好きだぜ、お嬢ちゃん」

そう言っただけで笑った。私の頭はまだ夢を見ていると勘違いしているようでうまく働かず、おそらく失礼な事を言われているのによく理解出来なかった。

「もうっ。それ以上近づかないでよ」

テル君が私の隣に座り、相手に向かって片手を振った。私はテル君が傍に来てくれたおかげで少しだけほっとする。

「ずいぶんなついてるじゃねえか。さすがは半身だ」

「こいつはヨーコじゃない」

ぶすつとしたタロさんの声。私からは紺色のポロシャツを着ている後ろ姿しか見えない。その大きな背中から不機嫌オーラが漂っているのがはっきりと目に見えるようだった。

「ああ？ だってお前、ヨーコだろ？ 半身だろ？ そいつに会いに来たんだろーが」

「こいつは違う」

ざわり、と心が竦んだ。切り捨てるように短く発せられたその言葉に、私は必要以上に動揺していた。

私は違う。ヨーコさんではない。私は半身ではない。

ありのままのその事実にも、どういいうわけかひどく焦った。

「色々あつたんだよ。ね、ユイネ」

と、テル君。

「はっ。なんだ、逃げられたってわけか。だから言つたろ？ 半身なんてハナツから持たなきゃ良い。それともこつちのお嬢ちゃんに乗りかえるのか？」

「『紅蓮』！ 君、デリカシーなさすぎ」

「んだよそりや、食いモンか？ なあ『漆黒』、巫女は良いぜえ。従順だしな。まあ俺としちゃ、こつちの世界の女もわるかねえな！」
「それで何なんだお前は。何しに来た」

不機嫌極まりないタロさんが冷たく言い放つと、おおそうだったと『紅蓮』さんがぼんと手を叩いた。彼はその繊細で美しい容姿に似合わず、豪快でおおざっぱな性格をしているようだ。

「お前らが、がっちがちに扉閉じるもんだからよ、帰れねえんだ。このタコ助ども」

「勝手に侵入してくる奴が悪い」

「そりやあねえだろ兄弟。俺はお前が心配でなあ、だからこつやってだなあ！」

「あ、あのっ」

声を上げると、一斉に美しい男性陣が私に視線を向けた。うっ…
…怖い。でも、怯んじやならん。

「とりあえず、靴、脱いでください」

訳も分からず色々な事にショックを受けている私だったが、今日は仕事なのだというある意味地味で凡庸な理由のおかげで、何とか立ち直る事が出来た。

それにしたってガルクループ生まれのかみさまは、私達地球人の常識をいとも簡単に飛び越えてしまう。

世界を守るかみさまが、べらんめえ口調で良いんでしょうか。

「俺とこいつはなあ、守り人の中でも年が近いからよ、兄弟みてえなもんなんだよ」

ラグナダスという世界とそこに通じる扉を守る『紅蓮』の守り人様は、大きな声で色々と私に説明してくれた。彼にもテル君のような世話役がいて、今はその人がラグナダスの扉を守っているのだそう。うだ。かみさま達はテーブルを囲んで、朝食後の高級日本茶を味わいながら話をしている。

「タロ助はよ、こんなナリのくせに乙女みてえな奴で昔っから面倒なヤローだったんだよ！ 自分の気に入った奴以外には心は開かないし、だからって巫女から氣を得る事もしやがらねえ。ガルクループにいる時はほんとんど、寝てやがった。代々のセウンリヒが何度泣きついてきた事か！」

「きさまのような節操無しと一緒にするな」

「それでもお前よりは、よっぽど役目を果たしてるぜ」

私は慌ただしい朝の時間の中、朝食を食べて準備をしなくてはならないので、罰当たりな事にかみさま達の話の片手間に聞き流していた。そんな無礼な態度の私を気に留める風もなく、『紅蓮』さんは大声で話してくれるのでどこにいても声が聞こえる。

「あぐくやっ」と見つけた半身には逃げられてなあ、目も当てられね

「えや」

う、とつんのめりそうになってしまった。

「んでも、都合良く代わりが見つかってよかったじゃねえか！」

「ちよつと。下品な言い方しないでくれない？」

「テルよ、俺は何も間違っちゃいねえ。現実、そのまんまだろ？
なあお嬢ちゃん！」

こんなタイミングで話をふらないで欲しい。どういつ返答をしたら良いか分からないし、どんな顔をすれば良いのかすら謎である。だって私は半身ではないし、ヨーコさんだって搜索中なのだ。

「何度も言わせるな。あいつは俺の半身ではない」

タロさんの不機嫌そうな低い声に、ぎゅっと心が縮み上がった。そそくさと鞆を肩にかけ、玄関へと向かう。もうこれ以上この場に
いる事が出来なかった。

「じゃあ何だ？　なんでここにいるんだよ」

少しの沈黙のあと、タロさんは大仰に言い放った。

「あれは俺の下僕だ！」

私がマッチョでやくざみたいに怖い男の人であつたなら、タロさんをばこぼこにぶん殴っていたのに。

臆病で非力な自分にそんな恐ろしい事は出来ないので、無言で玄関のドアを開いた。背後からユイネ、とテル君の声が聞こえたけれ

ど、どうしても振り向けなくて、そのまま逃げるように出てきてしまった。

「もっと他の言い方してくれたら良いのに……」

会社へ向かう道すがら、滅多に言わない独り言をぽつりと呟いた。

分かつてる。タロさんという人は最初から失礼で偉そうだったのだ。今に始まった事ではない。

たった数日しか一緒にいないのに、どうしてあの不思議な二人とこれ程打ち解けてしまったのだろうか。そう言えば赤の他人と寝起きを共にする事だって、初めてだったのだ。人見知りの自分には到底無理な事ばかりだったのに、何故、自然にそれが出来ていたのだろうか。不思議でならない。

相手が宇宙人だったり人ではなかったりするからかも知れない。とにかく、今週末は必ず母の故郷を再訪しよう。それで何が何でもヒロさんに聞いて、ヨーコさんの居所を何としても突き止めてみせる。半ば意地になってそう決意した。

昼時のフロア。パソコンの林の中で電話当番をしながらおにぎりをもぐもぐと食べた。窓から柔らかな日差しが差し込んで、とつても穏やかな陽気であるのが分かる。ここ最近は暴風雨もない。

コンビ二で買ったおにぎりが、ぼそぼそとして飲み込みづらかった。ぎくりとする。この感覚は、遠い昔のあの頃と似ている。そう思っただけで落ち着かなくなり、ばくばくと心臓が騒ぎ出す。かろうじて平静を装いペットボトルのお茶を一口飲んだ。指先が震えた。無意識にかばんに手をやったところで、また混乱しそうになった。

私にはもう、あのお守りがないんだった……。

それにあれば、私のお守りじゃなかった。あれは最初から、ヨーコさんのものだった。テル君もタロさんも、ヨーコさんに会いに来たのだ。タロさんが必要としているのはヨーコさんで、テル君の美

美味しい手料理を食べるはずだったのもヨーコさんだ。

私はただの代わりだ。都合良くそこにいただけの。

どくり、と心臓が縮む。

まずい。

何か他の事を考えなければ。私の悪い癖だ。良くない事を考えて、もつと良くない状態になる。その時、ぶーん、と携帯が震えた。気を紛らわせる為にそれを手にとる。笹本さんからのメールが届いていた。

【こんにちは！ 今日はいくつかバイトです。唯音さんはおにぎり食べてますか？ 当たってたらすみません】

出勤前にいつもコンビニに立ち寄って昼用のおにぎりを買うから覚えてしまったのだろう。笹本さんの予想が当たりで、少しだけ口元を緩めた。そのまま携帯を握り締めて深呼吸をする。

大丈夫、大丈夫。

これも子どもの頃からの癖だった。良くない事を考えようとしてしまう自分を宥める為に言い聞かす。

ずっとそうやって来た。あの丸くてひんやりとしてすべすべのお守りを抱き締めてそうしていると、不思議と心が落ち着いていた。自分の居場所がそこにあると、そう思えて安心出来た。

いま手に中にあるのはお守りじゃなくて携帯だけど……。

そうだ。最初からヨーコさんを見つけるまでの間柄だったのだから、今更動揺する必要はないのだ。それに代わりであってもこんな自分が役に立っているんだから、きっとあの二人と今は一緒にいていいのだ。さすがに下僕というのはいただけなので、それは訂正

してもらわないといけないとしても。

*

夕方、のろのろと家に帰るとそこはもぬけの殻だった。テーブルの上に置手紙があり、綺麗な字面で言葉が並んでいた。

【これから『紅蓮』をガルクループに連れて行きます。明日の昼頃には帰ってくるからね。夕飯は冷蔵庫にあるからチンして食べて。テルより】

ほつと息を吐き出す。『紅蓮』さんはどちらかというと苦手なタイプだったので、ついほつとしてしまった。何だかすごく元気な人だったなあとぼんやりと思った。

部屋を見渡す。青色のカーテン。リビングのソファにテレビ。傍らには最新のゲーム機。キッチンには知らない内に様々な調理器具が増えていく。しん、と静まり返った部屋。

ああそうか。こんなに静かだったのか。

少しだけ落ち込んで、少しだけのんびりとした一人の時間を満喫した。

*

今日は待ちに待った金曜日。今まで経験した事がないくらい濃厚すぎる一週間だった。仕事を休まずに行けた事の達成感に思わず涙

ぐみそうになる。私よ、よく頑張った。

「おはようございます」

「あ、おはようございます」

陳列棚に商品を並べている笹本さんが、ぺこりと会釈をしてくれた。私も会釈を返し、レジへと向かった。朝のコンビニは出勤途中に立ち寄るお客さんで意外に盛況なのだ。

幾度かのメールのやりとりで、以前よりも笹本さんの事に詳しくなった。彼は私と同じ二十三歳で、今は保育士の資格を取る為の専門学校に通っているのだそうだ。一度、一般企業に就職をしたが夢を捨て切れず退職して、今の道を選んだのだという。保育士という職業がそのまま笹本さんのイメージにぴたりで、私はとても感心したのだった。

出社し自分の席についてパソコンを立ち上げる。社内用のHPにアクセスし、届いているメールをチェックしてゆく。その中の一通に訃報を知らせる人事部からのメールがあった。何とはなしにそれも開いて次をクリックする。そこで、はたと手が止まった。稲妻のごとく頭に閃いた思いに、愕然とした。

もしかしたら、ヨーコさんはもうこの世にはいないのかも知れない。

喫茶店のマスターのヒロさんが、ヨーコさんの名前を聞いた後の狼狽ぶり。あれはこういう事だったのではないか。

ヨーコさんはもう既に亡くなっているのだ。

それは子どもの頃の事なのか、それとも大きくなってからの事なのかは分らない。もともと身体が弱かったのかもしれない。療養も兼ねてあの土地にいたとしたら、小学校のアルバムに載っていない

かったのも頷ける。

ヒロさんはヨーコさんを知っていて、そして亡くなったということ事も知っていた。その事実を知らずヨーコさんを探しに来た私に、本当の事を告げるべきか決めあぐね、動揺した態度をとってしまったんじゃないか。そう考えたらしっくりくる。

でもそれが本当だったらどうしよう……。どうすれば良いのだろう。タロさんになんて言おう。だってタロさんはずっと、ヨーコさんとの思い出だけを頼りに生きていたのに……。

軽いパニックになりそうになった時、始業のチャイムが鳴った。

どれだけ混乱していても憔悴していても、時は待ってくれず仕事はさばいていなくてはならない。
その日の私は普段にも増して口数少なく、極力誰とも目を合わせないように過ごした。

「はい、これで最後です。お願いしまーす」

矢崎さんが書類の束を机の上に置いた。その書類の上に、ぽんと可愛い包装の飴玉が三つ。

「あ、ありがとうございます」

「大丈夫？　なんか顔色悪いよ」

見上げると矢崎さんが僅かに眉を寄せて私を見つめていた。ストリートの髪は今日も艶やかでぱっちり二重。完璧なラインを描くアイラインは、夕方でも決して崩れない。

「はい。大丈夫です」

「片付けやっとかからさ、それ終わったらもう上がったら？」

彼女はいつも端々にまで目が届いて、周囲を気遣い職場内のバランスをととのえている。こんな私の事まで気にかけてくれるなんて……。ありがたくて申し訳ない。お礼を言っ、その提案に素直に従う事にした。

＊

もし、ヨーコさんが亡くなっていたら。
それはきっと、私のせいなのではないか。

もしヨーコさんがちゃんと漆黒の珠を持っていたら、そんな悲しい事にはならなかったのではないか。

きっとあの珠には人外の力が宿っているのだ。だからそれをお守りとして持っていた私は、今まで何とかやってこれたのだ。あのお守りがあつたおかげで今もこうしていられる。あの当時の私にお守りがなかったら、どうなっていたか分からない。きっと漆黒の珠にはタロさんの不思議な力が込められているのだ。

だとしたら、それを私に渡してしまったヨーコさんは、その後どうなったのだろう……。

子どもの頃の記憶が追いかけてくる。

じつとりと背中冷や汗をかいて、良くない考えばかりが浮かぶ。また無意識にかばんに手を入れてあのお守りを探してしまった。あれに触れたかった。あれだけが私の居場所を教えてくれた。

あの頃の私は、いつも邪魔者だった。でも今は違う。もう良い年をした大人なのだ。だけど……。

漆黒の珠を、もらったりしなければ良かった。

ヨーコさんがずっと持っていたら、全てが丸くおさまっていた。そこに私が変な形で入り込んだばかりに、タロさんはずっと思い続けていた半身を、魂の伴侶を見失ったのだ。

温もりを思い出す。ヨーコ、と何度も名を呼んで、私を優しく抱き締めた腕を思い出す。愛しい少女にもらった名前を口にしながらで、幸せだと呟いた。カラス、と呼んただけで嬉しそうに微笑んだ。他に何も求めず、ただそれだけで満足だと……。

もうテル君達は帰って来ているだろうか。

夕暮れの空を仰ぎ、家とは反対の道を選んだ。行くあてなどなかったけれど、家に帰れなかった。

もしかしたらやっぱり、邪魔者だったのではないか。いつも余計で余分な存在。

それが、私だ。

五歳の時、母を病気で亡くした。それから私は父に引き取られ、あの人外様が祀られていた神社のある場所から引越したのだ。母と父に何があつたのかは分からないが、私が物心ついた時には既に二人は離婚していた。後になって分かった事だけれど、母は自らを蝕む病気がガンだと知った時点で父に連絡を取っていた。故郷のおじさんとおばさん達にこれ以上迷惑はかけられないと悩んだ結果だったのだと思う。それでも私を引き取りに来た父に、おじさんとおばさんは、うちで私を育てたいと申し出てくれたのだそうだった。

父に引き取られた私は母の故郷よりは少しだけ都会の町へ移住した。

そこには新しい母親と、腹違いの妹がいた。

ただ黙々とやみくもに街路を歩き続けた。薄闇がおりて街灯に明かりがついても、足を止める事が出来なかった。喫茶店やレストランの前を幾度か通りすぎたけれど入る気にもなれず、すれ違う人の姿さえ見ようとせず、自分の少し先の道を見つめて歩き続けた。

ぼす、ぼす、ぼす、ぼす……。

スニーカーを履いている私の足音は、頑丈なアスファルトに染み込んでゆく。

ぼす、ぼす、ぼす。

大通りに突き当たり、横断歩道の前で立ち止まる。春先の涼しい夜風が通り過ぎ、私の髪を揺らした。

信号機の赤色が、じんわりと滲んでいる。

もしかしたら私は、あの頃から何も変わっていなかったんじゃないだろうか。

上京して一人暮らしを始めて大人になっても、子どもの頃と何も変わっていなかったんじゃないだろうか。

私は、ずっと……………。

「ユイネ！」

ぱたぱたと足音が聞こえた。

「ユイネ。どうしたの？ どこ行くの？ 家はこっちじゃないでしょ」

きゅつと腕が掴まれ、その感触に視線を腕に向けた。白くて綺麗な指先が見える。灰色のパーカーにジーンズ姿の華奢な男の子。可愛らしい顔がじつとこちらを見上げていた。

「テル君……………」

「うん」

「どうして、ここに」

「分かるんだ。ユイネがどこにいるか」

突然、テル君の大きな瞳から、ぽろりと涙がこぼれた。

「テ、テル君！？」

テル君が口元を持ち上げて微笑んだ。その美しい表情に息をのむ。天使のような男の子は私の首元に顔を寄せて、その両腕で私の背を包んだ。

「ユイネ……」

つやつやの茶色の髪が顔に当たっている。柔らかかった。

「ユイネ、帰ろう。晩ご飯、出来てるんだ」

しわしわになった私の心臓が、とくりと鼓動をうつた。
……いいの？

「うん。だってユイネのうちでしょ？」

でも。

「ごめんね、ユイネ。悲しい思いをさせて。泣かないで。……一緒に帰ろう？」

実際に涙を流しているのはテル君だったのだけれど、それはきつと私の涙なのだろう。

目を閉じてテル君の温もりに安堵しながら、小さな声で返事をした。

「うん……」

それからテル君と手を繋いで来た道を引き返して歩いた。もう辺りは夜の闇に包まれていて、結局家に着いたのは一時間以上も後の事だった。帰った途端、お腹をすかせたタロさんに「遅い！」と叱られてしまった。けれどタロさんも食わずに待っていてくれて、夕食は温め直して三人でとった。

「だ、だから、もしかしたら私のせいでヨーコさんが……」

ものすごく言い出しにくかった。

夕食後、高級日本茶を味わいつつテーブルを囲んでいるひととき。私は自分の思いついた仮説「ヨーコさんが既に亡くなっているかも説」について、タロさんとテル君に説明した。話の途中でタロさんが怒り狂って暴れ出しはしないかとびくびくしながら。けれど二人の反応は、私が予想していたものとまったく違っていた。ぽかんとした表情で私を見つめ、それからタロさんがテル君を見下ろし、テル君がタロさんを見上げて数秒見つめ合い、また私に視線を戻した。

「何を言っているのか分からんが、ヨーコは生きているぞ。確かに。いくら守り人の力が弱っているとはいえ、それくらい今の俺にだって感じ取る事が出来る。……まさかそんなくだらない理由で落ち込んでいたというのか？」

……はい？

目を見開き、タロさんの色男顔を凝視した。開いた口がふさがらない。ふつふつと怒りが込み上げてくる。

「くだらないって！ ひ、ひどいですつ。分かってるんならちゃんと言ってくれなきゃ」

「ああ……。まさかお前がそんな風に考えるとは思わんからなあ。それに漆黒の珠にはそんな威力はないぞ。あれは半身の体内に入った時に力が発動されるようになってるからな。あるとすれば、お前の気が俺に届いていたくらいで、持っている者には何ら利点はない。お前の気のせいだ」

「そんなっ。だって私、わ、私のせいかと思って！」

ああ何故だろう。今頃になって泣きそうになってきた。ヨークさんが生きていると分かってほっとしたからなのか、タロさんの物言いがやっぱり失礼で偉そうで腹が立つからなのか、分からなかった。じわじわと目に涙が溜まってきて、慌てて手の甲で拭いた。

「ちょっと！ タロちゃんの馬鹿っ。ユイネを泣かせないでよ！」

テル君が隣に座るタロさんの二の腕あたりをばしん、と平手でたたいた。

「面倒な。俺のせいではないだろうが」

タロさんにはちっとも効いていないようだ。

「テ、テル君。良いの、もう。ヨークさんが生きてるんならそれで……」

「ユイネ……」

やっぱり私の気持ちはタロさんへの怒りよりも、ヨークさんが生きていたという安心感の方が勝っていたようで、自然に口元が緩んで笑ってしまった。

「本当に……良かった」

心の底から、そう思った。

その時、大きな手の平が私の頭の上にぽんと置かれた。そのままわしわしとめちゃくちゃに撫でられ、髪がぐしゃぐしゃになる。

「ちょ、ちょっとタロさん。なにするんですかっ」

タロさんの腕を押しつけて顔を上げる。

「ユイネ。お前は阿呆なくらいのお人好しだな」

そう言つて、タロさんが微笑んだ。目を細めてやんわりと笑うその表情は、普段のタロさんにはあり得ない程に優しいものだった。だからだろうか。心臓を鷲掴みにされたような衝撃が走り、身体が硬直してしまった。

「気をつける。それでは悪い人間に良いように使われるぞ」

「わ、悪い人間って……」

ぐいとタロさんがテーブルの上に乗り出し、彫の深い美貌がすぐ目の前に迫る。こちらちに固まった私はその切れ長の瞳を真正面から見てしまった。途端に赤面したのが自分でも分かった。

「俺のような奴だ」

そして、にい、と意地悪く笑う。やっぱり彼は、かみさまではなく悪魔なのだ。

「顔が赤いぞ」

「あああ、赤くないですっ」

邪魔者の私。

だけど、もうあの頃みたいな何も出来ない子どもの私じゃない。ヨーコさんが生きているというのが分かって良かった。ヨーコさんとタロさんとテル君の間に割り込んでしまった私。邪魔者は邪魔者なりに、せめて何かで役立つ事が出来ればと思う。

だってそうしたら、もしかしたら、タロさんとテル君が、ユイネと会えて良かったと、そう思ってくれるかもしれない。

それならきっと、私という存在にも意味がある。そう思う事が出来る。

026（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

次の更新、なるべく週一を目指して頑張ります。

ユイネ。勝手に巻き込まれた被害者なのに。不運体質ここに極まり。

今後タロさん視点が入る予定でいます。

いつも読んでいただいている方々、どうもありがとうございます。
嬉しいです。

翌日、私は三十八度五分の熱を出した。おそらく一年ぶりくらいの事じゃないだろうか。

「大丈夫？」

枕元のすぐ近くにテル君がいて、とても心配そうな表情をしている。大きくて可愛い瞳が切ない光を帯びて長いまつ毛が影を作り、きゅつと結ばれた口元にも悲しみが滲んでいる。思わず見惚れてしまった。

「ユイネ？」

「あ、うん。大丈夫。ごめんね」

テル君が何かと世話をやいてくれて大げさなくらいのアイスノンで冷やされているし、久々に自分のベッドに横になっているので随分と楽だ。

「いま何か作ってくるから、それ食べて薬飲も。ちょっと待ってて」

何だか心がぐすぐつたい。やつぱりいくつになっても、看病してもらえるっていうのは嬉しい。ぼんやりと部屋の天井に視線を巡らす。

だけど、これじゃあヒロさんのところへ行くのは難しい。やっと土曜日になったっていうのに。ヨーコさんの居場所を見つけないといけないのに。

ふう、と息を吐き出す。その息も、口の中までもが熱かった。

「まったく軟弱な奴め」

見ると扉を開いてタロさんが入ってくるところだった。つやつやの黒髪は今日も一つに結わえている。来るなり憎まれ口をたたく大男の手に、替えのアイスノンとスポーツドリンクのペットボトルが握られていた。

誰のせいで熱が出てると思ってんですか、と心の中だけで返事をする。驚いた事にタロさんまでもが優しいのだ。本当に、これっぽちの少しだけ、優しい。さすがに病人を罵るような事はしないみたい。

タロさんの大きな手が私の後頭部を支え、一拍おいてゆつくりと元の位置に下ろされる。ひんやりと良く冷えたアイスノンがまた心地良く、目を閉じるとため息がもれた。

「すみません……ありがとうございます」

お礼を言うと、タロさんがふと私に視線を向けベッドの傍に腰を下ろして近づいてきた。

「お前の周りに『負』が見える。大した数ではないな。おそらくこれが原因だ」

少しだけ背筋が寒くなった。タロさんの記憶の中で見た『負』は、とっても薄気味悪いのだ。うねうねぐねぐねと蠢く真っ黒の昆布みたいな蛇みたいなの、まがまがしい物体。それが私の周りにあるなんて……。

「うえ」

「動くなよ」

大きな手のひらが私の顔の上あたりにかざされる。

「え？ 何ですか」

「『負』を取り除いてやる」

「い、いいですつ。大丈夫です。少し熱が出てるだけだし」

慌ててぶんぶんと首を左右に振った。するとタロさんが不思議そうな顔を向ける。

「おかしな奴だな。この『負』を消せば熱も下がるんだぞ。痛みがあるわけじゃない」

「私に痛みがなくなっても、タロさんにはあるでしょう」

かみさまは『負』を自分の体内に一度取り込んでから、昇華させる。けれどそれには痛みが伴う。私はその痛みを彼の記憶の中で体験して知っている。出来れば二度と体験したくないと思うようなものだった。かみさまはそんな痛みに耐えながら人知れずこの世界を守っている。たかだか私なんかの為に痛い思いをするなんて、良くない事だ。

タロさんの凄みのある鋭い両目が、まんまるに丸くなった。おちやめな表情に思わず笑うと、タロさんもふん、と鼻で笑った。

「ここまで私欲のない女は珍しいな」

「あの……タロさん」

「何だ」

「本当は、ヨーコさんがどこにいるのか分かっているんじゃないんですか？」

美しい顔にじいっと見つめられて、熱が上がりそうになってごほんとか払いをする。

テル君は私がどこにいるか分かったと言った。

それにヨーコさんが生きているのを二人はとっくに感じ取っていたのだ。それが意味するのは、ヨーコさんがこの世界のどこかに根ざし、毎日を暮らしているのを知っているという事だ。それならば、どこにいるのかくらい分かるはずだ。タロさんの守り人の力が、そこまで回復してきているという事なのだろう。

「あいにくだが、場所までは特定できん」

「え……」

ふうと大きく息を吐き出して、タロさんは遠くを見つめて続けた。

「今はお前との時間の方が長い。……お前との絆の方が深いからな」

何故だか心臓がどくどくと騒ぎ始める。視線を部屋の天井に戻してゆっくりと深呼吸をした。

「……今はそれで良かったと思っている」

え……？

「あの時の俺はどうかしていたのだ。漆黒の珠を渡すなど、言語道断の事だ」

タロさんは遠くを見つめたままだった。私から見える横顔はとってもシャープで美しかった。

「俺だとしてここまで阿呆ではないぞ。ヨーコはもう大人だ。とっくに家族を持って幸せに暮らしているだろう。そうでなかったとしても、忘れているはずだ」

知らず呼吸が浅くなる。心臓ががたがたとつるさく震えた。

「……もう会わない方が良いのだ。それで良い」

「そ、そんな」

あんなに会いたかったのに？

あんなに、あんなに大好きなのに？

「タロさん……」

また、最後の最後でタロさんは選択するのだ。それまでは腹が立つくらい図々しくせに、そうやってあっさりと自分を殺す。他者を生かす事を選択するのだ。かみさまは、とっても切ない。

「だ、だめですっ。そんなの、ヨーコさんに会ってみないと分からないじゃないですかっ」

ぎゅっと掛け布団の端を両手で握り締めて、ぜいぜい言いながら声を振り絞った。

「ヨーコさんだって絶対覚えてるはずですよ。きっと絶対に、ヨーコさんを見つけますから！ だから……だ、だから諦めないでください」

「ユイネ」

「今日はちよっと、無理だけど、明日には良くなってると思うし、だからっ」

おもむろに大きな手の平が私の頭に置かれた。びっくりしてぎゅっと目を閉じると、そのままゆっくりと優しく、いたわるように動

いた。タロさんが私の頭を撫でている。その事にまた驚き、かつと両目を見開いた。完全に身体が硬直してしまつて動かない。首をぎぎぎ、と動かして横目で相手を確認する。

あ……また笑つてる。とろけてしまひそうな優しい笑顔だ。

「お前という奴は、本当に奇妙な生物だな。貴重だ。稀に見るお人好しだ。馬鹿正直で呆れるくらいに裏がない」

「……ほ、褒めてるんですかそれ」

整つた美貌がぐつと近づいてきた。ますます緊張して固く目をつぶつて縮み上がる。

「当たり前だ。この俺が褒めてやっているのだ。喜べ」

う、嬉しくない。タロさんの顔がとつともなく近くにある気がする。低い声がごく近くで聞こえるし、頬に気配を感じる。

「ああ、あの！」

「どうした」

「わ、私、下僕じゃないです」

くつくつく、と声を出さずに笑っているのが分かった。

「お前は这个世界を守る為に、俺にその身を捧げただろうが」

「いや、それはその……」

「もう既に、お前は俺のものだ。諦めろ」

ああもつため。熱が上がった。絶対に。

「……そうやって素直に心を開けば良いのだ。お前の気は、心地良

い
」

どうやら触れている部分から私の気がタロさんへと流れているようだ。って、ちょっと待って。私は横目でちらりとタロさんを見や
った。

「病人から気をとらないでもらえませんか」

「俺は神だぞ。口応えする気か」

「い、今は力も弱いし、居候です」

「む。下僕の分際で」

「だから違いますっ」

「ほう」

ぐき、と無理矢理顔の角度を変えられ、間近に迫るタロさんの顔に呼吸が止まりそうになる。

「ユイネ」

どうしよう。ぐらぐらする。

「返事をしろ」

「……は、はい」

満足げに笑うタロさん。何だか嫌な予感。

「お前の気を根こそぎ奪ってやりたくなった」

何ですとっ！

慌てて硬直していた身体を動かし離れようと身じろいだけれど、
時既に遅し。がしりと肩を抑え込まれた。ひどい。ひどすぎる。高

熱を出している病人に何をするつもりなんだ。タロさんがゆつくりと目を閉じて迫ってくる。何ですかその美しい顔！ ぎいやあああ……！！！！

「何してんのっ」

ああ。天の助け。

「テル君っ」

「こ、の野蛮人っ。ユイネは熱出してるんだよ！？」

テル君が私に覆いかぶさっている大きな身体を勢い込んで引きはがした。タロさんは子どもみたいにむうと口をとがらせている。どうしてこうも平然と、病人相手にセクハラ出来るんだろっ。かみさまの思考回路は良く分からない。私は死にかけの魚みたいに、はふはふと息を吸い込んだ。

「ユイネ。平気？ この変態に何かされなかった？」

「……おい。テル、お前の主はこの俺だぞ」

「そうだよ。だから毎回、いつつもいつつも、僕が苦勞してるんじゃないか」

「なにい。消すぞっ」

「そんな事して困るのはタロちゃんだからね！」

二人の言い合いを聞きながら私はうふふ、と笑った。なんだかんだいっても、二人はとっても仲良しなのを知っている。それはそれは兄弟みたいに親子みたいに、絆が深い。熱が出ていてばおつとするし結構辛いのだけれど、心はほかほかだった。すごく安心する。ここがずっと私の居場所なら、とっても嬉しい。だけどそれは、二人には言わないでおこう。

＊

日曜日。起きられるまでに回復して、すぐに母の故郷の町にある唯一の喫茶店「ヒロ」に電話をした。

おずおずと用件を伝えると、ヒロさんはやっぱり慌てて、急に大声になった。

「や、やっぱりヨーコさんを知ってるんですね」

『ああ、うん。いや……参ったな。俺、隠し事するのすごく下手みたいだね』

携帯を持つ手に力がこもる。

「あの、まさか、もう亡くなってるんですか？ だからあんなに慌てて……」

見えない喫茶店の風景が脳裏に広がる。その端にあるレトロな電話機の前に佇むヒロさんはどんな表情をしているだろう。もしかして真っ青になっているのかも……。

「私、何も知らなくて……。ごめんなさい」

『ああ！ いや、違うんだっ。唯ちゃんが謝る事なんてひとつもないよ！ 俺の方こそごめんだよ。うん、ヨーコって人ね、確かにいるよ。知ってるし。ちゃんと生きてる』

「本当ですか！？ どこにいるんですか！？ 会う事出来ますかっ」

『……それがね、ちょっと連絡つきづらい人でさ。ええと、ほら、家庭の事情とか諸々で。あの、俺からヨーコに連絡取ってみるから、

待っててくれないかな』

そんなに難しい事情があるなんて。ヨーコさんは一体、何を抱えて生きている人なのだろう。すごく心配になってきた。

「あのでも、ご迷惑になるんでしょうか……」

『いや、大丈夫だよ。唯ちゃんがそこまで会いたいって思ってるなんて、俺知らなかったからさ。連絡とれたらまた必ず知らせるから約束する。だから申し訳ないけど、ヨーコの事は俺に任せてくれなかな。絶対知らせるから、それまで待って欲しいんだ。ね？』

来月にはお父さんになるヒロさん。こんな忙しい時期に余計な手間を増やしてしまったようで申し訳なく思った。だけどこれで、何とかヨーコさんのしつぽを掴めた。最初は途方もない話のように感じたけれど、もしかしたらすぐにでもヨーコさんに会えるのかも知れない。一体どんな女性になっているだろう。

私をいつも元気づけてくれたお姉さん。

タロさんを真っ暗闇の孤独から救った美しい少女。

きつと、会える。

028（ゆるやかな確信）

「おいこらタロ助よ。お前もちったあ学習しろよ」

扉を目の前にして振り返った『紅蓮』が、俺を見上げて言った。

「何が」

「何がじゃねえ。俺が分からねえとでも思ったか？ テルのなつき
ようを見たら一発だ」

燃えるような赤の短髪に手をやって、がしがしと頭を掻きながら
続ける。

「このド阿呆が。異世界の女なんぞ、余計にわりいぞ」

「ヨーコの事はもう諦めている」

そうだ。漆黒の珠を手掛かりにこの世界に降り立ち、そこで出会
った女がヨーコではなかった時点で、本当は諦めていた。そればか
りか懲りずに半身を手に入れようとしていた己に腹が立った。

「だったらなんで、こんな世界でちんたらやってんだよ」

「……別に」

「平気だよ、『紅蓮』。タロちゃんは意気地なしの臆病者だもん」

隣に立つ天使のような子どもが憎まれ口をたたく。『紅蓮』はわ
ざとらしく大きなため息をついた。その憂い顔は本当に辛そうに見
えるが、それは見せかけだけだというのを良く分かっている。こい
つの容姿は何かと得だ。

「とにかくよ、やめとけ。お前は阿呆で惚れっばいし、わがままのうえ寂しがりやで我慢もきかねえ」

それではまるっきりガキと同じだ。

「言いすぎだぞ。お前だとして同じだろうが」

「俺はきちんと遊べる」

無言で両手を扉にかざし、意識を集中する。こいつのせいで何度死にかければ良いのか。扉を閉じるのにも開くのに、相当な力を要するのだ。傍迷惑この上ない。

「こらこら！ 話の途中だっ」

「俺には話す事など一つもない。さっさと戻れ。バードナートが怒り出すぞ」

その名を口にする、『紅蓮』が眉間にしわを寄せて、げえ、と奇妙な声を上げた。

「おいっ。良いか！ 早いとこ戻って来いよ！ こっちにいたってろくな事になんねえんだからな！」

どこにいたって、ろくなものではない。俺にとっては生まれ故郷でさえ苦痛だ。何せ生きている事さえ苦痛なのだ。これ以上の地獄が他にあるつか。

……一体いつからこんな風に思うようになったのか。遠すぎて覚えていない。

無事に五月蠅い同胞を戻し扉を元通りに閉じると、ぐらりと身体が傾いた。息切れがする。いまだ守り人としての力は微弱だ。

あいつめ……。

あいつが、俺に心を開かんのがいけない。あいつから直接氣を得る事が出来れば今よりはましになるのだが、どういうわけかそういう点においてだけ、あいつは頑固なのだ。

漆黒の珠やテルには心を開くくせに、肝心の俺に対してだけはいつも頑なに心を閉ざす。

「……大変だ。ユイネが」

うすぼんやりとした表情のテルが、うわごとのように呟いた。

「くそ……何だというんだ」

俺はそれどころではないぞ。死にそうだ。しかし、今この時点でユイネに何かあつては困る。

「ユイネがとっても悲しんでる」

*

氣を取り損ね、立ち上がる体力もないのでベッドの脇に座り込んだ。大きく息を吐き出しながら隣を見やる。だいぶ症状が落ち着いたように見える女の寝顔がすぐそこにあった。

唯音。

まったく不思議な女だ。

これだけの高熱を出しているくせに、頑固さだけは変わらない。俺に心を開いた事は褒めてやっても良いが、何故ここまで私欲がないのか解せない程だ。

金を作って出してやっても、大金すぎると受け取らなかった。

『負』を取り除いてやろうと言っているのに、やめてくれと言いつ張った。

あまつさえ、ヨーコを見つけ出すと息巻いて、諦めるなど言い切った。

気弱で苛々する程主張がないくせにそうやって時々抵抗するのだ。そんな時は決まって自分の為にする事ではなかった。この世界を守る為に、真っ青になりながら俺に食ってかかった女だ。

……この十八年間、俺を生かし続けた女だ。

地味な女の横顔を見つめる。薄く開いた口からすうすうと呼吸音が聞こえ、熱のせいで頬が少しだけ赤らんでいる。そっと腕を伸ばし、指先で頬を撫でた。すべらかな感触。僅かに気が流れ込んできた。

このあたたかな感触を知っている。恐ろしく冷えた暗闇の中で、唯一の希望だった。たったひとつの俺の希望だった。悲しくて穏やかな、美しい魂の旋律。

愚かな俺はそれを、ヨーコのものだとずっと勘違いしていたのだ。何と間拔けな事だろうか。

「もう。ユイネは熱出してるんだから、気をとっちゃだめだってば」

部屋に入ってくるなり小言を言い出すテルをじろりと睨みつける。気を摂取する行為によって身体的に悪影響を及ぼすというような事は一切ない。まあしかし、搾取される側からしてみれば気分的に良いものではないだろう。テルは俺の威圧に怯んだ様子もなく、その場で腕を組んで可憐なため息をついた。

「……いつまでここにいろつもり？」

ヨーコが漆黒の珠を持たない今、この世界に用はない。だがこの目の前にある魂を、何のためらいもなく手放す事が惜しい。分かっている。俺の想いはいつだって矛盾しているのだ。

「さあな」

「僕らにとつては嬉しい事だけど、これじゃあんまりにも……」

「テル。こいつは過去に何があったんだ」

「興味あるの？」

「ただ、何となくだ」

端正な眉をひそめ、美しい子どもが俺を見据える。

「……意気地なしのタロちゃんらしくないな。ユイネをどうするつもりなの。……もう、あんな思いはしたくないんでしょ？」

「どうするつもりもない。勘違いするな」

もう間違えたりしない。ヨーコと再会出来なかった事にも、きつと意味があるのだ。

もう求めてはいけない。探してはいけない。

「まだ力が戻らないから、氣を得る為だけだ。他に意味はない」

じつとユイネの寝顔を見つめる。幾分か和らいだ表情に変わっていた。

別にずっといようと思っっているわけではない。半身にするつもりもない。もう間違えるわけにはいかない。

ただ、もう少しだけ、あと少しだけ、ここにいても悪くはないと思っただけだ。

また氣の遠くなるような、クソみたいな時間を過ごさねばらんだ。その永い時から見れば僅かまたたきの間ほどの事だ。ほんの少

しだ。こんな穏やかな時はすぐに終わる。それに……。

こいつならきつと俺を拒絶出来ない。こいつならば、受け入れてくれる。

「……ほんと、君って馬鹿だよなあ。あとで辛くなっても知らないからね」

俺は小づるさいテルの眩きを無視した。

ユイネ。

お前の傍は何と心地が良いのか。

テルが幾度となく咎めるので、多少なりとも気を使っているつもりだ。

極力怒鳴らないようにしているし、睨まないようにも心がけている。目つきが悪く態度が偉そうに見えるのは、まあ、仕方ない。生まれつきだ。

この俺が、神だと人々に崇められるこの俺が、これだけ心を碎いてやっているにも関わらず、何なんだお前は。

「ユイネっ！　どうしてお前はまた心を閉ざすんだ！　何が気に入らん!?」

「うつ……ちょ、ま、まず離してくださいっ」

むっとしながらも力を緩め解放してやると、ふらふらと俺の腕の中から逃げようとするので、がし、と腕を掴んだ。すると今にも食われんとする小動物のような怯えた目で俺を見上げる。

「い、色々言いたいんですけど、良いですか」

「お前は逆らってばかりいるからな。もう慣れたぞ。言ってみろ」

眉を下げ困ったような迷惑そうな表情のユイネは、俺に掴まれた腕に視線を落として口を開いた。

「あの、気なら、テル君経由でお願いしたいんですけど」

「却下だ」

「なんで……」

「こう見えても毎日遊んでいる訳ではないぞ。日々この世界の均衡を保つ為に、『負』を見つけては消しているのだ。かなり辛いんだ

ぞ俺は。お前から直接氣を得た方が良いに決まってる」

「で、でも、心を開くとかってそんな簡単には」

「テルには出来て何故俺に出来んだ!? あれは俺の一部だぞ」

「だって、タロさん」

「何だっ」

ユイネは、う、と言葉を詰まらせ沈黙した。俺が何だ。くそ。苛々する奴だな。

「さっさと言わんか!」

細い両腕を鷲掴んでがくがく揺さぶってやる。

「こ、怖いんですっ!」

「なにいつ。どこがどう怖いというのだ! これ程優しくしてやっているのか!？」

「どこがどう優しいっていうの。馬鹿タロっ」

思い切り背中をどつかれ、その衝撃に掴んでいたユイネの腕を手放した。固いもので殴られたようで背骨がじんじんと痛み、たまらず背に手を回して顔をしかめた。テルが素早く前に回り、俺とユイネの間に立ちふさがる。

「くっ……痛いぞ!」

「当たり前だよ。手加減なしで殴ったんだもん」

美しい子どもは不敵に笑い、片手に握っているお玉を振って見せた。背後にいるユイネが笑いをこらえている。

「……邪魔だ」

「わつ。馬鹿！ それはずる……」

言い終わらない内に、テルを消して俺の中に収めた。こつん、とお玉が床に転がり、目を見開いて硬直しているユイネが一人、残される。

「お、横暴ですっ!」

「何とでも言え。主の俺に逆らうところなる。さあユイネ。俺に色々言いたい事があるんだろう!？」

慈悲深い俺はユイネとの距離を縮めずに、その場で腕を組んで仁王立ちした。

「……あの私、容姿が整ってて美形の人ってすごく苦手で、ただでさえ緊張するんです」

「それで」

「えと、タロさんは背も大きいし、何て言うか威圧的で」

「だから？」

「ええと、だから……」

「もう良い。お前が心を開かんのなら、俺にも考えがある」

え、と顔を上げたユイネの間抜けづらを見据えて続ける。

「体液を交換すれば良いのだ」

告げると、ユイネは瞬間に顔を真っ赤にして両手をぶんぶん振りながら後ずさっていく。一步俺が近づくと、慌てて声を上げた。

「だからそれは出来ませんって」

「儀式だと思え」

「お、思えません！」

「この世界がどうなっても良いのか！？ お前の気がなければ俺は守り人の力を発揮出来んのだ。それでまた天変地異が起きてても良いのか！？」

「うつつ」

顔をゆでダコのように赤くしているユイネを壁際まで追い込んで、じっと見下ろす。相手が俯いているので焦茶色の柔らかそうな髪に唇を押し当てる。すると小さな身体がますます縮こまった。

「か、かみさまがこんなパウハラするなんてっ。それにこれ、セ、セクハラです」

意味が分からん。

「何ハラだか知らんが、俺はお前を脅迫しているのだ」

「……分かってて言ってるんですか。余計にたちが悪……」

「何か言ったか」

「……い、いえ」

脅迫しようが何しようが、俺はお前の気が欲しい。出来れば俺に心を開いて欲しい。この世界にいる僅かな時の間だけでも、そのあたたかな魂に触れていたいのだ。こうしていられる時間が長くは続かないと分かっているから、無理を押ししても求めるのだ。

「あああ、あの！ それからっ」

「何だ。まだ言うつもりか」

やはり、こいつは意外に頑固だ。俺を怖がるくせに、言う事だけはちゃんと言う。

「毎朝、こつこつのやめてください。仕事に遅れちゃ、困るんです！」

叫びながら俺を両手でぐいと押しやり、逃げていった。

「くそ……だめか」

——あーあ。これ以上嫌われてどうすんのさ。君って不器用すぎ——

「五月蠅い」

見た目が怖いだの何だのと言われても、どうしようもない。そんなものさつさと慣れてしまえば問題ない。守り人の異能の力は万能に近いが、己の姿形を変えるなどという無意味な事はしたくない。大事なのは外見ではない。魂なのだ。

良からう。他にもいくつか手段はある。

「……何ですかコレ」

スウェット姿のユイネが両目を見開いて呆然と呟いた。こいつの反応は予想通りだ。

「見て分らんか。神である俺にふさわしい、キングサイズのベッドだ！」

「これじゃ、ベッドしかこの部屋に置けない……」

「ふん。寝室ならば問題あるまい。だいいち、元々お前の部屋が小さすぎるのだ」

「あの、私のベッドは……」

「あれは捨てた。前のベッドでは俺の両足が出てしまうからな。これなら大丈夫だ」

昼間家具屋に行き、背の高い俺でも足が出ないサイズのベッドを購入して寝室に運んだ。運ぶ際に扉と壁が邪魔だったので取っ払った。だから寝室の扉はなく、廊下からすぐに高級ベッドに倒れ込める。

部屋一帯が、肌触り最高のベッドの上なのだ。すぐ近くで、諦めたようなため息が聞こえた。

「……も、良いです」

「さて。今夜からお前もこのベッドで寝てもらおう」

ぎょっとして俺を見上げる。口が動き、なんで、と声にならない声で呟くユイネに向かい、微笑みかけてやる。この容姿が怖いらしいから、なるべく笑顔を作ってやろう。俺は優しい。

「最近気付いたんだがな、人は寝ている時まったく無防備な状態なのだ。よってお前も寝ている間だけは俺に心を開いている。その間に気をいたたく事にした」

「でもっ、そんなっ」

「口応えは一切却下だ！ お前は俺の傍で寝ろ！」

顔を真っ赤にして眉間にしわを寄せ、ぴったりと口を閉じてユイネが沈黙した。どうやら静かに怒っているようだ。だが、知らん。逃がさない。

「……困ります」

「これは提案ではない。命令だ」

「嫌ですっ」

「ほう。この世界が壊れても構わないという事か？」

「ひ、卑怯ですっ」

「お前だっであのソファでは窮屈だろう」

「それはそうですけど、一緒のベッドはちょっと……」

「ねえ、もう寝て良い？」

押し問答を続ける俺とユイネの間を割って、テルが眠たげに目をこすりながらやって来た。

「テル君、あの、あのねっ」

困惑した表情でユイネがテルを見下ろす。テルは大あくびをしながらユイネの手をとり、小さな頭をその胸に預けて寄り添った。

「ね、もう寝ようよ、ユイネ。大丈夫だよ。この野蛮人から僕が守ってあげるから、一緒に寝よ。このベットふかふかで気持ち良いんだ」

やんわりと、有無を言わずにユイネの手を引いて俺の前をすんなりと通り過ぎる。

……何故だ。

大きなベッドに俺とテルとユイネがおさまり、薄暗い闇の中で視線を感じて顔を向けると、相手はじととした目で俺を睨みつけていた。それは疑いと警戒心丸出しの目だった。

「阿呆つ。お前に何かをするつもりは一切ないぞ。もうとくに色欲なんぞ枯れ果てているんだ」

ユイネは目を丸くして口を開けた。薄暗くて判別出来ないが、きつと赤面しているのだろう。

「し、色欲って……」

「何百年生きていると思っっているのだ。俺は『紅蓮』とは違うぞ」

どんなに美しい女性だろうが悩ましい肢体だろうが、何だろうが興味はない。俺には既にそういった感情が死に絶えている。きつと生きすぎるところなるのだ。だが、美しい魂は別だ。何としても手に入れたいし傍に置きたい。欲しくて欲しくてたまらない。しかしだからといって、その魂の持ち主を抱きたいとか、そんな風に思う事もない。ヨーコに対しても同じだったのだからそうだろう。む

しろ男だろうが女だろうが構わないくらいなのだ。そう。雄とか雌とか、そういう繋がりなど求めていない。

そんな関係はもう終わったのだ。遠い遠い、あの昔に。今では夢見る事もない。

「……分かりました。もう寝ますっ」

ほんの少し不機嫌な声が聞こえ、はじっこに小さく丸まってユイネが横になった。

そうだ。それで良い。こいつがきちんと寝入った事を確かめてから、邪魔なテルを消してやろう。

*

ふつくらと心が満たされていく。重く冷たく、凍てついた孤独が静かに溶けだして、呼吸をするのも辛くない。優しい大気が四肢を包み込む。嫌で嫌で仕方なかった夜の闇も、気付くだけで憂鬱になる次の日の訪れも、今は自然に受け入れられる。朝日の何と清々しい事か。

ああ……世界は、己が思っているよりも遥かに、美しいのかもしれない。

「……やっと慣れてきたようだな。まったく手のかかる奴だ。この俺をここまで手こずらせるとはな」

「す、すみません」

あたたかく優しい気が俺の命を生かす。力が漲る。

「あ、あの、もう良いですよね」
「だめだ」

腕の中にある、女の柔らかな身体が僅かに強張る。そんな相手にお構いなしに、思い切り抱き締めた。

「うつ……」

幾日も寢床を共にし、毎朝いやがられながらも抱きつき、やっとユイネが俺に慣れて心を開き始めたのだ。

野生の猫を手なずけるよりも難しかった。人間は生きている分だけ確固たる価値観と意思を持つ。餌をやれば良いという話ではない。だからなおさら、達成感があるのだ。

ユイネからはほんのりと花の香りがした。それは俺も使っているシャンプーというものの残り香だ。しかし何故だか俺の腕の中にいる女から香る匂いは、もっと上等な香水のような香りがした。

体温が伝わる。感覚を研ぎ澄ますと、小さな心臓がどくどくと鼓動を打っている律動を感じる事ができた。ユイネは意外と華奢で、意外と女らしい体型をしている。

心地良い。ずっと、こうしたい。

「馬鹿っ！ そんなにぎゅうぎゅうにしたら息出来ないでしょっ」

テルの声にはっとして力を緩めると、ユイネの身体がふらりと傾いてテルがそれを支えた。

しまった。どうしても逃がしたくなくて、力を強めてしまった。

「ユイネ、大丈夫！？」

「う、うん……。テル君、ありがとう」

小動物のような二人が、非難めいた目を俺に向ける。わざと咳払いをして、ふんぞり返って言うてやった。

「今日のところはこれで許してやろう!」

ユイネが仕事に出た後はテレビを見たり電車を使つて観光地をのんびり回ったり、コイチを呼びつけてゲームをしたりして一日を過ごす。異世界からやって来た俺にとってこの世界は、場の引力が強すぎるのだ。ガルクループに居た時の数倍は神経を使う。むやみやたらに力は使えないので、見過ごす事の出来ない歪みが見つかった場合にだけ移動して『負』を片付ける事になっていた。

そうまでしてここに留まる理由は何だ。
ただ一つ。

俺が愚か者だからだ。

*

その日、帰宅したユイネの顔色が真っ青だった。いつもくせでうねっている柔らかな髪を一つに束ねて右肩に垂らしているのだが、走って帰って来たようで、ところどころがほつれていた。

「……おかえり。何かあった?」

尋常ではない空気を察して、テルがキッチンから出て仁王立ちしているユイネの腕にそつと触れた。すると、びく、と肩を震わせて俯く。

「何事だ」

俺は腹が減っていたが、普段大人しくよっぽどの事がない限り取り乱したりしないユイネの反応が気になって、椅子から立ち上がって近づいた。

ユイネが、ものすごく小さな声で何かを呟いた。俺とテルは一瞬視線を合わせ、ユイネの口元に耳を傾ける。

「ユイネ。も一回言って」

テルが告げると、ごくりと唾を飲み込んで、ユイネがもう一度呟いた。

「あの、申し訳ないんですけど、今すぐ出て行ってください。お願いします……」

何だと!?

テルが動揺しているユイネを何とか席につかせ、そのごじんまりとした手の上に白魚のような手を重ねた。

「何があつたの？」

「さ、さっき電話があつて。あの、もうこっちに着いてて、もうすぐうちに來るって言うから……」

「誰が來るの？」

刹那、言い淀む。

「ユイネ」

ユイネは俯いたまま、息をととのえるように一度深呼吸をして口を開いた。

「い、妹が……。私の妹が、こ、ここに来るから」

テルはじつとユイネの顔を見つめている。

なんだ、そんな事かと俺は大きく息を吐き出した。身内が來るといっただけで、どうしてそこまで血相を変えて慌てなくてはならんだ。

「だからその、タロさんとテル君の事、何て説明したら良いか分からないし、あの……」

「そんなもの何とでも言えば良いではないか。俺は腹が減っているのだ。何も食わずに出ていけというのか」

「す、すみません。でも」

「勝手にやって来る方が悪い。迷惑千万この上ない」

「……タロちゃん。僕らも勝手にやって来て居候してるんだけど」
「俺は良いのだ。神だからな」

ピンポーン。

それ程大きな音量ではなかったのだが、ユイネの肩がぴくりと反応した。怯えているようにも見える。

「あ、あのつ。とにかくお願いしますっ」

テルが無言で俺に顔を向けた。美しい子どもの真剣な目つきに、何かがあるのだと分かった。

*

「久しぶりい。あはは！ 変わってない！ チョー地味！」

「……突然どうしたの？」

「えつとお。今日が水曜だから、明日ね。オーディションがこつちであるから泊めてもらおうと思ってえ」

心なしか消沈したユイネの声と、舌たらずな女の声が玄関から聞こえた。

「あれ！？ なんかい良い匂いしない？ わあっ。なにこれ！ チョー美味しそうっ」

女がキッチンに並んでいる料理を眺めて歓声を上げる。そこにあ

るのは最近俺のお気に入りである中華料理だ。テルが調理を済ませ、後は口に入れるだけだったというのに、いまましい。女は「エビチリ」のエビをひとつつまんで口の中に放り込んだ。それから大げさな声を上げる。

「唯音ってこんなに料理うまかったっけ？ てかこれ、多くない？」
「あ、いっぺんに作って冷凍とかするから」
「あたしお腹すいちゃったあ！ シャワー浴びて来るからよろしくネ」

鞆やら上着やらをぽんぽんとソファに投げ、女は長い髪を一度かきあげて鼻歌を歌いながら浴室へと消えて行った。

「なんだあの女は！ 図々しいにも程があるぞ」
「人の事言えないでしょ」
「本当にあいつはユイネの妹か？ ちつとも似とらん」

俺とテルは姿を消したまま、部屋の隅に立ってひそひそと囁き合う。ユイネがゆっくりと俺たちのいる空間に顔を向けて言った。

「あ、あの……声、聞こえるんですけど」

光の屈折の角度や空間を曲げれば姿をくらます事は容易い。だが声まで消す事は難しいのだ。

「ユイネ。あの女をさっさと追い出せ。俺のエビチリをあんな女に食わす気か」

「料理なんてまた僕が作ってあげるってば。ユイネを困らせないでよ」

目の前にいるユイネが、しゅんと肩を落としてため息をついた。

「すみません……」

何とも気に入らん展開だ。

何故俺が腹をすかせたまま壁際に立つて姿を消さねばならんのか。何故ユイネがすまなそうに謝らなければならんのか。見るからにこいつだって迷惑そうにしているではないか。なのに何故、こっちがこれ程気を使わねばならんのだ。何だ、何なんだあの女は。

——あれはユイネの妹。異母妹だよ——

テルが直接俺に語りかけてきた。

それからユイネの妹だという女は、テルの拵えた料理をうまそうに食い散らかし、テレビゲームでひとしきり遊び、明日は7時に起してと言い捨てて寢室の高級ベッドにもぐり込んだ。

おい。これは一体どういう事だ。

「くそつ。いつまでいるつもりだ!？」

「ちよっ、タロさん、声もう少し小さくっ」

女が寝入った事を確認して、腹立ちまぎれにソファに腰を下ろす。ユイネが俺を見下ろして必死に囁くが、ますます腹が立って仕方ない。

「ユイネ! 妹だか何だか知らんが、どうして何も言わんのだ」

「え……」

「お前だっっていやなんだろう?」

そう言つと、驚いたように両目を見開いてから大きくかぶりを振つた。

「べ、別に私は……。麗奈ちゃんはタレント事務所に所属して、それでたまにオーディションとか受けにこっちに来るから。よくある事で……」

「それにしたつて図々しいぞ。まるでお前が召使いのようではないか」

「タロちゃんがしてる事と一緒にじゃない？」

面倒なのでテルの呟きは無視だ。

「あ、あれは図々しいんじゃない、天真爛漫なだけで。とっても良い子だから」

見上げると困つたように眉を下げているユイネと目が合った。

「……本気で言ってるのか」

お人好しにも程があるぞ。

翌朝、レナという名の女は厚化粧をして派手な服に身を包み、部屋を出て行つた。そのすぐ後にユイネも慌ただしく仕事へと向かい、静まり返つた部屋で俺とテルは無言でため息をこぼした。

*

「ちょっと調子悪かつたんだよねえ。だつてほら、昨日寝るの遅か

つたしい。あたしってほんと運悪い。ついてない。はーあ」

その夜も傍若無人に振る舞うユイネの妹は缶ビールを片手にぶつくさと言いつきを並べ立てていた。どうやらオーディションというものが良くない結果に終わったようで、さつきから聞いてもいない事を早口でユイネ相手にまくしたてていた。

「ね、そう思うでしょ？」

「そうだね。麗奈ちゃん、可愛いのに。受かんないなんておかしいね」

「でしょお！？ 短大でもお、あたしのファンってたくさんいるんだからあ。一度に何人からもコクられたりするんの。でもお、やっぱりイケメンじゃないと、あたしと釣り合わないでしょお！？」

「うん。そうだね」

さも嬉しそうにうふふ、とレナが笑った。それ程酒が強いわけではないらしく、少し酔っているようだ。

「唯音はさ、そんな経験した事ないでしょ」

「え……」

「ていうかあ。いまだに処女？」

その下品な言葉に傍目で見ても分かる程ユイネが動揺すると、何が面白いのか、けたたましい笑い声が上がった。

「チョー受けるう！ それってやばくない？ 腐ってんじゃない？ おねーちゃん！」

もう我慢ならん。聞くに堪えん。一步足を動かすと、すかさずテールに腕を掴まれた。

——だめだつて。余計に話がややこしくなっちゃうでしょ!？——

黙って聞いているというのか？ そんなのは、俺の性分ではない。

——君が騒いで困るのがユイネだから、我慢しなくちゃだめなの——

僕だつていやだよ、とテルはふてくされたように呟いた。

あの女はオーディションとやらに落ちたストレスをユイネにぶつけて解消しているだけに過ぎない。認められなかったという現実を受け入れられない程プライドが高く、高慢ちきだ。あからさまな言葉を使ってユイネを傷つけ、それで自らの自尊心を満足させている。腐っているのはこの女の魂だ。

全てを分かつているくせにユイネは何も言わずに、ただただ受け入れてやっている。

「唯音つて、昔っからあたしのせいで損ばかりしてるよねえ。あたしの方が可愛いから、いつだって注目されるのはあたしだし。

あたしの事、嫌いでしょ」

「ううん。だつて麗奈ちゃんが可愛いのは本当だし」

「パパもママも、あたしばっかり可愛いがるもん。ま、仕方ないよね」

連れ子だもん、と勝ち誇ったように呟いた。

我慢の限界である。

「おい女っ！ 今すぐ出ていけッ」

突然現れた俺に驚いて、驚愕の表情を浮かべたユイネの妹が勢い良く立ち上がり大きな声を上げた。

「きゃあつ！ あんた誰よっ」

「とにかくさっさと出て行け！ お前の話を聞いていると耳が腐る！」

「……え、なに。何言ってるの。てか、チョー格好良くない!？」

瞬間的に立ち直った女の目が、好奇心輝きを帯びた。まわりつくような女の気配に俺の機嫌は最高に悪くなる。

「タ、タロさんっ」

「女、良く聞け。何を思い上がっているのか知らんが、お前はちっとも美しくない」

一言、そう告げただけで女の表情が一変した。

「何……なんなのこれ。意味わかんない」

混乱しながらも女の瞳には憤怒の炎が宿り、敵意が一気に膨れ出す。

「俺のユイネを貶めるような事を言うのは許し難い行為だ！ 言っておくがな、お前程の女なんぞこの世にごまんといえるのだ！ 身の程を知れっ」

「唯音っ。こいつ誰よ!？ どっから聞いてたわけ？ どっかに隠れて聞いてたんでしょ」

女はユイネを振り返り、怒りの矛先を俺ではなくユイネに向けた。

「何これっ。あたしを馬鹿にしてんの！？ あんたが仕組んだのっ。ひどいっ！ 最低ッ」

「ち、違うの。麗奈、お、落ち着いて……」

「だからなにさまだと言うのだっ。どうせ甘やかされて育ったんだろっが、性格の悪い女は最悪だ！ たいした事もない己の容姿を鼻にかけて自慢して、何が面白い！」

一番傷つくであろう言葉を選んで、言い放つ。恐ろしく歪んで醜い憎悪の感情を、ユイネにぶつけた事がまた許せない。そうやって俺のユイネを攻撃するのなら、その上をいくまでだ。

わなわなと口元を震わせて女が振り返ったかと思うと、大粒の涙を流し始めた。

「……ひ、ひどい」

「はっ！ 泣け泣け。泣いたってやめてやらん！ このドブスがっ」

「うっ……うわあああッ」

女が子どものように大声を上げて泣き出した。

そこで、はっとした。しまった。

泣いている女の後ろに、珍しく怒りをあらわにしたユイネが見える。

「ひどいっ！ ひどいいいい……うええっ。唯音ええっ」

ユイネが女の肩を抱くと、すがりつくようにしておいおいとまた涙をこぼす。

「……タロさん」

くそっ。最悪だ。

031（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

2点ばかり補足をさせていただきます。

- ・『麗奈』の読み方をレイナ→レナに変更しました。
- ・タロさんは興味のない相手には何の観察もしないので、そういう理由からユイネの妹さんの描写はほとんど皆無です。女、としか認識しません。

いつも読んで下さる心優しき方々に最大の感謝を。

「レナちゃん。こいつの言う事なんか、気にしなくて良いんだよ。ごめんね？ もう泣かないで」

リビングのテーブルに突っ伏して泣きじゃくっている酔っ払いの女の背に、テルがそつと手を添えて語りかける。隣に座って困り果てていたユイネの表情が少しだけ和らぎ、テル君、と口の中で呟いた。

「う、……」

女は僅かに首を上げ、それから勢い良く身体を起こした。涙でめちやくちな顔を向けて食い入るようにテルを見つめている。

「え……天使？」

「テルだよ」

「テンシ？」

くすりとテルが微笑むと、途端にレナは赤面して息を飲んだ。

「僕らね、ユイネの産みのお母さんの遠縁にあたる親戚で、いつもは外国で暮らしているんだ。今は少し事情があつて、ここに居候させてもらつててね。君を驚かせちゃいけないと思ってたんだけど……。ごめんね。あいつ、ちょっと馬鹿なんだ」

あいつ、と言う時にテルが俺を指さした。

「レナちゃんがつっても可愛いからさ、照れちゃってるんだよ」

やめろ。虫唾が走る。……と、怒鳴ってやりたいところだが、この場をおさめる為には無言でいるしかない。

呆けたようにテルを凝視していた女の瞳から、また少しだけ涙がこぼれた。

「い、いいのつ。分かってるもん！ どうせあたしは並よりはちょっとだけ可愛いだけだもん！ 普通の女よりはちょっとだけモテて、ちよつと足が長くてスタイル良いだけだもん！ アイドルとかにはなれないもんっ」

うぬぼれも大概にしろ。……と、言ってやりたいところだが、こも我慢だ。

「そつか……。君って可愛いくて頭も良いんだね」

テルがいたわるように呟くと、レナの表情が歪み、またテーブルに突っ伏しておいおいと泣き出した。

「わ、分かってるわよ！ 唯音にひどい事言っただから、怒ったんでしょ！？ あたしが唯音に八つ当たりしたから、だからなんですよっ」

「麗奈……」

「謝れば良いんでしょっ！ わ、悪かったわよ！ これで良いんでしょっ」

「おいクソ女。それは謝ったうちに入らん。土下座しろ」

それでも俺の気はおさまらんがな。

「ひ、ひどいいい……」

「タロさん。もうやめて下さい」

きつ、とユイネが俺を睨んだ。ぎくりとして、背筋に寒気が走る。

「麗奈。私の事なんて良いから。あんまり泣いちゃ、目が腫れちゃう」

「ううー……お、怒ってないの？」

「全然。それより私の方こそ、ごめんね」

どつと疲れが押し寄せ、ソファに倒れ込むように腰を下ろした。久々に至近距離で毒々しい気に当てられたせいもあるだろう。めまいがしそうな程のダメージを受けた気がする。しかしそんな事は二の次だ。それよりももっと大きな問題がある。

何故この俺が、あんな気の弱いふにやふにやユイネにひと睨みされただけで、ここまで焦らなければならんだ。くそ。

…… やつと俺に心を開きはじめたというのに、また一からやり直しか。いや、もっと悪いかも知れん。

それから騒々しいユイネの妹の機嫌も何とかおさまり、高級ベッドで眠り始めたのを確認してユイネとテルがリビングに戻って来た。

「はああ。こうやっておおごとになっちゃうから、我慢してって言ったのに！」

「あれはあの女が悪い。あそこまで言われて黙っていられるか！」

俺はソファにふんぞり返って腕を組み、二人に背を向けたまま言葉を返した。

「……ごめんね、テル君」

「ユイネが謝る事なんてないでしょ。謝んなきゃいけないのは、そ

この大男だよ」

「俺は悪くないぞ。正しく事実を述べたまでだ！ よって謝る必要は一切ない」

とは言ったものの、背後を振り向けない。またユイネに睨まれたりでもしたら、情けない事だが、落ち込んで立ち直れないかも知れない。またあいつが心を閉ざしてしまったかと思うと、それだけが反省点だとさえ感じる。

「タロちゃんてば」

「テル君、もう良いの。お茶でも入れるね。座って。……タロさんも」

ユイネの声音は既にいつものトーンに戻っていた。控えめで柔らかく、心地の良い声だ。

*

「……たしかに、麗奈は甘やかされて育っているとは思っただけ。でも、それって仕方ない事でしょう？ そうやって育ってしまったのは、回りの環境のせいでもあると思うから。それに今日は、オーダーションに落ちちゃってショックを受けてて。……私は麗奈が、小さい頃からずっと頑張ってたのを知ってるから」

だから、とユイネは手元を見つめて静かに語った。俯き加減のその横顔から、いたわりの感情が滲み出ていた。傷ついて疲れた妹を思いやる、姉の顔だ。

「そうやってあいつは姉であるお前にも甘えて、しなだれかかって生きているわけだ」

ユイネがゆっくりと顔を上げ、俺を見上げる。俺は真っ直ぐにその瞳を見つめ返した。

そうやってお前は相手の気持ちをくんで、受け入れてやるのか。だが、相手はお前の気持ちをくんでやった事があるのか？ 一度でも、相手がお前の心を優先しようとした事があったのか？

「タロさん……」

怒られるかと思い無意識に身構えた。しかし予想に反して、ユイネは笑った。

ほによ、としか形容出来ないような、柔らかな笑顔。

「ユイネ。……お、怒らんのか」

「もう良いです。だってタロさんは、私の為に怒ってくれたんですよ」

ふにやふにやと笑う。心なしか、恥ずかしそうに笑っている。

どく、と、俺の心臓が鼓動を打った。

無意識に手を伸ばし、マグカップに添えられているユイネの手に触れた。すると、あたたかな気が触れた指先から伝わってくる。疲れ切った細胞が、じわりと癒されていく。

ああ……こいつは今でも俺に心を開いているのか。

……良かった。

心の底から嬉しさが込み上げ、思わずそのまま小さな手を握んだ。

「わっ」

「ころころっ」

ぎゅ、とテルが俺の手の甲を思い切りつねった。その痛みに力が緩み、ひゅつと素早くユイネの手が引つ込んでいった。

つねられた手の甲をさすりながら無言で美しい子どもを睨みつけると、澄ました顔で返される。

「調子に乗っちゃダメ。油断も隙もないんだから」

ね、とテルがユイネに微笑みかけ、二人は穏やかに笑い合った。

その夜はレナという女がベッドを独占してしまった為、俺達はリビングで眠る事になった。俺が叩き起こそうとするのをテルとユイネが必死になって止めるので、まあ仕方なくだ。

真夜中、時計の針が時を刻む音を聞きながら、薄暗い視界の中で意識を集中する。ゆっくりと息を吸い込み、細く長く吐き出していく。寄せては返す波のような曲線を描く感情を、徐々に平らかな状態へと落ち着かせる。風一つない、ぴんと張った水面のイメージだ。これは俺が大の苦手とするところだが、やって出来ない事はない。段々と心が凪いでいく。ずっと身体が沈み、ゆるやかに落ちはじめた。暗黒の闇は物音ひとつ立てずに俺をすんなりと飲み込んで、俺の身体は速度を増して闇の底に落ちていく。

それは単なる好奇心だったのか、気まぐれだったのかは分からない。ただ純粹に知りたいという欲求からだった事はたしかだ。穏やかで控えめな空気をまとい、どこにでもいるような地味な容姿。誰もが通り過ぎるであろう薄い存在感しか持たないのに、他の何よりも、どんな者よりも美しい魂を秘めている。そいつの事をもっと知

りたいと思った。その旋律を。その生を。
ユイネの事を。ユイネの過去を。

十八年前にあの漆黒の珠を手にした頃の幼いユイネが、どのようにして今まで生きて来たのかを。

*

身体に振動を感じた。右に重力を感じ、中央に寄り、それから急に左へと転じる。

次に聴覚が戻り、ごおお、という音と人の話し声が聞こえてきた。フィルターを通したような男の声が何かを告げ、ふわりと身体が浮いた。

「この駅で降りるんだ。良いかい。これから行く家で、家族みんなで暮らすんだ。お父さんがさっき言った事、分かるよね。唯音は頭が良くて優しい子だから、大丈夫だ」

ふつと頭に重みを感じ、次の瞬間、溢れんばかりの光が世界を覆った。

真つ暗闇の中、小さな心臓の音が聞こえる。とくり、とくりと規則的に鼓動を打つ。少し早い気もする。じんわりと子どもの体温をすぐ傍に感じ、俺の全身がそれに包まれている事に気付いた。すると突然、大声で泣きたくなった。

寂しい。心細い。どうしたら良いのか分からない。辛い。怖い……。この心の痛みは何だ。

幼い少女の声が途切れ途切れに耳に届く。

「だいじょうぶ……だいじょうぶ……こわくない。まだへいき……おまもりがあるから。だいじょうぶ……」

ユイネ！

俺は声を上げたはずだった。しかし、声が出ない。驚いて辺りを見回そうとして、愕然とした。俺の身体がない。存在しない。次の瞬間、放り投げられたように意識が飛んだ。

*

「はあい。じゃあいただきますして食べましょうね」

テーブルの上にはレストランで見るようなお子様セットについてくる、旗つきのピラフ。旗がついているのは自分の分ではないけれど、同じピラフが目の前にある。それだけで嬉しくなった。

両手をぺしりと合わせ、大きな声でいただきますをした。

「はい、どうぞ。召し上がれ」

大きく口を開けて頬張る。あつたかくて、とてもおいしい。午前中にうんと遊んで来たから、お腹がペコペコだったのだ。隣に座って少しだけ持ちにくそうにスプーンを操る『妹』を眺めた。

「麗奈ちゃん。こうやって持つんだよ」

スプーンを振って見せると、くりくりとした目が真剣にそれを見つめ、それからピラフの山に口からかじりついた。

「まあ。あはは。麗奈ったら」

『お母さん』が楽しそうに笑って、麗奈がおいしいと大きな声で叫んだ。ふうと息を吐き出して、また一口ピラフを頬張った。やっぱりおいしい。

ここに来た頃は他人の家に来ているみたいにずっと緊張しっぱなしだったけれど、『お母さん』はとても優しくかった。『妹』も元気で可愛い。良かった。

きつと、うまくやっていける。

おかあさん。おかあさん。だから、安心してね。

*

それは唯音が小学校に上がった頃の事だった。黄色い帽子をかぶって赤いランドセルを背負った唯音は友達と分かれ、帰り道をてく

てく歩いていった。曲がり角を曲がって、家の茶色い屋根が見えてくる。玄関が開いていて、どこかのおばさんの後ろ姿が見えた。唯音がこんなにちは、と挨拶しようとその大きな背中を見上げた時だった。

「でもほんと、偉いわ。だって奈緒さん、前の奥さんとの子どもの面倒まで見ているんでしょう?」

その場で棒立ちになった。「奈緒さん」というのは『お母さん』の名前だ。

「あたしだったら出来ないかも知れないもの。自分の子だけでも大変だっていうのに」

「そんな。当然の事ですわ」

「色々悩みも多いでしょう? 血が繋がっていない子と自分の子と、同じように接するのって大変だと思うのよ。そんな悩みって、普通ないものね」

唯音の小さな心臓が、どくどくと鳴っている。おばさんも『お母さん』も、唯音に気付いていない。

「ええ。でも私達、引き取る時に決めましたの。どんなに辛い事があっても頑張ろうって。家族三人で力を合わせて乗り越えようって」
「まあ……。立派だわ」

足音を立てないようにそろそろと後ずさり、来た道を引き返した。足元だけを見て歩いた。『お母さん』の声は誇らしげで、聞いているおばさんもとても感動していたようだった。

家族三人。

そこに数えられていないのは自分だ。
お父さんと『お母さん』と『妹』。その家族三人にとって自分は、

「乗り越えなくてはならない辛い事」だったのだ。気付かなかった。知らなかった。自分がそんな存在だったなんて、分からなかった。自分は、なんて馬鹿なんだろう。なんにも知らないで、なんにも気付かないで、のんきに毎日過ごしていた。自分は、なんて馬鹿なんだろう……。

家のまわりを一周して戻ってみると、玄関の扉は閉まっていた。今までなんにも思わなかったけれど、この家の扉が自分を拒絶しているように見えた。怖くて取っ手が掴めない。家に帰りたいのに、緊張して足が動かない。唯音は扉の前でしばらく立ちすくんだ。太陽の日差しが赤いランドセルを照らし続けた。

意を決して帰ってみると『お母さん』も『妹』も普段どおりだった。少しだけほっとしてお昼ごはんを麗奈と一緒に食べた。

「どう？ おいしい？」

「おいしい！」

「うふふ。良かった」

麗奈が一心不乱にスパゲッティを頬張り、『お母さん』は向かいに座ってそれを楽しそうに眺めている。唯音はちらりとそれを盗み見て、それから勇気を振り絞って口を開いた。

「お母さんのスパゲッティ、とっても美味しいね」

心臓が飛び出してしまいそうな程ときどきして、息をするのが辛い。こわくてこわくてたまらない。『お母さん』が唯音に顔を向け、につこりと笑った。それを見て、心の底から安心した。それでやっとお腹が空いてきて、おいしいスパゲッティを心おきなく頬張った。麗奈がジュースのおかわりを欲しがり、『妹』のマグカップを持ってキッチンに向かった。洗いものをしている『お母さん』の背中が見え、唯音は声をかけようと上を見上げた。

「麗奈よりもあんなにたくさん食べて……遠慮もしないなんて……
なんて図々しい子」

小さな呟きだった。洗いものの音に混ざって聞き取れない程の声だった。なのに、聞こえてしまった。慌ててテーブルに引き返した。麗奈がマグカップを覗き込んで、それが空だと分かれると大声を上げた。

「ママあ！ ジュース！」

はいはい、と『お母さん』が返事をする。唯音の前には食べかけのスパゲッティがあった。さっきまでおいしく食べていたのに、もう手が伸ばせなかった。喉の奥がごろごろして苦しい。お腹は空いているのに、胸がいつぱいだった。

「唯音。どうしたの？ もう食べないの？」

『お母さん』の声がして、どきりとする。唯音は俯いたまま急いでフォークを掴んで一口食べた。すると何故だかスパゲッティがぼそぼそとして味がなく、噛むのも辛くて飲み込む時に喉が痛んだ。そろりとフォークを置いて小さく呟いた。

「もうお腹いっぱい。ごちそうさま……」

半分残っていた。

「あら。もう良いの」

見上げると『お母さん』がこっちを見ていて、思わず息を止めた。

『お母さん』の表情が、なんだか嬉しそうだった。今まで気付かなかったごく小さな事だけれど、目が嬉しそうだった。

唯音はその日から、なるべくたくさん食べないようにしようと決めた。『お母さん』の料理はとってもおいしいのでそれは大変な努力だったけれど、ちよつとずつ残すようにして麗奈よりもうんとたくさん食べないように気をつけるようにした。

自分は頑張らなくちゃいけない。この家にとって自分の存在は「乗り越えなくてはならない辛い事」なのだから、その当人である自分が、わがままを言うなんていけない事だ。本当なら『お母さん』は、血の繋がらない子を育てなくても良いのに、自分を引き取って育ててくれているんだから。

嫌われてはいけない。頑張らなくちゃ。

それでも夜になると、涙が出た。でも泣いちゃだめだ。めそめそ泣いてちゃいけない。おかあさんが心配するから。そんな時はお姉さんにもらったお守りを抱いた。黒くて大きくてまんまるの石だ。触るととても気持ち良い。お腹が空いて眠れない時も、そのお守りを抱いて眠った。すると何故だかほつとしてすぐに眠れるのだ。それから寝る時にいつもお守りを抱き締めて眠るようになった。

唯音が小学校高学年になった頃、麗奈がタレントを養成する劇団に入った。日々歌やダンスや演技などといったレッスンが目白押しで、その送り迎えの為に『お母さん』も忙しくなった。唯音が一人で留守番する事が多くなり、それがだんだんと日常になっていった。帰りが夜になる時は危ないので、お父さんと待ち合わせして三人で家に帰宅する事もある。そういう時には必ず麗奈から電話があった。

「帰り遅くなるから、ごはんテキトーに食べといてってえ」

「あ、うん。分かった」

三人はどうするの？ と聞いた事は一度もなかった。家には買い

置きのカップラーメンがあるので、唯音はテレビを見ながらそれを食べた。ぼそぼそとして飲み込みづらく、目の前がぼやけてテレビが見えなくなる。鼻の奥がつんと痛んで、味なんて分からなかった。たまらずに席を立ち、お守りが置いてある自分の部屋に走った。黒くて丸くてすべすべの石を両手で抱えて椅子に座り、じっとそれを見下ろした。

涙が石の上にぽつりと落ちた。ぽつりぽつりと、つるつるの石の上に落ちていく。音もなく水滴が真つ黒の石に落ちて、それからまた側面を伝って流れた。

「だ、だいじょうぶ……へいき、ぜんぜん……。わ、わたしには、お、おまもりが、あるから……」

唯音はいつも、お守りを抱いて声を出さずに泣いた。

中学生になって、唯音はお守りを肌身離さず持ち歩くようになった。どうしても不安定になる事が多くなり、どうしても良いか分からなくなった時にお守りに触れると、不思議と心が落ち着くのだ。

このお守りの事は誰にも言わなかった。誰にも見つからないように気を使ったし、どんなに仲良しの友達にも軽々しく話したりは出来なかった。このお守りだけが、自分の拠り所だったから。もしこの大事な石がなくなってしまうたら、生きていけないだろうから。

しかし高校生の時、苛々して大事なお守りを壁に投げつけた事があった。壊れてしまえば良いと思って、思い切り投げつけたのだ。

唯音はその日、死ぬつもりだった。

その日は麗奈の誕生日で、数日前にプレゼントを買って用意していた。しかしファミレスのバイトが入っていて、帰りが少しだけ遅くなってしまったので急いで家に帰った。最近は家族そろって食卓を囲む事も少なくなってしまったが、誕生日にはみんなで食事しようと思ったからだ。玄関で靴を脱いでいると、リビングから楽しそうな笑い声が聞こえた。顔を上げる。すりガラスの嵌め込まれた扉から、光がもれている。すっと心が冷えた。

あの人達は楽しい時を過ごしている。家族三人水入らずで。邪魔な私のいない時を楽しく過ごしているのだ。邪魔者は私で、あの家族に余計なのは私だ。

脱いだ靴を履き直して外に出て扉を閉めた。駅前まで歩いて、本屋で時間を潰してから家に帰った。

「あ、おかえり唯音。遅かったのね」

テーブルの上は既に片付いていて、『母』が洗いものをしながら話しかけてきた。

「バイト長引いちゃって……」

「おねーちゃん帰ってくるの遅いから、先食べちゃったよー！誕生日にはみんなで食事って決まってるのに」

「あ、うん。ごめんね」

「晩ご飯、どうする？ 冷蔵庫にあるわよ」

「あ、ちよつと食べてきたから……」

「えー！ あたしの誕生日だったのに？」

本当は昼から何も食べてない。のんきな麗奈の声に腹が立った。そっちは私なんか待たずにお腹いっぱいご飯を食べたんでしよう？ ちらりとテレビの前のソファに目を向けると、父の背中が見えた。いつだってこの人は、聞こえないふりをする。

「ごめんね。でもこれ、誕生日おめでとう」

リボンのついた包みを手渡すと『妹』の顔が輝いた。

「やった！　もしかして前からあたしが欲しいって言ってたやつ？」
「うん」

ブランドものの、キーケースだ。

「ありがとっ」
「まあ。それじゃ高かったんじゃないの？　麗奈ったら、そんなものおねだりして」
「おねーちゃん、バイトしてるから平気でしょう」

唯音は疲れているから、とリビングを出た。いつだって両親が本気で麗奈を怒ったりしないのは知っている。リビングの光がもれる廊下で立ちつくし、自分の着ている制服の、スカートの折り目を見つめた。

本当に、心の底から、疲れた。

もうへとへとで何も考えられない。

「馬鹿みたい……」

呟いて、家を出た。

死ぬには飛び降りるのが一番手っ取り早い。足が無意識に背の高い団地に向いていた。半ば走るようにして歩き続け、頭がぐらぐらして息が上がって、喉がずきずきと痛む。突然思いついて肩にかけている学生鞆に手をつき込んだ。あのお守りに指先が触れた。途端に激情が込み上げて目に涙が滲む。

悲しくなんてなくて、憎らしくて悔しくて涙が出るのだ。歯を思い切り食いしばって、闇よりも黒い石を睨みつけた。

もういやだ。もう疲れた。

生きてなんか、いたくない。どうしてこんなに辛い思いをしてみで、生きなくちゃいけないの。

両手を振り上げて目の前のコンクリートの壁に思い切り叩きつけた。がつ、と音がしてころりと地面を転がった。とつても硬そうな石だったけど、ひびが入ったに違いない。欠けたはずだ。

大事なお守りなのに自分で壊してしまった。もう後戻りできない。もうだめだ。

肩で息をしてお守りを拾い上げ、自分がやってしまった事を確認する為に丸い石を両手で転がす。手がぶるぶると震えて、涙があふれた。

「な……なんで……」

黒い石には、傷ひとつ、ついていなかった。

いつもと変わらない、黒くてまん丸で、少しひんやりとしたすべての石。私のお守り。

「なんで……」

幾筋も頬に涙が伝う。嗚咽がもれ、肩が震える。

なんで。

「お母さん……」

なんで死んじゃったの。私を置いて――。

私はずっと一人ぼっちなのに。私はずっと邪魔者で余計で余分で、必要のない人間なのに。

私なんか生きてたって、誰も喜ばないのに。

「お、お母さんっ」

私はどうして、生きていなくちゃいけないの。ずっと独りなのに……。

唯音はその場でうずくまり、肩を震わせて泣き続けた。その背が、どんどん縮んでいく。小さく小さくなって、夜の闇に消えていく。

「だ、大丈夫……大丈夫。平気……。こんなの、大した事ない。わ、私には、お守りがあるから……だから」

大丈夫。

*

「おかあさん。おみやげ」

幼い唯音の小さな手に握られているのは、黄色い花のついた雑草。母は微笑んでそれを受け取った。

「まあ綺麗ね。どうしたの？」

「おねえさんとね、じんじやのところでね、とってきたんだよ。きれいだっただから、おかあさんにあげる」

「ありがとう。唯音」

唯音が思い切り母に抱きつくと、柔らかな手が小さな頭を撫でる。大きく息を吸い込むと母の匂いに包まれる。

病室の白いカーテンが揺れた。

「……唯音はとっても良い子ね。優しくて、人を思いやれる子だもの。お母さんの自慢だわ」

顔を上げると、母が嬉しそうに額をくつつけてきた。

「お母さんの人生ってろくでもなかったけど、唯音のおかげでうんと良くなったわ。幸せよ」

「ろくでもないって？」

「ふふ……」

「さあ唯音。そろそろ帰ろうか」

病室に戻って来たおじさんがにこにこしながら近づいてくる。おばさんは同室の人やその家族と挨拶していて、まだ部屋の入り口にいる。

唯音は素直に頷き、母のベッドから降りておじさんの手を握った。

「いつもすみません。本当に、ありがとうございます。何からなにまで……」

「馬鹿だなあ。そんな事気にする暇があったら、たくさん食べて早く元気にならなきゃ。唯音はとっても良い子で頑張ってるよ。だから」

「らお母さんも頑張らなくっちゃあ」

「……はい」

「おかあさん、またね」

「またね、唯音」

手を振って病室を後にした。幼い唯音は、ちゃんと分かっている。母の病気が悪いもので、簡単に治るようなものではない事を。抱きついた母の身体はまた少し、痩せてしまっていたから。

おじさんとおばさんと手を繋ぎ、唯音は真っ直ぐ前を向いて歩いた。振り返ったら泣いてしまうから。

おかあさん。はやく元気になってね。うんと良い子で待ってるから。

*

「ユイネッ！」

俺は大声を上げて、飛び起きた。

「……な、なに」

はっと我に振り返り首を横に曲げる。ソファから半身だけを起こしてぼさぼさ頭のユイネが俺を見ていた。

今まで見ていたユイネよりも少し頬が痩せている。大人の顔つきだ。そこで過去から戻ったのだと分かり、部屋を見渡した。薄暗いリビング。しんと静まり返ったキッチンにカーテンの閉まっている窓。

「タロさん……どうしたんですか」

呆然とまたユイネに視線を戻す。

「いや……」

「も、びっくりさせないでください。夢でも見てたんですか……あたま、ばさばさですよ」

少し面白そうな声。

「お前もだ」

ユイネは少しだけ笑い、もぞもぞとソファに沈み込んだ。俺はその小さな背をじっと見つめ続けた。

翌日もユイネには仕事があり、朝早く家を出ていった。昼過ぎまで寝ていたユイネの妹は、すっかり立ち直っていて俺とテルに興味を持ち、さんざんくだらない事ばかりを質問してきた。

「もーチョー可愛い！　テルってえ、学校でモテモテでしょお!？」

テルはにつこりと微笑むだけだ。それだけで女はきゃーきゃーと騒いだ。

「おい。さっきからうるさいぞお前。殴りたいか」

あまり強くは言えない。こいつを泣かせばユイネが悲しむ。くそ。

「太郎さんってえ、みんなにそおいう態度？　チョー受けるう！」

チヨ―イケメンなのにい！ あ、ゲームしよつと」

今すぐ息の根を止めてやりたい。

ゲーム機を引っ張り出してソファに陣取り、遊び始めた女の背を睨みつける。腹でも痛くなっちまえ。

「いつまでいるつもりだ。さっさと帰れ」

「ええ、太郎さんに言われたくない！ ここ唯音んちだし」

何が面白いのか、げらげらと笑い転げた。やはり、我慢ならん。今すぐ消してやりたい。キッチンに立つテルに視線を投げると、無言で首を振った。

「唯音つてさ、あんまし怒んないじゃない？ だからあたし、いつも言いすぎちゃうの」

突然に真面目な声音で女が呟いた。

「あたしと唯音の母親が違うつて聞かされたのはあ、あたしが高校生になった頃かな。チヨ―シヨックでえ、まじむかついてさ。ちょっとグレたもんね」

「意味が分からん。お前なんぞのシヨックなど、ユイネの苦しみから見れば塵に等しい」

ひつどーい、と叫んでまた笑った。

「唯音つてチヨ―大人。そんときもお、やっぱりいつも通りだったもん。育ててくれて感謝してるって言っただよ！？ チヨ―すごいくない！？ あたしだったら暴走族とかヤンキーになってる、絶対」

……ユイネ。

「おい女。今すぐ帰れ。邪魔だ。消えろ」

俺は立ち上がり、女を睨みつけて言った。

「は？　ちょ、怖いんですけど」

「タロちゃん、やめなつて」

有無を言わず腕を掴んで立ち上がらせる。

「い、いたっ！　ちよつと何すんのよっ」

ぐつと屈んで女の顔をのぞきこんだ。すると相手は顔を赤らめ緊張しつつ俺を見上げる。動揺している両目を見据え、低く告げた。

「死にたくなかったら今すぐ出て行け。……良いな」

腕を離すと、女はぎくしゃくしながら鞆を抱え、逃げるように玄関に走っていった。テルが一瞬俺を睨みつけてからその後を追う。

「レナちゃんっ」

テルがうまくフォローするだろう。他の事に気を使っている場合ではない。

ユイネ。

お前の抱える孤独は、何と重く深いのか。

034（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

またもや読者が減りそうな暗い展開……。ううむ。

ユイネの不幸体質な考え方のルーツは過去にあります。
タロさんどうする。

いつも読んでくださる皆様、感謝です。

帰宅したユイネは少し疲れた表情で部屋を見て回り、腑に落ちない顔でリビングに戻ってきた。

「……あの、麗奈は？」

「あんな五月蠅い女は追い出したぞ」
「なっ！」

俺の言葉を聞いて慌てて鞆から携帯を取り出し、電話をかけようと操作する。俺は無言で小さな電話機を取り上げてソファに放り投げた。困惑したユイネがこちらを見上げる。

「何するんですか」

「放っておけ。傲慢で高飛車な女だ。どうせあいつはちっとも気にしてないぞ。無神経な女だからな。お前も居ない方がせいせいするだろう」

攻撃的な言葉に表情が硬くなり、警戒するように一歩退いた。

「そういう風に言うの、やめてください。麗奈は私の」

「『妹』か？ ふん。馬鹿らしい。人間というものは、家族ごっこが好きなようだな」

小動物のような怯えた目が俺を見つめている。その両目を見据えて、言った。

「お前も馬鹿らしいと思うだろう？ あんな阿呆な女が『妹』だなんて滑稽だ」

「どうしてそんな事言っんです。タロさん、なんか変です。なんで……」
「お前の過去を見た」

短く告げると、ユイネが息を飲んだのが分かった。

「……な、なんで。そんな……」
「もう止せ。あんな連中に付き合ってやる義理はないだろう。お前をないがしろにしてきた奴らだぞ」

俯いてゆるゆると首を左右に振る。

「育ててもらった恩義か？ くだらん。あいつらは世間体や見栄で、お前を引き取っただけに過ぎん。お前を養っているのだという優越感で、お前を押さえつけているのだ。今でもな」
「やめてください。家族の事、悪く言わないで」

ユイネのこじんまりとした小さな手が、拳を作っている。その手が僅かに震えている。こいつは自分の事を攻撃されるよりも、周りの親しい人間の事を悪く言われる方が、こたえるに違いない。そう分かっていて、俺は続けた。

「家族？ あの高慢ちきでプライドの高い母親の事か？ 反吐が出る。それともその女が孕んで産んだ子どもの事か？ 人の心を知ろうとしない怪物のような女だぞ。ああ、そうか。父親の事か。ただ己の平穏のみを願っってお前を見捨てた男の事か？」

じりじりとユイネが後ずさってゆく。俯いたまま絞り出すように声を上げた。

「ど、どうしてタロさんがそんなひどい事言うんです。私を育ててくれた人達の事、悪く言わないで。お、お願いですから」

「何故だ。何故お前がいづらをかばう必要がある」

「だって！　ちゃんと育ててもらったから。それにこの世界では珍しくない事だから……。私だけじゃないし、別に辛い事なんてなかったし、虐待とかされたわけじゃないし、ほんとに良くしてもらって……」

背に壁が当たる。ユイネが僅かに顔を上げて笑おうとしている。

俺はすかさず音を立てて両手を壁についた。びくりと華奢な肩が震え、沈黙がおとずれる。

「……いい加減、良い子ぶるのを止めたらどうだ。ユイネ」

はつと顔を上げたユイネは心底傷ついた目をしていて、俺の心臓が凍りつきそうになった。しかし、逃げ道を作るわけにはいかない。まだだ。お前に本音を吐き出させる為には苦しい程に追い詰めねばならない。本気でぶつからなければならぬ。ユイネの視線が不安定に揺れて、ぎゅっと眉根が寄った。

「わ、私、良い子ぶってなんかいませんっ」

「嘘をつけ。俺には分かるぞ。言ってやれば良いのだ。あいつらなんぞクソだ。見て見ぬふりをしてうわつつらの平穩に縋る、見せかけかけだけの家族ごっこなんぞ、うんざりだな！」

「そんなっ」

「お前だって本当はそう思っているんだろう！？」

「そんな事思ってませんっ」

「はっ。まだ良い子を演じるつもりか、ユイネ」

どくん、とユイネの心臓の脈動が聞こえた。みるみる顔が赤くな

る。激しい怒りの感情が、一気に噴出する。

「ど、どうしてタロさんにそんな事言われなきゃいけないの!? タロさんに何が分かるっていうのっ! ちっとも知らないくせに、勝手な事ばかり言わないでッ」

「お前が本心を言わぬなら、俺が言つてやろう! お前はあの家族の事が嫌で嫌でたまらんくせに、愛しているふりをし続けているだけだ!」

「やめてっ」

耳を塞ごうと動いた細い手首を素早く掴んだ。ユイネが渾身の力を使って振りほどこうとするのを、力づくで押さえつける。

「わ、わたし、そんな事思つてないっ! 良い子ぶってなんかないっ」

分かっている。

お前が本気であいつらに感謝していて、良い子ぶっているわけではない事くらい。

幼いお前が生きていく為には、そうする他なかった。

甘えられる場所がない者には、不満を言う事すら許されない。

受け止めてくれる人間がいない者は、激しい感情をぶつける術さえ持たない。

お前の母が、父が、周りの人間達が、良い子だと褒める度に、重く耐えがたい枷がはめられていった。優しく強いお前は無意識に、その枷さえも受け入れた。

病床の母を悲しませたくない一心に、本当の自分をどこかに閉じ込めてしまったのだ。

しかしどうして一方的に、お前が我慢を強いられねばならんのだ。

「自分達のエゴを押しつけるなど言ってやれば良いだろう!? お前の本当の母親だって、自分勝手に生きていたではないか!」
「もうやめてっ! お母さんの事、悪く言ったら許さないっ!」

ユイネが顔を上げ、肩で息をしながら真っ直ぐに俺を睨みつけた。

「その母親だって、結局はお前の幸せを後回しにしたのだぞ!? お前の事を思うなら、あのまま親戚の家いた方が良かったのだ! 何故わざわざとくに縁の切れた父親にお前を預けた!? それで本当に、お前が喜ぶと思っていたと言うのか!」

「やめて! は、離してッ!」

「言ってやれ! 何故自分を置いて死んでしまったのかと! 何故自分を一人ぼっちにしたんだと!」

ユイネの瞳に涙があふれ、頬を伝った。唇が震え、それを押さえつけるようにぎゅっと口を結ぶ。ぼとぼと大粒の涙が、次から次へこぼれ落ちてゆく。

ユイネ。

嫌な事は嫌だと言え。無理矢理に飲み込もうとするな。吐き出せ。それが受け入れねばならない自分の運命だとしても。

抗え。

諦めるな。

お前にはその権利がある。

きつく押さえつけていた手首を解放した瞬間、左頬に激痛が走り、一歩よろけた。視界の端に固く握られた小さな拳が見える。

「だ……だって、どうすれば良かったの? 死んで欲しくなかった……い、生きて欲しかった。だけど、誰が助けてくれるの……」

両手で顔を覆って、ユイネは泣いた。

「わ、私が、嫌だって言って泣きじゃくれば良かったの？ そうすれば……お、お母さんは助かったの！？ そうすれば……わ、私は邪魔者にならなかつたっていうの！？」

「ユイネ……」

「いやっ！ 触らないでっ」

肩に置いた俺の手を振り払い、身体をよじって俺の胸を両手で押し返した。構わずに力づくで震えている身体を抱き寄せると、本気で抵抗してくる。しかし小さな身体は簡単に、腕の中におさまってしまう。

「やめて！ 嫌っ」

「ユイネ」

「い、いやだつたらっ……うっ……」

ユイネが泣きながら俺のシャツを掴んで逃げ出そうと暴れる。俺は柔らかな髪に口付けて、押しつぶさないように気をつけながら一層きつく抱き締めた。

「ユイネ。悪かった」

「ひ、ひどい……タロさ、ど、どうして……」

「……お前の泣き顔が見たかった」

隠さずに、本心を告げた。ユイネの身体から力が抜け、しゃくりあげるような嗚咽が身体を伝って届く。

「うっ……うっ。ひどいっ」

「すまん」

「さ、最低っ……お、鬼っ悪魔ッ……」

「ああ。何とでも言え」

「鬼畜っ……へ、変態……ひとでなしっ……うっう」

「ああ。お前の言うとおりだ。俺は最低な奴だ。こんな奴に遠慮なんかする事はないのだ、ユイネ」

だから俺には気を使わなくて良い。

感情を殺さなくて良い。俺にぶつける。受け止めてやる。

「タ、口……さ……」

柔らかくあたたかな気が、流れ込んできた。

*

「どうしてそんな乱暴なやり方しか出来ないのかなあ」

ベッドの脇に腰をかけ、ユイネの頭を愛おしげに撫でながらテルが呟いた。ユイネは泣き疲れて眠っている。

「スマートじゃないっていうかさ、好きな子をいじめる事しか出来ない子どもみたい」

「何だとっ」

「でもタロちゃんにしたら上出来だよ」

テルはユイネの寝顔を見つめ、目を細めて微笑む。

「ユイネは人前で泣く事すら、ずっと我慢してたんだから」

俺達は無言でユイネの寝顔を見つめた。

幼い頃のお前にとって、漆黒の珠は文字通り『お守り』だったのだろう。この世界で生きていく為に、目の前に広がる世界で日々を暮らしていく為に、無機質な黒い石に全てを託して歩み続けた。

悲しみも怒りも喜びも、言葉では表現出来ないような複雑な感情も、全てをあの石に吐露して何とか地に足をつき、ふらつかずに立ち続けた。お前がこの世界で、何の不安もなく縊る事が出来るただ一つの存在が、あの珠だった。

それ程大事にしていたものでさえも、お前は静かに差し出すのだ。相手の思いを真っ直ぐに受け止め、相手の心に思いを馳せ、自分の事など一向に顧みずに。それが当たり前前の事だというように。

美しい魂が抱える重く深い孤独は、強くしなやかな心によって美しい音色に変わる。少しの闇を含んだ優しい旋律は、人の心の痛みを知るからこそ、あたたかな光を作り出す。

036 (色づく世界のはじつで)

しとしと雨が降る。

世界はぼんやりと滲んで、まるで水彩画のようだ。

この国土には四季があり、その季節ごとに愛でる草花も変わる。繊細な心が、時節に色彩の命を吹き込む。素敵な習慣だ。

買い物のついでに公園でひとふさ失敬してきた紫陽花をテーブルに生けた。うん。思った通り良い感じ。壁掛け時計を見上げ、そろそろ夕飯の準備にとりかかろうとキッチンに向かう。

新鮮な鰯が安く手に入ったので、刺身とたたきにしよう。それからさやえんどうの和え物にきゅうりの酢の物。今日は金曜日だから、それを肴にお酒を飲むのも良い。意外とユイネはお酒が飲めるくちだ。近頃は金曜になるとタロちゃんやユイネを誘ってお酒を飲む。今夜はそれにフライもつけよう。コイチはきつとご飯が食べたいに違いない。

ちらりとリビングに目を向けると二人は飽きずにテレビゲームを続けている。と言っても、きっとコイチが付き合わされてるんだろうけど。

「太郎さんって、唯音さんの遠い親戚なんですよ。昔から親交があつたんですか？」

「あいつが五歳の頃からだ」

うん。まあ、間違いじゃないけど。

二人は仲良く座り、テレビ画面に目を向けたまま世間話をしている。今はレースゲームに興じていて、コイチの操るレーシングカーがトップを走っているみたいだ。

「へえっ。小さい頃の唯音さんって、どんなでした？」

タロちゃんはりモコンを操作するたんびに大きな身体を右へ左へ動かしながら、それに答える。

「どうといつてもな。単なる幼児だ。まあ目に入れても痛くない程だ」

「そうですか」

対するコーチは慣れた手つきでリモコンを操り、余裕でタロちゃんの相手をしている。茶色のサラサラヘアに撫肩気味の穏やかな風貌。見た目通りの、柔らかな気をまとっている。野心や邪まな部分が少ない純粋な魂。男性にしたらちよつと頼りないくらいだ。

異性が苦手なユイネが、彼にだけは最初からあまり警戒心を持っていなかった。

「きつと優しくて可愛い女の子だったんでしょね」

無意識と思われる、素直な言葉。照れ屋のコーチには珍しい。

「何て言うか、唯音さんって優しいんですね。性格もそうですけど、全体的に。髪も柔らかそうだし、穏やかで……雰囲気優しいっていうのかな。人に緊張感を与えない人なんですね」

ようやくタロちゃんはテレビから隣のコーチに顔を向けて、眉間にしわを寄せた。

「何だ。ユイネにいやらしい妄想を抱くのは俺が許さんぞ」

コーチはその言葉にわたわたと慌てて、黒ぶち眼鏡を押し上げ

て首をぶんぶん左右に振った。

「そつ、そんなんじゃないですつ！」

「あやしい。顔が真っ赤だ」

「おつ俺は別に、そういう意味で言ってるんじゃないんですつて」

タロちゃんは鋭い眼光でコーイチを睨みつけ、

「ユイネはお前にはやらん」

と不機嫌な声で告げた。ぷつと吹き出してコーイチが笑う。

「まるで父親みたいですな」

「ふん。あいつは俺のものだからな」

瞬間、二人の間に奇妙な空気が流れた。笑いを引っ込めて無言でタロちゃんを見返すコーイチ。

「……唯音さんから、今お付き合ってる人はいないって聞いてます」

「それが何だ。お前はユイネの何を知ってる？ 何一つ大事な事は知らんくせに、俺に口応えするな」

「太郎さんのそういう言い方、唯音さんは迷惑してるんじゃないですか」

今日のコーイチはだいぶ凛々しい。

「何だと!？」

「だってそうでしょう。恋人でも何でもないただの親戚が、どうしてそこまで言えるんですか」

「知るか！ 俺のものだから、俺のものだと言っている！」

それからむつつりと黙り込み、大の男二人は真剣な表情でテレビゲームを再開した。僕は呆れてひっそりとため息をつく。ふがいない二人だなあ。

*

「ちよっ！ 太郎さんっ。卑怯じゃないですかっ」

「これは戦略のうちだ！ 負け犬めっ」

「……ど、どうしたのあれ」

仕事を終え帰宅したユイネは、肩をすくめておそるおそる僕に聞いてきた。

「ああ。ほつといて大丈夫。ゲームで喧嘩してるんだよ」

僕の言葉にちよつとだけ目を丸くして顔をリビングに向け、それから笑った。今日もユイネは柔らかな焦茶の髪を束ねて左肩に垂らしている。たまにはおろしたら？ と言ったら今は梅雨時で髪がうねっていやなんだと眉を下げた。そんなのちつとも気にならない。僕は好きなんだけどな。

「うわ。美味しそうっ。旬だもんね、鰯。調理するの大変じゃなかった？ テル君、ありがとう」

嬉しそうにしているユイネが可愛くて、一生懸命に食べる君が見たくて、つい料理に力が入っちゃうんだ。

「ううん。全然平気。ユイネが美味しく食べてくれるから、僕嬉しいんだ」

につこりと笑ってユイネを見上げる。少しだけ耳を赤くして彼女は微笑んだ。

ヨーコの行方は依然分からないままで、ヨーコ of 消息を知る人物からの連絡もまだない。何回かユイネはお母さんのお墓参りの為に故郷をたずねていたけれど、状況は変化しないまま季節は春から夏へと移り変わろうとしている。一向に進展しないヨーコ探しに最初の頃はユイネもやきもきしていた。だけどタロちゃんや僕がのらりくらりとしているので、最近では流れに身を任せている感じだ。

ユイネがたくさん泣いた次の日、目を腫らして語った言葉はやっぱり優しさに満ち溢れていた。

彼女は、自分を育ててくれた家族は大事な存在なのだと言った。

「あ！ 唯音さんおかえりなさい。すみません、俺ゲームに夢中で……。手伝います」

ユイネがテーブルに料理を並べていると、コーイチが傍へやって来た。

「あ、良いんですそんな。ゆっくりしてて下さい。いつもタロさんの相手させてしまってますみません」

「俺は全然……」

お皿を脇にずらそうとしたユイネの手とコーイチの手が重なった。と思った瞬間、ぱっと離れる。二人はお互いにすみません、と気恥しそくに頭を下げた。見えているこっちが恥ずかしい。

「ユイネ。これも持つていつて」

キッチンから声をかけ、ユイネを呼び寄せる。僕は洗いものを済ませてエプロンで手をぬぐった。

「これ？」

「うん。ね、ユイネ。コーチと毎日メールしてるの？」

彼女はサラダボウルを両手で持ったまま首を傾げて僕を見下ろす。

「うん？ ああ……そういえば毎日してるかな」

「ふうん……」

「どうしたの？ テル君」

ユイネが鈍感で良かった。

「最近コーチと仲良いもんね」

「そ、そんな事ないよっ」

慌てて否定するあたり、ユイネはとっても素直で正直だ。僕は距離を縮めて彼女を見上げた。ほっそりとした身体から良い匂いがする。

「ちょっと妬けちゃうな」

途端にユイネは顔を真っ赤にして、固まった。

「ふふ。可愛い」

「テ、テル君」

「何？」

「タロさんがお腹空いたって叫んでる」

おいまだか、と大声が響いた。

……まったくふがない。タロちゃんの馬鹿。のんびりしてたらユイネは誰かのものになっちゃうよ。

ねえユイネ。

君のおかげでタロちゃんの守り人の力も、順調に戻ってきてるんだ。まだまだ完全ではないけど、こんなに力が漲っているのは本当に久しぶりの事だよ。だからきつと、そのうち僕も本来の姿に戻れると思うんだ。

あんまりにもタロちゃんやコーイチが情けなくて任せておけなくなったら、僕が君をさらってしまおう。

うん。良いアイディアだ。

視線をふと僕の主に向ける。肩まである黒髪を一つに束ね、威厳のある均整のとれた身体（ユイネに言わせると、威圧感のある容姿らしいけど）に鋭い黒の瞳。男性的な線を描く輪郭。その美貌は異能の神の証。漆黒をまとう神だ。

これだけ守り人の力が回復しているにも関わらず、少し様子がおかしい。それは彼の一部である僕にしか感じられない微々たるものだ。おそらくは、長くこの世界に留まっているせいだと思う。

僕らの時は限られている。永遠に近い程の時を生きるくせに、限られているんだ。

たった一人では保てない。抱える孤独に、強すぎる異能の力に、人々の願いに、押しつぶされてしまうから。守り人は完璧な力を持った不完全な神。

彼はもう永い間、心と身体のバランスを崩したまま世界を守り、生き続けている。

だから僕は求めてやまない。
傍にいてあたためてくれる存在を。その魂を。
永い時を共に歩む、半身を。

036 (色づく世界のはじっこで) (後書き)

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

なんだかゆるーい三角関係。

あれ、これっていわゆる世間で人気の逆ハーってやつではないか!?
ユイネは人生最大のモテ期を迎えております。

なのに幸せそうに見えない(笑)

思いは恋に変わり、世界に色が戻る。第三部の開始です。

テレビのお天気お姉さんが、晴れやかな美しい笑顔で梅雨明け宣言を告げた日、驚くべき事が起こった。

その日は日曜日だったけれど、私は早起きをして外出の準備に全力で取り組んでいた。それこそ全身全霊をかけて、苦手な化粧も念入りにして、天気予報だって逐一チェックしていた。着ていく服一つとっても、ああでもないこうでもないで随分迷った末に決めたものだったりする。

「やっぱりこっちの方が可愛いよ。おろしていきなよ、ユイネ」

「ほんと？」

「ほんとほんと」

テル君が椅子に座る私の傍らに立って、うねりがちな髪に櫛を入れて整えてくれている。今日も束ねて行こうと思っていただけで、おろそうかな……。ああ。今から心臓が張り裂けそう。

「今日は待ちに待ったコイチとのデートだもんね」

にっこり笑って私の顔をのぞきこむテル君。ボーダーの大きめシヤツにハーフパンツという格好のテル君は、今日も天使のようにきらきら輝いて見える程の可愛らしさ。ムダ毛なんて一本もない、つるつるの足と華奢な首筋が罪な感じ。

「デ、デートじゃないの。ただ映画を観に行くだけだから」

そうは言ったけれど、私にとっては一大事だった。何せ異性と二人きりでそんな楽しそうなイベントを過ごす事なんて今まで一度も

なかったから。でもデートじゃない、と自分に言い聞かせておかないと、ますます緊張してしまう。

テル君はそんな私の思いを簡単に見透かしていて、にこにこ笑いかけてくる。

「夜は？ どうするの？」

「今日笹本さんバイトだから、夕方くらいには帰って来ると思う」

「そっか。……あ、雨」

えっ！？

ざああああああ。

耳を澄まさなくても聞こえてくる雨の音。窓を叩く水滴が次から次へと落ちていく。小雨なんてもんじゃなく、もう思い切り盛大に雨が降っている。むしろ大雨だ。

「う、うそっ」

さっきまで晴れてたのに！？ 梅雨明け宣言したばかりなのに！？

「……もう。大人げないんだから」

テル君がため息をついて後ろを振り返ると、よろよろと大きな影が姿を現した。影はその場で立ち止まり、大きくしゃみを二回続けて、それからまたよろよろとこちらに近づいてきた。

「俺が死にそうだというのに、良い度胸だ。ユイネ」

私の向かいの席にどかつ、と腰を下ろして、ぜいぜいと荒い息をつく美しい大男。肩まである黒い髪は乱れて少し顔にかかり、身体を前のめり気味にして私を睨んでいる。とてつもなく強い眼力で睨まれ、息が止まりそうになった。

「大げさだなあ。風邪引いてちよつと熱出てるだけでしょ」

そうなのだ。今日のこの日、驚くべき事にタロさんが風邪を引いたのだ。

かみさまが風邪を引くなんて想像もしていなかったし、本人にとっても初めての事なのだそうだ。テル君も驚いたくらいだ。体温を測ってみたら、少しだけ熱も出ていた。かみさまの平熱が何度なのかは分からないけれど、現在三十七度二分。それからタロさんの機嫌はますます急降下。

「ご、ごめんね？ でもずっと前から約束してたから……」

タロさんはむつと口をとがらせて窓を指差した。

「外は大雨だ！ 今日は中止だっ」

「タロちゃんが降らしてるくせに」

ぼそりとテル君が呟き、私は少し困って目の前のタロさんに顔を向けた。

「くそ。男と逢引きなんぞ許さん。ユイネのくせに生意気な」

うーん。どこぞのガキ大将みたいな事を言う。

「そっいうんじゃないって何回も言ったと思うんですけど」

「阿呆ッ。あいつはお前を襲うつもりだぞ！ ああ絶対そうだ！
そうに違いない！」

「……何でそんな事になるんですか。笹本さんは友達だし、そんな人じゃないですってば」

「お前はあいつを無防備に信頼しすぎる」

「別に悪い事じゃないと思うんですけど……」

「おまつ」

言い募ろうとしたタロさんは、一瞬顔をくしゃつとさせて、また一つ大きくしゃみをした。

普段病気なんて縁もなく毎日元気に暮らしている人が風邪を引くと、やっぱり心配になるものだ。そんな訳で私は今日の約束を断ろうとしたけれど、それをテル君に止められた。大した熱じゃないし、あんまり甘やかすと後が大変だから、と。この世界を守っているかみさまなのに、テル君にかかる大きな子供になってしまう。

「ユイネ。もう時間だよ」

「あつ！ 遅れちゃう」

「ユイネ！ 待て！」

「ごめんっ。タロさん。また帰ったら話聞くから！ ちゃんとご飯食べて薬飲んでっ」

慌ただしく家を出てマンションのエントランスまで降りてきた時には、白くけぶる程の大雨の中に世界は沈んでいた。思わず呟く。

「タロさん……こういう事はしたら駄目でしょう」

私の最初で最後かもしれない一大イベントに、大雨のプレゼントをしてくれるなんて。素晴らしいお慈悲です。かみさま……。

でも、負けるもんか。

曇天の空をきりりと睨みつけて、断固たる決意の元に傘を開いた。

どしゃぶり雨の中を何とか駅前まで辿りつき、傘をたたんで顔を上げるとそこに笹本さんがいた。お互いにぺこりと頭を下げて近づいていく。

「今日梅雨明け宣言したと思ったんですけど」

白地に淡いブルーのストライプシャツにジーンズ姿の笹本さんは今日も爽やか。黒ぶち眼鏡の奥の瞳はやっぱり大型犬みたいな柔和さで、今は困ったように微笑んでいる。

「ほんと。すごい大雨ですね」

「突然気圧が不安定になって、局地的に雨雲が発生してるって」

背後を指差した笹本さんの肩越しに巨大な画面が見え、そこで二コースが流れていた。

「これも温暖化の影響って事なのかなあ」

「……そ、そうですね」

多分、タロさんのせいなんですけど。

「でも映画館なら雨でも関係ないから良かったですよ。……なんか初めて見たかも」

「え？」

「唯音さんのスカート姿」

その指摘に何故か慌ててしまった私は自分を見下ろして、いやい

や、これは別につ。その、あの、あ、雨だからっ！と、求められてもない説明を言い訳がましく、まくしたててしまった。そう。張り切ってワンピースなんか着ちゃったりしている。普段はジーンズやパンツばかりなので、本当は足がすーすーしてそれだけで居心地が悪かったりする。何だか恥ずかしくって困る。

「良く似合ってます」

「あ、ありがとうございますっ」

ああ……。恥をしのんで着てきた甲斐があつた……。

そういえば、この服装についてもタロさんは何かと文句を言っていたっけ。

実のところ、タロさんが何を考えているのか私にはさっぱり分らない。かみさまの思考回路は複雑なんだと思う。きっと一般人で凡人の私には計り知れないようなルールがそこにはあるのだろう。とてつもなくいじわるだと思ったら、次の瞬間にはびっくりするくらい優しい。からかわれているんだろうかと思ったりもするけれど、タロさんは激情家だしいつでも真っ直ぐだったりするのでそれも違うのかも思う。はつきり言って、良く分からない……。

だけどこれだけは言える。

私の過去について。私の家族について。あそこまで遠慮なく、力いっぱい思いをぶつけられた事はなかった。友達に話す事はもちろんあつたし、今でも連絡を取り合う友達は私の家庭の事を良く知ってくれている。それなのに、あんな思いをした事がなかったのだ。辛くて悔しくて悲しくて、言われた事が案外凶星で、ショックで胸が痛くなるような思い。

それもそのはずだ。それは私が、無意識に避けてきていた事だったのだから。

「あれ。雨やんだみたいですよ」

笹本さんの声に顔を車窓へ向ける。右から左へと流れていく風景。電車から見る外の景色はたしかに雨がやんでいて、雨雲の切れ間から差し込むように光が世界へと落ちる。林立する白や灰色をしたビルが、きらきらとそれに輝いていた。

「わあ。もう晴れてるみたいですね」

良かった。タロさんの機嫌が直ったのだろうか。テル君の作った美味しいご飯を食べたのかな。熱もちょっとは下がると良いんだけど……。映画館のある駅まではあと三つ。

それから笹本さんの学校の話やテレビドラマの話、今まで観た映画で何が一番好きかとか、取りとめのない話をした。がたん、と右に重力がかかり、隣に立っている笹本さんと肩が触れ合った。うおおおお……。何だか緊張する。笹本さんは友達で知らない人ではないのに、私の知っている笹本さんではないような気がしてくる。日々タロさんやテル君と一つのベッドで寝ているとは思えないくらい、私は乙女に変貌していた。

「えっ。太郎さん風邪引いたんですか！？ あのだうさんが!？」

今日一番の大きなアクションで、笹本さんが目を見開いて驚いた顔をする。それがとても面白くて笑ってしまった。

「タロさんって風邪とか全然引かなそうですもんね」

「あ! ……失礼ですね。俺」

笑いながら駅のホームから人の流れに乗り、階段を降りて改札口まで歩いていく。

「大丈夫なんですか？ 熱は？」

「ちよつとだけ熱もあるんですけど、多分大丈夫だと思います。テル君もいるし」

「ああ。そうですね。……太郎さんには悪いけど、俺も今日は譲るつもりなんですから」

「あつ」

私は思わず声を上げた。改札を出て呆然とする。この町にやって来た人々でこつた返す駅の出入り口から、色とりどりの傘の花が咲いていく。ぽつりと笹本さんが呟いた。

「あれ。さっきまで晴れてたのに」

ざあああああ。

まごうことなき、大雨。空を見上げると、何ともへんてこで複雑な色をしていた。真っ白のもくもく雲と、どんよりとした灰色の雨雲がひしめき合っている。

「あの雨雲、俺達を追っかけてきてるみたいですね」

あはは、と爽やかに笑う笹本さんの横で、私は鼻から大きく息を吐き出した。その通りです。

……タロさん。その執念にひれ伏す思いです。

タロさんは風邪を引いて具合が悪い状態なのに、私がつきつきそわそわと出ていったもんだから、きつとへそを曲げてらっしゃるのだ。

うーん。帰りにお土産を買って帰ろう。

*

『いい加減、良い子ぶるのを止めたらどうだ』

あの時、私はタロさんのその言葉にとっても傷ついた。目の前が真っ暗になってしまいうくらい、ショックだった。それと同時に分かってしまった。

私は全然、自分の過去を乗り越えていなかったのだと。きちんと消化出来ていなかったのだ。

もう成人して自分で稼いだお金で生活をして、一人暮らしにも慣れていたので。勘違いしていたのかも知れない。自分は強くて、どんな事があっても何ともないよ、という顔で乗り越えられていると思っていたのだ。本当はちっともそんな事はなくって、ただ目をつぶって逃げていただけ。

とても弱くて情けない、小さいままの自分だった。

あの時はタロさんに言われた事が悔しくて、これ以上傷つきたくなくて怒りの感情で自分を守ろうとした。だけど……。

たしかに私は、良い子ぶっていたのかもしれないと思う。

それは、自分が選んで歩いて来たはずの人生を、あたかも周りの

人達の幸せを願っているから、周りの人達の為にそうしてきたんだと言わんばかりの、思いあがった無責任な考えの事だ。

嫌なら嫌だと言えば良かった。

苦しいなら苦しいと言えば良かった。

それを言えなかったのではなく、言わなかったのは、自分だ。

本当に強い人は、自分が嫌だと思う事をしないようにする為にはどうすれば良いかと知恵を絞って考える人の事だ。うんと悩んで自分が出した思いに、責任を持てる人の事だ。

他人の思いに乗っかって生きる人生は、どこかひとことで、少し楽ちんなのだと気付いた。

*

「いやあ！ 面白かったですね！」

「ほんとっ。私、最近観た中で一番かもしれません」

「ほんとですか！？ 実は俺もそう思ってたんです」

「やっぱり！？」

前を歩いていたカップルが私達の興奮した大声に振り返った。私は恥ずかしさに赤面しつつ、小声で提案をする。

「あの、もうお昼にしません？ 色々話したくって……」

「そうしましょう」

笹本さんと観た映画は、ずっと以前に映画化もされているアクションヒーローもののリメイク映画だった。今シーズン話題のそれは、

とてもハラハラとして面白くて、『正義』という信念の為に主人公が選り取る道の厳しさに胸がつまる思いがした。正義も悪もあいまいで、なのに人の綺麗な心が描かれていた。本当に素晴らしい作品で、私はこれを笹本さんと一緒に観る事が出来て、すごく良かったと感じた。

それからお昼を食べながら話し込んでいる間も、普段なら顔さえ向けないゲームセンターでクレイジーゲームに興じている間も、雨はずっと降り続けていた。

念の入った事に私達が屋内にいる間には止み、外へ出て歩き出そうとした矢先にまた降り出すという具合で。なんて嫌味な雨なんでしょう。

……タロさん。もう降参です。ごめんなさい。

「今日はとっても雨に好かれる一日だったなあ」
「ほんと。不思議な事もあるもんですね」

うふふ、と変な笑い方になってしまふ。帰りの電車から見える町並みは、濡れた屋根がぴかぴか輝いている。そう。雨は止んでいる。今は、だけど。

「俺のバイトがなきゃ良かったんですけど……すみません」

珍しく憂い顔をした笹本さんが、ふう、とため息をついたので私は慌てた。

「そ、そんなつ。笹本さん忙しいのに、ほんとにありがとうございしましたっ」

「あ、いえっ。そういうつもりじゃなくて……すごく楽しかったから、このままバイトに行くのは名残惜しい気が……」

「あ！ ま、また行きましょっつ」

勢い込んで口走ってから、一気に恥ずかしくなってしまう、私は猛烈にあわあわした。笹本さんがきよとした顔をしたので、一層恥ずかしくなる。

「あああ！ その、あの、お暇な時にもっ」

もうだめ。なんかもうだめ。

「……ええ。もちろんです。是非、また」

少し背の高い笹本さんを見上げると、穏やかに笑っていた。その柔らかい表情にほっと一安心する。

車内のアナウンスが聞き慣れた駅名を告げ、電車を降りて改札へと向かった。

もう驚かないぞ。改札口を一步出れば雨が降る。もう分かっているだから。いつでも来なさいっ。

私は心の準備をして傘を広げるスタンバイをしながら改札を出た。

「うわあ。すごい」

一足先に外へ出ていた笹本さんが立ち止まって空を見上げている。不思議に思っていると、周囲の道行く人達も同じように空を見上げながら歩いていたり、立ち止まったりしていた。つられるようにして私も頭上を見上げる。

「あ……」

西日が傾き始めた空に、綺麗な虹がかかっていた。

「すつごく綺麗ですね……。こんなにはっきり見えるの、あんまりないですよね」

誰かがケータイで撮影をしている音が聞こえた。それくらい、見事なアーチを描く虹だった。

もくもくの白い雲と灰色の雲は両脇に押しのけられ、薄青い空に鮮やかな色彩の虹。赤、橙、黄色、緑、青……。まるで夢の中で見ているみたいに幻想的で、美しくて、ぎゅっと胸が苦しくなる。感動して、泣けてしまいそうになる。

「ほんとに、綺麗……」

夢中で空を見つめていた。ただこの美しい景色を、心に刻んでおきたくて。

なんて綺麗な空。

素敵な虹……。

端正な顔をくしゃっとさせて笑う、かみさまの可愛い笑顔が脳裏に浮かんた。

鼻の奥がつんと痛くなる。

「こんなにすごい景色、唯音さんと見れて良かったです」
「え……」

夢中すぎてぽかんと口を開いていた私は、笹本さんに視線を戻す。また柔らかく笑っていたので、私も笑顔を返した。

笹本さんと駅前で別れた後、足早に家路を急いだ。タロさんの最

近のお気に入りであるメルバースのプリンを手。

「おかえり！ どうだった？」

「テル君ただいま。うん。すつごく楽しかったよ」

出迎えてくれた天使のように綺麗な男の子に照れながら報告してお土産のプリンを渡す。

「タロさんは？ 熱下がった？」

「もうすっかり良くなってるよ。でもふて寝してるんだ。ほんと子供なんだから。もう夕飯にするから叩き起こしてきてくれない？」

「うん」

「あ。ユイネ」

呼び止められて振り返ると、テル君がきゅっと抱きついてきた。つやつやの茶色の髪がすぐ目の前。華奢な身体がびとりと私に寄り添っている。ああ。天使に抱き締められていると思っただけで、くらくらしそうになる。

「ど、どうしたの。気が足りないの？」

「ううん。ワンピース姿のユイネがとっても可愛いから」

ぬあにいつ！？ 瞬間、鼻血を吹き出すんじゃないかってくらい顔が赤面したのが分かった。

「かかか、可愛いのはテル君でしょうっ」

「うん。良く言われる」

私を見上げてにつこり笑い、テル君は鼻歌まじりにキッチンへと

向かう。

ああ……。テル君。私は胸キュンしすぎて死んでしまつかも……。

扉のない寝室（のような、目いっぱい高級ベッドが敷き詰められている部屋）を見やると、たしかにタロさんが大きな背をこちらに向けてごろんと横になっていた。Ｔシャツにスウェットで、美しい黒髪はまた一つに束ねている。私がタロさん、と声をかけようと口を開きかけた時。

「ユイネ。俺は熟睡中だ。そんなところから名を呼んでも絶対起きんぞ」

……随分とふてくされてらっしゃる模様。

「起きてるじゃないですか……」

ぼそりと呟く。仕方なく高級ベッドの上を膝で移動して、背を向けているタロさんの横に正座して座った。

「タロさん。起きてください。晩御飯です」

沈黙。

「タロさん。機嫌直してください。お土産はメルバースのプリンですよ」

少しだけ、肩が動いた。私はむふつと笑って後を続ける。

「はあ。タロさんが起きないんじゃ、私が全部食べちゃおうかなあ。仕方ないなあ」

「阿呆っ。俺をガキと一緒にするな！ 食い物なんぞにつられるか
っ」

「あ。起きた」

タロさんは私を鋭い目つきで睨みつけ、むっと口を尖らせて起き
上がった。

「もう具合、良いんですか？」

「問題ない」

じろりと凄みのある黒い瞳がまた私を睨み、それから右の手首を
掴まれた。一瞬びっくりするけれど、氣を得る為なのだと分かり、
素直にそのままにしておく。

「今日、梅雨明け宣言したのにずうつと雨だったんです。笹本さん
と出掛けるのに雨だなんて、ちょっと残念だなんて思ってたんです。
だけど最後にとっても綺麗な虹がかかって……」

心が晴れやかになるくらい、素敵な虹。

「すっごく嬉しかったです」

私はにつこりと笑った。そうしようと思っていなかったのに、と
っても心がほかほかしていて、自然に出てきた笑顔だった。

「タロさん。ありがとうございます」

じいっと私を見つめるタロさんは、少し不思議そうな表情をして
呟いた。

「あんなものが嬉しいのか」

「はい。どんなものよりもずっと」

本当に嬉しかったから、私はそれをきちんとタロさんに伝えたかったのだ。するとタロさんが麗しい顔をくしゃっとさせて笑った。大きな身体に整いすぎなくらいの美しい顔を目の前にすると、今でも緊張してしまうし苦手だ。でもこの笑顔は、良い。とても。すごく。

「それなら毎日見せてやろう」

「そ、それじゃありがたみがなくなっちゃいます」

「何だそれは」

「ああいうのは、いつも見れないから良いんです。たまあに素敵な事が起こるくらいが、良いんです」

「ふん。そんなものか。じゃあ次はいつが良い」

ふと思いついた事を、私は無意識に言葉にしていた。

「あの。じゃあ今度、私の誕生日とか」

言ってしまった後に、思いっきり恥ずかしくなって俯いてしまった。もう全身の血管がぶわっと広がったのかと思うくらい、恥ずかしさに身体がかつと熱くなる。

ああ。私なに言ってるだろう。恥ずかしい。こんな事を言うなんて、人に自分のお祝いをお願いするなんて、穴があったら入って出ていきたいくらい、恥ずかしい……。

「なるほどな。それは良い」

だらだらと変な冷や汗をかきつつ、その声におそろおそろ顔を上

げてタロさんを見やった。

私の小さな心臓が、どこん、と大きな鼓動を打った。

タロさんがとっても嬉しそうな笑顔を私に向けていたのだ。呼吸をするのも忘れて、呆然とその可愛らしい笑顔を見つめた。

どうしてだろう。どうしてタロさんがこんなに嬉しそうな顔をするのだろう。私が言った言葉に対して、タロさんが喜んでいる。

何故だか分からなかったけれど、私も何だか嬉しくなった。

もしかしたら異世界のかみさまは、人を導くように生まれついて
いるのかも知れない。人を愛して慈しむのが当たり前のように、最
初から定められているのかも知れない。だからこそ彼らは世界を守
るのだ。その異能を駆使して、自らの痛みを顧みずに、自らの守る
世界に住む者達の為に、永い永い時を生き続けるのだ。何て深い愛
情だろうか。

ああ……。胸がぐつと締めつけられるようで、泣きなくなっ
てく
る。

その時、タロさんの美貌の顔面がゆつくりと近づいてきた。また
しても私の小さな心臓が飛び出しそうになって、身体が金縛りにあ
ったみたいに硬直する。咄嗟にぎゅっと目をつぶった瞬間、

「あだっ！ あだだっ！ タ、タロさんいたいっ」

どういう訳かタロさんが私の肩に、噛みついていた。

「ちよっ……何ですかっ！ 噛みつかないでくださいっ」

「腹が減った」

「そ、そこっ。そこ食べ物じゃないですからっ！ あだだだっ！
ちよっと本気で噛まないでっ」

「わ！ 何やってんの馬鹿タロっ」

テル君に助けてもらい、私は肩で息をしながら思った。

やっぱりタロさんが何を考えてるのかちつとも分からない……。
かみさまって複雑すぎる。

*

それからすっかり機嫌の直ったタロさんとテル君とで夕食を囲み
デザートプリンも食べて、いつも通りのくつろぎタイムへとなだ
れ込んでいった。私はソファに陣取ってテレビをぼんやりと見てい
て（その実は昼間のデートを思い起こしてにやけていたんだけど）、
タロさんとテル君はテーブル席でお茶を飲んでいた。そんな普段と
何も変わらない穏やかな時に、事件は起こった。

「タロちゃん!？」

背後でテル君の緊張した声が聞こえた。その尋常ではない声色に
寒気が走る。慌てて背後を振り返ると、椅子から崩れ落ちるように
して倒れ込むタロさんの姿が見えた。

「タロさんっ」

「来るな!」

びくりと私の肩が震えた。タロさんの怒鳴り声に身体が固まり、
どんどん呼吸が浅くなる。タロさんの大きな背中が丸まって、そこ
から黒い煙のようなものが漂い始めた。

「タ、タロさん！」

タロさんの身体から出てきた黒い煙はどんどん色が濃くなって、ゆらゆらと揺らめきながら成長していく。怖くて恐ろしくて、自分の口元がかたかたと震えているのを感じた。

「タロさんッ！！」

040（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

やっと恋愛もいろいろな感じが出てきましたでしょうか。長くかかってしまいました。

今後もゆるーく、じれーっとした感じで進んでいくかと思っています。

さあタロさんの一大事。

いつも読んで下さる方々、ありがとうございます。書き続ける原動力です。

あれは、『負』だ。無意識にそうだと確信する。

「タロさんっ」

「だめだっ！ ユイネ来ちゃだめ！」

テル君の必死の声に、両手を握り締めてその場で棒立ちになった。そうだ。不用意に近づいて、大変な事態を招いてしまっただけじゃない。ぐつと奥歯に力を込めた。

タロさんの身体から切り離された黒い煙はその存在感を増し、ぐねぐねと複雑な動きをしながらうごめいている。気味が悪くて、恐ろしい。見ているだけで心臓がどくどくと騒いで呼吸が浅くなっていく。

大きく咳き込み、立ち上がろうとしているタロさんとそれを支えるテル君。二人の視線の先には、大型犬くらいの大きさはあるだろう不気味に脈動を続ける、真っ黒の『負』の塊。

「大丈夫ですかっ」

私は大声で叫んだ。私とタロさん達の間恐ろしい『負』がのたうっている。

「ユイネ……そこを動くな……良いな」

絞り出すようなタロさんの声が聞こえ、ぎゅつと心臓が縮み上がった。どうしよう。とっても苦しそうだ。

「……あれ。これおかしいな」

タロさんの大きな身体を支えて目の前の黒い塊を見つめていたテル君が、ふいに気の抜けた声を出した。

「ね。タロちゃんこれって……」

「……ああ。こんな事は初めてだ。一体どうなってる」
「ねえっ。大丈夫なのっ」

ぼんやりと『負』を見つめて意味ありげな会話をする二人に、大声で呼びかけた。心配でたまらない。するとテル君が片手を振って、おいでの合図を私に送ってきた。……え？

「そおつと壁伝いにこっちにおいで。大丈夫だから」
「う、うん……」

いやいや。すごい勢いでぐねぐねうねうねしている『負』の横を歩いて通り過ぎるのは、ちょっと怖い。何が大丈夫なのかも分からない。でもとにかく二人の傍に行こう。腰の引けた状態のままおそるおそる一步を踏み出して、なるべく足音を立てないようにつま先立ちで歩き始める。すると、事もあるうにテル君がぷつと吹き出して笑った。

「ユイネ。なにそれっ。なにその格好っ。あははっ」
「だ、だって怖いっ！　ちよっ……テル君笑わないでっ」

自分だって分かっている。ものすごいへっぴり腰で、つま先歩きをしている体勢がいかにも格好悪いか。でも怖くってそれどころではない。ひやひやと汗が噴き出す。テル君の笑い声で、気味の悪い『負』が襲いかかってきたらどうするのっ！？　私の錯乱する胸中なんかお構いなしに今度はタロさんまで笑い出した。

「くっ……ははっ！ お、お前っ。それはないだろうっ」

さっきまで苦しそうにしてたのに……。

き、と二人を睨みつけて、でもすぐにぐねぐねの黒い塊に視線を戻して、そろりそろりと横を通過。何とか襲われずに二人の元に辿りつき、私はぜいぜいと肩で息をついた。

「何だっというのっ」

「あ。ほら見てユイネ」

「なによっ」

テル君が指差した先、大型犬くらいの大きさだった塊が、いまはもつと小さくなっていた。ぐねぐねもうねうねもだんだんと収まってきた何かの形を作りはじめているみたいだ。ひゅっと思を飲んだ。

「あれは『負』だけど、『負』じゃないんだ。タロちゃんの中で昇華させた後に、残骸みたいになっちゃっただけ体内に残っていた『負』だよ。だから害はない」

「そ、そうなの……」

だから「大丈夫」だったの。……もつと早く言ってくれたら、あんな恥ずかしい体勢はとらなかつただけだよ。

「自然に消えていくものだから、普通ならこんな風に塊になって出てくる事はないんだけどな」

タロさんから生まれた害のない綺麗な『負』は、私達が見守っている間に小さく縮んでぴたりとその動きを止めた。それからゆっくりと上下に揺れはじめる。それはまるで、小さな生き物が呼吸をし

ているみたい。小さな何かがうずくまっているみたい。ぴくりと震えて、その何かがむくつと起き上がった。

「あつ」

私は思わず声を上げていた。そこには真つ黒の長いウェーブヘアで真つ黒のドレスを着た、小さな女の子が立っていた。ちゃんと肌色をしている。

「あー。ゆいねゆいねゆいねゆいね」

驚いた事に、その女の子が私を指さして私の名前を連呼した。驚きのあまり腰が抜けそうになって、よろよろと後ずさる。

「何だこれはッ。おい！ テルッ。どうなってる！？」

「……僕にも分かんないよ。こんなの」

目をまん丸にしたタロさんと額に手を当てるテル君。尻もちをついた私に、『負』の女の子がずんずんと近寄ってきた。どうして良いのか分からずあわあわしている間に距離がつまり、がばりと抱きつかれる。

「ひよっ」

意味不明な叫び声を上げたのが最後。身体が緊張で硬直してしまった。

「ゆいねゆいねゆいねゆいね」

小さな両手両足が、私の上半身にがちりとしがみついている。

ちょうど女の子の顔が胸のあたりで、ぐりぐりと頬ずりをして私の名前を連呼する。

「ゆいねっゆいねっゆいねっ」

「……あの」

ぱつと顔を上げた女の子は、とっても可愛らしかった。くりくりおめめにふっくらほっぺ。三、四歳くらいの女の子。目が合うとにかつと笑顔になった。

「ゆいね！」

「えーと……」

頭上を見上げる。驚愕の表情のタロさんと、口をぽかんと開けたテル君がそこにいた。

041（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

一部改訂しました。

『負』の女の子の外見年齢：四、五歳から三、四歳に変更。
ちっちゃい事ですが意外と重要。

では、いつも読んでくださる方々、本当にありがとうございます。

042 (ガルクループ)

次々と飛び込んでくる奇怪な出来事のおかげで、私の頭はとうとうダウンしてしまった。

「ゆいね。すきすき」

「あは。可愛い」

膝の上にいる可愛らしい女の子がにこにこしているので、私もつられてえへへと笑う。何にせよ、こんなにチャーミングに、そして熱烈に好意を寄せられるのは初めての事だ。……結構嬉しいものなんだなあどこか麻痺した頭でしみじみ感慨にふける。

色んな事がありすぎて、笹本さんとの夢のようなひとときがとても懐かしく感じられる。あれ。あれはいつの頃だったっけ……。

タロさんから生まれた害のない綺麗な『負』の女の子は、私にしがみついたままだったのとおりあえず抱っこして立ち上がった。その重みも可愛らしいものだったので、また頬が緩んでしまった。身のちっちゃい子を抱っこした経験はあんまりないけれど、女の子の体重はきつとそれよりは軽いんじゃないかと思う。

「……おい。そいつを床に置け」

眉間にしわを寄せて難しい顔をしているタロさんがそいつ、といって女の子を指差した。

「ばかばか。あたちこいつきらい」

女の子はそう言ってぎゅっと私に抱きつき、タロさんを上目で睨

みつけた。するとタロさんの凄みのある黒い瞳が鋭くなり、背の高い大きな身体から威圧オーラがぎらぎらと放たれる。

「『負』の分際で何を言う。消してやる」

「いやっ。あたちやつとうまれた。まだきえたくない。いやいやっ」

「ちょ、ちよつと待ってください。この子にはもう害はないんでしよう？　だったら消さなくっても……」

「うーん。でも『負』である事は間違いないからね。今はタロちゃんから生まれて来たばかりで、何の影響も受けていないから大丈夫だけど。いつまた歪みを作り出すようになるか分からないよ」

テル君が困った顔をして私を見やった。『負』って良く分からないけど、そういうもののなの？　唐突に私の脳内にハテナマークがたくさんあらわれる。そういうえば、世界のバランスを崩したり均衡を壊してしまう歪みやひずみの原因になる『負』って、一体何者だろうか。黒くて気味が悪くてぐねぐねうねうねの正体って一体何なのだろう。集まれば歪みになって、人の中に入れば悪意に変わる。それはタロさんの記憶の中で私が学んだ事だ。その時、よりりと大きな身体が横に傾いた。

「タロさん？」

どうもタロさんの様子がおかしい。肩で息をしていて、やっぱり苦しそうだ。風邪が治っていないのだろうか……。

「……ちっ」

舌打ちをして、崩れ落ちるように椅子に腰をかけてテーブルに突っ伏してしまった。テル君がその背にそっと手を当てて神妙な面持ちで沈黙する。

「大丈夫なの？」

私は怖くなつてぎゅうと女の子を抱き締めた。タロさんは一体どうしてしまったのだろう。本当は風邪じゃなかったんじゃないだろうか。だってかみさまが体調を崩すなんて、きつとよっぽどの事に違いないのだ。でもどうしてだろう。毎晩同じベッドで寝てるし氣を送り続けているから、以前よりはずっと守り人の力も戻ってきてるって言つてたのに。そこまで考えて頭のとっぺんからさあつと血の氣が引いた。

もしかして、私の氣じゃだめだったんじゃないだろうか。やつぱり伴侶の愛の力でないと、タロさんを癒す事は出来ないんじゃないだろうか。

「う、ごめん。私……」

咄嗟に謝っていた。

どうしてもっと、ヒロさんに連絡をとろうとしなかったんだろう。先月、ヒロさんのところに待望の赤ちゃんが生まれて、それはそれはとっても可愛い女の子で、帰省した時に挨拶をさせてもらっていた。

ヒロさんも奥さんも嬉しそうで、その時にヨーコさんの話をどうしても持ち出せなかったのだ。日を改めてまた電話で聞こうと思っていた。だけど、そうしなかった。

赤ちゃんが生まれて喫茶店も続けているからきつと忙しいだろうと遠慮してしまったし、タロさんもテル君もヨーコさんの事を口にする事もなかったから。

そして何より、私が三人で生活している今の環境を、崩したくないと思つてしまったから……。

「……一度ガルクループに戻った方が良いね。その『負』の女の子の事もあるし。全てが初めてづくしで僕もどうしたら良いか分からないや」

テル君が華奢な肩を落としてため息をつき、弱々しい笑顔で私を見上げた。ずきりと胸が痛む。

「う、うん。私に出来る事ない？ 何でも協力するから」

ぐったりと伸びきったタロさんの大きな身体は、ぴくりとも動かない。ずきずきと胸の痛みが増していく。タロさんに何かあったらどうしよう。私のせいだ。もしも、もっと気が必要だというんならこの際体液だろうが何だろうが交換してでも良い。それでタロさんが元のように元気になるのなら。私に出来る事があるのなら。それから早くヨーコさんを見つけなくちゃ。

「ゆいねかなしいの？ つらいの？ ゆいねをつらくするのはだあれ？ よーこってだあれ？」

驚いて女の子を見下ろす。大きな黒い瞳が不安げな影を落として私を見つめていた。

「……大丈夫。辛くないよ」

「ほんとっ？」

「うん。優しいんだね。ありがとう」

女の子はまたぐりぐりと私の胸に頬ずりをする。何だか良く分からないけれど、この子に私の動揺が伝わってしまったみたいだ。しっかりしなくちゃ。

「ユイネ。ガルクループに戻る為に、君に協力してもらいたいんだ」

テル君が真っ直ぐに私を見つめている。

「うん。分かった」

私も真剣に返事を返した。何でも良い。とにかく私に出来る事なら何でもする。

「僕らにはユイネが必要なんだ。分かってくれる？」

「うん」

「ありがとう」

少しだけ首を傾けて、ふわりと天使が微笑んだ。思わず見惚れてしまう。

「じゃ、行こうか」

……ん？

「空間を移動するのは身体にかなり負担がかかるからね。人外の僕らは平気だけど、ユイネにはきついから。一旦仮死状態にして向こうへ連れて行くよ」

「え？」

ちょ、ちょっと待って。何の事？

「ユイネ。目を閉じて」

ゆっくりとテル君が迫り、私は慌てながらもぎゅっと目をつぶっ

た。

「あのっ。テ、テル君。ちょっと待って。説明し……」

説明して、と言いたかったけれど、無理だった。そこでふつつりと意識が途切れてしまったから。

すぐ近くで、人の気配がする。ふわりと花の香りを嗅いだ気がして目を開いた。黒い瞳と目が合う。どこかで見た事のある、力のあ
る瞳。何かが私のほつぺをくすぐっている。それが相手の髪の毛だ
と分かった。……あれ？

「……タロさん？」

ものすごい至近距離にタロさんの美しい顔面がある。あまりにも
距離が近くて、驚いて目をつぶってしまった。影がずっと遠ざかり、
ごほんと咳払いの音。

「起きれるか」

「あ、はい」

あれ。なんだろう。声が響いているような気がする。次の瞬間、
私のにぶい頭がぱつと覚醒してがばつと勢い良く身体を起こした。
まさかとは思ったけれど、やっぱり……。視界に飛び込んだのは見慣れない部屋。

ずつつと高いところに天井があつて、そこから上品な照明が吊り
下げられている。シャンデリアというよりも、もっと地味なものだ。
あたたかなオレンジ色の明かり。白亜の円天井に立派な円柱が何本
も伸びて、壁際にはぼつぼつとアンティークものの調度品が置かれ
ている。どれをとっても高価なもののように感じる。私はどうやら
ベッドの上にいるようだ。ベッドはベッドだけど、映画の中でしか
見た事のないような贅沢な大きさと、四方には繊細な彫刻が施され
た柱が見えた。どれもが全て初めて目にするものばかりだったのに、
どこか既視感を覚える。

ああそうか。これはタロさんの寝台だ。頭の片隅でどこか冷静な自分が、冷静に判断する。

「タロさんっ」

目の前でうーんと大きな伸びをしているタロさん。そのまま肩を押さえて腕を回し始める。

「大丈夫ですかっ」

「ああ。まだ少し身体が重いが、こっちでしばらく過こせば何とかなる」

「そうなんですか……。……。あ、あの、それでここはひょっとして……」

ちりりん。

どこからか涼やかな鈴の音が響いた。はっとして周囲を見回すと、タロさんの隣にテル君がいて、テル君と手を繋いでいる『負』の女の子が見えた。目が合うと、女の子がぱっと私に向かって駆けてくる。

「ゆいねっ」

ベッドによじ登り、がばりと抱きついて来た小さな身体を抱きとめて呆然とした。どこからともなく、大勢の人間達が姿を現したのだ。この光景はどこかで見た事がある。皆、白い衣服を身にまとっている。男女で少し形に差があるようだけれど、法衣、と呼ぶのがふさわしい。全員が音もなく、決められているかのようにぴたりと位置について、ざっと一斉にかしずいた。その中から一人の壮年が頭を垂れたまま前に出て、凜とした声を上げた。

「お帰りなさいませ。『漆黒』の守り人様。ティエルファイス様……」

もう一度倒れてしまいたかった。

ここはひよつとしなくても、タロさんとテル君の世界。ガルクループだ……。

「お待ち申しておりました！ 我が主の半身、ヨーコ様！」

ああ……誰か嘘だと言って。

*

「は、半身ではない！？ ヨーコ様ではないというのですか！？」

大理石のようなつるつるの地面に平伏していた太い眉の壮年は、半身を起して両目を見開いた。

ずらりと並んでいた神官さんや女官さん達はタロさんの一声でまたどこかに姿を消してしまった。残ったのはセウンリヒという名前の、神官さんだ。この人を私は知っている。

私が見たタロさんの記憶の中では二十代後半の、精悍で正義感溢れるイメージの青年だった。今日の前にいるのはその面影をそのままに、威厳と年齢を重ねた重厚な面持ちの壮年。そんなおじさまが素っ頓狂な声を上げて、穴が開くかという勢いで私を凝視している。その視線に耐えきれず、私はへろりと頭を下げた。

「す、すみません……」

「……では。半身でも何でも無い、善良なる一般市民の異世界の方を……連れていらつしやったと？」

「セウンリヒよ。お前もなかなか言うようになったな」

「お褒めいただき、光栄にございます！」

「阿呆。褒めとらん」

Tシャツにスウェットの、ゆるい格好のタロさん。けれどその背の高い大きな身体から、威圧オーラが全開で放たれている。……本当に具合はもう良いのだろうか。少し心配だ。

「ユイネはね、僕らの恩人だよ。こっちへ帰るのに協力してもらったんだ。客人として丁重におもてなししてね」

「はっ」

「テ、テル君……」

私は『負』の女の子を胸に抱き上げて、テル君の傍まで歩いていった。足の裏からひんやりとした感触が伝わる。テル君が大丈夫だよ、というように私に向かってにつこりと微笑んだ。

「後ほど女官長をこちらへ呼びましょう。ユイネ様。わたくしめはこの神殿の一切を預からせていただいております、大神官セウンリヒと申します。お目にかかれて感激至極にございます」

「あ！ あ、ありがとうございますっ」

慌ててお辞儀を返した。どうしてお礼を口にしてしまったのかは私にも謎だ。これ程丁寧な口調で語りかけられた経験がないので、それだけで上がってしまった。私はこの場所の雰囲気につきり飲み込まれて、立っているのがやつとのくらいに緊張していた。

セウンリヒさんは一瞬だけ目を細め、それから颯爽と立ち上がってまた深々と一礼をした。両腕の裾は長く、詰襟みたいに首元まで

きつちりとボタンが留められている。良く見ると金の細い糸でとても複雑な模様の刺繍が施されているようだ。見た事もない綺麗な生地、つい見入ってしまう。

「セウンリヒ。『白銀』は今どうしている」

「はっ。『白銀』の守り人様は視察巡行の為、ただいま神殿をご不在にしております。ネディ・サーシャ様がその留守を預かっていると聞き致しました」

「サーシャか。あいつはどうも苦手だ」

タロさんが不機嫌そうな顔で言うと、テル君がうーん、と唸った。

「でも見てもらわないと。僕らの中では一番の最年長だしね。どうする？ 今から行こうか」

「おそれながら！」

凜としたセウンリヒさんの声が響く。タロさんとテル君は会話を中断して目の前の大神官に顔を向けた。

「無礼を承知で申し上げます。『漆黑』の守り人様。どうか今暫く、ここにお留まりくださいませ。ご不在中延期にしております神事が四つ、それにお目通りと調印をいただきたい書類も山積しております」

タロさんがわざとらしいくらい大きなため息をつく、セウンリヒさんは一層深々と頭を下げる。

「テル。お前がやれ」

「ええー！ いやだよ。タロちゃんの仕事だろ」

「セウンリヒ。お前が代理でやれ」

「なりません！ 守り人様。どうかどうか、お願い申し上げます。
このセウンリヒ、一生のお願いでございます。長らくの旅路の後で、
お疲れである事も重々承知しております。わたくしとて、守り人様
にはすぐにでもご休息をお取りいただきたいと思っているのでござ
います。ああですが心を鬼にして、わたくしめは、わたくしめはっ
……」

「全く。相変わらず五月蠅い奴だな」

「タロさん」

必死に言い募るセウンリヒさんを見て、つい声を上げていた。振
り返ったタロさんの無言の威圧を感じつつ、ここは言わねばと踏ん
張った。

「し、仕事はちゃんとしないと、駄目だと思います」

長い黒髪が良く似合う、彫の深い顔立ちの美形が私を睨みながら
むっと口をとがらせる。

「仕方ない」

言うか早いか、太い両腕が伸びてきてぎゅっと抱き締められた。
突然の事で、うおっ、と奇妙な声が私の口から飛び出した。

「いやーっ。ゆいねはあたちのっ」

胸にかかえた女の子が、タロさんの厚い胸板をちっちゃな手でぐ
いぐいと押し返す。私は大きな身体の温もりに完全に硬直して、

「いいい、いやっ。これはそのっ。気を届ける為のもので、やまし
い事ではないですからっ」

と、誰に聞かれた訳でもないのに説明をした。

「ユイネ」

「は、はい」

「行ってくる」

「……いつてらっしゃい」

私の気がちゃんと届いたらしい。タロさんは満足げな表情でにいと笑って、大股で部屋を出て行った。視線を感じてそちらに顔を向けると、セウンリヒさんが私をじっと見つめていた。心なしか、おじさまの瞳がきらきらと輝いて口元にはやんわりとした笑みさえ浮かんでいる。

「あ、あの？」

「セウンリヒ！ 早く来い！」

タロさんに大声で呼ばれ、おじさまは素早く一礼し、しばしお待ちくださいませ、と言い置いて部屋を去った。しん、と円形の白い部屋が静まりかえる。

「さてと。ユイネ、ごめんね。急にこんな事になっちゃって。驚いてるでしょう？ ちゃんと説明するから。僕が傍にいるから安心してね」

「ありがとう……。テル君……」
「なに？」

呆然とテル君を見下ろす。つやつやの茶色の髪に色白の肌。天使のように綺麗な男の子が目の前で柔らかに微笑んでいる。

「色々聞きたい事があるけど……」

「うん」

「私……」

「うん」

「明日仕事だったと思うの」

「ああ。大丈夫だよ」

つばらな黒の瞳がゆっくりとまばたきをした。その仕草の美しさに、うつとりと夢心地になる。

「ユイネは昨日からインフルエンザにかかってる。僕がユイネの声で、電話しといたよ」

そ、そうなの。……テル君。人の声が出せるなんて特技があつたのね。

どうしてこうも簡単に、日常とかけ離れた世界に放り投げられてしまうのだろう。

目の前がちかちかして、何が何やら分からなくて、何を聞いたら良いかも整理がつかない。どっと疲れが押し寄せてくる。

あ、寝たい。寝てしまいたい。とりあえずさっきのふかふかベッドに戻って身体を横にしてみよう。

ふらりと一歩踏み出そうとした時、また新しい声が聞こえた。

「失礼致します。女官長フティ、参りました！」

ああ……もう。なるようになるしかない。好きにして。

「まずは御召し替えを致しましょう。よろしいですか？ ユイネ様」

挨拶を終えた後、フティさんが有無を言わさぬ勢いで言った。女官長のフティさんはびしりと法衣を着こなし、ぴんと背筋の伸びた迫力のある女性だった。金色の長い髪を高い位置でお団子にして、ほつれ毛の一本もない見事なまとめっぷり。少し吊り目の瞳に意思の強そうな唇。その口元にうつすらとほくろがあつた。四十代半ばの、ぱりぱり働くキャリアウーマンといった雰囲気。完全に気押されている私は頭ぼさぼさ、だぼだぼスウェット、という格好でとりあえずこつくりと頷いた。

やっぱり世界は違えど、私のこのだらしない格好は寝間着姿だと判断されたみたい。

「ティエルファイス様もどうか御召し替えを」

「はい」

「ではのちほど、来賓の間におうかがい致します」

「ユイネ。またあとでね」

フティさんが主導権を握り、きびきびと次の展開を決めてゆく。仕事が出来る人って、似たようなオーラというか雰囲気を持っているように思う。隙がない。

「ユイネ様、こちらに」

フティさんが腰を折って軽く会釈をしたまま、す、と腕を伸ばして誘導してくれる。恐縮しつつ従うと、一步半先を歩きながら、ちら、とこちらを振り返った。

「そちらの少女は……」

「あ、え、えと、ふーちゃんって言います」

タロさんから生まれた害のない『負』の女の子。我ながら安直だとは思いつけど鈍い頭で必死に考えた結果、これが一番しつくりくる名前だった。すると女の子が私を見上げて、ぱっちりおめめをきらきら輝かせて喜んだ。

「あたちのなまえっ」

「うん。ふーちゃん。どう？」

「うれちいっ。ゆいねだいすき！」

ちっちゃな手が、私の腕をぎゅうと掴んだ。ああ……めろつとしてしまふ。ここに来て緊張しっぱなしの心が、ほっこりと膨らんでいく。

「フウ様、ですね。御召し替えはいかが致しましょう？」

ふるふるとふーちゃんが首を振ったので、大丈夫みたいです、とフティさんに返事をかえした。

「かしこまりました」

一瞬だけ、ちらりとふーちゃんに視線を向けたフティさんの目元があたたかく和らいだ。ああそうか。彼女はきつと、お母さんだ。そう思うと私の緊張も少しだけ解けていった。異世界だといっても、人は人のままだ。立派な神官さんや上品な女官さんだといっても、誰かの親で誰かの子供。そう思うとなんだかほっとしてくるのが不思議だ。

高価そうな絨毯が敷き詰められた廊下を歩いていくと、また重厚な扉が見えてきた。

ちりりん。

どこからか鈴の音が聞こえて目の前にある両開きの扉が、すう、と開かれた。

じ、自動ドア!?

と思っただけで、向こう側に二人の女官さんがいて、その人達が扉を開いたのだと分かった。すごすぎる……。

「あ、すみません」

深々とお辞儀をしているので顔は見えなかったが、私もお辞儀を返しながらそこを通り過ぎる。それから顔を上げて、驚いた。

この神殿は、湖の上に浮いていた。正確に言えば湖の上に建てられていた。目の前に青々とした山が連なり、真つ青な空にうろこ雲。湖面がきらきらと輝いて、石の廊下にそれが反射している。芸術的な彫刻が施された支柱が並ぶ白い回廊。それがずつと先まで続いていて、複数に道が分かれてそれぞれの部屋を繋いでいた。何とも複雑な造りをしている。

「は、はへ」

綺麗。とっても。

「ユイネ様。こちらに」

振り返って私を見つめるフティさんに慌ててついていく。歩きながら下をのぞくと、透き通った綺麗な水で、底に沈む砂利さえ見える程だ。小魚の群れがすうと横切った。

「おしゃかな！ ゆいねっ。おしゃかながおよいでるっ」

「うわあ。ほんとだ！すごいねっ」

「ここは少し標高の高い場所にある神殿にございます。神事以外では一部の限られた方々にのみ出入りが許されております。さ、ユイネ様、こちらへ」

着替えなら自分でします、と言いたかったけれど断念した。何せ私知っている服の形をしていないのだ。どちらかと言えば着物に近く、それでいて洋服のような動きやすさもあって、何よりその生地素晴らしさと言ったらない。白の上に薄い山吹色の服、最後に

臙脂色の透き通った羽織りもの。ぼさぼさの髪を梳いてくれて髪を結いあげて髪飾りも付けてくれているみたい。左腕に銀色のブレスレット。良く見ると精巧な作りをしている。それとセットものなのだろうか、銀色の首飾りが下げられる。足元は指先の出るサンダルみたいなもので、それにも小さな光る石が散りばめられている。女官さん達は紐のない革靴のようなものを履いていた。

最後に手早く顔を拭われ、ぱぱぱ、とお化粧が施された。もちろんの事私は始終恐縮しっぱなしで、はふはふと呼吸しながらなるべく大人しくしていようと心がけた。身体がかちこちだ。

支度を手伝ってくれているのは女官長のフティさんとあと二人の女官さんで、その二人はついさつき扉を開けてくれた人達だった。二人は私と同年代くらいの女性だ。けれど凜とした雰囲気で堂々としている。そのうちの一人が、あまりに緊張している私に声をかけてくれた。

「ふふ。ユイネ様。そこまで緊張なさらずとも大丈夫でございますよ」

「はあ……もう心臓が止まっちゃいそうです」

「まあ」

「ユイネ様。しばしの間こちらでお待ち下さいませ」

私の世話を終えたフティさんが、さっと一礼をして部屋を出て行った。それからテーブル席に案内されると豪華なティーセットがあらわれて、お茶とお菓子があつという間に並んだ。紅茶に似た飲み物と、クッキーに似たお菓子。甘さ控えめだけれどとても美味しい。ふーちゃんも席についてクッキーをぼりぼり齧って、ずずず、とお茶を飲んでご機嫌だ。その様子を見て、食べれるんだ、とぼんやりと思った。

「お味はいかでございましょう?」

「あ。とっても美味しいです。ありがとうございます」

脇に立つ二人の女官さんにお礼を言うと、その二人が顔を見合わせてにこにこ笑った。二人も髪をお団子にして清潔感あふれる印象。きらきらと輝く瞳は、日本の同年代の女性にはないような真っ直ぐさがあつた。フティさんはびしつとした印象だったけれど、彼女達には何故だか親近感が持てる。多分年が近いせいなのだろう。

「あ、あの。この神殿にはどれくらいの方が働いてるんですか？」

「はい。神事をつとめる神官が七名。政務や国務をつとめる神官が十四名。わたくし達女官が二十四名でございます」

「そ、そんなにいらっしゃるんですか」

「ユイネ様。この神殿はずっと人手不足でございます。他の地におわします守り人様にお仕えしている神官や女官達の人数は、ゆうに百を超える事でしょう」

「えっ!？」

私の驚いた顔が面白かったのか、女官さんがくすりと笑った。

「このようにお客様がいらしたのも随分久しぶりの事でございます」
「ええ。とても嬉しく思います」

ははあ……。何となく分かった。

「タロさんって気難しいから、大変じゃないですか？ それにわがままだし……」

「タロさん？」

あ。しまった。

「あ、『漆黑』の守り人様です」

「異世界ではタロさん、とお呼びするのですか」

興味津々、という表情の彼女達。そりやそうだ。異世界、なんて多分一生縁のない場所なのだから。何だか楽しくなってきた。

「まあ……。何だか子犬のようなお名前ですね」

「ヒイト！ 何て無礼な事を」

「あは。たしかにそうですね。すみません、私のセンスが悪くて……」

タロさんの名前を命名した経緯を話すと、年若い女官さん達はくすくすと笑った。タロさんががみがみ怒って名前を教えてくれないものだから、犬にも通用するような名前をつけてしまったのだ。こんな事になるんなら、もっとかみさまっぽいものにしてあげれば良かった。

「ではタロ様とテル様は、ずっとユイネ様のおうちに？」

「はい。テル君はとっても料理が上手なんです。タロさんは気が向いたらお風呂掃除をしてくれたり……」

「ええっ！？ も、守り人様が！？」

それから会話が弾んで、一気に打ち解けてしまった。私のいる世界の事をとても熱心に聞いてくれて、楽しそうに笑ってくれるので私も嬉しくなって一生懸命に話した。この神殿はやっぱり人手不足のようで、たくさん仕事をみんなで分担してこなしているそうだ。一人で何役もつとめる人もいて、女官長のフティさんも大神官のセウンリヒさんもいつも忙しくしているという。それなら人を増やしたらどうだろというという提案に、残念な笑顔を作って答えてくれた。

「ユイネ様もおわかりでしょう？ この地におわします『漆黒』の
守り人様は、とくに繊細でいらっしゃいます」

「やっぱり……。短気で俺様で頑固だというのを、繊細、と表現す
るあたり、さすがです。」

「でもかみさまがずっと留守にしていたら色々大変じゃないんで
すか？ 今も仕事が溜まってたみたいだし……」

「ええ！ それはそれは大変でございます。ユイネ様。このような
事をなさる守り人様は、タロ様くらいでございます！」

「それには本当に、悩まされるばかりでございます。ユイネ様」

「本来なら定められた良き日に滞りなく行われるはずである神事す
ら延期になったり……」

「守り人様の恩恵を拝受する国土からはたくさんのお望書が」

「視察巡行もちつともしてくだらないから」

「再三、人の王が謁見を要請されて」

「断る言い訳を考えるのには毎度苦労して」

「タロ様にお伝えしても聞いてくだらないし」

「テル様も代理はあきあきだとおっしゃるし」

「あはっ」

思わず笑ってしまった。すると女官さん達はお互いの顔を見合わ
せて、口元に手を添えた。

「ひどいかみさまですね」

「ええ。本当に」

そう言っつぷふと笑った。

なんだ……。やっぱりタロさんは贅沢者だ。みんなに愛されてる。

あれ。そういえば、言葉が分かる。すごい。ガルクループで日本語が通じる。

大変だ。天使だ。天使がいる……。

「ユイネ。可愛いね。良く似合ってる」

私を呼びに来た女官さんに連れられて通された部屋に、テル君とフティさんがいた。磨き上げられた長方形の立派な石のテーブルに椅子がずらりと並び、色とりどりのお花がセンス良く大振りの花瓶に生けられている。大きく開かれた窓辺にも丸テーブルの席が用意されていて、そこに腰かけていたテル君が立ち上がって私に微笑んだ。脇に控えているフティさんはきちりと美しい礼を見せてくれる。あ。これって夢。夢みたいに美しい光景。

「どうしたの？ ユイネ」

つやつやの茶色の髪に色白の肌。黒目がちな大きな瞳がこつちを見ていて、ゆつくりと近づいて来る。ああ……。私、鼻血出てないだろうか。ちよつと心配。

ふわりと軽やかなシルエツト。白地にごく薄く色のついた生地が幾重にも重なり、まるでおとぎ話に出てくる妖精のような姿。肩から手首にまでの袖の部分がうつすらと透けていて、テル君の華奢な腕が見える。青い宝石がいくつも嵌め込まれた太い帯で腰を締め、足首まである生地はスカートのようにテル君の動きに合わせて優雅に揺れた。足元は私のものと似たようなサンダルで、糸のように細い金色のアンクレットをしていた。

「すごい……ほんとの天使みたい」

「そう？ 一応これが僕の正装だよ。もう随分してなかったから細

かいところは忘れちゃった」

そうだった。テル君は念じるだけで服装を変えられるのだ。

「テル君……綺麗……」

「ユイネ。よだれ」

「ええっ」

慌てて口元を拭った私を見て、あははと天使が笑った。

「嘘だよ。ね、こっちに来て」

自然な動作で私の右手にするりとテル君の左手が重なる。ひんやりすべすべ。先を越すようにふーちゃんがてて、と駆けつて窓辺にあるテーブル席にすんと座った。

「テル君……」

「ん？」

「ごめんね」

可愛らしく首を傾げて私を見上げるテル君に、どきまぎしながら先を続けた。

「こ、こんな天使みたいな子にずっとお料理作ってもらってたなんて……」

あまつさえ、ひ、ひとつのベッドで眠っていたなんて。罰が当たる。きつと。絶対。

「ふふ。良いの良いの」

す、と背を伸ばしたテル君が囁いた。

「だってユイネは特別だもん」

はぐうつつ！ もう駄目！！

「テル君っ。お、お願いだからあんまりからかわないで。死んでしまっつ」

「あは。ごめんね。つい面白くって」

ようやく席について、私はふらふらの頭を必死に動かしてテル君に色々話を聞いた。

今、ガルクランプ時間ではお昼の二時過ぎだという。テーブルの上にはこれまた美味しそうなチーズケーキみたいなものが乗っかっていて、紅茶の良い香りが漂っていた。はぐはぐとケーキを頬張るふーちゃんを見て、テル君も驚きの声を上げた。

「この子、食べれるの。タロちゃんから生まれたのに僕とも違うみたいだ」

ガルクランプには日本にあるような分かりやすい季節がない。標高の高い場所にあるこの神殿の周囲は、年中が初秋の気候なのだそう。何て過ごしやすいところだろうか。羨ましい。それから疑問に思っていた事を聞いた。

「そういえばどうして言葉が分かるのかな。私の言葉もちゃんと伝わってるみたいだし。日本語……なわけないよね？」

「ああうん。それはタロちゃんがユイネに……」

急にテル君が横を向いて、ばやあつと言葉を濁した。珍しい。

「タロさんが？」

「そうそう。あいつはあれでも神だからね。言葉が通じるようにばばつとユイネにおまじないをちよつと、ね」

「へえ！　すごい！」

につこりと笑顔を向けるテル君。そういえばタロさんの体調は大丈夫だろうか。

「最低でもあと二日はユイネにもこつちにいて欲しいんだ。やっぱリユイネの気が僕らにとつては一番の栄養だからね」

「う、うん。それは良いんだけど……。やっぱタロさんやテル君が、この神殿を長く離れるのは良くないよね」

仕事だつて溜まってしまうし、セウンリヒさんやフティさんも忙しいと聞いたばかりだ。何より神事も延期にするような留守がちなかみさまの事を、ガルクループに住む人達が疎んだりしないだろうか。勝手な事しやがつて、と怒りはしないだろうか。それで良からぬいざこざが起きてしまわないか、それがとても心配だった。

でも今回の事は最初から、そんなに長い時間留守にしようと思っていたわけではない事は私が一番良く分かっている。だつてタロさんとテル君は昔に約束を交わした魂の伴侶を迎えにいく為に、なけなしの力を振り絞つて扉を開いてやつて来たのだから。そこで再会出来るはずのヨーコさんと出会えずに、見知らぬ私がいたばかりに、予想外に長く異世界に留まる羽目になってしまったのだから。

そう思うと私の胸に苦々しい後悔の思いがまた湧き上がってくる。私が、もつと必死にヨーコさんの事を見つけようとしていたら良かったんだ。私が自分の事ばかり考えていたせいなのだ……。

「だから、だからね。タロさんとテル君はここにいて少しか待って欲しいの。私戻ったら、すぐヒロさんに連絡取るから。ヨーコさんを見つける事は、私が責任を持って必ずやり遂げるから」

タロさんは守り人でかみさまで、私のいる世界と扉を守る大事な仕事がある。それにこの世界でタロさんを待っている人がたくさんいて、タロさんが必要としている人がたくさんいるのだ。異世界の一般人である私と、のほほんと毎日暮らしていて良い訳がなかった。自分の鈍さ加減に、自分で腹が立つ。

「ユイネ……」

俯いた私の視界にテル君の白魚のように可憐な指先が見えた。そつとテーブルの上に伏せられたその手は、とても優しい慈愛に満ちている。ごめんね。テル君……。

「ばかつ！　ばかばかばか！　ゆいねをかなしませたらあたちゆるさないっ」

「うわっ」

幼い女の子の声にはっとして顔を上げる。ふーちゃんがケーキまみれの手でテル君によじ登っていた。

のおおっ！

「ふーちゃんっ」

「てるきらい！ ばか！ ばかばか！」

「ふーちゃん？」

「あ、うん。この子の名前……ああっ。ふ、ふーちゃんっ。そんな事したらだめっ。テル君は悪くないから」

慌ててふーちゃんをテル君から引きはがして抱き上げる。ふつくらした頬が、ぷう、ともつと膨らんだ。すかさずフティさんが布巾を手渡してくれる。それでふーちゃんの汚れた口元やら手を拭うと小さな両手両足でぎゅうう、と抱きついてきた。

「ゆいねっ」

「うん。私は大丈夫だから……こういう事はしちゃだめだよ。え、えと、もつと冷静に。ね？」

「ゆいねゆいねゆいね」

うーん。困った。きちんと意思の疎通が出来ているんだろうか。目を丸くして驚いていたテル君が朗らかに笑った。鼻の頭やほっぺにケーキのかけらをくつつけている綺麗な男の子はそれはそれで可愛らしい。あ、いやいや。見惚れている場合じゃなかった。

「テル君、ごめんね。大丈夫？」

「へーきへーき。すごいなあ、ふーちゃん。ちゃんと感情も持つてるんだね」

何だか申し訳なくて、私は新しい布巾をもらってテル君のほっぺを拭った。

「う、うん。でもどうして、私になついてくれてるんだろう？」

ふーちゃんはタロさんから生まれた『負』だ。ふーちゃんの正体は、真つ黒のうねうねぐねぐねの、世界に歪みを作り出してしまふ『負』なのだけれど、何故か生まれた瞬間に私の名前を叫んだのだ。

「ああ……その理由なら分かるよ」

「そうなの！？」

「うん。だってこの子は、タロちゃんから生まれたから」

ん？

意味が分からずテル君を見やるとそれ以上の説明はなく、にっこりと微笑みかけてくる。エンジェルスマイル。

ああ……。なんかもう、頭がくらくらしてきた。

「ねえユイネ」

突然テル君に手首を掴まれ、ぎく、と肩が震えた。

「ヨーコが見つかったとしてもさ、今更何て言うつもり？」

「え……」

「ヨーコはもう、ずうつと前から僕らのいない時を過ごしてるんだよ。もうとっくに繋がりは絶たれてる。ヨーコはあの世界のどこかで、ちゃんと自分のよりどこを作つて家庭を築いて暮らしているんだ。それが人の生き方だよ」

じつと見つめられて顔が熱くなるのが自分でも分かった。でも目の前の綺麗な男の子から目を逸らす事が出来なかった。テル君の瞳

がとても真剣で、そして少し悲しそうだったから……。

「で、でも、それはヨーコさんに会ってみたいと分からない事でしよう？ たしかにテル君の言うとおりかもしれないけど、それでも……今でも、ヨーコさんが一人にいる可能性だっと思うの」

ヨーコさんが何かを抱えて生きているのは事実なのだ。強くて優しくて美しい少女だったヨーコさんは、心に何らかの闇を、大きな悩みを抱えていた。けれど幼いながらもそれに負けまいと命を輝かせていた。前向きで明るくて、相手をきちんと気遣える素敵な少女だからこそタロさんの凍てついた孤独を溶かす事が出来たのだ。私の事だつて救ってくれた。そんなヨーコさんが大人になって、今どこでどんな暮らしをしているのかは分からない。彼氏がいたり結婚したりしているのかもしれない。

だけど……そうじゃなかったら？

ずっと一人で、その闇と今でも戦っているのだとしたら？

そう思うと、胸がつまる。

「だからやっぱり、ヨーコさんには会わないと……。きっとタロさんとテル君の事、すぐに好きになるよ。大丈夫。二人はとっても優しくて、それにヨーコさんの事を大好きなのを私は知ってるから。それは絶対に、ちゃんと伝わるものだから」

「でも、じゃあユイネはどうするの？ ヨーコが見つかったらユイネは？」

「え。……わ、私？ 私は……」

掴まれている部分が熱い。それに何だか胸も痛い。だってそんなの……考えなくても分かる事。

私の生活は元に戻るだけ。タロさんもテル君もいなくなって、漆黒の珠もなくなって、ただそれだけ……。実家を出て上京して、家と会社の往復で。休まずに働いてあのマンションで寝起きして、ずっと一人で。それが私の本来の生活で、今までだってそうやって過ごしてきた。そんな毎日に戻るだけ……。

どうしてだろう。それが当たり前の事なのに、喉が締まって苦しくなる。

「いつだってユイネはまず一番に相手の事を考えるよね。自分の事なんて二の次でさ。ユイネはうんと優しくて強いんだ。わがまま大王のタロちゃんに教えてやりたいくらいだよ。でも僕はね、僕はユイネが……」

その時、ごおおお、と突風が吹き抜けた。

「わっ」

窓ガラスが一斉にがたと悲鳴を上げる。テーブルの上のティーセットが音を立てて、フティさんが慌ててテーブルを押さえようと動いたのが視界の隅に見えた。そこでまた暴風。

ごおおおおつ。

がちゃん、と何かが割れる音。私はあたふたとふーちゃんを胸に抱いて前かがみになった。ものすごい風に目もあけられない。次の瞬間、頭上から聞き覚えのある声が降ってきた。

「おおお？ 何だよこりゃ！ やーっぱり半身だったんじゃないか！
なあお嬢ちゃん！」

見上げると、燃え上がる炎のような鮮やかな赤色の髪が目飛び込んできた。その下にある恐ろしく整った美形の顔。ヴィジュアル系バンドのリーダーみたいな、麗しいガルクループのかみさま。『紅蓮』さんがそこにいた。

047（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

異世界トリップ編。まだ続きます。

次話、わがまま大王タロさんの登場。守り人についても少しばかり掘り下げていければと思っております。

ゆるゆるペースですみません。

では、いつも読んでくださる方々に心からの御礼を。

048 (いにしえの恋)

嵐を呼ぶ男『紅蓮』さんの登場で、穏やかな午後のひとときが一時騒然となった。テル君はもつと大人しく登場してと小言を言い、フティさんや騒動に気付いて集まった女官さん達は『紅蓮』の守り人様に向かい深々と美しい一礼をして、散乱した周囲をテキパキと片付けていった。

「はあっ!?　じゃあ何だよ。半身の約束も交わしてねえってのに無理矢理こっちに連れ込んだってわけか!」

「……そういう下品な言い方しないでくれない?　ユイネには協力してもらったんだよ」

同じテーブル席に着いた『紅蓮』さんはテル君の説明を聞いて、また目をむいて驚いた。頭の後ろで手を組んで身体を反らせ、ほおお、と声を上げる。

私の右にふーちゃんがいて左に『紅蓮』さん、私の向かいにテル君が座り、お茶の時間が再開された。

赤地に花や龍の柄が繊細に描かれた美しい生地。私のものと同じ着物のような服に身を包んだ『紅蓮』さんは、片腕だけを袖にとおして粋な格好をしていた。着物の下に黒のぴったりとした服を身につけていて、首元には神秘的な輝きを放つ朱色の宝石が埋め込まれた首飾り。腰を太い帯で留めて裾からはまたぴったりとした黒のズボンに覆われた長い足がのぞいている。何ともまあ……。

「なあお嬢ちゃん」

隣に座るかみさまのあでやかな容姿に見惚れていた私は、はっとして顔を上げた。かみさまの麗しい顔にはいたずら小僧のような

にやつとした笑顔が浮かんでいる。

「お嬢ちゃんはとんでもねえお人好しだな。あんまり過ぎるとこいつらにイイようにされちまうぜえ」

鮮やかな赤の瞳が細められ、くくく、と喉の奥で笑った。

「あの……私、お人好しでしょうか？ そんなつもりはないんですけど……」

確かに振り回されてる感はあるけれど、本当にいやいや付き合わされてるってわけでもないと思う。こうやって人生の天地がひっくり返りでもしない限り出来ないような事を、体験させてもらっているのだから。何たってここは異世界で、まわりにかみさまやら天使やらがいらっしゃるのだ。まるで壮大なテーマパークか外国にでも旅行に来たような気分で、むしろ感謝しても良いのでは、とまで思う。それにそんな風に言われる程、自分は良い人間でもない。

「おうおう。それがもう奴らの思うツボなんだぜ」

片肘をテーブルに乗せて、『紅蓮』さんがぐつと身を乗り出す。

麗しいお顔とかぐわしい匂いが近づいて、私は反射的にぐぐつと身を引いた。

「同情は禁物って事だ。お嬢ちゃん」

同情……。その言葉に、そこはかとなない違和感と胸騒ぎを覚える。

「俺達は神だ。人々がこぞって崇め奉る、スンバらしい神なんだぜ。何せいつこの世界をてめえの力で生かしてんだからな！俺達の調

子が悪けりやすぐにそれが影響する。ちよつとでもその気があるんなら、世界を一瞬で消し去る事も出来る。とんでもねえ干渉力だと思わねえか？ 俺達の異能の力はそりゃあ絶大だ。やってやれねえ事なんざねえからな！」

だがなあ、と姿勢を戻して腕を組む。

「俺達自身は分かってんだよ。てめえらがだらだらと永い時を生き続ける、ただの化けもんだって事をな」

「そ、そんな」

『紅蓮』さんはちらりと私を一瞥して目を伏せ、細々と息を吐き出して首を振った。そんな風情の『紅蓮』さんは、今までの威勢の良さが嘘みたいに見える程に弱々しかった。

「人であれば歩むべき輪廻の道を外れちまってるんだぜ？ 人である事すら出来ねえ。それじゃあ皆が求める神だってんなら、それも中途半端だ。半身がいなきや、他人の気がなきや己を保てねえ。バランスが狂っちゃう。俺達は強すぎる力を持て余してる、始末の悪い怪物なんだぜ」

そう言つてゆるりと私を見やる。綺麗な赤色の瞳に射抜かれて身体が硬直した。

「その上てめえの愛する魂を、愛する相手を手に入れる為に、その相手さえもてめえとおんなじ化けもんに堕としちまうんだからな。

……こんなおぞましい話が他にあるかよ」

「『紅蓮』さん……」

「ほら！」

突然、目の前にずっと人差し指を突き付けられた。

「今、可哀そうって思っただろ？ 欠片でもそう思っただろ？ あめえよ。あめえよお嬢ちゃん！」

「えっ？」

ぐわしっ、と両肩を掴まれ、がくがくと揺さぶられる。

「わわっ……」

「俺達とはつくにそんなこたあ受け入れてんのさ！ 受け入れにやならんのさ！ あのバカがいつまでもウジウジウジやってるだけだ！ あのバカタロ助の乙女野郎がな！」

「うわっ。あ、あのっ……」

「あいつはどうしようもねえバカ野郎だ！ ずっと昔の失恋を引きずりやがって！ もう四百年も昔の話だぞ！？」

「ちよつと『紅蓮』てば！」

「ゆいねっ」

失恋？ よ、四百年？ それは、初耳……。

「おい。そのけがらわしい手をどけろ。ユイネに気安く触るな。ど阿呆が」

振り返ると苛々オーラ全開で、腕を組んで仁王立ちしているタロさんがいた。

「タロさんっ」

この荘厳な神殿の主であるかみさまは艶やかな黒髪をひとつに束ね、Ｔシャツとスウェットの、私の部屋にいた時と同じゆるい格好

のままだった。けれど私はそれを見て心の底からほっとした。タロさんまでかみさま然とした見目麗しい姿であらわれたら、私はもういたたまれなくなってしまうただろうから……。

私と目が合ったタロさんは、その鋭い黒の瞳をちよつとだけ丸くして一瞬固まったあと、ずかずかと大腿で近づいて来た。それから私の肩を掴んだままの『紅蓮』さんの手をばしりと払いのける。

「一体何しに来た。俺は忙しい。とつとと帰れ」

「おいおい。そりゃあねえだろ兄弟！ お前がこつちに帰ったのが分かったから、来てやったんじゃねえかよ！ そしたらこのお嬢ちゃんがいるもんだからよ、俺あてつきり……」

「これはこれは『紅蓮』の守り人様、ヴァノレスシェイラ様。ようこそおいで下さいました」

「おう！ 良かったなあセウンリヒ。やーっとこのバカが帰ってきてよ」

タロさんの後からやって来た大神官のセウンリヒさんが、さつと片膝についてひれ伏すように『紅蓮』さんに一礼をした。それから颯爽と立ち上がり、タロさんに向き直って口を開く。

「タロ様。夕刻六つの時より『つきおくりの儀』を執り行いますゆえ、あまりお時間がございません。ご用意を致しませんと……」

「ほらほら。行って来いよ。このお嬢ちゃんの面倒は俺が見てやつから、心配すんな！」

「くそつ。ユイネ！」

「はっ、はいっ」

何故かとてつもなく機嫌の悪いタロさんが、私を見下ろしてぎろりと睨んでくる。背の高い外国人モデルのような大男が私を睨んでいて、その眼力は半端ではない。こ、怖いっ。

「う、ごめんなさいっ」

「……なんだ」

「あ……なんとなく……」

つい謝ってしまった。すると彫の深い男らしい美形が、大きく息を吐き出しながらふっと笑った。

お……。

「行ってくる」

「……いつてらっしゃい」

大きな背中を見送りつつ、タロさんは私に何か言いたかったんだろうかと考えた。もしかしたら、子犬のような名前をつけたせいで怒っているのかも知れない。とうとうセウンリヒさんまで、タロ様と言っていたし。『紅蓮』さんの本当の名前だって、バ、ヴァ、……なんとかっていう格好良い名前だった。

うーん。あとでもう一度、怒鳴られる前に謝っておこう。あ。そういえば……。

「テル君。私てつきりテル君とタロさんは二百歳くらいだと思ってたけど、倍生きてたの？」

「うん。ほんとはね」

目の前にいるテル君が少し目を細めて微笑んだ。

「テル君……」

綺麗なのに、儚い。

触れたら壊れてしまいそうな、そんな笑顔だった。心がざわざわ

して落ち着かない。

「……失恋、しちゃったの？」

「うん。四百年前にね」

どうしてだろう。胸が苦しい。

いつだったかタロさんが言った事を思い出した。もう何百年も生きていて、とくに色欲なんか枯れてしまったって――。

四百年前……その頃には恋する心をちゃんと持っていたの？

「何だよ！ 言ってなかったのか？ んなら俺が教えてやるっ」

「そんなの良くないです。『紅蓮』さん」

「んあ？」

嬉々として話し始めようとした『紅蓮』さんに向かって私は首を振った。

「こんなデリケートな話を本人のいないところで了承もなしに聞くなんて……」

「良いんだ。ユイネはもう知ってるから」

「え……？」

テル君の言葉にぽかんとする。私が、知ってる？

つぶらな黒の瞳が真っ直ぐに私を見つめている。とても真摯に。

「不思議だっと思ってたんだ……。あの時、タロちゃんの過去を見せた時にね、ユイネは見ていたんだ。あいつ自身でさえ思い出すのを止めてしまった彼女の事を。そっと閉じ込めていたはずの過去の事を」

ああ……そうだったんだ。

大地を揺るがすような大きな鐘の音。青白い月夜に天蓋つきの大きなベッド。

美しい金髪の、長い髪を垂らして泣いていた彼女。

私に怯えて肩を震わせていた、彼女の事だ……。

『お許してください』

震える声。その痛々しい囁きに、この胸がまっぴたつに切り裂かれたような、とても耐えられそうにもないような激しい痛みに目の前が真っ暗になった。

それから深い悲しみと冷たい孤独と、暗黒の絶望がやって来たのだ。

あの記憶はタロさんの、とても哀しい過去的一幕。

清めの行水を済ませ、用意された衣に腕を通す。常から自分の支度を女官達に手伝わせる事はしない。それが俺の流儀であるからだ。……ただ単に煩わしいだけなのだが。

儀式にのぞむ格好はどうも仰々しくて参る。様々な濃淡の黒。三重にもなるその衣を重ね、金細工の施された帯で留める。左腕に三つ、右腕に四つの腕輪。首には細い鎖の首飾りが二つに、漆黒の寶石が埋め込まれたものを一つ。鬱陶しいことこの上ない。

ふと、ついさっきの光景を思い出して僅かに口元が緩む。

呼んでもいない『紅蓮』がやって来た事を感じ、むっとしつつ来賓の間に向かった。案の定あいつがぎゃあぎゃあと騒いでいてその隣にユイネがいた。ユイネは俺の名を呼び、ほっとしたように笑った。

この俺を見て、嬉しそうに、ほによっと笑ったのだ。

「タロ様。お支度はよろしいでしょうか」

「今暫く待て」

髪を整え耳飾りをつけ、目の前の己と目が合う。姿鏡に映る、神と呼ばれる「何か」――。

唯音。ゆいね

お前をこのままこの世界に閉じ込めてしまおうか。

この神殿に、この俺の傍に。

お前がここにいてくれるのならば、この世に俺の地獄はなくなる。俺の世界は色を取り戻し、俺の腐った四肢が息を吹き返す。お前の魂が寄り添ってくれるのならば、俺は……。

「馬鹿な」

目の前の化け物が呟いた。

ふざけた思いを一蹴し、大股で部屋を横切り扉を開く。正装をした神官達がずらりと控えており、一斉にひれ伏した。

「なんと……御立派でございます。タロ様……」

感極まった声をあげるセウンリヒを見下ろす。思わずため息がもれた。

「おい。なんだ。泣く奴があるか」

「も、申し訳ございません……。あまりにも久方ぶりの御姿でしたので……」

「行くぞ」

「はっ」

俺はもう間違えるわけにはいかない。

ユイネ。

お前は知ってどう思うだろうか。

愚かだと俺を嗤うか。不憫だと俺に同情するか。……いいや。

お前ならばありのままを、受け入れてくれるのだろう。

*

ふーちゃんはケーキを平らげお腹一杯になって、私の膝の上ですやすやと寝始めた。あどけない寝顔を見つめる。まつ毛が長い。つ

やつやの黒髪が少しくりんとしていてそれがまた可愛らしい。私は無言でお茶を啜り、『紅蓮』さんの言葉を待った。『紅蓮』の守り人様は、腕を組んで唸り声を上げながら遠い昔の出来事を何とか思い出そうとしている。

「んんっ。あれはたしか人としての『時』が終わって六十年くらい経った頃だったかなあ！ 守り人はな、半身を持たない間は他人の氣を得る為に巫女を囲う。そんなにあの女がいたんだ。名は……忘れたなあ」

「ジイナだよ。とつてもチャームリングで、素敵な魂の持ち主だった。あの頃からタロちゃん好みは変わらない」

テル君がさらりと答えた。片手で頼杖をついて、空いた手でフォークを持つてケーキをつついて少しアンニュイな感じ。氣だるげなその仕草も様になるから、すごい。

「そうそう！ んで、タロ助はその女に惚れて、女ももちろん嫌だなんて思わねえ。神の寵愛をたった一人で受けられるんだからな！ 相思相愛だ！ そうなるまでに時間なんかかからねえよ。だが、いざって時に女が怖気づいたんだ。守り人の半身になる事を恐れた。そこで女は甘ったるい夢から覚め、同時に愛も冷めて亀裂が入って二人は別れた！ 以上、終わり！」

拍子抜けして、あやうく椅子からずり落ちそうになった。

「そ、それだけですか」

「おう！ ま、そんなもんだろ。男と女なんてよ」

「はあ……」

かみさまの悲恋をたった一息で終わらせてしまつとは……。さす

がは『紅蓮』さんです。ただもう少しだけ説明が欲しいと思い、口を開きかけた時だった。

「久しぶりだね。ティエルファイス」

涼やかな声に気付いた時には、既にそこにいた。『紅蓮』さんの後ろに人が立っている。私は驚いてその人を見上げた。

天使だ……。天使が手品みたいに忽然とあらわれた。

金色のストレートの髪は腰まで伸びて、額に白い宝石。良く見るとそれは細い鎖がついた頭飾りだった。一重の印象的な目元にすらりとした鼻筋。桃色の唇。

「やあ。バードナート。元氣そうで何より」

中性的な容姿はテル君と同じような妖精服に包まれていた。だけど外見年齢はテル君より随分年上のように感じる。タロさんや『紅蓮』さんと同じくらいだろうか。

「お互い苦労するよね。どうしようもない主を持つとさ」

天使さんは言いながら微笑を浮かべ、がっちりと『紅蓮』さんの首根っこを片手で掴んだ。

「いやつ。ちょ、ちょっと待てよ！ これは違うんだっ」

慌てたように『紅蓮』さんが声を上げる。天使さんの切れ長な瞳がずっと細まると、周囲に冷やかな空気がただよい出した。何だろう。うすら怖い。

「おかしいなあ。部屋に縛り付けておいたはずなんだけど？ 仕事

が終わるまでは部屋から出られなくしてたはずなんだよね。どうしてこんなところで遊んでいるのかなあ？」

「ばっかお前！ 俺は遊んでんじゃねえよ！ タロ助の奴が、『漆黒』の奴が女を連れ込んでるからっ」

ものすごい言われように私はぽかんと口を開けた。その時、天使さんの視線が私をとらえた。その瞳が丸く見開かれ、驚きの表情で私を見つめ、そっと呟いた。

「なんて……美しい……」

聞き間違いだ。うん。絶対。

「……魂だ」

あ。そっちですか。

なんだか良く分からなかったけれど、褒められるのに慣れていない私は一気に赤面した。

「……良かったね。ティエルファイス。じゃあ私達はこれで」

「わあ！ まてお前っ！ まだ話が途中っ……」

一瞬にして『紅蓮』さんと天使さんの姿が消えた。視界が開け、青い稜線にオレンジ色の太陽が沈んでいこうとしている風景が見える。夕暮れ時だ。

「あれはバードナートっていつてね、僕と同じ守り人から生まれた眷族だよ。さ、もう日も暮れるし部屋に戻ろっ。ユイネ、疲れてない？」

「う、うん。大丈夫……」

「じゃあもうちょっとだけ話をしよう。『紅蓮』の説明で本当に全
てなんだ。だけどね、続きがある」

私はふーちゃんを抱き上げてテル君のあとについて歩いた。いつ
の間にか女官さん達がいなくなっている。むにやつとふーちゃんが
口を動かし、小さな手で私にしがみついていた。その温もりが、と
てもありがたかった。

「恋とか愛とか、儚いものだよ。夢のようなものだよ。知らないうちにそれは情や執着や情性に変わる。だからこそ純粹で美しい感情なんだろうね。タロちゃんとジイナの間に生まれた感情は、たしかに愛だったと思う。でもね、『紅蓮』の言ったように二人の思いはだんだんとすれ違って、終わりを迎えた。普通の男女に起こる、どこにでもあるような話でしょ？」

テル君はそこまで一気に喋って、私を見上げた。

「ただあいつがこの世界で神っていう存在だったただだ。守り人の半身でいる事の責任と重圧に彼女は耐えられなかった。当然の事だと思うよ。だって半身になれば人の輪廻から外れる。神と同じ存在になるんだ。人として子をもうけて毎日を暮らしていく、一般的な女性らしい幸せはそこにはないから。だけど彼女はタロちゃんを選べなかった事を思い悩んだ。ジイナは優しくかったから……。タロちゃんを受け入れられなかった自分を、責めたんだ」

身震いするような夜の闇がそこまで来ている。

「見ていられなかったよ。ジイナは涙を流して謝罪の言葉を口にしたら。笑わなくなって瞳から光が消えた。それからはその言葉しか彼女から聞けなくなった。神にそむいた事に懺悔して怯え続けて、日に日に弱っていった」

そこで言葉を区切り、綺麗な横顔を見せてテル君が遠くを見つめた。静まり返った神殿には人が誰もいないかのような錯覚を覚える。何故だろう。この建物から今は温もりを感じられない。静寂が、よ

り深い孤独を呼び寄せる。

「タロちゃんは、ジイナの笑顔がいつとう好きだったんだ。優しく微笑む彼女が好きだった。ほんとに、心の底から」

ひんやりとした風が吹いて、鳥肌が立つ。

「だから記憶を消した。彼女の中から、タロちゃんとの思い出だけを一つ残らず綺麗にね」

それは異能の力をもつ守り人だからこそ選り取る事の出来た、残酷な手段。

「……優しい笑顔を取り戻したジイナは、神殿にいる『漆黒』の守り人の巫女としての期間を終えて、故郷に帰った。あとは人として、普通の男性と結婚して子を授かって、孫が出来て、穏やかにその人生をまっとうした。それでおしまい」

神殿の複雑な回廊を歩く。まるで迷路みたいなその道の先は夜に溶けている。深くて冷たい、夜の闇に。

あの頃の、四百年前のタロちゃんは今よりももっと温和で大人な奴だったよ。バランスを欠いたのは、その頃からだ。彼女の記憶を消す時に名を捨てて、全てを愛せなくなったのは、その頃からだ。

自分の正体を知った。

俺は人でも神でもない。愛する者さえ救えない。許し難い化け物だと言って、タロちゃんは声をあげて泣いたんだ。

テル君の声が頭に残る。

いつ戻ったのかも分からなかったけれど、私は広すぎる寝室の寝台の上に仰向けになっていた。徐々に瞼が重くなり、いつしか眠ってしまっていた。そして夢を見た。

現実とも過去とも記憶とも思えるような、そんな夢を。

*

「守り人様」

その声に振り返る。目の前に、女性がいた。

愛しい女性。

動悸が早くなる。金色の美しい髪。ゆるくカーブを描いて華奢な肩にかかる。あたたかな魂の鼓動が伝わってくる。透けるような白い頬が、わずかに染まっていた。

触れたい。

己の浅ましい思いを強引に奥底へと沈める。

うつすらと微笑んでいる女性が、手にしていた赤色の果物をおずおずと差し出した。

「この神殿にあるお庭に、モチトの木がありましたの。実がなっていて……。私、これがとっても大好物で」

はにかみながら話す彼女の全てを、まばたきをせずに見つめる。知っている。知っている。それが大好きだった事を。子供の頃から大好きだったその実を、兄と木に登って、もいで食べた。それを親にしかられて、それでも美味しくてやめられなかった。

買って食べるのも良いけれど、あれは木になっているのをもいで食べるのが一番美味しいのよ。ほんとなんだから。だからそれがこ

の庭にあつたら、すごく楽しい。あなたにも食べて欲しいわ。きつと大好きになるわ。だって私とあなたって、好きなものが似ているから。ねえ、ダメかしら？

そう言つて笑つた。全て覚えている。お前の語つた言葉は一つ残らず全て……。

そうか。二人で植えたその木は、もう実をつけていたのか。早く実がならないかしらと、とても嬉しそうに笑っていた。

「甘酸っぱくて美味しいんです。守り人様のお口に会つか分かりますが……」

喉が張り付いてしまつたように、声が出ない。手を伸ばして受け取ろうとしたが、自分の指が震えている事に気付いて背を向けた。

「あ……。も、申し訳ございません。私つたら……」

気落ちした声が聞こえる。どくどくと五月蠅いくらいに心臓が鳴る。苦しい。胸が痛い。息を吸い込むたびに、胸から真っ赤な血が噴き出してくるようだ。

急げ。何か、何か声をかけなければ。彼女が行つてしまう。もう会う事もない。その瞳はもう自分を映さない。分かっている。それで良い。けれどもう一度。もう一度だけ。最後に……。

固く目をつぶり、腹にぐっと力を込めて口を開いた。

「そこに、置いてくれ。あとでもらおう」

「え……」

「俺も、その実が好きだ」

それだけ言うのが精いっぱいだった。振り返る。びっくりしたよ

うな彼女の瞳。それから頬が緩み、ゆつくりと微笑んでいく。

「はい」

その笑顔が好きだった。ただただ、好きだった。

泣かせたかったわけではない。壊したかったわけではない。この手で守りたかった。

些細な事で喧嘩をして、どうでも良い事で一緒になって笑っていたかった。今までと同じように。

愛していた。

傍にいたかった。いて欲しかった。ただ一人。たった一人の、最愛の人。

俺の、全て。

深々と一礼をして、彼女は笑顔を残して去った。

「……ジイナ」

どうか、幸せに。

儀式を終えた後もこまごまとした仕事を片付け、夜空に月が高く昇った頃にようやく部屋に戻った。

「遅くまでかかったね。もうフティ達には休んでもらったよ」

「ああ……。腹が減った」

「じゃあさ、隣の部屋に用意するからユイネも起こしといてね。ずっと寝っぱなしで晩御飯まだなんだ」

美しい子供はそれだけ言うと、一瞬にしてその場から消えた。大きな寝台の上、ずいぶんと右の隅の方でユイネが静かに眠っていた。

「おい。起きろ」

細い肩を揺すると、ゆっくりと瞼が開かれる。ぼやとした表情で上体を起こした。

「あ……。タロさん。すみませんでした」

ぼやとしたままユイネはぺこりと頭を下げた。髪留めが柔らかい髪に絡まっていつも以上にぼさついた頭になっている。俺はため息をつき寝台の脇に腰を下ろした。

「謝るような事をしたのかお前は」

「あ、あの、子犬みたいな名前をつけちゃったから、怒ってるんですよね」

「なんだそれは。別に怒ってなどいないぞ。……名など俺にはあまり意味がない」

言いながら髪留めをとってやろうと手を伸ばした。ユイネの髪は細く柔らかいので複雑に絡んでいるようだ。なかなかうまく取れず、少しばかり力を入れて髪留めを引っ張った。

「いたつ。いたたたつ。ちよつ……やつぱり怒ってるんでしょう」

「違うつ。これがうまく取れんのだ。くそつ」

「も、良いですから。自分で取りますからつ。あだ！」

「おい、とれたぞ」

俺の手の中にある髪留めを見つめ、ユイネはぼさぼさ頭に手をやって息をついた。

「……ありがとうございます」

うらみがましい声で言い、そこでやっと俺を見上げて目を丸くする。

「タロさん……か、かみさまみたいです。すごい」

「みたいではなく俺は神だ。どうだ、恐れ入ったか」

「は、はい。……そういう格好をしてるとちゃんとして見えます」

ふん、と鼻で笑い、堅苦しい衣をばさりと脱ぎ捨てた。じゃらじゃらとした腕輪も首飾りも邪魔だ。外して床に転がしていく。俺が豪快に着替えはじめると、ユイネは寝台から降りて俺の脱ぎ捨てた衣やら何やらを拾い上げた。

「高そうな服にしわが寄っちゃいます」

「お前、夕飯まだなんだろう？ 着替えて隣の部屋に來い」

「はあ……」

どうやらこいつは慣れない環境に突然放りこまれたせいで、多少疲れているようだ。しおれている。

「あれ。ふーちゃんは」

「ふーちゃん？」

「『負』の女の子です」

「さあ。知らんな。気配はするからどこかにいるんだろう」

そういえば、その『負』も何とかせねばならない。明日こそはサ
ーシャに聞かなくては。

ユイネはきよろきよろとあたりを見回し、しょんぼりと肩を落としてますますしおれていく。ふと思いつき、俺はユイネを見下ろした。

「こっちにもルーウィという名の酒があってな。なかなかウマイぞ」

すると少しばかり目に輝きが戻る。こいつは意外と酒好きで、それに強い。俺はユイネと酒を飲む時間がとても気に入っている。

「すぐに着替えて行きますね！」

ユイネの素直な反応に思わず笑った。

*

まあこれは仕方のない事だ。おそらくはこんな状況になるだろうと予想をしていなかった俺が悪い。

考えてもみる。突然自分の全く知らない世界に連れて来られて、人見知りする性格だというのに周りには初対面の者達ばかりがぞろぞろといる。一応社会人としての振る舞いは身につけているので、何とか当たり障りなく対処しようと頑張る。だが自分の知らない話を有無を言わず聞かされて（それも数百年前の失恋話なんていう、陰気な話だ）、悩まされて、心はへろへろに疲れ切っていたはずだ。ここへきてやっと俺とテルとテーブルを囲み、普段と変わらない夕餉の時間を過ごしたおかげで一気に緊張がほぐれていったのだろう。そこへ美味しい酒があるもんだから、酔うという方が酷である。

「だからー！ 私は別に偉くもなんともないんですつ。様とかつて言われるような人間じゃないんですつ。それにー、どーして私がタロさんのむかあしの失恋の話を聞かなきゃならないんですかつ」

ユイネはスウェット姿でばしりとテーブルを叩き、ぐいと酒をあおった。珍しく顔が赤い。テルが頬杖をついてくすくすと笑っている。

「ちょっとテル君！ きーてるの」

「うん。ごめん」

「タロさん！ お酒っ」

「もうやめておけ」

そう告げると恐ろしくすわった目で俺を睨みつけ、グラスをずいと突き出してくる。

「飲ませてくれないなら、もう気をあげませんから！ 良いんですかつ。良いんですね！」

完全に酔っ払っている。仕方なく酒を注ぐと、分かれば良いんで

す、とのたまった。

「こんなユイネ初めて見た。可愛いね」

おい。テル。余裕だな。

「なんだかんだいっても、男の人ってメンクイなんですよっ」

「めんくい？ 何語だ」

「だから面食いです！ ジイナさんも綺麗な人だったし、ヨーコさんだって美少女ですよ！？ あーやらしいっ」

ぶつと噴き出して笑ってしまった。色々あるだろうにそんな感想を口にするあたり、酔っ払いの戯言である。

「くく……たしかにそうかも知れんな。その点お前は地味な顔をしているぞ」

わざとそう言ってやるとユイネは口をとがらせて俺を睨んだあと、にやりと不気味な笑みを浮かべた。

「良いですよ。私はべつに美人に憧れたりしてませんからっ」

「ほう。珍しいな」

「だって大変ですよ。綺麗だと目立つし苦労しますもん。麗奈ちゃんも大変だって言ってます」

それから大きなため息をついて顔を横に向け、ぼうつと遠くを見つめて黙り込んだ。俺はそんな酔っ払いを肴に静かにグラスを傾ける。何故だかひどく居心地が良い。

「……タロさん。後悔してますか。ジイナさんの記憶を消した事」

穏やかでしつかりとした声音で、ユイネがさらりと言った。だからだろう。俺も意外にすんなりと答える事が出来た。

「いいや。していない」

「なら、良いんです」

酔っ払いの横顔は頬がほんのりと赤く、肩に垂らした焦茶の髪は灯に輝いて、とてもあたたかそうに見える。

……不思議だ。こいつは、たった一言で俺の傷を癒した。

「私かとにかく言う事ではないですから……。何が良くなかったとか、こうすれば良かったとか、そんな事じゃないんです。だってそうでしょう。必死だったんだから」

僅かに顔を俯かせ、片手を額に当ててゆるりと首をふる。

「でも……本当は、分らないんです。だって私は……。あんな風に切ないくらいに、誰かを好きになった事がないから……」

ユイネはゆっくりとまばたきをしてこちらに向き直り、真っ直ぐに俺の目を見つめてきた。少しだけ身を乗り出す格好で、じっと、食い入るように見つめてくる。いや、見つめるといふよりは睨んでいる。

どく、と俺の心臓が鳴った。

酔っ払いの据わった目に睨まれているだけだというのに何をときめいているのだ。阿呆か俺は。くそ。怯むな。相手はユイネだぞ。

「タロさんっ！」

「うおっ」

心臓が口から飛び出そうな程驚き、思わず声を上げてしまった。

「な、なんだ」

「よんひやくねんまえの失恋をー、いつまで引きずってるつもりですか！ タロさんは良い男です！ 男前なんですっ！ もっと自信を持ちなさいっ」

呆然とする俺をよそにユイネは鼻息荒く席を立つた。両手を腰に当てて仁王立ちをして、その上俺を睥睨する。あり得ない。あの気弱なぐにやぐにやユイネからしてみれば、これはもう酒乱の域だ。

「良いですか！ 私が必ずヨーコさんを見つけ出しますからっ。ちゃんと半身になってくださいって言っんですよ！？」

「……お前な。それは」

「大丈夫ですっ。ヨーコさんだったらどーんと受け止めてくれますっ」

前々から少し気にはなっていた。どういっわけかこいつは、ヨーコの事をひどく『買って』いるのだ。俺は苦笑をもらし、椅子に深くもたれてユイネを見上げた。

「お前の中じゃ、ヨーコは完全無欠の良い女だな」

「そーですよ。良い女ですよ。優しくって強くって、綺麗なんですー」

立ちっぱなしのまま、ふにやふにやと笑っ。つられてこっちも笑っってしまう。

「何故そっ言い切れる」

「だって」

ばしん、と両手をテーブルにつく。ふわりと柔らかな髪が揺れた。

「ヨーコさんは、真っ暗の真っ黒くろの闇の中からタロさんを救ったんです！　ずうつとずうつと一人ぼっちだったタロさんの冷たい孤独を、溶かしてくれたんです！」

いつとき、呼吸をするのを忘れてユイネの真摯な瞳を見つめた。

「……ユイネ」

お前は……。

「それに……私も、ヨーコさんに救われたんです。ヨーコさんがあのお守りを、くれたから……あれを、あれが、私、あったから……でもあれは、私のじゃなかったけど、だから、せめて……」

突然がくつと上体が揺れてユイネの姿が見えなくなった。席を立つて回り込むと、うー、と呻きながら酔っ払いがうずくまっている。

「世話の焼ける奴だな」

腕をとって立たせようとした時、ユイネが小さく身じろいで何事かを呟いた。

「ん。なんだ」

「だめ。き、気持ち悪い。吐くかも……」

なんだとっ！？

「待て待てっ。ここで吐くなよ！」
「ううっ」

両手で口元をがばつと抑え込むのを見て、咄嗟に横抱きにして廊下へと走った。

緊急事態だ。仕方ない。回廊へ飛び出してしゃがみ込み、月明かりの落ちる美しい夜の湖面に向かってユイネにゴーサインを出した。髪にかからないように後ろで束ねて持ち、空いている手で背中をさする。何とか落ち着いたあと、テルが持ってきた水の入ったグラスを手渡してうがいをするように促す。

「す、すびません」

ず、と鼻を噉り、その場でへたりと土下座をした。かと思ったら、そのまま寝息を立て始めた。

……こいつめ。覚えてろよ。

力の抜けた身体を抱き起こす。酔っているせいか思いのほか熱かった。乱れた髪を梳いて、気の抜けた寝顔を見つめる。柔らかく優しい気が全身に流れ込み、ふわりと心があたためられていく。

闇を知る、穏やかな魂の鼓動。俺はこの美しい旋律を知っている。そう。美しいのだ。他の何よりも、どんな者よりも、美しい。

冷えた闇の中で、たった一つの光だった。希望だった。命そのものだった。

「くそ……」

こんなはずではなかった。

俺はやはり、どうしようもない阿呆だ。手のつけられない愚か者だ。ぎしぎしと胸が痛む。同時にじわりと滲み出す思いに、今更ながら動揺する。

相手が眠っているのを良い事に、その華奢な身体を抱き締める。

小さくてすぐに壊れてしまいそうだ。柔らかな髪に頬を寄せ、また少しだけ腕に力を込めた。

こんなはずではなかった。

どうしてこんな酔っ払いの、酒くさい女を腕の中に抱いて、胸が張り裂けんばかりの思いを抱かなくてはなんなのか。地味な顔をして気弱で目立たない女を腕の中に抱いて、四肢がばらけるかと思う程の幸せを感じなくてはなんなのか。

「ユイネ」

地獄のような永い時を生きる俺を救ったのは、ヨココではなかった。たった今、それがはつきりと分かった。お前だ。

「……ユイネ。好きだ」

馬鹿正直で遠慮がちで、ふにやふにやと気が弱いくせに頑固者で、いつだって相手の事を思って自分を置き忘れてくるようなお人好しのお前が。

俺はお前が、好きだ。

「……僕は忠告したんだからね。タロちゃんが悪いんだよ」

傍に佇んでいたテルが、拗ねた声でぼそりと呟いた。分かっている。馬鹿者は俺だ。

今まで思い出す事もなかったあの頃の記憶。生々しい傷跡。ずっとそれに背を向けて遠く冷たい場所に閉じ込めて、鍵をかけておいたはずだった。

鮮やかな熱が、息を吹き返した思いが、力強く全てを押し流し、恐ろしい闇を塗り替えていく。色彩豊かな、あたたかな世界へと。脳裏にジィナの笑顔が刹那浮かんで、さっと消えていった。分かっている。

俺はもう、間違えたりしない。

己の気持ちを押し付けて、相手を殺してしまうような愚行はもうたくさんだ。

愛しい女にもう二度と、あのような思いをさせたくはない。

052（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

やっと自覚しました、かみさま。

まだまだ色々ありますが最後にはハッピーなエンドになりますからね、うん。あらかじめ。

次話、ネディ・サーシャの登場。異世界トリップ編佳境です。

では、いつも立ち寄ってくださる方々、感謝感激でございます。

どうせなら、すべて覚えていない方が良かった。どうしてだかいくらお酒に酔ったとしても記憶だけは毎回はずきりとしているのだ。自分が何をやらかしたのか、自分が一番良く分かっている。

何ていうかもう……お天道様の下を歩けません。恥ずかしすぎておそれおおくて。

まさか異世界に来て、かみさまの神殿でそのかみさまの前で、リバスするなんて……。ひどい。もう色々と。

せめて日本の、自分の良く知っている居酒屋とかで友達の前ならまだよかった……。

そんな訳で大きすぎる寝台の上で目が覚めてからも、もぞもぞと何度が寝返りを打つだけで起き上がる勇気がなかなか出てこなかった。横目でちらりと様子を伺うと、隣ですやすやとテル君が眠っていた。なんてまあ……可愛らしい天使。その横にお酒臭い私がいるのが申し訳なく思ってしまうくらい、まばゆい寝顔です。タロさんはもう起きているようで、寝台の上にも部屋にもいないようだ。うーん。いつまでもこうしている訳にはいけない。よし、とひとつ気合を入れて身体を起こした時だった。

「タロ様。どちらへ行かれるのです。どうかお待ちください」

「どうかあともう一日、こちらにお留まりくださいませ」

「まだ神事が山ほどございます。タロ様、どうか」

「朝っぱらから五月蠅い奴らだ！ 散れっ！」

だんだんと声が近づいて来て、勢い良く寝室の扉がぱたんと開かれた。

「お。起きたか」

かみさま然とした凜々しい格好のタロさんに、セウンリヒさんに他、神官さん達がそろそろと。神官さん達は起きている私に気付き、さあっと流れるような動作でひれ伏してゆく。

「お目覚めでございますか。ユイネ様」

凜としたセウンリヒさんの声。今日も真っ白の法衣をびしりと着こなし、髪を後ろに流してすっきりとした精悍な顔立ち。そんな彼には素敵なおじさま、という形容詞がふさわしい。寝起きの私は恐縮しまくり、急いで寝台の上で正座をして深々と頭を下げた。

「お、おはようございますっ」

「ユイネ」

タロさんの声にぎくりとして、咄嗟に大きな声を出した。

「タ、タタ、タロさん！ も、申し訳ありませんでしたっ！」

しん、と辺りが静まり、次の瞬間タロさんの大きな笑い声が白くて美しい寝室に響き渡った。

「ん。なあに。うるさいなあ……」

がはがは笑うタロさんの声で、テル君がむっくりと起き上がった。

「くつくく！ その様子じゃあ昨日の事を覚えているようだな。この回廊から聖なる湖に向かって吐くなんぞ、並の度胸ではないぞ！ そんな不屈き者はこの数百年の間にお前だけだ。さすがだな。ユイネ！」

腕を組んで仁王立ちしている美しい大男は、にやにやと意地悪な笑みを浮かべて、わざと、そんな事を言った。……凶悪です。

私は何の反論も出来ず（実際それは事実であるわけで）顔に熱が集中していくのを感じながら、また俯いて出来ればここから消え去りたい気分で、口を開いた。

「……も、ほんと、反省してます。すみません。もう当分お酒は飲みません」

「あれしきの事で何を言う。俺の晩酌に付き合うのはお前の義務だ」

ええと。それ、何ですか。いつからですか。

「ユイネ様。今暫くお待ちくださいませ。女官長が参りますゆえ」

いつの間にかセウンリヒさん以外の神官さん達の姿がなくなっていた。テル君が優雅な伸びをしつつ、ねえ、とタロさんに声をかけた。

「今日はサーシャのところへ行ってくるよ。僕とユイネの二人でね」
「俺も行くぞ」

「タロちゃんも駄目でしょ。仕事はまだたくさん残ってるんだからねえセウンリヒ」

「ああ！ ティエルファイス様！ 左様でございます！ まだ神事があと三つに、人の王との謁見と、それにお目通りをいただきたい書類が……」

「そんなものは後回しだ！」

「なりませんっ。タロ様、お願いでございます！ どうか！」

「……セウンリヒ。それ以上言うつもりならば命を差し出せ」

「はっ！ もとよりわたくしのこの粗末な命、この地におわします

『漆黑』の守り人様に献上させていただいております。いやしくも剣で一突きせよと申されるのであれば、ここで、この場で速やかに」

「ああ、あのっ！　ちよつと待つてください！」

話がとんでもない方向に行きそうになったので慌てて割って入った。どうしてもこんな話になってしまうのか。多分九割五分、かみさまなのに大人げないタロさんのせいだと思う。

「私に良い案があります」

拳手をして発言するとタロさんにもすごい眼力で睨みつけられた。ひいつ、と目を逸らして先を続ける。

昨日も思った事だ。世界を守り人々を見守る『漆黑』の守り人様が、そうやすやすとこの神殿を離れてはいけないのだ。だからやっぱりそのサーシャさんのところへはテル君に行ってもらおうようにして、私だけ元の世界に戻してもらおうのがベストだ。その事を説明して後を続ける。

「私があつちの世界でヨーコさんを必ず見つけます。それからタロさんに連絡しますから。それならちゃんとこっちで仕事が出来るでしょう？　そうすればセウンリヒさんやフティさん達の負担も減ります」

むつとタロさんの口元がとがった。

「却下だ！」

「……どうしてですか」

「どうしてもだ！　言っただろう。俺はお前の気でなければ受け付けん。お前の気がなければ守り人の力がそのうち弱まっていくのだ。

そうなれば世界を守る云々ではなくなるからな。俺もまた向こうへ戻る」

「で、でも」

「それにお前のようなくずにヨーコ探しが務まるとも思えん！」

ふぬ、と大きく息を吐き出して胸を反らせる。く、くそう……。

「それは大丈夫ですっ！　ちゃんとやりますから」

「駄目だ」

「タロさん……」

「……そんなに俺が邪魔か」

タロさんらしからぬ言葉に思わずどきつとした。けれど当の本人は思いきり不機嫌そうな顔で、いつもと何も変わらない様子だった。

「ふん。ではこうしよう。俺はここに残り、お前とテルを向こうへ戻す。世界を渡る為に眠らせたお前を、向こうの世界で目覚めさせなくてはならんからな」

「分かりました」

「だがそれにはひとつ条件がある。何度も言っただと思うが、異世界へ繋がる扉を開閉させるには莫大な力を要するのだ。俺の力がまだ完全に戻っていない現状、お前の気が不可欠だ」

はい。私は無言でひとつ頷いた。

「だからだな、それ以降お前から直接氣を得られないというのは俺にとってはかなりきつい状況になるわけだ。そうなると前もって通常よりもたくさんの氣を蓄えておく必要がある」

うーん。氣って蓄えられるものなのか……。

「よってだな、その、何だ。あの、あれだ……」

ん？ タロさんが突然もごもごと口ごもった。珍しい事もあるものだ。ぼうつとタロさんを見ていると居心地悪そうに視線を足元に落したり、ごほん、と咳払いをしたりして落ち着かない様子。どうしたんだろう。そんなタロさんを見てセウンリヒさんもぽかんとしている。

「もう。タロちゃんてば気持ち悪い」

テル君が私の腕にきゅっと抱きついて呟いた。

「な、なにいつ」

「しょうがないから僕が言っておけるよ。だからね、たくさんの氣を得る為にはやっぱり儀式が必要って事だよ」

「……儀式？」

あれ。妙な胸騒ぎがする。

「うん。前に言ったと思うけど、氣っていうのはお互いに心を開いている同志じゃなきゃ送られない。お互いに好き同士の相手じゃなきゃ成立しないものなんだ」

好き同士、という言葉に何故だか恥ずかしくなるけれど、私は頷いて先を待った。

「だけど、そうじゃなくてもたくさんの氣を得る為の手段があつて、それがお互いの体液を交換するって方法だ。まあひとつの儀式みたいなものだって思えば良いよ。でね、その儀式を心の通じ合った相手とすれば、より強くて大きな力が生まれるわけ。何て言ったら良いのかなあ、より濃厚な氣が得られるようになる。だから守り人にとつたら半身っていう存在はすごく大きいんだ。守り人はその相手を得る事によって初めて神の力の全てを手に入れると言っても良いね。……まあ『紅蓮』は相手が半身じゃなくても大丈夫みたいだけど」

「そ、それってつまり……」

「つまりね」

「ユイネ！」

突然名前を呼ばれて、びくつと肩が震えた。いつの間にかすぐ傍に大きな影。タロさんが寝台に手についてぬつと顔を近づけてきた。

ちょ、ちょ……。

「ちょっと！」

「これは儀式だ！ そうだ！ たかだかディープキスだぞ」

やめてー！！ はつきり言わないでっ！

「あのっ、ちょっと待ってください！」

「今更往生際が悪いぞ。これが唯一の手段だ。お前の意見に合わせてやってるんだ！ 目をつぶれっ」

思いきり背を反らせるとぐっと両肩を掴まれて押さえ込まれる。心なしかタロさんの鼻息が荒い気がする。いや、きつと気のせいだ。だってタロさんはかみさまで気が必要なだけで、色欲なんか一切なくてヨコシマな下心でこういう事をするのではないと分かっている。分かってはいるけれどもっ！

「せ、せめて歯を、歯を磨かせてください……」

目をつぶってしまったら最後ののような気がして、じつと間近にある男らしい美貌の顔を凝視した。かなりの至近距離に迫った鋭い黒の瞳。

「……お願い、します」

気押されて蚊の鳴くような声しか出なかった。で、でもこればかりは主張しなくては。だって酔っ払ってそのまま寝てしまったんだから、これは私にとっては死活問題なのだ。

お互い身体が固まってしまったかのような沈黙が、数秒。それからタロさんが勢い良くぐわっと身体を反転させて、背を向けてうな

だれた。

「だ、駄目だ……出来ん」

その呟きに私はまた固まった。ああ……どうしよう。やっぱり私、口臭かったんだ……。

でもそれ以前にこんな私なんかと、その、アレだなんてやっぱり嫌に決まってる。かみさまだから、気が必要だから仕方ないにしても、相手がヨーコさんならともかく……。あ。まずい。思ったよりもシヨックだ……。

「恐れながら。……あの、少々よろしいでしょうか」

おずおずとセウンリヒさんが声をあげた。

「なんだ」

一気に疲弊した様子のタロさんが言うと、おじさまは立った状態で両手を掲げて一礼をする。

「では本日テル様とユイネ様には、ネディ・サーシャ様との懇談をしていただきましょう。タロ様には『鎮魂の儀』と『沈静の儀』の神事を二つ、人の王との謁見、合間に書類も片付けていただきます。翌日に最後の神事、『豊饒の儀』を執り行っていました。さすれば概ねの役務を終える事が出来ましょう」

「……おい。なんだそれは。俺を殺す気か」

「滅相もございません。しかしこのように致しますれば、翌十の刻にはタロ様も一緒にユイネ様の世界にお戻りいただけるかと存じます」

「え。でもそれじゃあ、またタロさんが神殿を留守にしちゃうって

事になりませんか」

私はセウンリヒさんの提案に驚いた。この大神官さんは、タロさんをまた異世界に送り出そうと言っているのだ。タロさんがいなくなるتماた仕事が溜まったり色々大変だろうに……。

「ええ。わたくし共とて、タロ様の健やかなる安息を心より願っているのです。そもそもわたくし共は、『漆黒』の守り人様に身命を捧げてお仕え申し上げる事に、何らの異論もございません」

穏やかに微笑んでいるおじさまは私に向かってひとつ頷き、言葉を続けた。

「おそれ多くも、わたくし共が動く事により守り人様に少しでも御恩返しが出来るのであるとするならば、わたくし共はそれを誇りとしそれを命とし、それに無上の喜びと最上の幸福を感じる次第でございます」

「……お前はくどくどと物を言いすぎる」

「はつ。申し訳ございません。……ですから、タロ様」

真つ直ぐにタロさんに向き直り、大神官さんは朗々たる声で宣言する。

「本日はわたくしの言うとおりに動いていただきますので、どうかご承知を」

「何だと!？」

「すべてはユイネ様とあちらの世界へお戻りになる為、でございます」

くすくすとテル君がこっそり笑った。タロさんがじっとセウン

リヒさんを睨みつけるけれど、セウンリヒさんも毅然とした態度でタロさんを見つめている。

「くそっ！ さっさと行くぞ！」

どすどすと音が立ちそうな歩幅でタロさんが部屋から出て行き、セウンリヒさんが素早く一礼をして顔を上げた。

「……ありがとうございます。ユイネ様」

「え……？」

「女官長フティ、参りました！」

素敵なおじさまは微笑みを残して去り、入れ違いにフティさんが部屋にやって来て、私は呆然としたまま寝台から降りた。どうして……。

「おはようございます。ユイネ様。湯殿のご用意が出来ておりますので、ご案内致します」

「おはようございます。あ、ありがとうございます。……あ」

そういえば当たり前だけど替えの下着とか持ってきていない。どうしよう。借りるのも悪いし、何より洗濯してもらうのも申し訳ない。と、その時。

「はい。ユイネの事だから、色々気にすると思って僕が持ってきていたよ」

テル君が差し出したのは見た事のあるトートバック。私のものだ。受け取って中を見ると、タオルの下に替えの下着が何セットか入っていた。

「テル君……すごい。色々ありがとう。お世話かけます」

何ていうか、色々細やかな気遣いがとてもありがたい。さすがはテル君。伊達に可愛らしい天使ではないのだ。茶色のつやつやの髪にうるうるとした大きな黒い瞳。長いまつ毛にすすべの頬。微笑む口元は愛くるしくて、その美しい造形について見惚れてしまう。あれ……何やら違和感。何だろう。

「……テル君？」

「うん？」

「背、伸びた？」

その違和感は目線の高さだった。寝室のひんやりとした大理石みたいな石廊の上に立っている。テル君の頭は私の顎辺りの高さにあったはずだ。だから私が少し見下ろす感じになるはずなのに、今、テル君のつばらな瞳は私と同じ位置にあった。

「あ。ほんとだあ」

嬉しそうにテル君が笑った。ああ……可愛い。

「これって……成長期？」

私の言葉に天使がまた声を上げて笑った。

054（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

52話の後書きで、うそ予告をしてしまいました。申し訳ございません。

思いのほかタロさんが乙女になってしまったせいで話が進みませんでした。

いえ、作者の力量不足ゆえにございます。すみません。次話こそ、サーシャさんの登場です。

では、読んでくださる方々に心より御礼申し上げます。

055（神の半身）

その神殿は、森の中にあつた。

様々な緑が折り重なり、木々の幹は逞しく命に満ち溢れて、荘厳な空間を作り出している。呼吸をして、大自然の中に「生きて」いる緑の色がこんなに深いものだとは思わなかった。全てがきらきらと輝いているように見える。大地を覆う苔ですら、とっても綺麗だ。

「はぁ……」

「ユイネ。こつち」

涼やかなの声に振り向くと、森の緑を背景に佇む天使がそこにいた。小さな頭を少し傾けて、中性的な顔立ちの可愛らしい男の子がじつとこつちを見つめている。

「きれい……」

「もう。呆けてないで、おいで」

天使が苦笑しつつ私に向かって手招きをした。それでやっと我に返り、慌ててテル君の後に続いた。

「ここは『白銀』の神殿だよ。ガルクループにいる四人の守り人の内の一人で、一番の年長者」

「何歳くらいなの？」

「うーん。もうざっと九百年は生きてる」

すごい。

「本人は留守らしいけど、サーシャが、『白銀』の半身がここにい

るんだ。タロちゃんから生まれた『負』の女の子の事が何か分かる
と良いんだけど……」

『白銀』の守り人様の神殿もタロさんのところと造りが同じだ。
長い回廊が迷路のように入り組んで、たくさん部屋を繋いでいる。

「ふーちゃん、やっぱり今朝もいなかったんだ。どこいつちゃった
んだろう」

少し心配だけれどタロさんがどこにいたと言っていたので、消
えてしまったわけではないと思う。

「うん。まあだいたい予想はついてる」

テル君が一つの扉の前で立ち止まった。美しい木の年輪をその
ままだに、品の良い彫刻が施されている神々しいくらい大きな扉。そ
れが音もなく内側から開かれていった。

「お待ち申ししておりました。ティエルファイス様。ユイネ様」

扉の先、その廊下にずらりと女官さん達が両側に控えていて、そ
れが次の扉まで続いていた。片側に……二十人くらいはいるだろう
か。壮観な眺めにぽかんと口が開く。

「久しぶり。カエナント」

「お久しぶりでございます、ティエルファイス様。こちらへ。サー
シャ様がお待ちです」

「うん。フェルズナックは？」

「『白銀』の守り人様とご一緒に視察巡行に出ております」

一人の女官さんがテル君の半歩先を歩いて先導してくれている。きっとこの神殿の女官長さんだ。雰囲気ごとくなくフティさんに似ている。出来る女、という凜としたオーラだ。

私はさっきから緊張と興奮のあまり、少しばかり鼻息が荒かった。何せ初めて会えるのだ。かみさまの半身に。魂の伴侶さんに。一体どんな人なのだろう。色々と聞いてみたい事もある。

元々は真つ当な寿命をもった普通の「人」だったけれど、守り人様の珠を受け取り、永い時を共に歩もうと決めて、それを選択した人だ。きつとたくさん悩んだり迷ったりしたのに違いない。

女官長さんが背筋のぴんと延びた美しい礼をしながら次の扉を開いてくれた。中から暖色系の灯の明かりがもれる。ふうふうと私の鼻息が鳴る。扉が半分まで開かれた時、ものすごいスピードで中から何かがひゅ、と飛び出してきた。残像が目に残る。

「ゆいねっ」

「うおっ!」

あ、と思った瞬間には私の身体に黒い塊が激突。驚いて男らしい声を上げる私の膝辺りに、ふーちゃんがつちりとしがみついていた。

「ふーちゃん! ここにいたの!」

「ゆいねゆいねゆいねゆいね」

両脇の下に手を入れて抱え上げる。小動物系の可愛らしいふーちゃんの重みに、頬が緩んだ。ちっちゃな手で私の顔をぺちぺちと叩く。良かった。また会えて。

「うふふ。一足お先にお借りしちゃった。可愛いわね! ふーちゃんって言うの」

その声に顔を上げた。部屋の窓辺にある重厚で幅広のカウチに身体を預けていた小柄な女性が、ふわりと立ち上がった。

無造作にまとめあげた薄茶色の長い髪がゆるやかなカーブを描いて肩にかかる。身ごろのゆったりとした薄桃色のワンピース。チワワのようにくりっとした瞳に、白い肌。ふつくらとした頬に色の薄いそばかすが散っていて、それがとってもチャーミングだった。

「やあサーシャ。久しぶり。元気そうだね」

テル君が柔らかな声で言うと、その女性がぱっと花が咲いたような華やかな笑顔を作って両手を広げる。

「ティエル！ 久しぶりい。元気だったあ！？ もうちつとも遊びに来てくれないんだから！」

きゅんとテル君に飛びついて、ぎゅうぎゅう抱き締めている。私はぼうつとしながらその光景を眺めていた。『白銀』の半身であるネディ・サーシャさんは私よりも少しだけ背が低く、ちんまりとした外国の美少女みたいな女性だった。……間違ってもうん百年生きているお方だとは思えません。

「それでこの子が、ユイネちゃんね！ 初めまして！ 私がサーシャよ。よろしくっ」

飛びつくように私の両手を握り締めて、ぶんぶん振り回して、力いっぱい歓迎の意をあらわしてくれた。どうして私の名前を知っているのか、とかそんな疑問も吹っ飛ぶ程の元気オーラが全身から溢れている。ものすごい至近距離に可愛らしいお顔が迫り、私は赤面しながら笑顔を返した。

「は、初めまして。倉田唯音です」

「まあまあまあ！ 素敵……。とっても綺麗！」

「え……」

「あなたの魂の音色」

「……。あ。ありがとうございます」

お礼を言つとサーシャさんは一瞬だけきよとした表情になつて、こつ付け加えた。

「もつと喜んで良いのよ？ 容姿を褒められる事なんかより、よっぽど価値があつて本当の事なんだから」

一瞬、どきつとした。

「さあ！ 私に聞きたい事があるのでしょ？ ここ何日かダーリンがお仕事でいないから、ちよつと退屈してたの。何でも聞いてね。私、ユイネちゃんとたくさんお話したいわっ」

語尾にハートマークがつきそうなうきうきした口調のサーシャさんが、テーブル席を勧めてくれる。そこには優雅なティータイムセツトが既に用意されていた。

サーシャさんの圧倒的な明るいパワーに多少面食らっていた私だけれど、時間が経つうちに心がほこほこことあたたかくなっていった。

「ええ〜！ 『漆黒』の事をタロちゃんっていうの！？ とっても素敵！ 私もこれからそう呼ばうつと」

かみさまの半身で、人よりも永い時を過ごして様々な経験をしてきているだろうその人は、おとぎの国のお姫様みたいに可愛らしく

てお菓子みたいに甘い雰囲気、女の子、という言葉がぴったりの女性だった。

もともと童顔で頑張っても大人っぽくなれないのだと説明してくれる仕草も良い意味で子供っぽくて、それがすごく似合っている。こんな私でさえサーシャさんを眺めていると、守ってあげたいと思ってしまう。……なるほど、これが庇護欲。

要するに私のイメージしていた人物像と全く違っていた。何百年も生きているからもっと物静かで淡々としていて、びしっとした言葉を使う人なんじゃないかと勝手に考えていた。ガルクループのかみさま達は、人の常識という枠を簡単に飛び越えてしまう。

「ふうん。よく分かったわ。そのヨーコちゃんが鍵ね……」

興味深そうに呟いてサーシャさんは紅茶を一口飲んだ。それから私の隣に座って美味しいパイをむしゃむしゃ食べているふーちゃんに柔らかな視線を向ける。

「ふーちゃんも色々調べてみたけど、やっぱり『負』である事には間違いないわ。でもねえ……長ーく生きてる私だけけど、こんな現象初めてよ。一度取り込んで昇華したはずの『負』が形を作って、それも意思をもって生まれてくるなんて。不思議……」

「やっぱり向こうの世界に長く留まった事が関係してる?」

「そうね。『漆黒』……タロちゃんが守る扉とそれに繋がる世界は、四人の守っている世界の中でも場の力が極端に強いところよ。そういう場所は歪みやほころびが出来やすいし、大きな『負』も生まれやすいの。きっとその世界の力が作用して生まれたのね。彼の体調はどう?」

「こっちに帰ってから回復したよ。ユイネもついててくれるからもう大丈夫みたい」

「それなら問題ないわ」

「あ、あの、ふーちゃんはやっぱり昇華しないといけない『負』なんでしょうか？ 危険なんでしょうか？」

サーシャさんは私に向き直り、思案げな表情で首を傾けた。むむつと眉間に可愛らしいしわが寄る。

「うーん。『負』である限り絶対安全だとは言い切れないのよ」

「『負』って、私よく分からないんです……」

「そうなのよねえ。私もよく分からないの」

肩をすくめて、うふふつとおちゃめに笑った。

「よく分からないけど、世界に害を及ぼす『負』の存在は決してなくならないの。世界がそこに在って、そこに命がある限り『負』は生まれ続ける。いくら消しても知らない間に生まれてる。だから私達も存在し続けるの。どうやらそういうものみたいなのよねえ。ああん！ もうちょつとうまく説明出来れば良いんだけど！ ごめんねえ」

サーシャさんは申し訳なさそうに、ダーリンならもつとちゃんと説明してくれるはずなんだけど、と言った。ダーリンっていうのはつまり『白銀』の守り人様の事だろう。うーん。ラブラブ……。

「だからふーちゃんってほんとに不思議！ 害のない『負』なんて存在出来ないはずなんだけどねえ。どうしよう？」

私は隣にいる小さな女の子を見下ろして、またサーシャさんに視線を向けた。

「あのつ。それならしばらく様子を見るっていうのはどうでしょう」
「そうねえ……ティエルはどう思う？」

「うーん。難しいなあ。やっぱり昇華させた方が良いとは思っけど……」

「で、でも、今すぐにしなくても大丈夫でしょう？」

「うん。そうなんだけどね」

サーシャさんとテル君が困ったような笑顔になる。はらはらしながら私は二人を交互に見つめた。何とか昇華しない方向にもっていかかった。ふーちゃんは生まれたばかりで、まだ消えたくないと言っていた。それに害がないんだったらこの世界に存在していても良いんじゃないだろうか。私になついてくれているからかも知れないけれど、ふーちゃんを消してしまうなんて、悲しい。ちっちゃくて、それでも精いっぱい生きているふーちゃんには罪はないと、そう思ってしまうのは悪い事なのだろうか。

「じゃ、本人の意見も聞きましょう。ねえふーちゃん？ あなたはどう思う？」

サーシャさんの問いかけに、口元にパイのかすをいっぱいくつつけたふーちゃんが大きな声で答えた。

「あたち、生きたい！ まだまだいっぱい！ あたちゆいねがすきっ！ たくさんたくさん、すきっ！」

「よし！ 決まりいっ」

ぱちん、と両手を合わせてサーシャさんは明るい声で言った。

「ふーちゃんはこのままでよし！ ユイネちゃんと一緒に帰ってよし！」

「ええっ。ほんとに良いの？」

「ありがとうございますっ」

「ゆいねといっしょ！　ずっといっしょ！」

「うふふっ。ふーちゃんをお願いね」

「はいっ」

とっても嬉しくてサーシャさんの手を両手でぎゅっと握り締めてしまった。するとサーシャさんも笑顔を向けてくれた。嬉しさで胸が一杯になる。困惑気味のテル君をそっちの形で、感動……。

ひとしきりはしゃいだ後、そうだっ、とサーシャさんが瞳をきらきらさせて立ち上がった。

「ユイネちゃんに見てもらいたいものがあるのよ！　私、最近編み物とお裁縫に目覚めてね。向ここの部屋に置いてあるのっ。見てくれる？」

言いながら私の手を取って勢い込む。その勢いに飲まれつつ、私は笑顔を返して頷いた。楽しそうにしているサーシャさんの言う事なら何でも聞いてしまいそうだ。一緒に席を立とうとしたテル君に、ダメっ！　と鋭い声が飛んだ。サーシャさんだ。

「ティエルはここにいて！」

「ええー。何で？」

「だって見せるの恥ずかしいもん」

「ユイネは良いのに？」

「ユイネちゃんなら良いのっ」

引きずられるようにして隣の部屋に続く扉の先へ。てててっとうーちゃんが追い越していった。

サーシャさんの手芸の腕前は、とても前衛的で芸術的なものだった。

「あつ。これかわいいですね。鍋敷きですか」

「うふ……。マフラーよ」

さつきからどれをとって何を言っても、私の発言は失礼千万。こ、これはまずい……。

幅広のテーブルの上にずらっと並んだファンシー雑貨の数々は、形は個性的だけれど、どれも心のこもった作品だと思った。それでやっと私の鈍い頭にもひらめきが舞い降りた。

「サーシャさん。あの、もしかして赤ちゃんが？」

レースのブランケットを手にしたサーシャさんが、今日一番の笑顔で振り返る。

「そうなの！　いま五カ月目よ。もう少ししたらお腹も目立つようになるみたい」

「わあ。おめでとつございます」

「ありがとう」

愛おしそうにお腹の辺りに手を添えて、サーシャさんは柔らかに微笑んだ。

「妊娠が分かった時はね、とっても嬉しかったわ。だってダーリンと私の愛の結晶ですもの。うふふ。愛の結晶なんてちょっとクサイ

言葉だけど、私達にしてみればすごく大事で、重い言葉よ」

ゆっくりと席に腰を下ろし、その手で生み出した作品の数々に目を向ける。

「新しい命を宿すっていうのはね、私達の時の終わりが近づいている事を意味しているの。役目を引き継ぐ時期がやって来たって事なの」

目を細めて微笑むサーシャさんの表情は穏やかで、私にはその感情を読み取る事が出来なかった。

千年という長い長い時を生きる守り人様。その時が終わるという事。それは人の死と同じ意味なのだろうか……。

「守り人はね。世界の均衡を保ち扉を守る為に存在しているの。ガルクールプには必ず、四人の守り人が存在するように出来ているのよ。もし一人が欠ければ、それを補うように命が生まれる。役目を終える時が近づけば、役目を引き継ぐ為に命が生まれる。そうして遠い過去から永遠に続く未来にまで、守り人の力は絶える事なく、続いていく。守り人は「人」ではないわ。「神」という名前がついた、機能の事よ。世界を監視し影響を及ぼし、潤滑に流転していくように備えられた装置の事よ」

まるで諳んじているように紡ぎ出される言葉は、とてもサーシャさんが語っているものだとは思えなかった。そこに今までのようなあたたかさがなかったからだ。私は黙って斜向かいの席に腰を下ろした。

「ってね！ これは私の考えた事じゃないのよ？ 守り人の歴史にある言葉なの。暗いわよねえ！ だってそんなの哀しいじゃない！

？ 赤ちゃんが出来る事はとっても幸せな事よ。時が終わるのだっていずれは来る事だし、それに何より私にはダーリンがいるもの。最後の最後まで、うーんとうーんと愛してあげるつもりよ。この子も、ダーリンもね！」

「サーシャさん……」

強い人。強くて優しい人。その明るさには芯に強さがあつたのだ。こんな人が傍にいてくれるのなら哀しい事なんかひとつもない。

サーシャさんの明るさは『白銀』の守り人様の為なのだと分かった。

「あの、聞いても良いですか？」

「ええもちろん。どんどん聞いて！」

「あの……守り人様の半身になるってやっぱり大変な事なんでしょうか。ヨーコさんが見つかって、それでかみさまの半身になつてくれなんて、ものすごく都合が良いというか……」

「うーん。多分それ程大変じゃないと思うわ」

「え……」

「だって私、騙されたんだもの」

一瞬意味が分からず、そばかすの散つた可愛らしい顔を凝視してしまった。肩をちよつとすくめてサーシャさんが笑った。

「ひどいのよお！ ダーリンったらね、私に何の説明もなしに白銀の珠を渡してきて、何も知らない私に承諾の言葉を言わせちゃったのよっ！ 気が付いたら半身になっちゃってたってわけ」

あまりの事に、絶句……。

私の驚いた顔がおかしかったのかサーシャさんが面白そうに声を上げて笑った。それにつられるようにして私も気の抜けた笑顔を作る。

「私はね、人だった頃に心臓の重い病気にかかっていたの」

それを治してあげようと言われ、サーシャさんは『白銀』の守り人様から珠を受け取った。それはいわゆる詐欺行為。後で聞いてみればそれは、かみさまの目ぼれだったのだそうだ。……何とも激しい恋心です。ただサーシャさんも『白銀』の守り人様の事が好きで、お互いに心を開いている間柄だった事は確かだ。それはやっぱり最低条件のようだ。

白銀の珠——新しい命を体内に取り込んだ時点で「人」の枠から外れる。三日間眠り続け、次に目覚めた時には「神の半身」として世界に生まれるのだという。生まれ変わる為の深い眠りについた時に、守り人の歴史を学び守り人の力を得て、守り人の伴侶としての知識が備わる。

半身として生まれた自分は、今までの自分と同じなようで、何かが少し変わっていたのだそうだ。それは多分経験しないと分からない感覚なのだろう。

「だからねえ。タロちゃんも騙して渡しちゃえばよかったのよ」

とてつもない力技だとは思っけれど、それも一つの手段ではある。うん。多分。

「ねえユイネちゃん。もしヨーコちゃんに会えたら伝えて欲しいの」

私の手にサーシャさんのすべすべの手が重なる。真っ直ぐに私を見つめるサーシャさんの大きな瞳。

「何も心配いらな。大丈夫よ。あなたは決して一人じゃないわ。きつとあなたなら、タロちゃんと一緒に歩んでいける」

ぎゅっと手を握られて何故か私の心臓がばくばくと騒ぎ始める。

その大きな瞳に吸い込まれそうになり、私は何とか声を振り絞った。

「……わ、分かりました。サーシャさんの言葉はきつと必ず、ヨー

「コさんに伝えます」

「ありがとうございます」

ふわっとサーシャさんの良い匂いが近づく。おでこにちゅ、と可愛らしいキスをされた。

「うふふつ。これはおまじないよ」

赤面しつつ、すぐ目の前で微笑むサーシャさんを見つめる。柔和な笑顔はとってもあたたかい。

「あなたが自分の殻を破れるように」

あ……。

やっぱりこの人は私の心を見抜いていた。私の心の、醜い部分を見抜いていたんだ……。

「ありがとうございます」

自然と感謝の言葉が口をついて出た。優しい人。私もいつか、こんな人になれたら良い。

「ゆいね！ これみてっ」

大声に振り返ると、そこにはマフラーの毛糸をめちゃくちゃに解

いて絡まるふーちゃんがいた。

のおおっ！

おい。なんだこれは。

くそ忙しい一日を終えて、五月蠅い神官共からやっと解放されたと思えば時刻は深夜だ。もうふらふらだ。だが疲労困憊の身体を引きずってでもここへ帰ろうと思うのは、ひとえにユイネの気に直接触れたいからだ。セウンリヒの馬鹿者の言うとおりに仕事を片付けているのも全て、僅かな間だけでもユイネの傍にいたいが為だ。それ以外の理由などない。世界なんぞユイネがいなければどうでも良い。

「……おい。なんだこれは」

口に出して言うが返事はない。当然だ。皆眠っている。寝台の上で仲良く川の字で眠る奴らを無言で睨みつけるが、虚しさだけが込み上げる。

おい。この主は俺だぞ。

ユイネの両側にテルと『負』がいて、三人仲良く、腹が立つ程気持ち良さそうに眠っている。

まあ良い。テルを消してやるか。それとも『負』を消してやるのか。思案しつつ寝台に近づいた時だった。

「あ……タロさん。お疲れ様です」

「……ああ」

ユイネが目を覚まし、小さな声で言いながら身体を起こそうとするのでそれを手で制した。

「あの……話したい事があって起きて待つてようと、思つてたんですけど……寝ちゃつてました」

「そのまま寝ている」

寝台の端に身体を滑り込ませる。見るとテルと『負』は両側からユイネにべつたりと寄り添つて、そろつて寝息を立てていた。……こいつらはどこまでも主をないがしろにするようだ。

「あは。動けないみたいです」

「叩き起こすか。それではお前も窮屈だろう」

「だ、大丈夫です。こんなにくっすり眠つてるんだから、何だか可哀そうだし」

「ふん」

仰向けの状態で身動きのとれないユイネは、薄暗い闇の中でふにやりと笑つた。俺は横臥して肘をつき頭を乗せ、邪魔なテルの頭ごしにユイネを見下ろした。まあ、眺めているだけでも悪くはないな。

「今日サーシャさんに会つて来ました。とっても優しく可愛くて、明るい人ですね。……どうして苦手なんですか？」

「きゃんきゃんと五月蠅くてかなわん」

「うーん……」

「で、なんの話だ？」

「あ。はい。あの、サーシャさんにふーちゃんの事聞いたんですけど、大丈夫だつて言つてもらえて、それで向こうの世界へも一緒に歸つて良いつて言つてもらえました」

サーシャの奴め。何か企んでいるんじゃないだろうな。あれは昇華せずとも、ガルクループに置いていた方が良く決まっている。

あの世界は力が強すぎる。いずれ歪みを作り出す『負』に戻ってしまふ可能性が高い。

「タロさん？　どうかしました？」

ユイネが顔だけを俺に向けて、不安げな声を出した。

「いや。……それで」

「はい。あと、守り人様の半身の話とか色々してもらえて、とっても勉強になりました。それで私、何だかやれそうな気がしてきました」

そんな訳はないのに、その言葉を聞いて何故か期待をしてしまう。やれそう？　何がだ。

「私、ヨーコさんを説得出来ると思います」

「……なに？」

「あつ。ま、まだ見つける事も出来てないんですけど、ヨーコさんに半身になつてもらえるように、多分ちゃんと説明出来ると思うんです」

意気込んでいる相手を見て俺は心の中で落胆のため息をついた。

「おいユイネ」

「はい？」

「そんな小難しい事をせずとも良い方法があるぞ」

「えっ。何ですか」

暗闇に目が慣れて、はっきりと顔の輪郭が見える。俺を見上げる瞳を覗き込むように見つめてにやりと笑い、なるべく冗談に聞こえ

るように言ってやった。

「お前が俺の、半身になれば良い。それなら今すぐカタがつく」

案の定、ユイネはぎょつとして硬直した。

「くく。面白い顔だな」

「そつ、そん、そんな、自暴自棄にならないでくださいつ。は、は、半身っていうのは魂の伴侶でしょう！？ 誰でも良いってわけじゃないんですからっ」

「おい。大声を出すな。こいつらが起きたら面倒だろうが」

「だつてっ……。……。す、すみません」

じとつと控えめに俺を睨みつけ、それから目を閉じてふうと息を吐き出す。

「……タロさんの魂の伴侶はヨーコさんです。私なんかじゃないんです。私じゃ、ないんです」

「だかお前の魂は気に入っている。お前の気があれば俺は……」

「それはヨーコさんの魂と似てるからでしょう。……。私は、一時的に協力してるだけですから」

そうだ。お前の思いなど顧みずに、そのお人好しな性格に付け入って振り回しているだけだ。

ユイネ。お前にとっては迷惑な話だろうな……。

きりりと胸が痛む。

「あ、あの、それですね、私こつちの世界に来て、やっぱりなっ
て思ったんです」

真つ直ぐに天井を見つめたユイネが口元をほころばせた。

「タロさんは贅沢者です。みんなタロさんの事を大事に思ってくれてます。みんな優しく、タロさんの事が好きなんです。セウンリヒさんもフティさんも、ここで働いている人達みんな。それに『紅蓮』さんもサーシャさんも、タロさんの事心配してくれてますよ」

ふん。余計な世話だ。

「たしかにタロさんがかみさまで守り人様だから、みんなそうしているのかも知れませんが。でもそれが何だって言うんです。それでも良いじゃないですか。……私、母や父や妹の事、やっぱり大事なんです。そんなに好きじゃないのかも知れないけれど、でも憎んだりしたくないんです」

静かに語るあたたかな横顔を見つめる。その声音は落ち着いていて心地良く、すんなりと胸の中へ染み込んでいく。

「私は父の連れ子で母とは血が繋がってなくて、それで寂しい思いをたくさんしたのは本当です。母が私より麗奈を可愛がるのも多分本場で、私がそれで家族になじめなかったのも嘘じゃありません。だけど……それだけじゃないんです」

小さい頃、運動会時には家族みんなで自分の応援をしてくれた。その時食べたおにぎりはとても美味しかった。数える程しかなかったけれど、父と二人で電車に乗って映画を観に行った事もあった。母親が違つと知らされて少し荒れた妹は、そっけなかったけれど、それでもお姉ちゃんはお姉ちゃんだよね、と一言呟いた。

「辛い思い出ばかりじゃないんです。色々思い出すと、ほんと……」

ちゃんとあるんですよ。楽しかった思い出が。悲しい事とか辛い事が続くと、ずっとずっと自分は不幸だったって思ってしまうけど、忘れてるだけなんです。ちゃんと誰かが、自分に優しくしてくれてた。それは家族だったり友達だったり……。そういうの、忘れちゃいけないって思っんです」

ユイネは顔を僅かに傾けて俺を見上げた。

「タロさんは一人じゃないですよ。ヨーコさんに万が一振られちゃったとしても、慰めてくれる人達がちゃんといます。支えてくれる人は、なにも恋人や特別なたった一人だけじゃありません。大丈夫です」

そうしてほによつと笑う。

ユイネ。だからこそお前の魂はあたたかく美しい。闇を知り光を生み出す、しなやかな強さを持つ。

「……お前。俺には堂々と偉そうにものを言うじゃないか」

「はっ。す、すみません。そんなつもりじゃっ」

「前々から反抗ばかりするし俺の言う事はちつとも聞かんしな。俺は神だぞ。この俺に何度も説教するような無礼者はお前くらいだ。

お前は俺の下僕だという自覚が足りん」

「ええっ！ 何ですかそれっ」

「阿呆。だから大声を出すな」

「……す、すみません」

じつと睨み合い、お互いに笑った。

「明日、帰るんですよ」

「ああ。もう寝ろ」

「はい……おやすみなさい」

この寝台が狭いと感じる事はいまだかつてなかった。それはそう
だ。この世界で、神と呼ばれる者が休む神聖なるこの寝台に、どう
して何人も横になる事があるというのだ。苦笑がもれる。

唯^{ゆい}音^ね……。

「ユイネ様。本日執り行われます『豊饒の儀』は民に開かれた神事となっております。ご見学なされてはいかがでしょう？」

おそらく来賓の間であろう場所で、私はふーちゃんとお絵かきをして遊んでいた。もっぱらふーちゃんがクレヨンに似た筆記具で、大きな用紙に思う存分、ぐりぐり模様を書きなぐっている。勢い余ってぴかぴかに磨かれたテーブルの上にはみ出してしまう事、数回一緒にについていくれる女官さんは笑って構いませんよ、と言ってくれた。私はふーちゃんから出されるお題に従ってぞうさんやねこさんを描いたりしている。

「へえ。そうなんですか」

「ええ。人の王や王族の皆さまも参列なさいますし、その時は神殿につとめておりますわたくし共も全員参列致します」

年若い女官さんはにこりと上品な笑みを浮かべて説明をしてくれた。

「国土の平安と繁栄、豊かなる大地を祝う儀式で、民は守り人様に日頃の感謝と先々の平和をお祈り申しあげます。雅楽の奉納や舞もあつて、とても華やかな神事なのですよ」

*

その儀式はとても盛大で厳かで、神秘的なものだった。

神殿の北の端にある真っ白の大きな舞台に、神官さんや女官さん達が正装をしてずらりと整列している。立派な来賓席にはこの土地を収めている王様らしきおじさまとその関係者の人達が座っていたらしき、というのは遠目から見てもその身なりが豪華であるのが分かったからだ。私は舞台の上ではなく、岸辺の人ごみの中からそれを見つめていた。この儀式を見に集まって来た大勢の人々はガルクループに生を受けて生活している、いわゆる庶民の方々。みんな着物に似たつくりの服を着ている。神殿でみかけたようなものではなく実用的な生地ですつらえてあるそれに、私も袖を通してある。老若男女の人々が目をきらきらと輝かせて舞台を見つめていた。

「ゆいね。みえないっ。だっこ」

目立つといけないからと同じような服に着替えたふーちゃんを抱き上げると、隣で立っていたおじさんが気付いて声をかけてくれた。

「こっちの方ならまだ前が見やすいよ。ほら」

「ありがとうございます」

「珍しいね。黒の髪だなんて」

「まあ！ 本当っ。『漆黑』の守り人様と同じなのね」

「うわあすごいなあ」

周りの人達がふーちゃんの髪の色を見て、興奮した面持ちで盛り上がる。なるほど。見渡してみても、ふーちゃんやタロさんのような黒髪の人はずいない。わっとおおごとになりそうになった時、

「あ！ 始まったっ！」

「おおん。」

大きな鐘の音が辺り一帯に鳴り響いた。ぴりりと空気が震えて、人々がじつと固唾を飲む。

「ごおん。ごおん。」

二回続けて鐘の音が続き、それから弦楽器のような美しい音色がするりと大地を駆け抜けていった。

舞台の端に弦や打楽器、吹奏の楽器を操る人々が並ぶ。その背後から一人の女性が、ゆつくりと舞台の中央に歩み出ていく。それと同時に澄み切った歌声が全てを包み込んだ。その声は清らかで伸びやかで、はじめは楽器の奏でる音なのだと勘違いした程に美しかった。神に奉納する為に紡ぎだされる音楽。それがこんなに綺麗だなんて知らなかった。

「うわぁ……」

「ゆいねすごいねっ。とってもきれいだねっ」

ふーちゃんがその音楽の素晴らしさに興奮して大きな声を上げて、私は慌てて、しいつ、とポーズをとる。すると今度はひそひそ話の音量で、ふーちゃんが言った。

「あたちあれ好き。あれなあに」

「あれは歌。音楽だよ。綺麗だね」

「何。君達初めて？」

隣に立つおじさんが私達の会話を聞いて同じ音量で話しかけてきた。

「あ。はい。そうなんです」

「すごいだろう？ 豊饒の儀はずっと延期になってたんだが、無事

に出来てよかった」

ぎくり。

それはタロさんがずっと私の世界にいたせいだからで、今回急に神事をどつと終わらせるような強硬スケジュールになってしまったのも、タロさんがまたガルグループを留守にするからで。

こんな立派な儀式だって準備するのも大変なはず……。

「あ、あの……この土地にいる『漆黒』の守り人様ってどんな方なんでしょう」

私は隣にいる優しそうなおじさんにタロさんの好感度調査を行う事に決めた。

「え？ 知らないの？」

「あつ、あの、最近引越して来たばかりで」

「へえ。それじゃずいぶん山奥かどつかで暮らしてたんだね。この地におられる『漆黒』の守り人様はね、いつも神殿を留守にして帰って来たらほとんど寝てて、それはそれはぐうたらな神様だよ」

すごくショック……。もうそのまんまじゃないですか。どうすんですかこれ……。

「ひ、ひどいかみさまですね」

「ああ。でも守り人様は守り人様だよ。それ以外の何者でもないし、『漆黒』の守り人様は昔頃からぐうたら神様だって有名だ。昔話だつてあるよ。知らないのは君くらいじゃないかなあ。四人の守り人様は私達の生活には欠かせない神様だよ。これっくらいの愛嬌があった方がかわいいじゃないか」

そうか。タロさんのぐうたらぶりは、今に始まった事ではなかったのだ。それは多分、失恋をしてしまった何百年も前から。だからこの土地に住む人達もそりゃあ寛容になるわけだ……。

このガルクループには、私のいる世界ではもうとつくに忘れ去られてしまった純粋な何かが息づいている。

「ほら。守り人様のお出ましだ」

舞台に視線を戻すと、ちょうど歌が終わって雅楽の伴奏も静かに波が引いていくように、終わりを迎えていた。

整然と並ぶ神官さんと女官さん達の中央が割れ、正装をしたテル君があらわれる。すると舞台にいる全員が足を折ってひれ伏していく。一拍遅れて、漆黒の衣装をまとったタロさんの大きな身体があらわれた。いつものように髪を結わえず、肩にかかる黒髪。その長身からはこの場にいる全ての人達を無言にさせるような、ものすごく強いオーラが放たれている。私は緊張のあまり息を止めてその姿に見入っていた。

「不死なる大地の豊饒を。絢爛の未来への光芒を。我らの命と生死を。全ての帰結を司る力。偉大なるガリオレス一族へ、我らの清廉な忠誠と祈りを献上致します」

凜々しい壮年の声音。王様が堂々と宣誓をして『漆黒』の守り人様の前へ出て跪いた。ゆっくりと厳かな動作でタロさんの右腕が動き、頭を垂れた王様の上へとかざされる。

静寂の空間をさいて、雄々しく力強い声が大気を震わせ、世界に響いた。

「特別な力を与えられし一族の末裔、『漆黒』がこの地を導きゆかん。全ては世界の均衡と秩序の為に。善なる民らとの誓約を果たさ

ん」

分かっていた。本当は。

タロさんの孤独は、私が考えるものなんかより遥かに重く、計り知れないものなんだ。だってそれは何百年も生き続けてみないときと分らない。その孤独は、とても苦しくて悲しい。ただと言わずにはいられなかった。

「この地より、災いよ去れ。嘆くなかれ。次なる生を与えん」

一人だって、思っで欲しくなかった。

悲しい思いをして欲しくなかった。

自分は化け物なんだって言いながら、涙を流して欲しくなかった。とても傷ついて辛くて怖くて、真っ暗で……。

そんな思いを、もうタロさんにはして欲しくなかった。

もうタロさんに傷ついて欲しくなかったから、私は言ったんだ。

「タロさんは一人じゃないですよ」って……。

ああどうしよう。

胸が苦しくて、目の前がぼやぼやとして良く見えない。

「ゆいね。ないてる……。どうしたの？　かなしいの？」

「う、ううん。大丈夫。タ、タロさんがごく立派だから……。感動しちゃったんだ。大丈夫だよ」

女官さん達が私も舞台の上に参列するようにと最後まで誘ってくれたけれど、それを頑なに拒んでしまった。だって本来、私はそこにいて良い人間じゃないから。

私にはこの場所が、やっぱり合ってる。

どつと歓声が上がリ、煌びやかで華やかな音楽が鳴り出すと舞台では舞が始まった。今まで厳かに見守っていた人達も振る舞われたお酒を手しに、わいわいと賑やかになる。

「う……」

ぐずぐずと私が泣いていたなら、ふーちゃんが頭をなでてくれた。だから余計に涙が止まらなくなった。

私の魂が綺麗だつて褒められるのはとても嬉しい事だ。なのに、素直に喜べなかった。私はひねくれ者だ……。

美しい魂だと言われるたびにヨーコさんの事が頭をよぎつて、どうしても違う、と思ってしまう。違う。

本当に美しい魂は、綺麗な魂は、ヨーコさんが持つてる。私のはちよつとそれに似てるだけ。

ヨーコさんがタロさんの本当の半身で、見た目だつてその魂に見合つた美しさを持つてる。

きつとあの舞台の上に立てるのは、ヨーコさんなんだ。私じゃない。分かつてた事だ。最初から……。

「あ、ありがとう。ふーちゃん。もう大丈夫」

私は涙目のまま、心配そうに顔を覗き込むふーちゃんに笑つてみせた。

「ほんと？」

「うん。大丈夫」

もうタロさんには傷ついて欲しくない。

好きな人には、幸せになってもらいたい。

少しでも何かで役に立てれば、それで良い。
その為だったらきつと頑張れる。

神殿に戻りスウェットの上下に着替え、ふーちゃんに元の黒のドレスを着せる。ふーちゃんはやっぱりテル君とは違うみたいで、念じて服装を変えたり出来ないようだった。本当に人間そっくりで、人間そのもの。不思議だけれど、あたたかい。

「ぞーうさんぞーうさん。おーはなが長いのねえ」

ふーちゃんが覚えたての歌をうたい始めたので、私は微笑んで続きをうたった。

「そーよ。かあさんもなーがいのよお」

ふーちゃんは「歌」をとても気に入ったようだ。嬉しそうに笑っている。

「ユイネ！ お待たせっ」

振り返るとパーカーにジーンズ姿のテル君が扉を開いてこっちに歩いてくるのが見えた。にこやかな笑顔につやつやの茶色の髪。可愛らしくて天使みたいな男の子。ティエルファイス。テル君。タロさんの一部。

人ではないけれど、テル君もやっぱりとっても優しくて、あたたかい。

「ね。儀式見ててくれた？」

「うん。すごく格好良かったよ」

「でしょっ」

ん？ あれ……。

「だ、誰ッ」

思わず叫んでしまった。テル君だと思っていた男の子は、テル君にすごく良く似ているけれど違う人物だった。だって男の子でも少年でもなく、すらりと背の高い青年なのだ。これは……一体何ごと

「いやだなあ。僕だよイネ」

モデルのようにすらりとした手足。切れ長の黒の瞳。とても上機嫌なその人はずんずん近づいてきて、突然がばりと抱きついてきた。私より少し背が高く、華奢に見える両腕は意外に力強くてますます焦って身体が硬直してしまふ。うわ、良い匂いがする。うわあ。うわ。ど、どうしよう。

私の頭は完全に混乱して何が何やら分からず、かあつと顔から火が噴き出そうな程恥ずかしくなって、気が遠くなりかけた。

「あれ。大丈夫？」

くすりと笑った振動が伝わる。

「あ、あの、あのっ」

「僕はテルだよ」

「……ほ、ほんとに？ でもだって、そんな」
「良く見て」

こわごわ見上げると、恐ろしく整った色白の美しい顔。うつすら桃色の頬につやつやの唇。涼やかな目元は穏やかに微笑んでいる。

「テ、テル……く、んなの」

「うん。そう」

「そんなんっ」

「ふふっ。あー嬉しいっ！ 僕ずっとユイネを見下ろして抱き締め
たかったんだあ」

あ……もうだめ。気絶する。

「阿呆。離れろ」

ずっと視界が影になったかと思ったらタロさんが仁王立ちしていた。Ｔシャツにスウェット姿で、綺麗な黒の髪を一つに束ねている美しい大男。ぐいとテル君の頭を押しやり私とふーちゃんをちらりと一瞥する。

「あ、タロさん。お疲れ様です。あの、テ、テル君が大きくなっちゃってます」

不機嫌そうに見えるのは気のせいだろうか。タロさんはテル君を睨みつけて少し口を尖らせている。

「これがこいつの本来の姿だ」

「えっ」

「そうだよ。タロちゃんの力が足りなくて、子供の姿しか保てなかったんだもん。はあっ。何百年振りだろうっ！」

テル君が嬉しそうに両手を天に向けて大きく伸びをした。
そうだったの……。な、なんだか複雑な気分です。

「ユイネ」

「は……いつ!？」

急に手首を引つ張られてバランスが崩れ、どすつ、と厚い胸板に顔面が激突した。

「ったあ。は、鼻がつぶれちゃいます」

「ふん。どうせそんなに高い鼻じゃないだろう。問題はない」

……はい。そうですね。

悔しくて何か反論したかったけれど、とても平静ではいられなくて何も思いつかなかった。タロさんの腕の中だと思うと心臓が痛いくらい跳ねまわって、息が苦しい。気を送る為なんだからと何度も自分に言い聞かせるのに、どんどん顔や耳が熱くなっていく。頬や肩や背中に、タロさんの体温を感じる。恥ずかしくてぎゅっと目をつぶった。

タロさんが私の頭の上でふうと大きく息をついた。ずっと忙しかったから疲れているのだろうか……。

私の背中に回っているタロさんの腕に力がこもった。身体がより密着しそうになって慌てると、余計に力が加わって完全に押さえ込まれてしまった。

「あ、あの……」

「まだだ」

「……はい」

いつからだろうか。

以前のような、ぎゅうぎゅうにされてつま先が地面から離れてしまふような激しい抱擁ではなくなった。だから余計に、勘違いして

しまう。こんな風にされる事に慣れていないから……。

恥ずかしくてどきどきして死んでしまいそうなのに、そのあたにかさが心地良くて胸が苦しくなる。こうしているとすごく安心出来るだなんて、絶対に言えない。

まるで守られているみたいに思えるなんて、そんな風に思う自分
があまりにも滑稽で……。

本当にそうなら良かった……。

だめだ。そんな事考えちゃ。気を、気を送る為だけの事なんだから。

出来れば最後まで気付きたくなかった。自分の気持ちなんて。

「ユイネ」

「は、はい」

「何故、舞台の上になかった？」

「あ……」

『漆黑』の守り人様。人外様。美しいかみさま。……タロさん。

「な、なんか舞台の上なんて子供の頃の学芸会以来だし、緊張して何かしちやったら大変だし……」

強くて弱くて傲慢で、なのに寂しくて優しいタロさん。笑う時は、整った顔をくしゃっとさせて可愛い笑顔を作る。魂の伴侶に会う為に、力を振り絞って異世界までやって来た。本当だったら私なんかには出会えない人だった。本当だったらあの時に、ヨコさんと再会出来ていたはずなのに……。

私には届かない。

「お前は俺の傍にいろ」

どうして……そんな事を言うの。胸が痛くて、息が出来ない。

「……気が、必要だからですよね」

「そうだ。あの世界を守りたいんなら、俺の言う事をきけ」

何でも良い。傍にいたい。タロさんの傍に。

だけどそれは違うでしょう。ずっとこのままで良いわけないんだ。それは私だけの、我が儘だ。

「下僕ですもんね」

「そうだ。やっと自覚したようだな」

うふつと笑ったら目頭がかつと熱くなった。どうしよう涙が出てしまいそうだ。落ち着け……。私は震えそうになる息を押さえて、何とか声を絞り出した。

「でも、もう下僕も卒業しますから」

「なに？」

「ヨーコさんがいてくれたら、私が氣を送らなくても大丈夫でしょう？ お役御免です」

ふつとタロさんの腕から力が抜けた。

その時私は涙をこらえるので必死で、ずっと俯いて下を向いたままだった。だからタロさんがどんな顔をしているかなんて、これっぽっちも考えなかった。

「ね。もう良い？」

見るとテル君がじたばたと暴れているふーちゃんをかかえ上げて、

困った顔をしていた。

「ゆいねーっ！ ゆいねはあたちのおっ」

ぱつとふーちゃんが私に抱きついて、胸のあたりにぐりぐりと頭を押し付けて全身で愛情の意をあらわしてくれる。私は鼻をすすって笑った。

「さつさと帰るぞ」

「えっ。セウンリヒさんや皆さんに挨拶……」

「あいつらが来ると五月蠅いからな」

ぬつとタロさんの大きい手の平が視界いっぱい広がる。

「でもっ……」

またしても、私は最後まで言葉を言わせてもらえなかった。

もうきつと会えないだろうから、きちんと挨拶をしたかったなあ……。

*

どごおん、と凄まじい爆音(?)とともに目が覚めた。見慣れた天井。見慣れた蛍光灯。起き上がって見渡すと、そこは私の部屋。何だかとても不思議な気分だ。あつという間に戻って来てしまった。全部が夢だったような気もするし、それでも記憶ははっきりと残っていて、少しふわつとする。いつもと変わらない私の部屋。なのに、どこことなくよそよそしく感じる。時計を見ると午後十一時。

私はリビングのソファの上にいた。

「ゆいねっ」

「はあー。帰ってきたね」

ふーちゃんが膝に乗り上がってきて、抱き上げながら横を見るとそこにテル君とタロさんがいた。

「だ、大丈夫ですか？」

目覚めに聞いた爆音はどうやらタロさんが起こしたものらしかった。壁際にあるリビングボードの手前で脛を抱えてうずくまっている。テル君が呆れたような口調で言った。

「思いつきりぶつかったんだよ」

「くそっ！ 痛いぞ！ どうしてこんな所にこんなものがあるんだっ！！」

それは八つ当たりです……。思わず笑ってしまった。するとタロさんが凄みを利かせて睨んでくる。咄嗟に笑いをこらえて質問した。

「タロさんこそ、どうしてそんな所にぶつけたんですか」

「……五月蠅い」

異世界に行っていた間は三日間。それは私が仕事を休んだ日数と同じだった。現実の自分の世界に戻ってきた途端に私の頭は通常モードで色々な事を思案し始める。旅行から帰った時もそうだけれど、一番にするのは洗濯だったりする。

洗濯機をナイトモードで回しつつ携帯をチェックすると、やっぱり笹本さんからのメールが何通か届いていた。返信しようとした時、

画面の留守電マークに気付いた。

「何だろ……」

つい呟いてしまった。最近では直接電話がかかってくる事ってあまりない。余程緊急な用件だろうか……。不安になりつつ問い合わせをかけて、伝言を聞いた。

「ねえユイネもお茶飲むでしょ？　今いれたからこっちおいでよ」

私は洗面所で立ち尽くしていた。携帯を片手に持ったまま、放心していた。

「ユイネ？」

ふわりと腕に柔らかな感触。テル君の白魚のような指先。視線を向ける。男の子の姿に戻ってしまったテル君の大きな黒の瞳が、私を見上げている。

「どうしたの？」

「あ……」

かすかすの私の声。別人みたいな声。言わなきゃ。言わなきゃ……。

「あ、ひ」

「あひ？　あひる？」

一度深呼吸をして、覚悟を決めた。じっとテル君の瞳を見つめ返す。

「ヒロさんから留守電が入ってたね、今それを聞いたの」

「ヒロさん？」

「あ、うん。ヨーコさんの事を知ってる人。その人から伝言があつてね。ヨーコさんと連絡が取れたって。今ヨーコさんはこっちに住んでるんだって……」

テル君の瞳はじいっと私を見つめていて、その表情はぼうつとしていた。

「それで、今度の週末には会える事になったって」

「……ヨーコに？」

「うん。テル君、ヨーコさんが見つかったんだよ」

「ヨーコが……」

「あ！ ヒロさんに電話しなきゃっ。あ、でももう夜遅いから、明日の方が良いね。タ、タロさんにも報告しなきゃね」

「僕が、言ってくる」

「あ……うん」

ふらりとテル君がリビングに戻っていった。驚かせてしまっただろうか。ずっと会いたかった人と急に会える事になったから、びっくりしちゃったんだろうか……。

身体が重くて固くて、ここから動けそうもなかった。ごとごと動く洗濯機を呆然と見つめて、それからぴしゃりと自分の頬を叩いた。

私、今どんな顔していた？

ちゃんと笑えていた？

あんなにあんなに、会いたかったヨーコさんに会える。なのにとどろいて落ち込んでるの……。

ちゃんと喜べない自分がひどく小さく、卑怯に思えた。これじゃ

せっかく会つてくれるヨーコさんにも、ヨーコさんとの再会を待ちわびていたタロさんとテル君にも、失礼だ。

「だ、だめ。しっかりしなくちゃ」

私が関わる事の出来る、最後の事なのだから。ちゃんと役に立ちたい。

「だ、だいじょうぶ。大丈夫。きつとうまくいく」

大丈夫……。

無意識に携帯をぎゅっと両手で握り締めていた。

060（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

異世界より戻ってきました。次話より、第四部突入致します。
ついに長い事ひっぱりまくったヨークさんが登場するエピソードで
ございます。

ではまたお会いできますように。

061 (想うという事)

「……タロちゃん。早くしないと」

「う、五月蠅いつ。分かっている！ 少し黙れっ」

「ゆいねーっ」

もう……。

僕はふーちゃんを抱えてため息を落とし、ソファから一步後ずさった。

さつきからずうつと同じ体勢で、僕の主は微動だにしない。ソファに横たえたユイネに覆いかぶさる大男。緊張のあまりこれ以上ない程に凶悪な顔でユイネを睨み、耳まで真っ赤にしてがちがちに固まっている。

ユイネはとっても安らかな表情で深い眠りにについている。柔らかな焦茶の髪はいつものように横で束ねられていて、その穏やかな寝顔を眺めていると何だかこっちまで眠たくなってしまいそうになる。ユイネの不思議な魅力はこういうところにもあるんだ。ユイネの表情や仕草や雰囲気、優しくて柔らかくて、相手に緊張感を抱かせない。僕はユイネが一生懸命食事をしている姿がすごく好きだし、ほによつと笑った時の顔も好きだ。こうやって見ていただけで安心出来る寝顔も好きだけど、今は早いとこ覚醒させなきゃ。普通に眠っているのはわけが違う。この深い眠りから呼び戻す為には守り人の力が必要なんだ。直接、その力をユイネの内側に注ぎ込む。

世界を渡る為に眠らせたお姫様を目覚めさせなきゃいけない。それは王子様の役目。こいつは神だけど。

ごめんね。ユイネ。君のファーストキスつてば、実はもうこいつが奪っていたりする。

「タロちゃんが出来ないなら僕がしても良いんだけど」

ものすごい眼力で睨まれて、肩をすくめる。タロちゃんのどきどきが僕にまで伝わってくるので、結構苦しい。

「これは儀式だ……そうだ、儀式だ……。今までだって何度となくしてきた事だ……落ち着け……心を無にしろ……」

ぶつぶつと唱えて自己暗示を繰り返す。意を決して、右腕がおそるおそる動いてユイネの頬にあてがわれる。ゆっくりと指先がその肌の感触を確かめるようになぞっていく。さらりとタロちゃんの長い黒髪がユイネの横顔を覆い隠す。

「ユイネ……」

どく、と鼓動を打ち、胸が締め付けられた。

「ゆいねー!」

「ちよつとちよつと! タロちゃん早くしてっ」

じたじたと暴れるふーちゃんを何とか押さえ込むのだけれど、渾身の力を込めて僕の腕をぎゅうぎゅうつねるので大変だったりする。はあ。やっと元の姿に戻れたと思ったのにそれはほんの一瞬の事だった。

でも子供の姿のままでも良いやと思ったりもする。だってユイネはこっちの僕の方が、きつと好きなんだ。あの慌てっぷりは面白かったけど、子供の僕の方が遠慮なくユイネに抱きつけるしね。

ゆらりと大きな身体が起き上がり、名残惜しそうにユイネから離れていく。その時、僕はタロちゃんを見て絶句してしまった。まさか……。まあ仕方のない事かも知れないけど、こんな気持ちは本当に数百年振りの事だし、神と言われる存在だけれど、タロちゃんだ

って健康な男性である事には変わりはないわけだし。この方が真つ当な反応なのかもしれないけどさ。

だけどやっぱりその姿はユイネに見られちゃマズイよ……。

「タロちゃん……それはちょっと、まずくない？」

僕はいくらか遠慮がちに、タロちゃんの下半身を指差した。

「ぐあっ！！」

咄嗟に前かがみに長身を折り曲げた時、ユイネの瞼がぴくりと動いた。

「わっ。ユイネが起きるよっ」

「くそっ！」

タロちゃんが慌ててユイネに背を向けようとした時、ものすごい勢いでリビングボードに激突した。声にならない声を上げてその場にうずくまる。

「ゆいねっ」

「はあー。帰ってきたね」

うん。まあ結果的に良かったかも。

「だ、大丈夫ですか？」

ユイネの驚いた声。僕は振り返って説明をした。

「思いつきりぶつかったんだよ」

「くそっ！ 痛いぞ！ どうしてこんな所にこんなものがあるんだっ！！」

くすくすとユイネが楽しそうに笑って、タロちゃんが恥ずかしいやら痛いやらでユイネをぎろりと睨みつける。すると口元に手を当てて明らかに笑いをかみ殺して、呟いた。

「タロさんこそ、どうしてそんな所にぶつけたんですか」

「……五月蠅い」

タロちゃんの大きな背を見下ろしながら苦笑する。ああ……何て心地良いんだろうね。そう思うだろう？

僕らにとったらユイネという時間が、全ての事が、とっても愛おしい。またこうしてユイネといられるなんて夢みたいだ。セウンリヒに感謝しなきゃね。

でもさ、だけどさ、僕らはいつまでユイネと一緒にいて良いのかな。

ユイネはお人好しでうんと優しいから、ユイネはきつと嫌だなんて言わないから……。

ねえ僕は、ずっと一緒にいたいんだ。

ユイネにタロちゃんの半身になって欲しいんだ。ずっとずっと、一緒にいたいんだ。ねえ駄目かな。

何とか落ち着きを取り戻したタロちゃんがソファにふんぞり返って、ふーちゃんは僕がお茶を入れる動作をじいつと観察して。僕らってみんな、ユイネが好きなんだ。ユイネのいる世界が全てなんだって、また僕はあらためて思ったりして。

「ユイネを呼んで一緒にお茶しよう」
「するーっ」

でももう、間違えたくないんだ。タロちゃんの思いは僕が一番良く知っている。だから僕は何も言えない。僕らとユイネの間に横たわる深い溝は、どうしたって一足飛びに越えられない。一度失敗しているから、その重さは嫌でも胸に押し掛かる。もう愛しい人を傷つけたくないんだ。

このままで良いわけない事もちゃんと分かってる。だけど、あと少し。あと少しだけなら一緒にいても良いよね……？

「ねえユイネもお茶飲むでしょ？　今いれたからこっちおいでよ」

洗面所をのぞくと洗濯機の前に立つユイネが見えた。どこか呆然としていて少し顔色も悪い気がする。

「ユイネ？」

僕はそっとユイネの腕に触れた。あたたかな感触。僕の大好きなユイネ。タロちゃんの心を生き返らせた人。タロちゃんに大事な何かを教えてくれた人。だから思うんだ。だから願うんだ。まず一番に、

「どうしたの？」

君の幸せを。

061（想うという事）（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

実を言いますとこの物語の最終部だったりします。一番長くなる部分になると思います。

いつも読んで下さる方々、ありがとうございます。励みになります。

幾度となく、その誘惑に負けそうになる。

しかしそれがいかに安易で安直で、唾棄すべき下劣な行為であるかという事を知っている。数ある訓戒には全て、重く深い意味があるのだ。それは我々の自戒でもある。守り人の長い歴史の中で繰り返された悲劇に基づくその戒めを、あえて破ろうとする愚かな者はいない。

ヨーコと会う日は二日後になった、とユイネは言った。

「はあつ。ど、どうしよう。もう緊張しちゃって」

いくら頬を上気させてユイネが嬉しそうに微笑む。俺はその笑顔に見惚れながら、ゆっくりと椅子に深くもたれた。あまりの衝撃に、身体がぐらぐらとして支えきれない。

たとえば人を、自らの思い通りに動かす事さえ可能なのだ。相手の心を支配すれば良い。この異能の力を持つてすれば、欲しいものなど簡単に手に入れる事が出来る。しかしその傲慢な私欲に屈した歴史が語っているのは、目を覆いたくなるような凄惨な結果だけだった。

圧倒的な支配力を持つ脅威の力を一番に恐れているのは、他でもない。守り人自身だ。

何故、ささやかな願いさえ叶わないのか。俺は世界を統べる神のはずだ。否、所詮は化け物に過ぎないという事か。

ヨーコが見つかった時点で、全てが終わる。

「それで私、少し考えたんです。とりあえず、最初に私がヨーコさんに会って事情を説明するっていうのでどうでしょう?」

勢い込む相手をぼんやりと眺める。穏やかな線を描く唇に視線がいきそうになって目を逸らした。その桃色の唇が柔らかかった感触を思い出し、慌てて顔を真横に向ける。

「……そんなもの、何とでも出来る。お前の手を借りずともな」
「えっ。……あ、そ、そうですか……」

今更ヨーコと会ったところで、何も変わらない。ヨーコが俺の事を覚えていてもいなくても、結果は同じだ。

ヨーコを半身にはしない。俺は俺の、いるべき世界へ帰るだけだ。
「あ、あの……楽しみですね！ ヨーコさんすごい美人さんになつてるかな……。ヒロさんの話だと今独身で、付き合ってる人もいないらしいんです。あ、それに私の事も覚えていてくれてるみたいだから、きつとタロさんの事も」

楽しそうな声に俺は思わずユイネを睨みつけた。びくつと両肩を持ち上げ目をまん丸にして、小動物のような動作で怯える。それからおそるおそる、といった風で呟いた。

「タ、タロさん？ ……なんか怒ってます？」
「怒つとらんわ！」

大声を上げてしまつてから心の中で舌打ちをした。見るまでもなく、テルが視線で俺を責める。

「……少し疲れているだけだ」
「あ、そうですよね……。扉を閉じたり開いたりするのって大変なんですよね。す、すみません。私ばかり浮かれちゃって」

ユイネは俺の言葉に眉を下げてしゅんとして、それから思いついたように立ち上がった。

「分かりましたっ。タロさん！ 氣をつ。氣を受け取ってください」

……まずい。

「ユイネありがとっ。じゃあ僕がもらおうかな」

テルがささずそう告げるが、ユイネはふるふると首を振って続けた。

「タロさんすごく疲れてるみたいだから、直接氣を届けた方が良いよね」

ユイネのその気持ちは舞い上がる程、嬉しい。だが今はそれが余計に俺をジレンマに突き落とす。

そうだ。俺はお前の氣に触れて、お前の氣で全身を満たされたい。きつと脳髓を貫くような幸福感に包まれるだろっ。ユイネの柔らかな身体を抱き締めたい。花のような香りを胸一杯に吸い込みたい。その魂の鼓動を、自分の肌でじかに感じられたら……。何という至福の時だろうか。心臓が高鳴る。

まずい。まずいぞ……。

今ユイネに触れたら、俺は発狂する。

「い、いやっ！ 俺はもう寝る！」

慌てて席を立ち、振り返らずに寝室へと向かった。

ヨーコと再会した時点で、全てが終わる。俺がここにいる理由がなくなるからだ。俺がユイネの傍にいる為の、その根拠が足元から崩壊する。そうだろう、ユイネ。

お前はやつと理不尽な束縛から解放されるわけだ。

だからそんなに喜んでるんだろう？

寢室の暗い天井を見上げ、深いため息を落とした。

*

俺の煩悶とは裏腹にユイネは今までと何ら変わりなく、むしろいつもより僅かに少しだけ、機嫌が良さそうだった。

翌朝から普段通りの時間に起きて仕事へ向かい、夜には帰宅して夕餉を囲む。今朝方『負』の子供と一緒に仕事場へ行くと言って駄々をこねていたが、ユイネに諭されるとふてくされながらも頷いた。ユイネのいない日中は意外にも大人しくしていた。

テルの作った料理を前に、ユイネはとても真摯に食事を進めていく。一生懸命に口を動かし、全身全霊で味わう姿は相変わらずだ。こいつが食べているものは何でも、ものすごく旨そうに見えるから不思議である。テルがそんなユイネを見て目を細めて笑った。

「ユイネ、美味しい？」

ユイネは気の抜けた笑顔で答える。

「うん。すごく美味しい。いつもありがとう。テル君」

「ふふ。僕、ユイネが食べてくれるのとっても嬉しいんだ。だって

こいつはさ、ばくばく食べるだけであんまり味わってないんだよ。
絶対」

こいつ、と言ってテルがちらりと俺を見た。

「そんな事はない」

「ほんとかなあ。感想とか聞いた事ないけど？」

「タロさんて質より量って感じですよんね」

「おい。お前らなあ……」

俺がユイネとテルに向けて説教しようとした時、視界の隅に小さな手がよぎったのが見えた。あろう事か、『負』の子供が俺の皿からクリームコロッケを手づかみで取り上げてもぐもぐと頬張っている。

「貴様ッ！」

「ふーちゃん、手づかみは駄目だよ。熱くない？ 大丈夫？」

「うん！ おいちいねっ。ゆいね」

「それは俺のクリームコロッケだぞっ。『負』の分際で生意気な！
今すぐに消してやる」

「……タロさん。大人げないです。私のあげますから」

くそっ。ひどく負けた気がするのは何故だ。ユイネが柔らかに笑いながら俺の皿にそっと目当ての品を乗せた。

「む……」

「テル君のお手製ですよんね。ほんとに美味しいから、食べれないのは残念ですよんね」

おいユイネ。さりげなく俺のフォローをするな。余計に恥ずかし

いぞ。

「あ、そうか……。テル君に料理習っておけば良かったな……」

ぽつりと落とした呟きが胸に突き刺さった。俺とテルはぐつと声を飲む。

——ユイネの為ならいつだって作ってあげるのに。本当だよ。ユイネ。ねえユイネ。だから僕らを選んでよ。ヨーコと会つの、やめると言つて。ずっと僕らと一緒にいたいって、言つて——

「ヨーコさんにもうんと美味しいもの、作ってあげてね」

心の声は届かない。ユイネの優しい笑顔を見つめてテルは微笑んだ。

「うん。そうだね……」

あと僅かしか残されていないユイネとの貴重な時を、『負』の子供はことごとく邪魔してくる。朝も夜もユイネにべったりと張り付いて、今も風呂上がりのユイネを捕まえてソファで仲良くテレビを見ている。あまつさえユイネの膝の上に居座り、こそこそと何かを囁き合っている。俺はそれを背後のテーブル席から、『負』など消えてしまえと念じながら睨みつけた。

「ふーちゃん。ほんと？　ほんとに？」

「うんっ。ほんと！　ほんとだよ！」

「おい！　何が本当なんだ」

俺の声に『負』の子供はむつとした顔をして、真っ赤な舌を突き

出した。

「たろにはおしえなーい」

「なにいつ！ ユイネ！」

「ふふっ。タロさんには内緒です」

く……許さんッ！！

もう我慢ならん。ユイネは俺のものだ。今は、今だけはそれで良い。とにかく思い切り抱き締めてやろうと思ひ席を立つ。するとユイネが不安げな表情で俺を見上げた。

「あの……タロさん……ずっと怒ってます？ どうしたんですか？」

悲しい声にぎくりとする。じつと俺を見つめるユイネの瞳が寂しそうに見えた。それでやっと分かった。俺の態度がユイネを悲しませている事に。

「私、何かしたんなら謝ります。だから、あの……」

「……阿呆。怒つとらん」

俺は息を吐いて笑った。腕を伸ばし、ユイネの小さな頭に触れる。お前を悲しませたくない。それは何を置いてもまず一番に、優先すべき事だ。

「まあたしかにその『負』が邪魔だとは思うがな。俺は神だから心が広い。感謝しろ」

こわばっていたユイネの表情が、ふにやりと緩くなる。触れている部分から優しい鼓動が伝わる。柔らかな気の感触が心地良く、さ

さくれだっていた俺の心もふつくと膨らんでいく。

「あ。ヨークさんと十八年ぶりに会えるから、緊張して……?」

「……ふん。そうかも知れん」

「タロさんて意外と乙女ですもんね」

「お前は最近一言多い」

「あつ。すみません」

ほによ、と笑うユイネ。それにつられて俺もまた笑った。ああそうか……。

唯音。ゆいね

お前の為に、俺が出来る事は一体どれだけあるんだろうな。

いよいよヨーコとの再会を、ユイネとの別れを明日に控えた夜、その日に限ってユイネはいつもと同じ時間に帰宅しなかった。時刻が七時を回り八時を過ぎて九時を回った頃、俺はこらえ切れず立ち上がった。

「遅い！ 何をしているんだあいつはっ」

もう共にいられる時間は残り少ないというのに。

「うっーん。残業かも？」

テルが首をかしげて呟く。

「待つてられん。迎えに行く」

「あたちも行くっ」

「ついてくるな！ テルっ。こいつを押さえておけ！」

「ずるいーっ」

わめいている声を背中受けて、サンダルを履いて扉を開ける。途端に熱気を含んだ大気がまとわりついてきた。どうにもこの世界のこの土地の、「夏」の気候だけには馴染めない。このぬめるような重たい熱が、とてつもなく苦手だ。手早く髪をまとめ上げてエレベーターに乗り込む。もうじわりと汗をかいてきた。外の街路に降り立ち、青々とした緑の匂いといまだに熱を持ったアスファルトのむっとする匂いに眉根を寄せ目を閉じた。大きく深呼吸をしてユイネの気配を探る。心を一定に保ち鎮めるのは元々苦手な行為だというのに、不快な暑さのせいで倍に骨が折れた。

「……そこか」

案外近くに感じた愛しい気配を辿っていくと小さな公園に行き着いた。じいじい、と鬱陶しい虫の音が聞こえ、闇を照らす街灯には小さな羽虫が群がっている。遊具がぼつと置かれた人気がない公園。薄闇の中にある一つのベンチにユイネの背中を見つけた。半袖の青いシャツにジーンズという服装は、確かに今朝見たものと同じだ。その細い背中を見た瞬間に、身体が硬直した。

「す、すみませ……」

バイクの走り去る音にユイネのか細い声が重なる。細い肩は儚げに震えていた。その肩にかかる柔らかな髪も、ふるふると震えている。ユイネは俯いて両手で顔を覆い、泣いていた。

「大丈夫です。我慢しないで良いんです」

穏やかな男の声が、労わるように言った。隣に座っている男の格好にも見覚えがある。それはその男の仕事着だ。コンビニの制服というもの。夜の公園のベンチで涙を流すユイネの隣には、コイチがいた。目の前の光景の、意味が分からず混乱する。

何故、こんなところでユイネは泣いているのか。何故、その隣にあの男がいるのか。一体どうした。何があつたんだ、ユイネ。何を悲しんでいるんだ。何故泣いているんだ。家にも帰らずに。

その男の前で。

ゆつくりとコイチの腕が動いた。びくりと俺の心臓が縮まる。

やめろ。触るな。俺のユイネに……。

何か少しでもやましい動きをしたならば飛び出して行ってぶん殴ってやるうというのに、その手はあまりにも紳士的に、泣いている相手を優しく包み込むように、ゆっくりと背中をさすっていた。涙を流す幼子をあやすような、純粹な慈愛に溢れている。

強い風が吹いた。公園の木々が一斉にざわざわと騒ぎ始める。俺の心が不安定に揺らいでいる為だ。ぶるぶると心が震えている。くそ……。

「……さ、笹本さん」

「はい」

「ありがとうございます。も、大丈夫です……」

「本当ですか？」

「はい。なんだか泣いたら少し、すっきりしました。本当に、ありがとうございます。仕事中だったのにすみません」

「良いんです。少しでも唯音さんの役に立てたんなら俺は」

「え……。わっ」

「うわっ」

ざざざ、とひと際強い突風が吹きぬけ、ユイネとコーイチは咄嗟に身体を縮めた。

「すごい風ですね。台風でも来てるのかな」

「ほ、ほんとですね……」

二人が立ち上がったので俺は慌てて姿を消した。何故だか気付かれなくなかった。息を殺し、目の前を行き過ぎる二人を見守る。コーイチは恐縮するユイネを説き伏せ、家まで送ると言って二人で夜道をてくてくと歩いていった。俺は街灯の光で出来た二つの影を呆然と見つめ、その後ろを阿呆のようについていった。息をするのもやっとなで、めまいを起こしそうだ。

「笹本さん。何から何までほんとすみません。でも、ありがとうございます」

マンションの前でユイネはぺこりと頭を下げ、それからコーイチに向かって恥ずかしそうに微笑んだ。するとユイネの前に立つ優男も照れたように笑って頭をかく。俺はそれを随分遠くの路地から眺めていた。これ以上近づく事が出来ない。耐えられない。俺の心は既にがたがただ。あんなものを間近で見ようものなら意に反して、竜巻でも起こすに違いない。

「あ、あの……唯音さん……今度、またどこか行きませんか？ 映画も良いし、そのうち花火大会もあるし」

「あ。はい。是非」

「良かった。じゃあまたメールしますね」

ユイネの姿がマンションに消えても、男はしばらくじっとそこに佇んでいた。それからゆっくりと踵を返し、こちらに向かって歩き出す。俯き加減のその男の口元には、微笑が浮かんでいる。それを複雑な思いで見つめた。はっと男が顔を上げ、ばちりと俺と目が合った。

「たっ、太郎さんっ!？」

しまった。あまりにも悄然として姿を消し忘れていた。

「なっ……いつ、いつからここにっ」

「五月蠅い。お前には関係ない」

わたわたと慌てふためいているコーイチを無視してすれ違っ。

「あ、た、太郎さん！ ちょっと待って下さい」

ぴくりとこめかにみ青筋が立つ。立つたに違いない。腹が立つ。何故だ。何故お前が……。お前などの好きにさせてなるものか。こんな軟弱な男にユイネはやれん。俺が神ではなくこの世界の単なる一人の男だったなら、決して黙ってなどいない。こんな男に渡すものか。

背後を振り返り、ひよろ長い体軀をした男を睨みつける。黒ぶちの眼鏡の奥の瞳が僅かに怯えた色を見せる。

「……なんだ」

数秒の沈黙の後、覚悟を決めたようにコーイチが真っ直ぐに俺を見上げ、毅然とした声で言った。

「太郎さんはいずれアメリカへ帰るんですね。太郎さんの過ごしている場所は、ここではないんですよね」

「だったら何だ！ 何が言いたいっ！？」

俺の剣幕に一瞬怯み、しかしコーイチは負けずに声を荒げる。

「だったらこれ以上、唯音さんを巻き込まないでくださいっ！ 唯音さんにこれ以上、負担をかけないでください！」

その言葉の重みと鋭さは脅威の破壊力を持ち、俺の心を手加減なしで打ちのめした。

何も言わない俺を訝しげに見やり、コーイチは頭を下げて会釈を寄こす。

「俺の言いたい事はそれだけです。……じゃあ」

去っていく男の背は、音もなく夜に消えた。
扉を開くと、ひんやりとした空気が流れてくる。明るい照明に目がくらんだ。

「もうタロちゃんてば。ユイネと行き違いになってたよ」

「あつ。タロさんごめんなさい。ちよつと今日残業になっちゃって……タ、タロさんっ!？ どうしたんですかつ。顔、真っ青ですよ」

俺を見上げるスウェット姿のユイネ。その目元は少し赤らんでいる。それを見ながらぐつと腹に力を込めて、何とか声を絞り出した。

「ユイネ……。お前」

「は、はい」

「何か、悩んでいる事はあるか」

「え……。な、ないですよ」

「……そうか」

「タロさんどうしたんです。具合悪いんじゃない……」

「いや。腹が減っているだけだ」

そろりと伸びてきた手から逃げるようにテーブルへと向かった。

触れたら、まともでいられなくなる。

俺のどす黒い孤独が、あたたかな魂を求めて暴れている。お前が欲しいと泣き叫ぶ。

間違うな。もう二度と。

何が神だ。笑わせる。

たった一人の大切な者の、涙さえ拭えずに。心さえ救えずに。自

らの思いだけを押し付けて。何が、神だ。

これでは何も変わっていない。あの頃と何も……。

ユイネ。お前が望むなら何だってしてやろう。何が欲しい？
うしたい？ 俺の力があれば全て意のままだ。なのに……。

この愚かな化け物は、お前の幸せが何なのかを知らずにいる。

柏木葉子。

それがヨーコさんの本名だった。

ガルクループから戻って来たのは水曜の夜。翌日仕事の合間を見計らってヒロさんに電話をかけた。

「俺もさ、そっちに行ければ良かったんだけどやっぱり休めなくて。セッティングだけしとくから」

「そんな、ヒロさん。ありがとうございます。全部していただいて……本当に感謝してます」

「良いつて良いつて！ あいつ土日も働くような仕事してるからさ、夕方になっちゃうけど良い？」

ヨーコさんは大都会に本社を構える外資系の会社の、企画部で働いているのだそうだ。会うのは土曜の夜になった。ヨーコさんが働く会社のある駅の、有名な待ち合わせ場所に午後六時。目印に私はうちわを持っていく事にした。人がたくさん集まる場所なので、タロさんとテル君には別の場所で待っていてもらうようにした。ただでさえ二人の外見は目立つのだ。雑誌から抜け出てきた外国人モデルのような大男と、天使のように綺麗な男の子を連れて、大都会を闊歩するなんて荒技、私には無理だと分かっている。

ヨーコさんの連絡先は携帯の番号だけを聞いたけれど、多分当日までその番号にかける事はないと思う。ヒロさんには気になって仕方ない事だけを、失礼とは思いつつ先に聞いてしまった。

答えはとりあえず一安心な内容で、本当に良かった。

ヨーコさんには今、旦那さんや恋人と呼べる特定の相手はいない、という事だった。

これで最初の難関はクリアできた……。

私はパソコンの画面と向き合って仕事をしながら、頭の中では全く別の事を考えていた。

タロさん……帰って来た時から何だか不機嫌な気がする。大きな身体から苛々オーラをばっしと放っているのだ。目つきも相当険しい。あれはもう、相手を射殺するような勢いだ。ヨコさんの事も本当はもっと手伝いたかったんだけど、少し迷惑そうだった。それに昨日も気を届けたかったのだけれど、すぐに寝室に行ってしまった……。

本当に疲れてるだけなんだろうか。私、何かしてしまったんだろうか。どうしよう。一緒にいられるのはあと少ししかないのに。少しでもタロさんの役に立ちたいのに。気を届けるくらいしか私には出来る事がないのに……。

身体が椅子にめり込んで、椅子ごと地面に沈んでいきそうなくらい落ち込んでしまう。

うう。駄目駄目。ちゃんとしなくちゃっ。

暗くならないようにして、なるべく普段と変わらないように過ごそうと決めたんだから。あとちよつとでも一緒にいられるのなら、笑っていたい。仲良くしていたい。

終了のチャイムが待ち遠しい。早く家に帰りたい。テル君、今夜は何を作ってくれたんだろう。テル君の美味しい料理を食べられるのも、あと数回だ。うん。大事に食べなくちゃ……。

*

夕食の時間は、ふーちゃんのおかげで更に賑やかになって私はとても嬉しかった。リビングのテーブル席にタロさんとテル君とふー

ちゃんがいて、みんなで美味しい料理を食べられるなんて。それがこんなに楽しいなんて……。

「あ、そうか……。テル君に料理習っておけば良かったな……」

テル君の料理を覚えておけば、一人になった後もこの楽しかった時間をちゃんと前向きに思い出せたかも知れない。もうすぐ、タロさん達が来る前の私に戻るのだ。

それがこんなに寂しいなんて……。

私はきつとしばらくの間、一人で夕食をとる状況に落ち込んでしまっただろう。今のこの楽しい時間を思い出せば、しょんぼりとするだろう。

あ。泣きそう……。

「ヨーコさんにもうんと美味しいもの、作ってあげてね」

私はまた暗くなりがちな思いを振り切ってテル君に笑いかけた。天使のように可愛い男の子が、綺麗な微笑で答えてくれる。

「うん。そうだね……」

たしかに一人になれば寂しいに決まってる。でもそれは、私の一方的な思いだ。ヨーコさんやタロさんの思いを考えれば、逆にこれからはずっと一緒にいられるんだ。だから、このお別れは全然悲しい事でも寂しい事でもない。うん。そう思おう。

……って、そう簡単には思えなかったりする。ああ私ったら……。

「ゆいねっ。だっこ！」

お風呂から上がったらふーちゃんが私を見上げて両手を伸ばしてきた。ゆるい曲線を描く黒の髪はつやつやとして、ぱっちりおめめが可愛らしい。私は喜んでふーちゃんを膝に抱いてソファに座った。

「ゆいね。あたちね、どーぶつえんにいきたいのっ」

「動物園？」

「うんっ。てれびでやってた。ぞうさん見たあい」

ふーちゃんのふわふわの髪を梳きながら、そうか、と思う。ふーちゃんにとってはこの世界の色んな場所が初めてできらきらとしてきつと楽しい場所なんだろう。私も子供の頃はそうだったんだろうか。

きつと動物園に行ったら、ふーちゃんは好奇心を爆発させてとても喜んで、ちっちゃな身体の全部を使って、嬉しさを表してくれるんだろう。うん、楽しいに違いない。色んな所へ連れていってあげたい。私は思わずにやりと笑った。だけど次の瞬間、胸がきゅつと縮んだ。

ふーちゃんとも、ずっと一緒にはいられないよね……。

「ゆいね？」

「あつ。うん。動物園ね、今度行こうね。色んな動物がいっぱいあるんだよ。楽しいよ」

「よーこつてだあれ？」

びっくりしてふーちゃんの可愛らしい顔を凝視する。

「……え？」

「よーこつてなあに？ ゆいねはずっとそのひとのことをかんがえてる。たろもてるもよーこを知ってる。みんなよーこをかんがえて

る」

ふーちゃんが桜色のほつぺを少し膨らませて、瞳を不安げに曇らせた。ふーちゃんは自分だけが知らない事に不安を感じている。私は少し考えてから言葉を選んで説明した。

「え、えーと。ヨーコさんはね、何て言うか……タロさんの大事な人だよ」

そうだ。何よりも、誰よりも。タロさんの、全て。

「……きつとタロさんの半身になる人で、そうになったらみんなでガルクールプに帰れるんだよ」

「ゆいねも一緒？」

「わ、私は……違うの。私は……」

「なんでっ。ゆいねとずっと一緒にいいっ！　よーこなんていらないっ。ゆいねがいいのっ」

「ふーちゃん……」

ふーちゃんが私の胸にぐりぐりと頬ずりをして、小さな手で必死にしがみついてくる。そのあたたかみが嬉しくて嬉しくて、また泣きそうになる。

私の中の寂しくて卑怯で孤独な私が、喜んでいる。うれしいうれしい、と言って両手を伸ばしている。

ふーちゃんは私を選んでくれるの？　こんな私がいいって言うてくれるの？　本当？　本当に？

「あ、あのね、ふーちゃん」

情けないくらいに声が震えていた。ふーちゃんがぐりぐりをやめて、大きな瞳で私を見上げる。

「もしね、もし、タロさん達がガルクループに帰るってなっても…ふーちゃんは私と一緒にいてくれる？」

「うんっ。ゆいねとずっと一緒にいるよ！」

ふーちゃん。ほんと？ほんとに？

うんっ。ほんと！ほんとだよ！

どきどきと心臓が暴れている。ふーちゃんに縋りつく私は、なんて情けないんだろう。でも、だけど、やっぱり嬉しい。ありがとう。まさか自分が、一人になる事にこんなに怯えてしまうなんて思わなかった。今までは平気だったのに、それがとても寂しいと感じてしまう。

タロさんはきつと、すごく強い人なんだ。

こんな寂しさを抱えながら相手の幸せを願う事が出来るなんて…。

頑張ろう。最後の最後まで、笑顔でいられるように。タロさんとヨーコさんがうまくいくように。私に出来る限りの事をしよう。私の好きなタロさんは、うんと強くて優しい人だから。

私だって、強くならなくちゃ。

「唯音さんっ」

聞き覚えのある声に呼び止められて振り返った。

金曜日。仕事を終えて、タロさん達が待つ家へ帰ろうと歩いていた時だった。コンビニの制服にジーンズ姿の笹本さんが駆けてくる。その背後には夜道を煌々と照らすコンビニの明かり。

「笹本さん？」

はい、と言いながら爽やかな笑顔が返ってきた。黒ぶち眼鏡の奥の瞳は柔和に微笑んでいる。

「ど、どうしたんですか？ 今バイト中じゃ」

「あ。そうなんですけどね、えっと……今お仕事の帰りですか？ お疲れ様です」

「あ、はい……」

どうしたんだろう。まさかこれを言う為にわざわざバイト中のコンビニを出て、私を追いかけてくれたんだろうか……。私は困惑気味に笹本さんを見上げた。

「風邪はもう良くなりましたか？」

「はい。もう大丈夫です。ありがとうございます」

そう言ってお辞儀をしてまた笹本さんを見上げる。きつと、何か他に言いたい事があるのだ。笹本さんは少しだけ困っているような表情をして、もう一度唯音さん、と私の名前を呼んだ。

「あの……俺の勘違いだったら申し訳ないんですけど、その、何かあったんですか？」

漠然とした問いかけに、私はぼんやりと笹本さんを見つめてしまった。

「あ、いえ。えーと……唯音さん、ここ数日ずっと元気ないみたいで、落ち込んでるように見えたから……」

突然に、胸がぎゅうと押し潰される。笹本さんは俯き加減のまま申し訳なさそうに続けた。

「俺が出しゃばって聞くような事でもないと思うんですけど、なんかすごく辛そうだったから。心配で……。その……。えっ。ゆ、唯音さん」

驚いた声にはっとする。私は慌てて下を向いた。

「あつ。ち、違うんです……これはっ」

自分の意思とは関係なしに涙があふれてきた。一気に混乱してしまい、それでますます涙がぼとぼと落ちていく。

「す、すみません……わ、私……あの……っ……」
「……唯音さん、こっち」

笹本さんに腕を引かれ、涙でにじんだ視界の中をよろよろと歩いていった。

一度流れてしまった涙はどうやっても止める事が出来なくて、一

度泣いてしまつたらどんな悲しくなつて、私はとうとう嗚咽を漏らして泣きながら公園のベンチに座った。

「……っ、すみませ、ほんとっ……うつつ」

思つてもみないところで優しい言葉をかけられて、笹本さんが私の事を気にしてくれていた事がありがたくて、また涙が出る。私は鞆からハンドタオルを取り出して顔を覆った。喉がひくひくして苦しい。

「こういう時は我慢しないで、泣いた方が良いんです」

「うつつ……あのっ……あのっ」

「はい」

「タ、タロさんがっ」

「え？ 太郎さん？」

「タロさんと、テ、テル君が、もう帰っちゃうんです……」

その言葉にして声に出してみると、もう、どうして良いか分からない程悲しくなった。私は齒を食いしばって目をぎゅっとつぶって泣きながら続けた。苦しくて苦しくて、勝手に言葉が飛び出してくるのだ。

「もういなくなっちゃうんですっ……こ、ここに来たのも、ほ、本当は会いたい人がいたからでっ……。それは私じゃなくて……でも、その人が見つかったから……うつつ」

私は頑張らなくちゃいけないのに。どうしてこんなに弱いのか。

「それで私っ、よ、喜ばないといけないのに、本当はっ……」

ヨーコさんが羨ましくて……。

タロさんにあんなに思われているヨーコさんが羨ましいんだ。これからもタロさんとテル君と、ずっと一緒にいられるヨーコさんが羨ましくて仕方ないんだ。だって、それはもともと、私のものじゃないから。

「もう……タロさんに会えなくなる……」

やっと仲良くなれたのに。

もう一緒にご飯も食べられなくなる。メルバースのプリンも一緒に食べられない。一緒にお酒も飲めない。あの大きな背中も見られない。私に笑いかけてくれた可愛い笑顔も、あの腕の温もりも、何もかも、なくなってしまう。

好きなのに……。

「……そうか。太郎さん達ってたしか、アメリカに住んでるんだよね」

「は、はい……。だから、いつかこうなるって分かってたのにつ……うっ」

「そりゃ、寂しいですよ。悲しいです。……こっちで暮らす事は出来ないんですかね」

私は首を左右に振った。

タロさんは異世界のかみさまなんです。本当は、この世界を守っているんです。ガルクループっていう世界があって、そこでタロさんの帰りを待つてる人達がいるんです。だから、ここに残る事は出来ないんです……。

「うーん……そっかあ」

「良いんですつ。我が儘な事言つて、困らせたくないんです……。
ただちよつと、少し……寂しくつて……」

「うん。分かります。……ねえ唯音さん。それって我が儘な事でも、
恥ずかしい事でもないですよ。当然の事です。だって大好きな人達
が遠くへ行つてしまふんでしょう？ 寂しくて泣くのは、その人達
が大好きだつていう証拠です。……俺がいますから。太郎さん達が
いなくなつても、俺はここにいます」

優しい言葉を聞いて、また私は泣いた。どこにこんなに水分があ
つたのかというくらい、涙があふれて止まらなかった。笹本さんは
本当に、優しい人なんだ。

「うっ……ありがとうございます……」

私は本当に、タロさんが好きなんだ。だからこんなに、寂しいん
だ……。

朝からどんよりとした曇り空。夏だというのに半袖では少し涼しいくらいの天気だった。

いつもと変わらない土曜日。だけど、何かがしっくりいかない一日。

珍しくふーちゃんはソファに座って一日中眠たそうにしている、タロさんは誰も近寄るなオーラを放って始終むっつりとしていた。テル君だけが普段通りの爽やかさで、家事を手伝ってくれたり、私と話をしたりしてくれた。夕方外出するその時まで、ヨーコさんの話題が上がる事はなかった。

「じゃあ先に行くね」

「うん」

ポロシャツにジーンズ。薄手のジャケットを持って玄関に立ち、テル君に向き直る。清潔な白シャツにカーキ色のハーフパンツという格好のテル君は、今日もとっても可愛らしかった。少し見上げるような角度で私を見て微笑む。何度となく見てきたその笑顔に、私はいつものようにときめいた。

「ユイネ……」

するりとテル君の白い両腕が私の背中に回った。ちょうど顎のあたりに、テル君のつやつやの茶色の髪が当たる。ほっそりとした男の子の身体が私にぴたりとくっついた。

「……大丈夫だよ。ヨーコさんは分かってくれる。心配しないで」

私はテル君を元気づけたくてそう言った。タロさんもテル君もきつと不安なんだ。ヨーコさんが半身になってくれるかどうか。ヨーコさんの返事が、イエスなのかどうか。

「ありがとう。ユイネ」

テル君の鈴の音のような可憐な声は、私の身体を伝って届いた。

*

何度となくシュミレーションを繰り返して入念な準備をしていた大事な瞬間は、意外にもあっけなくおとずれるものだ。

「唯音？」

その声は想像していたよりも落ち着いていて、大人の女性の声音だった。

「久しぶり！ 大きくなったね」

たくさんの人々が行きかう駅前で、その人の輪郭だけが浮き上がっているように見える。すらりと背が高く、スマートなパンツスーツを完璧に着こなしている。軽快に大きな歩幅で近づいてくる。明るい色の髪は女性らしいショートボブ。

「ヨーコさん！」

私の声に大きく頷く、綺麗な女性。明るくて華やかで、きらきら

とした笑顔。

「うわーっ。懐かしい！ 唯音、元気だった？」

ぱつと両手を広げ、それから私の肩を包んだ。私よりも少しだけ背の高いその人を見上げる。

「お姉さん……」

ヨーコさん。

やっと、会えた。

「ヒロから聞いたよ。私を探してくれてたんでしょう？ 覚えててくれたの、すっごく嬉しい」

長いまつ毛に大きな瞳。控えめに施されたお化粧が、ヨーコさんの素肌の美しさを引きたてている。

「わ、私も嬉しいですっ。覚えていてくれたんですね」

「当ったり前よ。でもほんと、唯音ったら私のイメージとぴった。優しい雰囲気ちつとも変わってない。良かったあ」

にこにこ笑う綺麗なヨーコさんにそう言われて、私は嬉しくて赤面した。

「ヨーコさんも、やっぱり美人さんですね。とっても素敵です。そうだろうなって思ってたんです」

「やあねもう！ 褒めたって何も出ないわよ」

「元気でした？」

「うんもちろん。元気だけが取り柄だもん」

「あは。良かった……。あの、私ずっとお礼が言いたくつて。ヨーコさんのお陰で私、色々乗り越える事が出来て」

「待った待った。ね、どこかお店入らない？」

「あ……じゃあ東口の方に行きませんか？」

ああどうしよう。どきどきしてきた。

ヨーコさんと待ち合わせをしたこの場所は有名なスポットで人も多い。反対側の出口は比較的人通りも落ち着いているので、タロさんとテル君には東口で落ち合う事になっていた。

ヨーコさんと並んで人でごった返す駅前を右へ歩いていく。

「あのつ。いつからこっちに？」

「うーんとね、小六の時に家族と引越してきて、それからはずっとこっちよ。大学出てから今の会社に入ってさ、やっと最近になって色んな事を任せてもらえるようになってきたの」

「仕事、大変そうですね。で、でもやりがいがある？」

「そうなのよ。休みもなかなかとれないけど、今はそれでもすっごく充実してるっていうの？ ふふつ。絶対婚期逃すわよねえ」

きらきらと眩しいヨーコさんの横顔に思わず見惚れてしまう。元氣そうで安心した。きっと本当に毎日が充実しているんだろう。自分の力で、自分の人生をきっちりと生きている。ヨーコさんはそんな人が持つ力強い輝きを放っていた。良かった。ヨーコさんはあの頃と変わってない。優しくて明るくて美しくて、強い。

「ほら唯音。ぼつとしない」

「わっ」

目の前を横切っていく男性にぶつかりそうになって、ヨーコさんに腕を引かれた。

「す、すみません。すごい人ですね」

「土曜の夜なんていつもこんなよ」

近状を報告し合いながら東口へと回りこんでいくと、だんだんと人の流れが落ち着いてくる。行きかう人達がまばらになったところで、私は足を止めた。

「……ヨーコさん」

「なあに？」

夜の闇が落ち始めたビルを背景にヨーコさんが振り返る。苦しいくらいときどきして、胸が張り裂けそうだ。大きく息を吸い込む。

ヨーコさん。

「覚えてますか？ 一緒に遊んだ裏山の神社……」

「ああ、うん。ちっちゃくて古ぼけた神社ね。人外様の」

人外様。

その言葉にまた私の心臓がどくと跳ねる。

「……はい。それで私が引つ越すときにくれたお守りも、覚えてますか？ 真つ黒でまん丸の、すべすべの石」

漆黒の珠。それはタロさんが半身であるヨーコさんに渡した大切なもの。守り人の、もうひとつの命。

「石？」

「はい。泣き虫だった私を元気づけてくれたんです。そのお守りのおかげで、私は、今まで頑張ってた……」

ぎゅっと両手を握り締める。よし。言うんだ。

「ヨーコさんに会ってもらいたい人がいるんです。その人もヨーコさんに会いたくて、ずっとヨーコさんを探していたんです。ずっと遠くから、ヨーコさんに会いに来てて……」

「えっ。そうなの!？」

ヨーコさんは驚いた顔をして少しだけ首を傾けた。

「カラスっていう名前……覚えてますか？」

祈るような気持ちで、じっとヨーコさんを見つめる。

「カラス？ カラスって鳥の？」

急にひやりと背筋が冷たくなった。慌ててかぶりを振る。

「ヨーコさんが子供の頃、私が遊んでもらってた頃です。その頃に人外様の神社で会ってるんです。背が高くて髪が肩まである男の人と、天使みたいに綺麗な男の子」

そこまで言うときヨーコさんの眉がきゅっと寄った。傾けられた頭が今度は反対側にかつくりと傾く。

まさか……。

「お、覚えてないですか？」

まさか、そんな。

ヨーコさんの態度に動揺して私の頭の中が一瞬真っ白になった。

その時。

「ユイネ？」

その声にはつとして振り向く。タロさんとテル君が、そこにいた。

「あつ、テ、テル君。あのっ」

「唯音。知り合い？」

きょんとしたヨーコさんの声。

「……ヨーコ？」

これもまたきょんとしたテル君の声。わわっ。どうしよう。はやく説明しなくちゃ。

ヨーコさんお願いっ。思い出して！

「あつうん。ヨーコさんだよ。あ、ヨーコさん、あのね……」
「ユイネ」

私の言葉を遮って凜と響いた低い声。その声の主はつややかな黒髪を一つに束ね、シンプルな黒シャツとジーンズをモデルのように着こなしていた。

「タ、タロさん」

「……ユイネ。お前は先に帰っている」

え……。

足が震えた。一瞬、目の前が真っ暗になった。

タロさんは私を見ていなかった。

「カラスって、この人？」

ヨーコさんの声が随分遠くに聞こえた気がした。

タロさんは何も言わずヨーコさんだけを、ただ一心に見つめていた。そこから一度も、視線をはずす事はなかった。

ぎゅっと目をつぶって背を向ける。

「あ、あの……じゃ、じゃあ私」

「えっ。ちよっと唯音っ!？」

足を動かす。

ヨーコさんの呼び止める声も無視して、私はその場から逃げ出した。

つらくて悲しくて、息が止まりそうだった。もうあの場所に立っていらなかった。そこには私の居場所なんか、あるわけなかった。私じゃなかった。最初から。

タロさんはずっとヨーコさんを見つめていた。最後まで、私を見る事はなかった。

すれ違う人と肩がぶつかる。すみません、と謝って自分の足元だけを見て歩いた。どんどん息が上がっていく。ぼやぼやと視界がにじんていく。雑踏の騒音も遠のいていって、無音の世界にたった一人、取り残される。息を吸うと、喉が痛んだ。泣きそうになって唇を噛んだ。

タロさんとテル君には、まだお別れの言葉を言っていない。だってなんて言ったら良いか、考えても考えても、ちっともまと

まらなかつたから。

067 (さよならとヨーコの真実)

帰りたい。家に帰りたい。ふーちゃんが待ってる。ふーちゃんに会いたい。

どこをどう歩いたのか分からない。だけでもくもと下を向いて歩き続けるうちに、混乱していた感情がだんだんと落ち着いてきた。すると苦々しい後悔の思いが広がっていく。
どうしよう……。

失礼な事をしてしまった。ヨーコさんを置き去りにして、逃げ出してしまっなんて。

最後まで少しでもタロさんの役に立ちたいって思ってたのに。タロさんの幸せを願ってたのに。

最後まで笑顔でいるって決めてたのに。逃げ出すなんて、私は弱虫だ。

戻らなきゃ。ちゃんと話をしなきゃ。

心を決めて顔を上げる。辺りはすっかり夜になっていて、ひんやりとした風が吹き抜けていった。左右を見渡して呆然とする。

あ……まずい。ここ、どこ。

雑居ビルが林立する薄暗い路地。私は完全に迷子になってしまっていた。駅前はこの方向だろう。少し歩いて遠くに目を凝らすと、明るいネオンの光が見えた。あっちの方だろうか。私は光に吸い寄せられる虫のように、都会のネオンへとふらふらと向かっていった。ぶー、と鞆の中からくぐもった音がした。携帯を取り出して、ぎくつとする。

ちゃんと謝らなきゃ。通話ボタンを押してそつと耳に押し当てた。

「はい」

『唯音、今どこ？』

「ヨーコさんごめんなさい。急にいなくなったりして」

『ほんとよもつ。びっくりしたんだから！ まだ家じゃないよね？ とにかく戻ってきて』

「あの、ええと……そ、それが迷ったみたいで。どこにいるか分からないんです」

『ええっ』

「す、すみませんっ」

あはは、とヨーコさんの楽しそうな笑い声が聞こえた。

『あーもつ唯音らしい。そこから何が見える？ お店とかある？』

細い路地から出て、横断歩道の先にある全国チェーンの有名なレストランの看板を見つけた。ヨーコさんは駅周辺を熟知しているようで、私がレストランの名前とそれがあある場所を告げると、あー、と声を上げた。

『また遠くまで行ったわね。説明しづらいからそっち行くわ。待ってて』

それから十分ほどしてやって来たヨーコさんに、私は慌てて駆け寄った。

「ヨーコさんっ。色々、本当にすみません」

「もつ。世話が焼けるわね」

恐縮しまくる私を見て、ヨーコさんは朗らかに笑いながら許してくれた。

「あの……」

「二人なら先に帰ったよ」

「えっ」

「あ。こっちのが近道」

人通りのない道に入っていくヨーコさんを追いかけて、隣に並んで見上げる。街灯に照らされた美しい横顔。表情は柔らかく、口元には微笑が浮かんでいた。

どうなったんだろう。話は全部終わったのかな。半身になってくれるのかな。

ヨーコさんのこの表情……。きっと上手くいったんだ。そうだとしたら、いつガルグループに帰るんだろう。

タロさんとテル君は……どこに帰ったの？

「ヨーコさん、あの」

「詳しい事は二人から聞いてね」

私の顔を覗き込むように見つめて、ヨーコさんが綺麗に微笑んだ。優しい目をしていた。

私はそれ以上聞く事が出来なくなって、はい、と小さな声で返事を返した。

「……ヨーコさん」

「うん？」

「ありがとうございます」

「なあと急に」

私はヨーコさんと目を合わせて、えへへと笑った。胸いっぱい色んな思いが込み上げてきて、また泣きそうになる。良かった。

これでもう、タロさんは一人じゃない。

タロさんの隣にヨーコさんがいてくれるなら、もう大丈夫だ。ヨーコさんの明るい笑顔が、冷たくて恐ろしい孤独を溶かしてくれる。長すぎる時だってヨーコさんがいてくれるなら、二人でいられるなら、もう辛くない。ヨーコさんの優しくてあたたかな魂の旋律が、タロさんを包んでくれる。これからはずっと、二人は一緒にいられる。良かった。

これで良いんだ……。

そこまで考えて、ふと思い出した。サーシャさんに伝言を頼まれていたんだ。私がヨーコさんに声をかけようと顔を上げた時、向かい側から若い男性がふらふらと千鳥足で近づいて来るのが見えた。

何だろう。良くない感じだ。ヨーコさんと私は相手を避けるように道の左側に寄った。

「え……なにあれ。危ない」

緊張したヨーコさんの声に、ふらつきながら歩く男性の姿を見やめた。だぶだぶのズボンに派手な柄のシャツを着た若者。痩せているせいで顎が尖っている。その男性の手元を見て、ぎゅっと心臓が縮まった。右手にあるものが不気味で恐ろしい存在感を放っている。酔っ払って歩いている若者の右手に、抜き身のナイフが握られている。

怖い。危ない。近寄っちゃ駄目だ。本能が危険を感じた、その時だった。

うつろな表情で遠くを見ていた若者の両目が、一瞬でこっちを向いた。血走っていてどこかおかしい。その目が、私とヨーコさんを見た。全身に緊張が駆け抜ける。

「うらあ！」

男性にしては異様に甲高い声。その声を聞いた瞬間、私は走り寄ってきた若者に肩を押されて突き飛ばされていた。

「唯音っ」

足がもつれて転びそうになる。何とか踏ん張って、咄嗟に相手を見た。若者は私を見ていない。どく、と心臓が鳴った。ぞっと全身に鳥肌が立つ。私の頭の中に、不気味な単語が弾けるように浮かんだ。

通り魔。

若者は肩で息をして、ヨーコさんに向かっていている。じり、とヨーコさんが後ずさった。右手のナイフが不気味に光っている。奇妙なうなり声が聞こえた。

うそ。だめ。なんで！

「ヨーコさんッ！」

無意識に身体が動いていた。肩にかけていた鞆を振り上げて力いっぱい相手に叩きつける。衝撃に若者の身体がぐんと揺れた。

「くそおッ！」

若者が叫びながら腕を振り回す。後ずさった私の腰に相手の蹴りが当たった。

「うっ」

「きゃあっ！ 唯音っ」

思い切り転んで、膝と両手に鋭い痛みが走る。それでも慌てて顔を上げた。若者の全身はヨーコさんの方を向いている。血走った目はヨーコさんを睨みつけている。恐ろしい凶器はヨーコさんを狙っている。

どうして。なんで。なんでよ。やめてよっ！

「ヨーコさん逃げてっ」

「しねああああ！！」

駆け出したヨーコさんの背中。それを追って若者も走り出す。二人の背中。全てがスローモーションのようにゆっくりと動いていく。私の荒い息の音。心臓の音。片手を地面につく。ざらついたアスファルトの感触。

だめ。だめだめ。そんなの、だめ。

ヨーコさんは、タロさんの大切な人なんだから。ヨーコさんはタロさんの半身になるんだから。やっと出会えたんだから。これからずっと一緒にいるんだから。

こんな奴に、何かされてたまるもんか！ そんなの絶対、だめなんだ！

「じ、のおっ！」

大声を上げて、私は全力で走った。何がなんでも、ヨークさんを
守るんだ。ヨークさんを傷つけるなんて許さない。絶対に！

目の前に迫った若者の背中に手を伸ばす。右手でシャツを掴んだ。

「だめだつて……言っでんしょ!!」

素早くシャツを両手で鷲掴みにして、勢い良くうしろへ引っ張った。ぐらりと相手の身体が傾く。あり得ないくらいの怪力を発揮して、私は若者と一緒に道路に転がった。

「唯音!」

身体の色んなところが一気に痛くなる。それでもすぐに立ち上がると、ヨーコさんの腕が私の肩を包んだ。

「大丈夫っ!?!」

「に、にげなきや」

「うっ! うっ!……」

若者がよろりと立ち上がった。その手にもうナイフはない。転んだ時の衝撃で遠くに飛んでいった。

「あっ」

若者の背後に、恐ろしいものを見た。そこだけ景色がぼやけている。黒いもやがかかっているみたいに。私はその時になって、急に恐怖を感じた。目の前に立つ若者が白目を向いていたからだ。

「ぎ、ぐぐ……」

若者の表情が苦しげに歪んで、背後の黒いもやがだんだんとはつきりしていく。うねうねと動いている。まるで生き物みたいに。あれはどこかで見た事がある。そんな、馬鹿な。まさかそんな。

「うぐうつ」

うめき声を上げている若者の身体から力が抜け、地面に崩れ落ちた。黒いぐねぐねが一気に空へと伸びあがる。五メートル以上はあるかと思われるような、大きな『負』だ。

「ユイネ！」

声に振り返る。暗い道の先から、テル君の走ってくる姿が見えた。その後ろにいるタロさんの姿を見て、また慌てて黒いぐねぐねの方へ振り返った。中空で暴れている黒い闇。激しく伸びあがってぎゅっと縮んで、めちゃくちゃにもがいている。逃げ出そうと必死に暴れ回っている。もう既に、この黒くて気味の悪いぐねぐねはタロさんに捕まっているのだ。ひどい暴れようで、きっとこの『負』を捕らえているタロさんの全身は激痛にさいなまれているはずだ。なんて巨大な『負』なんだろう。

「ユイネっ。危ないよ！　そこから離れてっ」

テル君の叫び声。私はすぐ目の前の大きな『負』をじっと見つめて、そして確信した。

『負』は集まって世界に歪みを作り出し、そのまま見過ごすと天変地異が起こる。生物の中に入れば病や悪意となる。

世界に害を及ぼす『負』の存在は決してなくなるらない。世界がそ

ここに在って、そこに命がある限り『負』は生まれ続ける。いくら消しても知らない間に生まれている。だから守り人達は『負』を昇華する力を持っているのだ。

世界を守るために、そこで生きる人々のために、『負』は消滅させるべき存在なのだ。

ああっ……。でも！

「ユイネ！ 何をしているっ。さっさと離れる！」
「待つて！ タロさん待つてくださいッ！」

私はこの『負』を知っている。ずっと一緒だった。とっても可愛くて、優しい子だった。生まれてきた事を喜んで、いつだって私の味方をしてくれた。

ああ……。それなのに私は……。私はなんて事を。

震える足を何とか動かして、苦しんで暴れている大きな『負』の目の前に立った。息が上がる。口元がわなないて、涙が流れた。両手を広げる。大きく息を吸ってその名前を叫んだ。

「ふーちゃんっ！！」

私のせいだ。

ふーちゃんはただ、生きたかっただけなのに。ふーちゃんは優しい女の子なのに。私のせい……。『負』に戻ってしまった。

「ふーちゃん！ もう良いのっ。もうやめて！」

ぎゅ、と黒いぐねぐねが鋭く尖る。ひゅっ、と風を切るような早

さで私の身体を貫いた。その瞬間に、両手両足がもがれるような味わった事のない激痛に襲われる。
痛い！

「あ、ああっ！」

「ユイネ！」

駄目っ。

私は咄嗟に両腕を動かして黒いぐねぐねをぐっと掴んだ。

ギヤアアアアアアー！

鼓膜が破れそうな程のひどい叫び声が頭の中に反響する。捕まえた。

「ふーちゃん！」

ぎゅっと目をつぶって、暴れまわる『負』を力づくで、無理矢理抱き込める。

「ふーちゃん、ふーちゃん、ふーちゃんッ」

内臓が燃え上がるような痛み。頭が割れてしまいそんな激痛。だけど、絶対、手を離さない。

だってふーちゃんは私のために。

「ごめんっ。ごめんねふーちゃん。もう良いの。もうやめて……」

ごめんね。ごめんね……。私のせいで。私のために。

サーシャさんに頼まれていたのに。ふーちゃんをお願いねって言

われたのに。

ふーちゃんはいつだって私の味方をしてくれたのに。ずっと一緒にいたいって言うてくれたのに。

——ゆいね……。なんで？……どう、して？ ゆいね。ゆいねゆいねゆいね……。——

ふーちゃん。

——よーこが、いなければいいんだ。よーこなんて、いなければいい。よーこさえいなかったら、ゆいねはかなしくない。だから、よーこをころそうと思ったの——

ごめんね……。ふーちゃん。

ふーちゃんをこんな風にしたのは私だ。私の醜い心だ。私はヨーコさんに嫉妬して、妬んだ。

——なんで？ なんでゆいね。泣かないで。あたち、わるいことしたの？ よくなかったの？ ——

違うよ。ふーちゃんは悪くない。ふーちゃんはうんと優しくて可愛くて、とっても良い子だよ。

——……ほんとう？ ——

うん。ありがとう。ふーちゃん、ありがとうね。私、とっても嬉しい。もう大丈夫だよ。悲しくなんかない。ふーちゃんのおかげで、もう元気になったよ。

——嬉しい。あたち、ゆいねが大好き——

すつと力が抜けた。全身を貫いていた痛みが引いていく。うつすらと目をあげると、腕の中にふーちゃんがいた。だけどその小さな身体は透けている。まるで幻みたい。

「ふ、ふーちゃんっ」

目の前の女の子が、嬉しそうに微笑んだ。

「ね、ねえ。大丈夫？ どうしたの？ 身体がっ……」

「ゆいね……」

「ま、待って」

「ゆいね。ごめんね」

「いやっ」

私は慌ててふーちゃんを抱き締めた。小さな身体を抱えて、泣いた。

消えてしまう。ふーちゃんがなくなってしまう。

——ゆいね。ゆいねゆいね——

「だ、だめっ。ふーちゃんいかないでっ！ だ、だってまだ、動物園に行つてないよっ。こ、この世界にはもっともっと、楽しい事がいっぱいあるんだよ。ふーちゃんに見てもらいたいものがたくさんっ……」

ふーちゃんが私の胸にぐりぐりと顔を押しつけた。

——もういいの。あたち、しあわせ——

ふーちゃん！

—— ゆいね。ごめんね ——

「ふ、ふーちゃん……ふーちゃん。ごめんねっ。ごめんっ」

—— ゆいねはわるくない。ゆいねは優しい。だからあたち、ゆいねが大好き——

「うつうつ……うあああ。ふーちゃんっ！」

みつともないくらいに、ぼろぼろと泣いた。じわりとふーちゃんの重みがなくなっていく。

—— ゆいね、ごめんね。ゆいね、さよなら ——

「ふーちゃ……」

—— ゆいね、ありがとう ——

両手を地面についた。そこには何も、残っていなかった。

目の前が真っ暗で、ぼたぼたと涙が落ちていく。そのままそこにうずくまって、泣いた。

消えてしまった。ふーちゃんが。私のせいで。私は守ってあげられなかった。

あんなに小さくて必死に生きようとしていた、可愛らしい女の子を。

「……ユイネ」

低くて落ち着いた声が聞こえた。肩をそつと包む手の温もり。途端にまた涙が溢れて、身体を起こして振り返った。そこにタロさんがいた。じつと私を見つめていた。

「わ、わたしっ……ふーちゃんをっ」

胸がぐつと苦しくなる。タロさんの温もりが、ぎゅうと私を包み込んだ。

「……『負』は、いずれこうなる運命だ。^{さため}お前の手で昇華させたあいつは、最期にはちゃんとあいつに戻っていた。俺が今まで見て来た中でも、一番安らかな最期だ。幸福な最期だった」
「う、うつつ……だ、けどっ」

両手でタロさんの服を掴んだ。いくら歯をくいしばっても、涙を止められなかった。タロさんの胸にぐいぐいと顔を押しつける。ぎゅうつと一層力を込めて抱き締められた。

「お前はきちんとあいつを昇華させたんだ。あいつにとっては、それが一番の幸福だ」

ふーちゃん……。

黒くてつやつやとした長い髪。ゆるくウェーブがかかったその髪はとっても綺麗だった。いつもきらきらと輝いていた大きな瞳。小さな手足。

ちっちゃな身体で、力いっぱい私を抱き締めてくれた。いつだって私が好きだと、全身で、好意を示してくれた。

美味しそうに口いっぱいにご飯を頬張って喜んでいた。おいしい

ねって言って、嬉しそうに笑っていた。

歌が好きだった。一緒にぞうさんの歌をうたった。何回も、何回も……。お絵かきもした。とっても楽しかった。

楽しかった。楽しかったよふーちゃん。

にっこりとふーちゃんが笑う。ふつくらとした桜色のほっぺ。

小さな両手で私にしがみついて、私の胸にぐりぐりと顔を擦りつけて、それからぱっと顔を上げて笑うんだ。

「ゆいね大好き」

ありがとう。ふーちゃん。

私を好きになってくれて、ありがとう。

この地より、災いよ去れ。嘆くなかれ。次なる生を与えん。

落ち着いた声が身体の奥で響いた気がした。ああ。タロさんはやつぱりかみさまだ。

その声は厳かで、だけど心地良く慈愛に満ちていて、普段のタロさんからは想像もつかない程の圧倒的な包容力を兼ね備えていた。長い長い間、こうやってたった一人で『負』を救い続けてきたんだ。人々の知らないところで、人々を守り続けている。神の力を持つ、特別な存在。なんて孤独な存在だろう……。

何とか自分を取り戻した私は、ぐずぐずと鼻を嚙って顔を上げた。

「ヨ、ヨーコさんは……」

自分の声に驚いた。がらがらでしわしわの声。

「大丈夫だよ。ひとつも怪我してないし、ちゃんと家に帰した」

すぐ傍に立っているテル君が私を見下ろしていた。天使のように柔らかな表情。

「彼女の記憶は、迷子のユイネを見つけて一緒に駅まで帰って、そこで別れた事になってる」

「あ、あの人は……」

派手な柄のシャツを着た若者は、今もうつぶせのまま動かない。顔だけは横を向いていて眠っているようにも見える。

「ふん。放っておけ。どうせろくでもない人間だ」

「そうそう。ただの酔っ払いだよ。このまんま寝かしとこう。夏だし平気でしょ」

さつきはちゃんとかみさまだと実感できたけれど、二人のこういう言動はとっても身近で、妙な親近感をおぼえる。

「それよりお前だ！」

「わっ」

突然身体がぐらりと傾いて、両足が宙に浮いた。とんでもない状況に身体が硬直して、見慣れない景色に目がまわって、あまりの事に声も出なくなってしまうた。

「こんなにっ！ 傷を！ この阿呆ッ。無茶もたいがいにしろ！」

こ、これは多分、お、お姫様だっこというものでは。私には一生、縁のないものなのではっ！？

「あ、あのっ」

ぎぎっ、とタロさんがものすごい眼力で睨みつけてきたので、ごくつと言葉を飲み込む。男らしくうるわしい顔面がすぐ近くにあって、抱きあげられている状況に私の頭は完全に動きを止めた。だけど、ときめくとかドキドキするとか、そんな場合ではなかった。怖い。怖すぎる。タロさんが全力で怒っている。そのとてつもない迫力に震え上がりそうになった。

「す、すみません……」

「守り人でもない普通の人間が、異能の力を無理に使ったんだ！

……全くとんでもない事態だ」

「……え」

「何でもないように見えるがな、お前の生命力は今、極端に弱っているんだぞ。身体には相当の負担がかかったはずだ」

そういえば……そうだ。地球人で凡人で一般市民で、何の力もない私が、どうしてふーちゃんを昇華させる事が出来たんだろう……。ちっ、とタロさんの舌打ちが聞こえて、私はびくっと縮みあがった。

「サーシャの奴め。許せん」

「……サーシャさん？」

どうして急にその名前が？　と思う間もなく、タロさんの鋭い視線が私に向いた。

「お前、サーシャに何かされたろう。お前の使った力はまぎれもなく、守り人の特殊な力だ。それはお前の『中』に温存されていた」

ええと……。あの時、サーシャさんに会って何をしたっけ。うーん……。

「そもそもユイネ、お前はぼうつとしすぎだ！　そんな細工を施されているのも気付かんとはな！」

「す、すみませ……あっ！　お、おでこっ」

「なんだ！」

「おでこにちゅつとされて、それで」

可愛らしい笑顔を向けてくれたのだ。そうして私にこう言った。これはおまじないよ。あなたが自分の殻を破れるように。

サーシャさんは全てを知っていた。

「そっか……」

ゆるくまとめあげた薄茶色の髪に白い肌。ちんまりとした外国の美少女。『白銀』の守り人様の半身で、とっても明るくて元気で、素敵な人だった。楽しそうに笑うサーシャさんは本当に可愛くて、守ってあげたいと思うてしまう程。だけどやっぱり、峻厳な強さを併せ持っている人だったんだ。

私は両手で顔を覆った。また泣いてしまいそうだった。息が震える。

サーシャさんは全てを知った上で私に、ふーちゃんをお願いね、と言ったのだ。それは、そういうことだったんだ……。

「ユイネ」

タロさんの声がすぐ近くで聞こえた。タロさんの温もりがすぐ傍にあった。

「泣くな」

「……はい」

「決して悔いるな。お前は良くやった」

そうだ。もう泣かない。ふーちゃんとの楽しい時間は、そんな悲しいものじゃなかった。ふーちゃんからもらったものは、悲しい想いなんかじゃない。もっともって大切に、あたたかなものなのだから。

濡れた目元をぬぐい、ゆっくりと大きく、息を吸いこむ。

「はい」

「……よし。帰るぞ」

そこで、貧血を起こした時のように視界が暗くなり私は意識を失った。

ほっそりとした手足の、見えるところに擦り傷が出来ている。気を失っているユイネを抱えたままソファに座り、血の滲む皮膚にそっと手を押し当てた。目を閉じて念じると小さなとげがちくりと刺さるような感覚が手の平から伝わる。守り人は相手の痛みを引き受けることにより、その傷を癒す。

華奢な肩を抱き寄せて大きく息を吐く。情けない事に、まだ指先が震えていた。

あの巨大な『負』がユイネを貫いた瞬間、我を失いそうになった。ユイネにもしもの事があつたらどうにかなってしまっただろう。それこそ世界を潰しかねない。俺にとつたらユイネ以外の全てのものが、二の次だからだ。ユイネがいなければ何の意味もない。大事な命だ。確かに呼吸をしている柔らかな身体を抱き締めて頬を寄せる。その温もりにやっと心が落ち着いていく。

何故こんな無茶をさせたのか、サーシャの意図が全く不明だ。

それからしばらくして目覚めたユイネは案の定、熱を出していた。おそらくは昇華した『負』の残骸が体内に残っている為だ。そして予想通り、ユイネは俺の手を借りず自力で治すと言い張った。

「大丈夫です。熱つていつてもびっくりするような高熱じゃないし」

ベッドの上に上体を起こし、肩にカーディガンを羽織っている。焦茶の柔らかな髪を横に流してふにやりと笑うユイネは、脆く壊れやすそうに見えるのだ。それだけで俺の心はまたしても不安に駆られる。

俺はお前が心配なんだ。お前に何かあつたら、俺はどうすれば良い。くそ……。

ため息を吐いてベッドの脇に腰を下ろした。

「お前はマゾか」

「ち、違いますっ。……その、あの、この熱もふーちゃんを昇華したなごりだと思うと何だか……」

少し俯き頬を赤く染めて、（それは熱のせいかもしれないが）何故だか嬉しそうに微笑んでいる。俺は呆れて相手を見やった。やはり、マゾだ。

「それに、タロさんが痛い思いをするのは嫌なんです……」

小さな呟きにはつとする。手元に視線を落としているユイネの穏やかな表情。一瞬で心を奪われ、その美しい表情に見入った。可憐な睫毛。照れたように微笑む口元。ふっくらとした曲線を描く唇。

「……ユイネ」

にじり寄って腕に触れると、心地良くあたたかな気が流れ込んできた。

「は、はい？」

顔を上げたユイネは目をまるくした。俺は構わず距離を詰めていく。全てが、俺の欲しているものだ。手に入りたい。今すぐに。

お前の全ては何故そんなに穏やかであたたかで、優しいのか。その魂の奏でる美しい旋律も、闇を知る光に満ちた気も、気が弱くお人好しのくせに頑固で、真の強さを持つ性格も。

「ユイネ」

どうした事か、こいつの地味な顔つきさえ愛おしい。俺の目はおかしくなった。もう駄目だ。もう我慢出来ん。

「タ、タロさん？ どうしたんです？ なに……」

「ユイネ！」

「わっ」

ばっつ。

奇妙な音とともに後頭部に強烈な痛みが走った。たまらず両手で頭を抱える。背後を振り返ると片手にお玉を持ったテルが仏頂面で突っ立っていた。

「ユイネは熱を出してるの！ 野蛮人だなあもう」

「テル、きさまっ！ っつっ……」

「だ、大丈夫ですか」

「もうちよつとで晩御飯出来るよ。ユイネ、食べれる？」

「あ、うん。食べるっ。テル君ありがとう」

「……テル」

俺は片手で後頭部を押さえて立ち上がりテルを見下ろした。ありったけの怒りを込めて睨みつけてやるが美しい子供は平然として、つと顎を上向ける。何というふてぶてしい態度だ。

「元はといえば、お前がふがいないばかりにユイネが巻き込まれたんだぞ！ 何の為に前がいたと思ってる！？ まんまとサーシヤにやられおって」

「そんな事言ったって分かるわけないでしょ。サーシャは守り人の半身だもの。本気になれば僕が分かるはずないよ。それよりタロち

やんこそ、なんで分からなかったのさ。ちよつと鈍りすぎじゃない？」

「なにいつ」

「僕に八つ当たりしないでよね」

「んなつ」

「ちよ、ちよつと待った！ 二人ともっ」

ユイネの声に、俺とテルは睨み合いながらも押し黙った。

「あの……テル君もタロさんも悪くないですよ？ それから……あの、私、サーシャさんにはとっても感謝してるんです」

真っ直ぐなユイネの視線は、誠実な心をそのまま映し出しているかのようだった。

「ふーちゃんは本当は、すぐにでも昇華させなくちゃいけなかったんです。けどあの時、私もふーちゃんもそれを望んでなかった。私は嫌だったんです。ふーちゃんと離れたくなかったから……」

すつと声を落とし、目を伏せて続ける。

「サーシャさんは私の願いを尊重してくれたんです。だからこそ、私にふーちゃんを昇華させる力を授けてくれたんだと思うんです。私が自分の選んだ結果に、私自身で責任が持てるように。ふーちゃんが『負』に戻ってしまった時に、私がちゃんと責任を持って対処できるように」

もしサーシャさんのくれた力がなかったら、『負』に戻ってしまつたふーちゃんに何もしてあげられなかったら……。そうなつてしまつたらそれこそ辛くて悲しくて、私はずっと後悔し続けたと思う

んです。

「サーシャさんは私に、ふーちゃんをお願いねって言うてくれたんです。それはこういう意味だったんだって、分かったんです」

もう一度顔を上げたユイネは、そう言っただけで笑った。その笑顔は常と変わらずどこにも気の抜けたものだったが、心なしか晴れ晴れとして立派に見えた。

「……おい。そのお人好しっぷりは何とかならんのか」

「あ、はい。すみません」

ユイネの返答に思わず笑った。

なあユイネ。お前の心は神よりも深い。お前はすんなりとやってのけるが、「受け入れる」という行為には勇気と聡明さと、何より強い心がなければならないのだ。そうやってお前は俺をも受け入れ、許すのだろう。

だが俺は、俺を許す事は出来ない。あつてはならない。

お前に何かあったらどうする。お前を危険にさらしたのはこの俺だ。守り人という存在が、お前の日常をおびやかしている。

「その、あの、それで、ヨーコさんとは？」

ああ……全く。そっちの問題もあったな。これも許せん。ユイネの純粋な思いを踏みにじった奴がいるのだ。

「その様子じゃ、ちっとも気付いていないようだな」

俺はあらためてユイネを見下ろし腕を組んだ。

「え？」

「うーん。僕も心配になってきちゃった。ユイネってば、少し人を疑うって事を覚えなきゃ」

言いながら、テルも俺の横に並んで肩を落とす。

「な、なに？」

僅かに怯えた表情を見せるが、ためらいなく告げた。

「あの女はヨーコではないぞ。お前は騙されているんだ」

ユイネはぽかんと口を開き、目も大きく見開いて分かりやすいくらいに驚き絶句した。

あの時、ユイネの隣にいたあの女はヨークではなかった。

ヨークの魂を間違えるわけがない。いくら年数が経とうが外見が変わるうが、この俺が間違えるわけがない。あれはヨークではなく、全くの別人だ。ユイネのそれと全く似ていなかったのだから。にもかかわらずユイネに自らをヨークだと名乗ったあの女の素性が掴めず、何を企んでいるのかも解せなかった為に、ともかくユイネを遠ざけようとあの場を下がらせたのだ。

「だ……だってヨークさんは、自分がヨークさんだって言ってた……」

「でもねユイネ。本人がそう言っただけで証明するものは何もなかったでしょ？」

「それは……そうだけど、でも」

「ヨークを知っているという男がどういう理由からかは知らんが、わざわざ偽物を仕立て上げてお前と引き合わせたんだ」

「ヒロさんが！？ どうして」

「ふん。そいつを締め上げれば答えが出るだろう」

「ま、待って下さい……きっと、何か事情があるんですよ。そんな締め上げるだなんて」

「阿呆かお前は。当然の報いだ」

「でもっ」

「ストロップ。もう晩御飯にしょ。ユイネも熱出してるんだし、その話は後にしようよ」

テルが呆然とするユイネに向かって、とびきりの微笑を向けた。

*

もう……何が何だか分からなくて、熱が上がってしまいそうだ。
あの人はヨーコさんじゃない？ ヒロさんが嘘をついた？ どう
して？ そんな……。

「はい。ユイネ。無理しないでね」

美味しそうな匂いに顔を上げる。テル君が器によそってくれた雑
炊は土鍋で作ったもので、鮭ときのこが入っていて上にネギが散ら
してあった。途端に私のお腹はぐると鳴いて唾液が出て来る。

「うわあ美味しそう……ありがとう。テル君」

あたたかそうな湯気の奥に、綺麗な男の子の笑顔が見えた。ああ
……天使だ。天使がいる。またテル君の作ってくれたご飯が食べれ
るなんて……すごく嬉しい。うん。今はとにかく食べよう。

リビングのテーブル席に、タロさんとテル君と私が座っている。
私の隣には一つの空席。つんと鼻の奥が痛くなったので無心になっ
てレンゲを口に運んだ。すると口の中が熱くなって、丁度良い塩加
減の、うまみのぎゅっとつまっただしの味が広がった。柔らかなご
飯と少ししょっぱい鮭の身。しゃきとしたネギの感触と優しいき
のこの触感。飲み込むとあたたかな熱が喉を通して身体を中心に落
ちていった。じわりと全身に熱が行き渡る。

「う……おいしい」

私は片手で涙をぬぐって、はふはふしながら美味しい雑炊をもぐ
もぐ食べた。

「おいユイネ。泣くか食べるかどっちかにしろ。せわしない奴だ」
「だ、だって」

タロさんは艶やかな黒髪を一つに束ねて、大きな口を開けて雑炊を食べている。あつあつなので、少し顔が赤い。箸でおかず（甘辛い味付けのお肉で、これもとっても美味しい）をばいと放り込んですごい勢いで次々と美味しい料理をお腹におさめていく。テル君がにこにこ笑っている。私はまたこうしてタロさんとテル君と食事が出来た事が嬉しくて、でもここにはふーちゃんがなくて、嬉しいやら寂しいやら美味しいやらで、泣きながら雑炊を頼張ってうふふと笑った。

ヨーコさんにはやっぱり何か重大な事情があるんじゃないだろうか。本当のヨーコさんは、どこにいるんだろう。ヨーコさんではなかったあの綺麗な人は、本当は何ていう名前なんだろう。ヒロさんは何を知っているんだろう。

もう少しヨーコさんの事について色々話したかったのだけれど、熱が出ているんだからさっさと寝ると凄まれて、私は大人しく横になった。目を閉じてヨーコさんを思い浮かべる。

茶色の長い髪が風になびく。あの古ぼけた人外様の神社を背景に、花柄のワンピース姿の少女がいる。この姿は私の記憶にあるヨーコさんではなく、タロさんの記憶の中のヨーコさんだ。あっけらかんと明るくて、優しい少女。ヨーコさんは大きな笑顔を向けて、私に向かって手を振った。

会えそうで会えない。きっと会えると思っていたのに……。

「どこに……ヨーちゃん」

けれどその疑問の答えは翌日になって唐突に、想像もしない形であらわれた。

日曜日。熱はすっかり下がっていて、私はその日、ヒロさんの喫茶店がある母の故郷へ行こうと朝から身支度を整えていた。電話で話す事も出来るけれどやっぱり直接会って話した方が良い。

「あの。私に任せてもら……」

「馬鹿を言うな！ お前はまた騙されるに決まっている！」

憤慨しているタロさんは、今回ばかりは一緒に行くの一点張りで、私の言葉を聞いてくれない。それはそうだ。私は自分の頼りなさに落ち込みそうになった。うっつ。いかんいかん。

「えと、じゃあなるべく穏便に」

こわごわ提案するけれど、じろりと私を一瞥するだけでタロさんの怒りオーラは鎮まる気配がない。ど、どうしよう。かみさまが怒っている。ヒロさんは無事で済むんだろうか……。何とかしないと。

「もう行ける？」

テル君が玄関に続く廊下に立って振り返った時だった。

ピンポン。

「誰だろう……」

こんな時間に、インターホンが鳴るなんてかなり珍しい。勧誘だろうか。私のすぐ傍、壁にかかっている電話を取り上げるとモニターにはつと光が入る。その白黒の映像を見て、びっくりした。

大きくていかつい身体を少しだけ丸めて、きよろきよろと左右を見ながら手に持ったハンカチで額を拭っている。外は朝だというの

に夏の熱気でもう暑いに違いない。今日も太陽はさんさんと輝いている。五分刈りの髪に太い眉毛。このモニターの映像はそれほど鮮明ではないけれど、よく見知っている人物を見間違うはずもなかった。私はその名前を、無意識に叫んでいた。

「ヒロさん!？」

「いいですか！？　くれぐれも落ち着いて、冷静につ。お願いします」

「分かっているつ。さっさと入れろ」

廊下で腕を組んで仁王立ちしている美しい大男に向かって、私は何度も懇願してから、おそろおそろ玄関の取っ手を掴んだ。そうつとドアを開くと、腰をがっくり折って頭を下げた状態のヒロさんが見えた。

「ヒロさ……」

「ごめんつ。唯ちゃん、ほんつとくにごめん！」

私はヒロさんの後頭部を見つめて、なんだかとても申し訳ない気持ちになってしまった。

「そんな、ヒロさん。顔を上げてください」

だけどヒロさんは腰を折った状態のまま続けた。

「あいつから連絡あったんだ。もうばれてるよって言われて。最初からこんな事するべきじゃなかった！　申し訳ないっ」

「良いんです。何か事情があったんですよね？　と、とりあえず中に……」

次の瞬間、私は自分の耳を疑った。というか、驚きすぎて耳がもげるかと思った。

「ヨーコ！」

それはタロさんの声だった。心底嬉しそうな声。

……はい？　今なんて？

私の横をずっと大きな影が通り過ぎる。

「ヨーコッ！」

「うがつ」

「ヨーコっ。ほんとにヨーコだあっ」

ちょ、ちょっと待って……。

私の頭は目の前の光景を見て、どっと慌てふためいてぐるぐるとパニックに陥った。

何。何が起こったの。

モデル並に恐ろしく容姿の整った大男が、いかつい身体をした男性を思い切り抱き締めている。

タロさんはヒロさんよりも背が高かった。ヒロさんの太い両腕が、わたたと空を切つてもがいている。その上テル君までもが、ヒロさんのおなかのあたりにぎゅっと抱きついていた。

まさか、そんな。

ヒロさんは両手に力を込めて、よいしょとタロさんを押しやり、なんだなんだと言いながら顔を上げて、それから驚愕の表情でぴたりと固まった。

「あ！　うわあぁっ！？　お前っ。おまつ！　ええつと……カラス

「!？」

タロさんが顔をくしゃつとさせた嬉しそうな笑顔で頷いている。
そんな、ちよつと待って。だってヨーコさんは……。

「う、嘘だろっ!？ えっ。テ、テル!？ な……なんでっ」

わなわなと肩を震わせるヒロさんをじいつと見上げていたテル君が、ぽつりと呟いた。

「ヨーコって男の子だったんだね」

なっ……!？

「なんでっ……どうしてお前ら唯ちゃんのとこにいるんだよ!？
ちつとも変ってないし!」

「ああ……ヨーコ。覚えていてくれたのか？ また会えて嬉しいぞ。

……それにしても随分と遅しくなったな」

「僕、昔のヨーコのが良かったなあ」

「おいっ！ その名前で呼ぶのやめてくれっ。とりあえず離れてくれよっ」

そこでようやく三人は私の方を振り返った。全員の顔色がさつと青ざめる。

「……ユイネ？」

「唯ちゃん、あの」

握り締めていた拳がぶるぶると震えている。何とか冷静さを装って声を絞り出した。

「……ど、どういう事か、説明、してくださいすよね？」

タロさんが目を見開いて、まばたきを何度か繰り返す。その表情はどこか間が抜けていて、可愛らしいものだった。

*

かしわぎさえ
柏木紗枝。

それが、私がヨーコさんだと思っていた綺麗な女性の本名だった。ヒロさんとは大学時代からの友人で、今回の件で急遽助けを求めたのだという。何でも当時から大の親友であり、ヒロさんに将来奥さんとなる女性を紹介したのもこの紗枝さんだったのだそうだ。そして唯一、ヒロさんの家族以外でヒロさんの「とある事情」を知っている人物だった。だからこそ「ヨーコさん騒動」の折り、ヒロさんはこの昔からの親友に、土下座せんばかりの勢いで「身代わり」を頼んだのだった。

「紗枝はさ、さばさばした性格で何でも話せる男友達みたいなものなんだよ。あいつに言ったら失礼だって言われるけど。あの話を話したのはこっちの大学に行ってた頃だったなあ。あいつが俺んちに遊びに来て酒飲んで、たまたま引き出しの奥にしまってあった写真を見つけちゃったんだよ」

それはワンピース姿の美少女が一人映っている、古ぼけた写真だった。

「俺ね、その事はだーれにも、ぜーったい、ひとつことも言った事なかったんだよね。あんまり思い出したくもない事だったからさ。写真だって全部始末したと思ってたんだから。だけど何でかなあ、酒飲んでたからかもしれないけど、ついぼろっと言っちゃったんだよね」

うわ。なにこの美少女！ しかもふっるーい写真。こんなの後生大事に持つてるのあんた。何、初恋の人？ とにたりと笑いながら、からかい気味に聞いてきた紗枝さんに対し、ヒロさんはその時ばかりは何故だか胸を反らせて自慢げに、こう答えたのだそうだ。

ああ？ そりゃ、俺だよ俺！ かわいいだろう！

私は大きく息を吐き出して椅子の背もたれにゆっくりと身体を預けた。めまいすら感じて、無意識に額に手をやった。

「ヒロさんが、ヨーコさんだったなんて……」

それじゃあ私は随分最初の段階で、目当ての人と会っていた事になる。それこそタロさん達がやって来る前からヒロさんと交流があったのだから、私はずっとヨーコさんと時を同じく生活していたのだ。

テーブルを挟んで向かいに座っているヒロさんが、大きな身体を縮めてしゅんとする。

「……ごめん。もう本当に、ごめん」

ヒロさんがどうして子供の頃、女の子の格好をしてヨーコと名乗っていたのか。

ヒロさんのお父さんは古き良き日の昭和そのままの、あの農村で喫茶店を営んでいた。お母さんもいて、ヒロさんの上には三人のお兄さんがいた。ヒロさんは末っ子である。兄弟たちは年が近く、上の兄はよく店の手伝いもしていたのだそうだ。しかし末っ子ともなると常に自分中心で、また活発だったヒロさんはちつとも親の言いつけを守らない子供だった。悪ガキである。宿題をせずに学校に行くのもしょっちゅうだし、友達に悪戯したり、店で扱うものをつまみ食いする事もあった。お母さんはそのたびにヒロさんを叱り、ヒロさんはそのたびにもうしませんと誓いを立てた。しかしその誓いはもって数日。あっさりと破られてしまう。

そんな日々の繰り返しの中、お母さんがある時こう言った。

「ふう……そういや私、本当は女の子が欲しかったのよ。全くぜんぶ、男が生まれてきちゃったんだから」

唐突の言葉にヒロ少年はぼんやりとお母さんを見上げた。今も学校の連絡帳に記されていた、『元氣があるのはいいが授業中も騒がしい』という先生の指摘をネタに叱られている最中だった。

お母さんがにひひと笑った。嫌な予感がして逃げ出そうとしたところを、捕まえられる。うわーだのやめろーだの、ヒロ少年は必死になって抵抗したがあえなく失敗。

「これから言いつけ守らなかつたら、こうするからね!」

そう言つて鏡の前に立たされた自分。そこにはスカートをはいた女の子がいた。

ヒロ少年はぎょつと驚いてからむつとして、急いで服を脱ごうとするが。

「それ脱いだらゲンコツだよッ!!」

お母さんの言葉にはたと手が止まる。お母さんのゲンコツは本当に痛い。泣きたくないのに涙が出るのだ。痛くて痛くてじんじんして、それはそれは鬼の所業のように怖い。これからはそのゲンコツのかわりにスカートををはかされるといふ事か。だったらまあ良いや。痛くないし。こっちの方が全然楽なんだ。

ヒロ少年はふん、と鼻を鳴らして大声で答えた。

「女のかつこなんて平気だもんねー!」

スカートをひるがえし、野山を元気に駆け回った。しかし友達にこんな姿を見せるわけにはいかず、そんな時は知り合いの目から隠れるようにして遊んでいた。見知らぬ大人や馴染みのない人達の前では女の子を装ったりもした。やっぱり恥ずかしかったから、本名の「洋^{ひょう}」と言わず、「洋子^{ひょうこ}」と名乗ったりもした。

どういうわけかヒロ少年の女の子姿は家族に評判が良く、特にお母さんは良く似合うと言って喜んだ。悪乗りしてかつらまで買ってきて、「ようこちゃん」と呼ばれる事もしばしばあった。

だけれどもヒロ少年も子供とはいえ、いっぱしの男である。

懲りずに忘れ物やらつまみ食いやらを繰り返し、そのたびにスカートををはかされるようになり、だんだんと本気で嫌になってきたのだ。

こんな事ならゲンコツの方が良いかもしれない。いや、やっぱり

あれは嫌だ。ではどうすれば良いのだろう。それは自分が宿題をやらずに学校に行ったり、授業中に騒いだりするのを止めれば良いのだ。

何故だかそれでもやってしまう。そんな自分にも腹が立つし、嬉々として自分を女の子にしようとするお母さんにも少しずつ不信感を抱くようになった。もしかしたらお母さんは本当に、男じゃなくて女の子が欲しかったんじゃないだろうか？こんなに聞きわけのない悪ガキの「ひろし」よりも、お人形さんのようなかわいい「ようこ」が良いのだろうか……？ ヒロ少年の心に、暗い影が落ちた。スカートををはかされて「ようこ」になる日は、誰にも見られないようにひっそりすごそうと思うようになった。

何せ「ようこ」にならなければいけない時は、自分が屈辱を感じる時だからだ。駄目だと言われている事をしたりするのは自業自得で、そんな自分が情けない。だったらそんな服脱いでしまえば良いとも思うのだけれど、見つかってゲンコツされたら嫌だ。その上お母さんが嬉しそうにしているからそれがまたがっくりくる。心が成長しつつあるヒロ少年にしてみれば、それは言葉では表現し尽くせない程の敗北を感じさせるものだったのだ。

それからは裏山の神社で一人、時間を潰すようになった。

その頃だった。古ぼけた鳥居のある人外様の神社で、一人ぼっちで遊んでいる小さな女の子を見つけたのは。

私はヒロさんが一生懸命説明してくれた話を聞いて、ヒロさんの両隣に座っているタロさんとテル君にちらりと視線を向けた。二人はうつとりとヒロさん（「ヨーコさん」）を眺めて幸せそうにしている。

って……おい。それで良いんですか。

と、決して口には出せない突っ込みを入れてから口を開く。

「あの……二人とも。気付かなかったの？ ヨーコさんが本当は男の子だって」

おかしいでしょう。世界を統べるかみさまともあろう者が。しかし平然と、さも当然のようにタロさんがさらりと答えた。

「あの頃はひどく弱っていた。直前に大量の『負』を昇華させていたから余計にな。そんな気配すら見分けられん程だった」

「だってヨーコ、すっごく可愛かったもん。ね？」

「だ、だから、もうヨーコって呼ぶなっば」

ああそうですか。もう……。がつくりとうなだれてしまう。

あの当時、ヨーコさんが抱えていた何らかの闇の正体は、こういう事だったのか……。

お母さんは怒鳴ってもゲンコツしてもちっとも懲りないヒロさんをどうしたものかと考えあぐね、ちよっとした悪戯心で始めただけなのだと思う。悪気はなかった。だけどヒロさんにとってはそれがとても深刻で重大な問題になってしまったのだ。現に当時の出来事がちよっとしたトラウマになり、中学に上がってすぐに空手部に入部したくらいだ。

今ではあの美少女の面影は欠片もないくらいに大きな身体をしている。

「でも、どうしてわざわざ紗枝さんに頼んでまで……嘘を？ 私、小さかった頃によく遊んでもらってたお姉さんがヒロさんだったって聞いても、変に思ったりなんかしませんよ。何だか妙に納得しちやったくらいです」

あのヨーコさんの明るさと優しさは、ヒロさんが持っているもの

と同じだ。言われてみれば分かる事で、容姿は変われどその本質は変わっていなかった。

ヒロさんはうう、と唸ってお茶を飲んで、また私に頭を下げた。

「だからね、もうごめんとしか言いようないんだ。……男の意地つてやつだよ」

私を見るヒロさんは、歯痛を起こしているような何とも言えない表情で続けた。

「どーしても、唯ちゃんには知られたくなかったんだ。俺が女の子のかっこして、それがあの時のお姉さんだってさ。分かってるよ。唯ちゃんがそんな事で人を変な目で見たりしない事くらい。だけど、どーしてもさ」

それから腕を組んで、ぶんぶんと首を振った。

「いやっ！俺のそんな薄っぺらいプライドのせいでみんなに迷惑かけちゃったんだもん！紗枝がこっちで唯ちゃんと会った後、すぐ連絡くれてさ。その電話を奥さんに聞かれちゃって、ものすごく怒られたんだ」

私はふと、ヒロさんの奥さんを思い浮かべた。笑うと鼻に小じわが寄って、子リスみたいに可愛い奥さん。

「あんなに唯ちゃんが真剣に探してたのに、どうして黙ってたんだって。そのうえ嘘ついたなんて許せないってね。あ、俺、奥さんにも今まで言っていなかったから、余計に怒っててさ。ケツひっぱたかれて、謝ってこいって店追い出されたんだ。……ごめん」

いかつい身体をしおしおとしおれさせるヒロさんに思わず、同情してしまう。

「もう、謝らないでください。良いんです。私の分まで奥さんが怒ってくれたみたいだし……」

するとほっとした表情を浮かべ、ぼつりと呟いた。

「なんていうか、初恋の相手には情けないこと知られたくないだろう？」

私は驚いてヒロさんを見つめた。ヒロさんはへへへと笑って、頭をかく。

「なーんかさ、唯ちゃんすつごく可愛かったんだよ。いつつもお母さんの事心配してて健気だね。俺ガキだったけど、守ってあげたくなって多分、初めて思ったんだ」

そう言ってヒロさんが穏やかに笑った。じっと目元を見つめていと少しだけ、ヨーコさんの面影が重なった気がした。

「唯ちゃんは俺の初恋の人なんだ」

ヨーコさんの朗らかで元気な笑顔。

神社の裏でいつも遊んでくれた。お姉さんはもの知りで、色んな事を教えてくれた。色んな遊びも教えてくれた。おやつと一緒に食べたりもした。その光景を思い出す。

ああ……私は一人じゃなかった……。

爽やかな風が心に吹いた気がした。それがうんと優しく、胸がじんわりとあたたかくなった。

「それはそうと、おっどろいたなあ！ お前ら一体何なの！？」

ヒロさんが大きな声を上げてタロさんとテル君を交互に見やる。

「言っただでしょ？ こいつ人外様だつて。僕だつて人間じゃない。だから、年をとってないでしょう」

テル君の言葉に、ぱかっと口と目を大きく開いて固まるヒロさん。

「結婚の約束したんだよ？ ヨーコが大人になったら迎えに来てねって言っただから、だから、来たんだ」

硬直しているヒロさんに構わず、テル君がにこにここと説明を続ける。タロさんは難しい顔をして腕を組み、うんうんと大きく頷いている。私はそれをひやひやしながら見守っている。

「う………そ、だろ？」

ああどうか、ヒロさんが倒れてしまいませんように……。

「ほんとうだよ。ヨーコがああ珠をユイネに渡したから、僕達ずっとユイネといたんだ」

ぎぎぎ、とヒロさんが首を動かして、驚愕の表情で私を見る。私はごくりと唾を飲み込んで、一つ、頷いた。

「ひ、ひいえええっ」

がたた、と椅子を大きく鳴らしてヒロさんがよたつきながら立ち

上がった。そのまま後ずさって背後の壁にぴたつと張り付く。

「あり得ないっ！ そんなのあり得ないだろッ！！」

「あり得ないもくそもあるか。ヨーコ、忘れたとは言わせないぞ。俺との約束を違えるつもりか」

ドスのきいた低い声に、ヒロさんがぎょっと目をむいた。

「そ、そんなの本気にするかよっ！？ 俺は子供だったんだぞっ！
もうそんなに覚えてないしっ。む、無理に決まってるだろっ」
「……ほう。神に向かって言い訳しようというのか」

タロさんは椅子に座って腕を組んだまま、じろりとヒロさんを睨みつけた。するとヒロさんはぶんぶんと首を振って、あり得ないっ、とまた叫んだ。

「ま、待て待てッ。そもそも俺、男だぞ！？」

「そんなものはどうとでもなる。異能の力があればな。……ヨーコ」

凶悪な笑みを浮かべたタロさんがゆっくりと立ち上がる。ま、ま
ずい。ヒロさんが危ない気がする。まさか、拉致……。
私も慌てて席を立った。

「タ、タロさん待ってくださいっ。お、おお、落ち着いてっ」

がしつとタロさんの腕を掴んだ。するとタロさんは片眉を上げて
私を見下ろす。

「なんだ。俺は落ち着いているぞ」

「まっ、まずは話し合いましょう！！」

壁にぴったりと背をつけたままのヒロさんが叫んだ。

「そ、そうだつ！ 俺にはもう家族がいる！」

ぎゅっ、と私の心臓が縮まった。ぴたりとタロさんの歩みが止まる。

「愛する奥さんと子供がいるんだあッ！ だから無理なんだよつ。悪かった！ 悪かったよ！」

私は咄嗟に両腕でタロさんの大きな身体にしがみついた。

「タロさんっ」

ああ……。せっかく出会えたのに。ずっとずっと、それだけを心の拠り所にしてあの暗く冷たい孤独の中を、じっと耐え続けていたのに。気の遠くなるような永い時をたった一人で……。

ヨーコさんは、ヨーコさんとのあの思い出は、タロさんの全てだったのに。

「だ、大丈夫ですつ。何か良い案がきつとあるはずですよ！一緒に解決策を考えましょう！」

ずっと探し求めていた半身は、もう手の届かない人になってしまっていたなんて。きつと傷ついたはずだ。ショックに決まってる…。

しがみついているタロさんの身体が、小さく震え出した。どうしよう。な、泣いちゃったの……？

なんて声をかけたら良いのだろう。うまい言葉が思いつかない。ああ。私の馬鹿っ！

タロさんの震えはだんだんと大きくなる。私はより一層力を込めてその大きな身体を抱き締めた。

「タロさ……」

「くっ……くく。ああ……もう無理だ」

……ん？

見上げるとタロさんは片手で顔を覆って、ぶるぶると肩を震わせていた。その頬に涙が伝って……いるわけではなく。

「少し脅かしてやろうと思ったんだがつ……ははは。ヨーコ！なんだその顔はっ。お前らの慌てっぷりは傑作だ！」

そう言って、がはがは笑い出した。

「もういじめすぎだよ。タロちゃんてば」

呆れたようなテル君の声。

呆然とする私とヒロさん。

タロさんは笑いながら私の頭をわしわしと撫でて言った。

「今更本気でどうこうするつもりはない。ヨーコを見た時から分かっていた。あいつにはもう守るべき者がいるとな。そうしがみつかなくとも、何もしないぞ。からかったただけだ」

私は一気に赤面して、がばつとタロさんから離れた。

「ひどいですつ。わ、私タロさんがショックを受けたと思って！」

「くっ……すまん……くくく」

「タロさんっ！」

「なっ、んだよもー。俺、殺されんのかと思っただるお」

ヒロさんがずるずるとその場にへたり込んだ。

ひとしきり笑って気の済んだタロさんは、ゆっくりとヒロさんに向き直る。

「ヨーコ……いや、ヒロシがお前の本当の名だな。お前は今まで通り、人として真摯に生き、愛すべき家族を大切にすることが良い。この世に人として生を受け、年を重ね命を全うする、その尊き道を歩め。俺は遠き地において、それを見守り、見届けよう」

その声は穏やかで、そして力に満ち溢れたものだった。

*

真上にある太陽が容赦なくアスファルトを焦がす。

真夏のお昼時の気温は殺人的で、一步外に出た瞬間に汗がじわりと浮かんだ。駅の改札口から出て来る人々は日陰から出た途端、一瞬だけ顔をしかめる。

とにかく、暑い。日差しが痛い。

「いやー、でもほんと驚くなあ。こんな事ってあるんだなあ。誰かに言いたいけど、きつと信じてもらえないだろうなあ。神様がほんとに実在するなんてさ。俺だってまだ信じられないもん」

ヒロさんがハンカチで汗をふきふき、感慨深げに呟く。

最寄りの駅まで全員でヒロさんを見送りに来たのだけれど、タロさんは暑くてたまらんと行って私の日傘を差している。

「ヒロシ。元気だね。会えて良かった」

テル君がヒロさんにきゅっと抱きついた。つやつやの茶色の髪を撫でてヒロさんが笑う。

「おう。お前らも元気だな。帰るんだろ？ その、何とかっていう自分の星にさ」

タロさんもテル君も、ヒロさんには説明しなかった。守り人が、半身を必要としている事情を。

「唯ちゃんにはたくさん迷惑かけちゃったからなあ。今度来たら必ず店寄ってくれよ。ばっちりおごる」

「ありがとうございます」

「じゃあな！ お前らも時間あつたら店に来いよ！」

「ああ」

大きく手を振りながら去っていくヒロさんに手を振り返す。私の隣にはタロさんとテル君がいて、私達はヒロさんの背中が見えなくなるまで、じつとそこに佇んでいた。

「……あの」

何か言葉をかけたいのに、ちつとも頭に浮かんでこない。

ヨーコさんと再会出来たのは良い。だけどヨーコさんはヒロさんでもう家族がいて、タロさんの半身になる事はないのだ。

魂の伴侶を失ったのだ。

二人はそれをあつさりと受け入れてしまった。

でも本当は、ショックだったに違いない。落ち込んでいるに違いない。

私は結局タロさんとテル君の役に立ててない気がする。どうすれば良いんだろう。探しても探しても、答えが見つからない。複雑な迷路に迷い込んでしまったみたいに、私はおろおろとした。

ああどうしよう。何て言おう。

「あのっ」

「……ユイネ」

あ……。

心臓が、大きく跳ねた。

大きな手が、私の手を包み込む。

少し骨ばった長い指が、私の指に絡まる。

全身の血液がどどど、と駆け廻って、顔に熱が集中する。

「……ヨーコが漆黒の珠を渡した相手が、お前で良かった」

整った美貌が私を見下ろしている。

「お前でなかったら、俺はどうなっていたか分かん。お前のおかげでこうしてヨーコとも再会出来た。……感謝している」

彫が深く、男性的な輪郭に鋭い黒の瞳。それが見ている間にくしやつと皺を寄せて、可愛らしい笑顔になる。

私は息をするのもやつとの状態で、その笑顔に見惚れた。

「だからぐちゃぐちゃと余計な事を考えるなよ。お前は阿呆だからな」

「なっ……」

「この俺がここまで言ってやっているのだ。素直に喜んでいれば良い。分かったか、ユイネ」

美しい顔がぐつと近づいた。鮮やかな黒の瞳が私の目をのぞき込む。

私はタロさんの顔から目を逸らす事も出来ず、赤面したまましばらくと口を開いた。

「分かったなら返事をしろ」

「……はい」

「よし。……暑いな。さっさと帰るぞ」

ぐい、と手を引かれて歩き出す。繋いだ手から、指先から、タロさんの体温が伝わってくる。

あつい……。

顔も指も腕も、身体全部。あつくてたまらない。

「ねえお昼ご飯さ、冷やし中華で良いよね」

先を歩いていたテル君が振り返った。天使のように可愛い男の子は、夏の熱気のこもる暑さの中でも爽やかでとっても綺麗だった。

*

『私もね、言ったんだよ。こんな事したってすぐばれるもんよって。だけどヒロの奴が、どうしても頼むって。一生のお願いだーってうるさく叫ぶから。でもやっぱり引き受けるんじゃないかって後悔したの。だって唯音ちゃんがとっても優しい感じの子だったから……ごめんね』

その日の夜、私は教えてもらっていた番号に電話をかけた。今日ヒロさんがわざわざうちまで来てくれた事を話すと、そっか、と言って説明してくれた。紗枝さんは事前にヒロさんと打ち合わせをして、子供の頃の思い出とかその当時の私の様子とかを、色々教え込まれたのだそうだ。

「良いんです。その事はもう……ヒロさんにもたくさん謝ってもらいましたから。紗枝さんにもご迷惑かけてしまって。何だかすみません」

電話の向こうから朗らかな笑い声が届く。

『唯音ちゃんが謝る事ないわよ。あ。そうそう、モデルみたいに綺麗な二人組？ 唯音ちゃんの親戚の方らしいけど、もう怒ってない？』

「え？」

『あの日ね、長髪で背の高い男の人がね、私の事睨みつけて言ったの。お前はヨーコではないな、唯音を騙してどうするつもりだ、何を企んでいるんだって。もう私一気に冷や汗かいて、十年分寿命が縮まったんじゃないかってくらいびびったもの。慌てて謝って、自分分は友達に頼まれて、悪さをするつもりはないんだって説明したんだけど。あれは怖かったなあ』

それから紗枝さんの仕事の話や私の職場の話をして、今度飲みに行く約束をして電話を切った。一つ息をついて、ちらりとソファに目を向ける。そこにはタロさんとテル君が仲良く座っていて、テレビゲームをしていた。プレイヤーが協力し合って怪獣を倒すゲームだ。

今日はヒロさんが来て、彼がヨーコさんだと分かって、それで半身には出来なくなつて……色々あったはずなのに二人はいつもとちつとも変らない。本当は落ち込んでいるのにそれを隠している、という風でもない。これからどうしよう、と困った様子もない。……不思議だ。

そろそろ背後から近づいて、しゃがんでソファの背もたれに両手をつく。

「……面白そうだね」

「うん。今ね、こいつ倒せばここクリアするんだ」

テル君が前を向いたまま答えた。色白の綺麗な横顔はとっても真剣。食い入るように画面を見つめる瞳は無邪気そのもので、私は思わず微笑んだ。

「私も、やってみたいなあ……なんて」

「駄目だ」

すかさず鋭い声がとんだ。タロさんが横目でじっと私を睨んでくる。

「以前やったのを忘れたのか。お前は弱すぎて話にならん」

「い、いや、あれは別のゲームだったから。これなら平気かなあ、なんて」

「却下だ」

一言でばっさり切り捨てられてしまった。二人はまたテレビゲームに没頭する。

うつ……。寂しい。

でも本当は、一緒の時間を過ごせるだけでも嬉しくて仕方ない。そのうち二人は帰ってしまうのだろうか。……その時は、私もうんと協力しよう。

タロさんはかみさまだ。

異能の力を駆使して世界の均衡を守り、扉を守る偉大なかみさま。ガルクループではタロさんを待っている人達がたくさんいる。だから異世界のすみっこにある一般人で凡人の私の部屋で、こうしてテレビゲームをしていて良い訳がない事はよく分かっている。

だけど、私の本音は……。

ぎゅっとソファの背もたれを掴む。緊張して、どくどくと心臓が暴れ始める。

「あの……」

掠れ声しかでない。何気なく、呟く感じを装って話したいのに声が震えてしまいそうだ。

「私……二人がガルクールプに帰るなら、うんと気を届けられるように頑張ります。新しい伴侶を探すなら、一生懸命手伝います。だから……あの……」

ぐつと唇を噛み締めて、覚悟を決める。

「今はまだ……もう少しだけ、ここにいてくれませんか。わ、わたし……まだタロさんとテル君と、一緒にいたいんです」

言い終らないうちに二人が同時に振り返った。目をまん丸にして、心底驚いた表情。

「あつ……め、迷惑ですよ。そんな……」

のぼせてしまいそうなくらい、赤面した。

「……良いの？」

テル君が華奢な身体を乗り出して、私にぐつと近寄った。その時。

がおおおお！ どどーん。ちゃらちゃらり〜。

はっとする。テレビ画面に大きく、「GAME OVER」の文字。

「なっ」

「ユイネ！」

がばつとテル君に抱きつかれ、タロさんが勢いよく立ち上がる。

「ユイネきさまっ！ あともう少しでクリアするところを！」

え。そこですか。

「すみませんっ。うわわっ」

可愛らしい男の子が私に頬ずりをしている！ ぎゅっと抱きつかれて、頬ずりされている！

うわああ！

「テ、テル君！？」

耳元で掠めるように、テル君が綺麗な声で囁いた。

「嬉しい……。好きだよ、ユイネ」

あ。もう駄目。心臓がもたない。

074（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

ヨーコさんの事は当初より設定済みでした。色々期待を裏切ってしまっていたら申し訳ないです。

タロさんだいぶ大人になってきました。お礼言えるよ。

もちろんユイネも成長してます。ふーちゃんのおかげです。

次話より、この物語の最後のエピソードです。

また少し更新があいてしまうと思います。すみません。

二人の間にはまだ越えねばならない山があります。それを乗り越える勇気があるのか否か。

のろのろだらだら続くお話についてきてくださる方々には本当に力をいただいております。

ありがとうございます。

ではまたこの物語の最後にお会いできますように。

075（孤独な魂）

それは何の前触れもなく、突然におとずれた。

ちゃんと理解しているはずだった。分かっているつもりだった。いつまでも一緒にはいられないという事実。

だけどあと少し。あともう少しだけなら……。

この穏やかな時が、あたたかな時が、ずっと先まで続いて欲しいと矛盾する想いを抱いたまま。

いずれ必ずやって来るはずの結末に蓋をして、見ないようにして、背を向けたまま……。

その日は突然に、おとずれた。

*

「あのね、先週彼氏と別れたっていったじゃない？」

「あー浮気されたってやつ？ ひどいよねえ！」

「うん……でね、実は……今また彼氏が出来たの」

「え！ まじで！？ ちょっと何それえ！ 相手誰よ」

「それがね、ずっと元カレの事で相談にのってもらってた男友達なの。別れた後とかも優しく慰めてくれて、それで……」

「あー分かった！ 実は前から好きだったんだ、とか言われちゃって？」

「あ……うん。そうなの」

「うわーすごい！ 良かったじゃない！ 良いな。もう、今日はおごってよねえ」

「へへ。良いよおごる。先週はヤケ酒に付き合ってくれたもんね」

「やった。じゃ、早く行こ。お疲れさまでーす」

「お疲れ様です」

仕事終わりの更衣室。私の後ろを良い匂いのする二人組が通り過ぎていった。皆賑やかにおしゃべりをしながら制服から私服へと着替え帰っていく。いけないと思いつつ、つい聞き耳を立ててしまった。

なるほど。失恋して傷心中の相手を優しく慰める。それから、実は、と告白……。

私は一人、勝手に赤面して俯いた。

ロッカーの前、備え付け小さな鏡に映る自分の顔。少し情けない表情をしている。横に流した前髪をちゃんと引っ張って扉を閉めた。でも、どうだろう。そんなの強気で俺様な人物に通用するのだろうか。しかも相手は世界を守るかみさまだ。胸がじわりと締め付けられる。いつも想いは同じところをぐるぐると廻って答えに辿り着かない。

そもそも私に、そんな事を言う資格があるのだろうか。
かみさまの半身になれる資格が、あるのだろうか……。

会社の表玄関の自動ドアが見えるところまでやって来て少し目を細める。夕暮れ時のオレンジ色の太陽の光。先に立っている人達のシルエットがいくつか見える。

「あ！ 倉田さん。ちょっと」

その中の一人が私を見て手招きをした。シフォンのふんわりとした涼やかなブラウスに黒のスリムパンツ、ヒールの高いサンダル。ブランドもののバックを肩にかけたおしゃれな出で立ちの矢崎さんだ。

「お疲れ様です。……どうかしたんですか？」

言いながら視線を先に巡らせて、驚いた。

「良かった。今呼びに行こうと思ってたの。あの子、倉田さんを待ってるんだって言うから」

四、五人の華やかなOL達に囲まれて、色白の男の子がいる。細身のおしゃれなシャツにジーンズ。

「……テル君」

「知り合い？」

「あ、はい。親戚の男の子で……」

「そうなんだあ。すっごい可愛いからびっくりしちゃった」

矢崎さんと言葉を交わしながら自動ドアを通り抜ける。テル君が私を見てぱつと笑顔になった。

あ……か、可愛い。じゃなくって。

「ユイネ。お疲れさま」

「テル君、どうしたの？」

傍まで行くとテル君がそつと私の腕に触れた。

「ごめんね。こんなとこまで来ちゃって」

「うっん。良いんだけど……」

「倉田さんの親戚なんだってね！　可愛いよねー」

「ねえ、モデルとかしてるの？」

「中学生？」

「日本人？ ハーフなの？」

「あ。ええと……」

周りにいた同僚や先輩が私とテル君を取り囲んだ。これは、お姉さま方の格好の餌食だ。……ここは一気に突破しないと、いつまでたっても抜け出せない状況に陥ってしまう。テル君がわざわざ職場まで来たのだ。何かあったに違いない。私は鼻から大きく息を吸った。よし。

「そ、そうなんです。親戚でモデルで中学生でハーフなんですつ。じゃあ、お疲れ様でした」

ぺこりとお辞儀をしつつテル君の手を取って、じりりと横へ移動。その時、

「ほおら！ 私達も帰りましょ。目の保養はこれでおしまいです！」

矢崎さんの一声。ああ……さすがです。

私が振り返って会釈をすると、矢崎さんはにやりと笑って片手を振った。

「あーびつくりしたあ。すごいパワーだね」

爽やかに笑うテル君を見下ろして、そうだね、と苦笑する。

「どうしたの？ 何かあったの？」

「うん。あのね、コーイチが交通事故に遭ったんだ」

「えっ！」

驚いて立ち止まった。さ、笹本さんが！？ 交通事故。そんな……

…。

「つていつでも怪我はかすり傷程度だから大丈夫だよ」

その言葉に止めていた息を吐き出して、心の底からほつとした。
テル君が私の手を取って、大丈夫だよ、ともう一度言った。

「よ、良かった……」

動悸が早まってしまった胸に片手を置いて、何度か深呼吸をした。

「コイチが横断歩道を渡っててさ、右折してきた車と接触したんだ。たまたまその現場に僕とタロちゃんがいてね、僕が病院まで付き添ったんだよ」

「えっ。そうだったの」

「駅の反対側に総合病院あるでしょ？　そこにいるから、これから行く」

「うん」

通りの街灯が点き始め、ゆっくりと夕闇が世界を包んでいく。目の前の信号が、赤く変わった。

*

空調のきいたフロアには人がまだまばらにいた。足早に通り過ぎていく白衣の人とすれ違う。私は病院が、あまり好きではない。とはいっても病院が好きだという人の方が珍しいだろう。

「三階なんだ」

エレベーターの扉は三つ。分厚くて頑丈そうな扉。テル君は表示板を見上げていた。私はテル君とずっと手を繋いだままだ。テル君が私の手をぎゅっと握っている。

私は会社からここへ来る間中、何か良く分からない、言い知れぬ違和感を感じていた。それが何なのか今やっと分かった。テル君の口数が少ない。

おしゃべりという訳ではない。だけどテル君は聞き上手で話し上手なのだ。今日何があったとか、こんなテレビを見たとか。仕事はどうだったとか、お昼は何を食べたの、とか……。テル君と顔を合わせればそんな他愛ない会話のやりとりをするのが普通だった。なのに今は、必要な事以外口にしない。私から話しかけてもそれに答えるだけ。どうしたんだろう。

「テルく……」

「あ。来たよ」

白い廊下に光が差した。杖をついた老婦人と、見舞いに来たのだろう娘さんがぺこりと会釈をして降りていく。奥ゆきのあるエレベーターへと乗り込んで、テル君が三階のボタンを押した。

「コイチの病室はエレベーターを出て右。ナースステーション通り過ぎてすぐの部屋だよ。名前出てるから」

「うん……」

何とも言えない不安が、心をよぎった。

チン。

古風な音が鳴って、目の前の重厚な扉がゆっくりと開いていく。
私が先に降りた。その時、テル君が繋いでいた手をするりと解いた。
すうつとぬくもりが消える。

テル君はエレベーターの中にいた。

「テル君？」

「ごめんユイネ。僕、先に帰ってるから」

「えっ。ど、どうして？」

分厚い扉がゆっくりと閉まり始める。テル君がうつすらと微笑んでいる。息を飲む程に美しく、儚い微笑。ざわりと胸が騒ぐ。

テル君のおおきな黒の瞳。そこから一筋、涙がこぼれ落ちた。

「テル君っ」

しんと静まり返ったフロア。中途半端に片手を上げた私が一人、ぼつんと取り残された。

どうしたの。一体何があったの。台風のように胸の中がざわざわと騒ぐ。

私は何かに急かされるようにしてナースステーションを見つけてその前を通り過ぎ、「笹本紘一」の名札のかかるドアをノックした。返事を待たずにノブを回す。

「あれっ。唯音さん!？」

白いベッドに上半身を起した状態の笹本さんがいた。左の額にガ―ゼ。左手首に包帯。身体は薄青色の検査着に包まれている。

「笹本さん！ 大丈夫ですかっ」

勢い込んで傍まで行くと、笹本さんは目を大きくして驚いた。

「怪我はっ!」

「あ、あの、大丈夫です。おでこにかすり傷と手首をひねっただけで……」

「ああ……そうですか……。良かった」

大きく息を吐き出しながら、ベッドの脇に両手をついて脱力した。テル君の言ったとおりだ。……じゃあこの不安はどこから来るんだろう。

「……すみません。びっくりさせちゃったみたいですね」

笹本さんの穏やかな声が聞こえて、私は顔を上げて笑った。

「いえ。私も大げさですよ……すみません。テル君に聞いて来たんです」

「ああ。そうだったんですね。今日一日は念のため病院で過ごす事になりました。何でも病室が空いてないそうで、急遽ここに押し込まれたんです。あ、その椅子に座って下さい」

それでようやく周囲を見渡して、なるほど思った。がらんとした空間に、運び入れたらしいベッド。脇には背の低いキャスター付きの戸棚があり、その上に眼鏡とペットボトルが置かれている。笹本さんの黒ぶち眼鏡は、片方のレンズにひびが入っていた。部屋の隅の方にホワイトボードがある。元々病室としては使われていない部屋のようなのだ。

「本当に大丈夫ですか？」

くどいと思いながら、やっぱり聞かずにはいられなかった。笹本さんは大きく頷いて笑う。

トレードマークである黒ぶち眼鏡をかけていない笹本さんは、少し年上の雰囲気がある。やっぱり疲れているようで、よれつとした笑顔を浮かべている。あまり長居しない方が良さだろう。

「はい。それが、びっくりするくらいぴんぴんしてるんです。一応レントゲンとか頭の方も検査してもらったんですけどね。先生の話だとまったくもって健康体だって」

事故にあったのは数時間前。バイト先のコンビニへ行こうと横断歩道を渡っていた時、左側からやって来た車にはねられたのだ。

「俺、絶対死んだと思いましたよ。だってぶつかったワゴン車、か

なりへこんでたらしいんです。運転してた方も完全に轢いちやっただって思ったらしいですから」

ざわつ、と悪寒が全身を貫く。怖い。何でだろう。どうして……。

「全身痛いつていうか、熱いつて感覚で。眼鏡もふつとんじやつて周りも良く見えなくなつて。大丈夫ですかつて声が遠くに聞こえて……。誰かが駆け寄つて来て、太郎さんのあの整った顔が見えた瞬間に、気を失つちゃったんです。偶然太郎さんとテル君があの場合に居合わせたみたいなんですよね。起きたらテル君がいて、ずっと付き添つてくれていたらしいんです。色々迷惑かけちゃつてすみません」

「そんな、良いんです。とにかく無事で良かった……」

私は無意識に胸のあたりを片手で押さえていた。あ、そういえば、と笹本さんが言った。

「さつき先生や警察の人にね、驚かれました。あんな事故にあつてこの程度の怪我で済むなんて、普通だったらあり得ないつて。本当に奇跡だつて言われましたよ」

奇跡。

その言葉に愕然とした。

たまたまや偶然が、そんなに簡単に起こるのだろうか。

どうしてテル君はわざわざ私の職場まで迎えに来たんだろう。笹本さんが事故にあつて、だけど怪我がかすり傷程度だったならそんなに慌てる必要もなかったんじゃないだろうか。テル君が来なければ、私はそのまま帰宅していた。

どうしてテル君の様子がおかしかったんだろう。どうして手を、

ずっと繋いでいたんだろう。

ぞわ、と鳥肌が立った。思い至った答えに、血の気が引いていく。

使ったんだ。守り人の異能の力を。笹本さんを助ける為に――

きつと本当に、ひどい事故だったんだ。かすり傷で済むのが奇跡だと言われる程の事故だ。どれだけの力がいったらう。どれだけの力を使ったらう。その守り人の力だって、今は完全じゃないのに。痛い思いをしたんじゃないんだろうか……。

テル君は、私とタロさんが会わないように職場まで迎えに来たんだ。だって家に帰ってタロさん達がいなかったら、私が不思議に思う。いたとしてもタロさんがぐったりしていたら、私が驚く。

そんな……。

テル君のあの涙は、一体誰の……。

気が付いたら街の通りを全速力で駆けていた。人にぶつかりそうになってよろけ、信号で立ち止まり、鞆を手に驚掴みに持つてぜいぜいと荒い息をついた。不審げに私を見下ろすいくつかの視線を感じる。

テル君は先に帰ってるって言った。だから、いてくれるはずだ。いてくれるなら良い。

でも不安で仕方ない。心がちっとも落ち着かない。タロさんの姿を見ないと、気を屈けないと安心出来ない。だっていくら考えてもしっくりこない。

どうして力を使って笹本さんを助けた事を、私に隠そうとするの。

信号が青に変わった。もつれそうになる足を無理矢理前へ押し出

して、走った。

心臓が破裂しそうなくらいに走りに走り、マンションのエレベーターにのって壁に寄りかかった。喉がひゅーひゅーいつて苦しくてたまらない。止まった途端に汗が噴き出して、手の甲で額の汗を拭った。扉が開いたと同時にまた駆けて、乱暴にドアを開く。タロさん、と声を上げたかったけれど、それも無理だった。ようやくリビングに辿り着いて、崩れるようにしてうつ伏せに倒れ込む。

「騒々しいな。何事だ」

不機嫌そうな低い声。咄嗟に肘をついて顔を上げると、カーキ色のカーゴパンツが見えた。がくつと首を折って見上げると、腕を組んで仁王立ちしているタロさんがそこにいた。黒のＴシャツに肩までの黒髪。良かった……いてくれた。

「タ、タロ……タロさん……」

「なんだ」

「ごほごほと咳き込んで、その場に座り込む。両手を胸に当てて呼吸を整えながら声を絞り出した。

「だいじょぶなんですか……ち、力……使ったでしょう、たくさんき……気を、」

ずっと目の前に影が出来た。タロさんが私のすぐ傍に両膝をついていた。

「……全くお前は。本当に、呆れる程のお人好しだ。……これから先が思いやられる」

長い指が、私の前髪をそつと梳いた。その指先が頬を伝う。私は驚いて硬直した。

「おかしな顔だな」

「う、生まれつきです」

硬直しながらも反論すると、タロさんが笑った。ぎくりとする。タロさんのその笑顔はいつもの可愛らしいものじゃなく、今にも消えてなくなりそうな、寂しいほえみだった。

「タロさ」

突然、引き寄せられて強い力で抱き締められた。私の頬に、つややかな黒髪が当たる。ほんのりと花の香り。正しい身体はひやりと冷たくて、私はあのお守りを思い出した。冷たい。冷え切ってる…。

「ユイネ……お前の気はあたたかいな。お前の魂は、美しい」

ぎゅっとタロさんのシャツを掴んだ。苦しいくらい身体が密着しているせいで顔が見えない。ざわざわして落ち着かない。どうして嫌な予感がする。怖い。なんで……。

「俺はずっとお前に生かされていた。はじめからヨーコではなかったのだ。俺はお前に、救われていた」

低い声が身体を伝って、心の中で響く。

「唯音。俺は……お前が、好きだ」

これ以上、この世界に留まるのは危険だ。俺自身が世界の歪みの原因となりかねない。

暗い闇に沈む深夜。ただ一点を見つめている。不思議と恐怖はない。四肢が凍るような孤独が、部屋の隅でうろついているとしても、もうおそらくは、俺の世界が色を失う事はないだろう。

静かな寝息を聞く。

「……ん。かに……」

寝返りをうつ気配に隣を見やれば、愛しい女の間抜けな寝顔があった。肘について顔を覗き込む。ぐっすりと寝入っている相手は起きる気配もなく、柔らかな髪があらぬ方向に行ったりきたりしている。

「ユイネ」

手の甲で頬を撫でた。

お前のくれた言葉に何より、俺は幸福を感じた。お前との時が、俺に生きる力を宿した。

俺は一体お前の為に、何が出来る。

「……妙だな」

「うん。何か変だ」

同じ違和感を感じていたのだろう、美しい子供が俺を振り返った。この感覚は『負』ではない。だがしかし明らかに何らかの予兆である事は間違いなかった。空間が、微振動を起こしている。

首を少しだけ傾け、テルが腕を組んで唸った。

「何だと思う？ ユイネの周りで何かが起こる？」

「いやそれはない。あいつの周辺はこの俺が守っている。あるわけがない」

「だったらどうして？ この近くだよ」

壁に掛けられた時計を見上げる。昼の十二時過ぎだ。仕事へ出かけたユイネが戻ってくるまでにはまだ時間がある。

「うーん。気にする必要もないのかなあ。最近ユイネのお陰で力が結構戻って来てるから、余計な事にも反応しちゃってるだけかも」

「かもな。少し外へ出る」

「了解」

この四角い箱の中では気が複雑に流れていて掴みづらい。一步外へ出ると、粘つくような熱気が全身にまとわりついた。顔をしかめ、邪魔な髪を一つに束ねる。虫の声が幾重にも重なり、耳鳴りのように五月蠅く鳴り響いている。

「五月蠅い虫だな」

「蝉っていうんだって。夏にしかこの世界に出て来られない。だから、命を削って鳴くんのだ」

「ふん」

マンションを出て暫く歩き、細い道を通り抜けて公園に出た。炎天下。容赦なく照りつける太陽の下、誰もいない公園の遊具がざらざらと光っている。

「……ここら辺じゃないみたい」

「ああ」

じり、とうなじの辺りが焼けるような感覚。顔を上げる。その時、世界がぶるりと震えた。

はっとしてテルと顔を見合わせ一直線に駆け出した。駅前の交差点、その一本手前の道だ。

「くそつ。間に合わない！ 飛ぶぞ！」

その場所へ移動した瞬間、派手な衝撃音が耳に届いた。両目を見開く。

「事故だ！ 誰か轢かれたぞっ」

「人がはねられたって」

「うわ……ひどい」

騒然とする周囲。人々が横断歩道の先に顔を向けている。アスファルトの上に描かれている白と灰色の縞模様。そこを突っ切るように黒々とした不気味な曲線の跡。青色の車が不自然な状態で停止していた。その数メートル先に見える身体。男が慌てて駆け寄っている。

「だ、大丈夫ですかっ」

これか。ユイネを守る為に張り巡らせていた俺の網に引っ掛かったのは、その為か。

「あ、の馬鹿者が！」

テルを身の内に戻し、ぐったりと横たわる男の元に駆け付けた。一目見ただけでまずい容体だと分かる。

「コーイチ！」

身体を支え抱き起こす。コーイチの焦点の定まらぬ目が俺を見上げた。力の抜けた身体が、がたがたと震えている。

「お、お知り合いですか！？」

コーイチが僅かに背中を曲げ、低い呻き声を上げた。口元から大量の血液が流れ出す。それを目にした途端、傍らにいる男が息を飲んだ。

「う、うわ……き、救急車っ」

ばたばたと走り去る足音。ここから居なくなってくれた方が好都合だ。手をかざし目を閉じる。

「……くそっ」

怒りやら焦りやら何やらで、俺の感情が暴風雨のさなかのように乱れていてうまく集中出来ない。

「くそっ！　なんと不運なっ。なんと軟弱な男だ！　こんな男しかないのか！？」

ユイネを守る男は。ユイネが慕う男は。

「この阿呆が！　俺はお前が気に食わんが、あいつにはお前が必要だっ。お前はユイネを置いていくつもりかッ」

強く目をつぶり、言葉を吐き捨てる。急げ。早く処置をしなければ手遅れになる。潰れた内臓に力を叩き込む。内側から熱が爆発した。

「許さん。許さんぞ……。あいつを残して死ぬような事は……決して」

お前が死んだら、あいつが泣くだろう。

誰かを失う悲しみを知るユイネは、また、声を殺して泣かねばならんだろう。

そんな事はあつてはならない。俺の見ている前で、そんな事は絶対に許さん。

「ぐっ」

あまりの激痛に身体が傾いた。冷や汗が全身に噴き出す。手がぶるぶると震え始める。呼吸さえ止まり、頭の中が白く霞んだ。

「ふ、ざけるな……。俺は、神だ！」

ありったけの力を相手に叩き込んだ。引き換えに、その身の全てが俺の中に一気になだれ込む。

——タロちゃん！　もう良い！　コーイチは助かったよつ。もうやめるんだつ——

「がつ……」

弾かれたように身体がのけぞり、仰向けに倒れた。遠く騒がしい物音が聞こえる。複数の人間がこちらに近づいてくるようだ。

——馬鹿！　無茶すぎだよ。いくらなんでもこれじゃ——

「はつ……俺は、死なん」

死んでたまるか。意地でも死なんぞ。この世界を守る為に、絶対に死ぬわけにはいかない。自分の身体を二つに割るイメージを作り、意思を込める。

「ぐあ、あ……」

呻き声とともに青白い光が閃き、美しい子供が姿をあらわす。

「タロちゃん」

「テル……お、お前はそいつと行け……ユイネに」

相手が頷いた事を確認して、残る力を振り絞りその場から移動した。

朦朧とする意識の中で俺はやつと答えを見い出した。今までに味わった事のない程の充足感に包まれる。

唯音。

お前の為ならこの命でさえも惜しくはない。しかしお前はそんな事を望まないだろう。

俺はお前に、俺にしかしてやれない事があつた。それは守り人として絶大な力を有する、神として。その力があるからこそ、誰もお前にしてやれない事が、この俺には出来る。

これから先、あの軟弱な男が一生を使つてお前にしてやれる事を全て挙げ連ねても、この俺が為せる事には永遠に勝てないだろう。

「ふ……ははは」

爽快な気分だ。

ユイネが好きだ。ユイネが欲しい。ずっと傍に居て欲しい。この寂しい化け物の傍に。

俺の傍にいて欲しい。あたたかな気が、その魂が、お前の全てが俺のものであったなら……。

しかしこの世界を愛するお前の幸福は、この世界の中にこそ存在する。お前の生きた証がここにあり、絆を結んだ人間達がいるこの世界の中にこそ、お前の生きる時が、人生が、確かな重みとともに存在するのだ。ユイネ……。

こんな俺でも過去のあやまちから学ぶという事を、知っているんだぞ。

「ちょっとタロちゃん」

その声にうつすらと目を開いた。フローリングの上に大の字で寝ている俺を見下ろす美しい顔。そのおおきな黒い瞳から、ぽろぽろと涙がこぼれている。

「少しは我慢してよ。タロちゃんのせいで僕大泣き。カッコ悪いじゃない。必死にこらえてたのにさ。ユイネは心配して、きつと走って帰ってくるよ」

「……やはりそうか。……戻れ」

有無を言わずテルを内へと収め、やっと一息ついた。両手を広げじつと見下ろす。じわりと四肢に力が戻る感覚があり、ゆっくりと立ち上がった。これなら何とかいけるだろう。もう心は定まった。覚悟はついた。

だが、別れとは悲しいものだ。ぎしぎしと胸を締めつける。往生際の悪い己が、嫌だ嫌だと駄々をこねる。あまりの情けなさに自嘲の笑みが浮かんだ。

目を閉じて呼吸を正す。

がたがたと騒がしく扉が開閉される音が響き、どたばたと足音が聞こえた。心を鎮め、平静を貫けと己に言い聞かす。

「騒々しいな。何事だ」

乱れた髪をそのままに、ユイネは眉根を寄せて肩で息をしながら俺を見上げた。どれだけ走り続けたのか、顔は真っ赤で焦茶の髪は汗で額に張り付いている。

「タ、タロ……タロさん……」

お前の声は控えめで穏やかで、心地良い。その優しい声音を、俺は忘れない。

「なんだ」

ユイネは咳き込んでその場に座り込み、依然呼吸を乱していて苦しそうだ。

「だいじょぶなんですか……ち、力……使ったでしょう、たくさん。き……気を、」

胸をつく衝撃に、いつとき言葉を失った。

お前は、俺の身を案じて走って帰って来たというのか……。こい

つはどこまで他人の事ばかり心配すれば気が済むのだ。
全身から力が抜けた。膝をつき、大きく息を吐き出す。

「……全くお前は。本当に、呆れる程のお人好しだ。……これから先が思いやられる」

手を伸ばせば届く場所にいる。愛しい女の髪を梳き、柔らかな頬を撫でた。こんな触れ方をしないように今までずっと気をつけていた。案の定、慣れていないユイネは目を見開いて口を開けた。

「おかしな顔だな」

「う、生まれつきです」

出来る事ならば、お前を慈しみたかった。この手で。

「タロさ」

細い身体を腕の中に抱き締める。その温もりに目頭が熱くなった。

「ユイネ……お前の気はあたたかいな。お前の魂は、美しい」

生きている命の鼓動は、こんなにも愛おしい。

「俺はずっとお前に生かされていた。はじめからヨーコではなかったのだ。俺はお前に、救われていた」

あの漆黒の珠を幼いお前が抱いたその日に、俺の心は救われていた。

「唯音。俺は……お前が、好きだ」

華奢な肩が震え、身じろぐ心配がした。より強く抱き締めて優しい温もりに顔をうずめる。

「……お前の世界を、守ると誓おう。お前の人生を支えてやろう。何があるうとも、必ず守ってやる」

お前の全てを見守り、お前の幸福を支えよう。異世界に生きる神として。

「ふん……。あんな軟弱男のどこが良いのか知らんが、あいつがもしお前を泣かすような事があれば、天罰を下してやるぞ。俺は神だからな。それくらい朝飯前だ」

「タロさんっ……私っ、わたしっ」

「お前はもう一人ではないぞ」

俺がいる。決してお前を一人にはしない。

「もう一人で泣かなくて良い。お前の孤独は、俺があたためて癒してやろう。お前は安心して、自分の生きる道を往け」

細い身体が震えている。ゆっくりと力を注いでいく。心が締め付けられて息が苦しい。

「タロさん待つて……なんでっ……うっ……うっ」

細い腕が俺の背に回り、俺を包み込んだ。抱き締められて我慢出来ずに涙が滲む。

気の遠くなるような長い間、暗く凍えた時を過ごした。

幾度となく己の意義を問い、意味を疑い、恐ろしい化け物だと己に失望し、何の希望も見い出せずに死を願った。

「ユイネ……お前が好きだ。……お前が……」

お前とこうして出会えた事に、俺は世界に感謝をしよう。

「タロさん、タロさん……」

あたたかな鼓動が俺の全てを包み、満たしていく。

もう……十分だ。これで良い。

お前といられた僅かな間の幸福な時間が、俺の全てだ。俺の希望だ。俺の命だ。ユイネ……

「お前が、たとえ全てを忘れても……」

「……何を……や、やめてっ。待って！」

ユイネがシャツを引っ張って暴れ出した。腕に力を込めて封じ、抱き締める。目を固く閉じて歯を食いしばり、力を注ぎ続ける。

「お前が、俺を忘れても……」

「いやっ！ タロさんっ」

「俺はお前を、覚えているから」

「タロさっ……」

こわばっていた身体からゆっくりと力が抜けていく。腕がぐたりと垂れ下がった。肩で浅く息をしながら身体を離し、愛しい女の顔を見つめた。目を伏せて気を失っているその頬に、涙が流れていた。

視界が歪む。
息が乱れ、涙が溢れた。

*

「お帰りなさいませ。『漆黒』の守り人様。……………タロ様。長らくの旅路、お疲れ様にごさいます」

魚の腹のように白い石壁。円形の神殿。もうとっくに見飽きている。しかし久方ぶりにみるその風景は、穏やかな色彩で柔らかい。

「……………セウンリヒ」

「はっ」

「俺は心を入れ替えたぞ。…………『漆黒』の神としてその責務を全うする」

「はっ」

「巫女の選定を再開しろ」

息を飲む気配がした。振り返って見下ろすと、白の法衣を着た男は額を地につけ、ひれ伏したまま押し黙っている。

「どうした。分かったのなら返事をしないか」

「……………お、おそれながら！」

ゆっくりと俺を見上げたその男の顔には、苦しげな表情が浮かんでいた。

「なんだ」

「氣を得る為の人員が必要となりますれば……こ、この不肖、セウンリヒめがその役目をば、仰せつかりましょう。無礼を承知で申し上げております。ですが僅かでも、タロ様のお力になれるのであれば、お心穏やかにお暮らしいただけるのであればっ」

驚き、目を剥いてセウンリヒを凝視する。壮年の男は至極真剣に、切羽詰まった目をして訴えていた。

「……おい。気色悪いことを言うな」
「申し訳ございません！」

思わず苦笑がもれる。笑ってしまう。この男は、不器用ながらも俺を慰めようとしているのか。

ああ……。ユイネ。
お前の言ったとおりだ。

「セウンリヒよ」
「はっ」

この生真面目な男はどこまでも己の道を信じ、信念を持ってその責任を果たそうとしている。『漆黒』の守り人に仕え、この神殿を守る大神官として胸を張り生きている。

「俺は偉大な側近を持った。誇りに思う」

精悍な顔立ちとその瞳は青年の頃と変わらない。しかし皺が増え、髪には白いものが目立つようになった。……年をとったな。

「あ……ありがとうございます！ 身に余るの程の、無上な

る幸福にございますっ！」

「阿呆。泣く奴があるか」

「も、申し訳ございません……」

目を伏せて笑った。

この世界も悪くはない。お前と僅かでも繋がっているのなら、俺の世界に地獄はない。

唯音。

俺の往く道を照らす、唯一の光――。

今日も雨。

このところ、ずっと雨だ。夏頃には安定した天気を持ち直していたのに、涼しくなってきた頃にはすっかり雨の多い毎日に逆戻りしていた。

片手で傘を開いて大粒の雨が落ちる世界へ足を踏み出す。

ぼつ、ぼつぼつぼつ……。

雨が傘を叩く音を聞きながら通い慣れた道を歩く。

最近ではすっかり木々の葉が落ちて、通りは枯葉のじゅうたんのようだ。晴れた日は良いけれど、雨の日はすべて危なかったりする。白い息を吐いて慎重に足を運んだ。もうすぐ冬がやって来る。

途中で、あ、と思い、立ち止まり、鞆の中身を確かめた。

お守りを鞆の中へ入れたっけ。

ソフトボール大のまん丸の球体。真っ黒で艶やかで、ひやりつるりと肌触りの心地いい、素敵な石。

ああ良かった。持ってきてる、ちゃんと。

軽やかな重みのある、これは私の大事なお守り。

どこに出かけるにも必ず持ち歩いて、帰宅しても常に手に届く場所に置いている。一日中、肌身離さず傍に置いて、雨の日なんかは特に胸に抱いてうんとお祈りをする。

どこかで見守ってくれている誰かに、私の力が届くように、と。

いつからだろう。そんな習慣が身についたのは。子供の頃はお祈りをするような事はなかったと思う。だけど昔から落ち込んだりした時も嬉しい事があった時も、いつもこれに触れてこれを抱き締めた。それは今でも変わらない。何故だかこれが傍にあるだけで心の底から安心して、自分の居場所がそこにあるような気になって、落ち着いた気分になれるのだ。このお守りがあったお陰で、今まで何とかやってこれた。そしてこれからも、このお守りがあるのなら、私は何でも乗り越えていけるような気がしている。

とっても不思議な黒くてまん丸の石。

落としても割れず、ひびや傷一つつかない。汚れてもタオルですと拭くだけで元通りのつやつやになる。

私の大事な大事な、お守り。

「おはようございます」

定時刻に出社。

*

金曜の夜。駅前近くの居酒屋は今夜も盛況で、人の話し声がざわざわと賑やかに飛び交っている。BGMにゆるやかな音楽が流れているはずなのだけど、気付かない人も多いんじゃないだろうか。

「だからさ、お見合いなんてやめときなつて言ったでしょお!？」

「だけど親戚の勧めで断れなかったんですってば」

四人席を陣取り、この店の売りである地鳥の焼き鳥を片手に男前

な美女二人。私は目の前に座る二人の話を聞きながらジョッキを傾けた。

「紗枝さんってえ、もう結婚諦めてる派ですか？ マンション購入考えちゃってたり？」

躊躇なく爆弾を投下した矢崎さんに対し、紗枝さんが据わった目で睨みつけ、

「こらっ。私はねえ、今は仕事してる方が楽しいし結婚も急いでないの！ そういうものは縁が大事なの！ 矢崎ちゃんみたいに焦っておじさんとお見合いなんかしないのっ」

とまくしたて、満足したようにふん、と笑った。矢崎さんは大げさにひえゝと声を上げてビールを一口。二人のやりとりが面白くて私は笑いながら焼き鳥を頬張った。

「で、唯音ちゃんの方はどうなのよ」

「そうよ倉田さん。コンビ二の彼とは進展あったの！？」

「ふ、と焼き鳥を喉に詰まらせ、慌ててビールで流し込む。

「な、何ですかそれ。笹本さんは友達ですよ」

「あ。そうそう笹本！ あの爽やか店員！ 友達なんて今時あり得ないしっ。倉田さん狙われてんの分かってる！？」

矢崎さんが意地悪な笑顔で私を指差した。私がいくらぶんぶん両手を振って違います、と主張をしても右から左で楽しそうに笑っている。あの、聞いてますか。

「はあ〜！ 唯音ちゃんが心配だわ。変な事されそうになったら私に電話しなさいねっ」

紗枝さんが身体を乗り出すようにして、ね、と念を押してくる。

「あの、だから」

「あつ。すいませ〜ん！ 生中三つ！」

「で？ 相変わらず健全デートなの？ 手ぐらい繋ぐでしょ？」

色々な事を諦めて私は苦笑した。こういう話は盛り上がって面白い。私だつて二人の話を笑って聞くのだ。同僚の矢崎さんは茶色のストレートの髪をかき上げて豪快にジョッキを傾けている。アイライン完璧の瞳は少しだけとろんとしていて色つぽい。その隣にいるのはショートボブの髪からすらりとした首筋を見せる、薄化粧の紗枝さん。ひよんな事から知り合いになったお姉さんだ。串に刺さった焼き鳥をそのままがぶりと食べているのに何故だかスマートでさまになっている。

私は不思議な心持ちで二人を眺めた。以前の私なら、きっとこんな風に一緒に席で一緒にお酒を飲む機会なんてないような人達だと思ふ。

紗枝さんは、故郷にある母の墓参りに行った時に偶然に出会った人だ。あの土地にある唯一の喫茶店「ヒロ」に立ち寄った時、ヒロさんの学生時代の友人である紗枝さんがいて、そこで知り合いになった。紗枝さんは気さくな性格で話が盛り上がり、その時に初めて私は幼い頃に遊んでもらっていたお姉さんが、女装をしたヒロさんだったという事実を知った。紗枝さんは大都会の外資系会社で働くキャリアウーマンで、それからはこうしてたまに仕事帰りに飲みに行く間柄になった。何度目かの時、同じお店で飲んでいた矢崎さんにばったり会って、意気投合して現在に至る。

「それにしても倉田さん、やっぱりお酒強いね。強すぎ！ そうだろうなって思ってたけどさ」

「思ってたんですか」

「うん。ほんとはね、一緒に飲みに行く機会をずっとうかがってたんだから。そういえば倉田さん、彼が出来て変わったよね」

……彼じゃないですけどね、と心の中で突っ込みを入れつつ、店員さんが運んで来てくれたジョッキ三つを受け取ってそれぞれの前に置いた。

「そうなの？」

「ええ。どこがって言われたら分かんないんですけどね、何となく雰囲気。前はちよっとおどおどした感じで声かけたら悪いかなあって遠慮してたけど。今はどくん、としてるって感じ？ 貫禄？

あ、でもどつか抜けててばやあとした雰囲気は変わってないですよ？」

「あー分かる！ それ唯音ちゃんって感じ！ 見てると眠くなるのよ！ なんか知らないけど！」

「そうそう！ 癒されますよね。ゆるきやらので」

「あの、それ褒めてます？」

「何言ってるの、もちろんっ」

「けなしてるの！」

ぷつと吹き出してみんなで笑った。楽しい会話のさなか、私は鞆の中にあるお守りをふと思い出す。最近よくこういう時がある。記憶が曖昧な個所があったり、本当にこうだったかな、と首をひねりたくなるような時が。

たとえば私の部屋にある最新のゲーム機の事。買った覚えなんてないなあと思つた直後に、その経緯を思い出して多分そうだった、と思つたり。（これは妹の麗奈が持ち込んだもので、一度ゲームを

してみたら私がすごく下手だったので麗奈が呆れていた)

その後で、決まってあのお守りを思い浮かべる。一人の時だった手にしてじっと見つめる。するといつもは安心出来るのに、その時ばかりは胸が押し潰されるような気持ちに襲われるのだ。真っ黒のまん丸のこの石が大好きなのに、寂しいような悲しいような、苦しい想いに胸がつまって泣きたくなる。本当に涙を流してしまう事もある。

大切な何かが、大事な何かが、ぽっかりとそれだけ抜け落ちてしまったような感覚。

私の大事な大事なお守り。

漆黒の……。

しまった。昨日飲み過ぎた。う……。

私はむかつく胸を片手で押さえ、何とか身支度を整えて玄関でブーツを履いた。胃薬は飲んだから効いてくるまで我慢だ。

今日は土曜日。マンションのエントランスに降りて、今にも泣き出しそうな曇り空を見上げ大きく息をついた。いつものように映画を観に行くのだけれど、わざわざ笹本さんがバイトを休んでくれたのだ。何とはなしに緊張してつい念入りに化粧をしてしまった。天気がもってくれば、と思った矢先に、ぽつりと雨が降り出した。

ざああああ。

すぐに本降りになった冷たい雨に、私はむっと口を尖らせる。片手で傘を広げ、いざ。

「やっぱり降りましたね」

「はい。しかもどしゃ降りですね」

駅前で笹本さんと落ち合い、映画館のある場所へと向かう為、電車に乗り込んだ。

「なんか前にもこういうのありましたよね」

「え？」

笹本さんの言葉に、私は首を傾けた。私より少し背の高い笹本さんを見上げる。笹本さんは黒ぶち眼鏡の奥の瞳を柔らかに細めて笑い、肩をすくめた。コートの襟を少し立てて着こなしている笹本さんは、ちょっぴり格好良い気がして、私は変に意識しないようにひ

っそりと何度が深呼吸をした。……決して興奮して鼻息が荒いわけではない、はず。

「その日もずっと雨が降ってて、何故か俺達が電車とか建物の中にいる時にだけ、やむんです」

ほら、と言って笹本さんが前を指差した。私はそれにつられるように視線を車窓へ向ける。

「ほんとだ……」

さっきまであんなにざあ降っていた雨がやんでいる。少しだけ日も出ているようで、雨に濡れたビルの窓がきらきらと輝いていた。ああそうだ。覚えている。あれは、笹本さんと初めて映画を観に出かけた日の事だ……。あの日――。どく、と心臓が鳴って、突然視界が歪んだ。目の前が一瞬で闇に染まる。

「唯音さんっ。大丈夫ですか？」

その声に景色が戻った。笹本さんが咄嗟に私を支えてくれていた。貧血を起こしたようだ。

「あ、す、すみません。大丈夫です」

「そのまま、俺にもたれててください。具合悪いんですか？」

心配そうな声に申し訳ない気持ちになりながら、かぶりを振って答えた。

「違っんです。全然大丈夫なんです。あの、昨日飲み過ぎちゃって」

えへへと笑うと、笹本さんも眉を下げて笑ってくれた。

「でも……無理しないでくださいね？」

「はい。ありがとうございます。吐きそうになったらちゃんと言います」

そう言って笑った。だけど私の心は落ち着かないまま、そわそわとして仕方がなかった。

何だろう。急に何とも言えない違和感を感じるようになった。

電車が駅に滑り込み、乗っていた人達がぞろぞろと降りていく。その波に従って改札を出た。外はやっぱ雨が降っていて、色とりどりの傘が町を埋めつくす。私の目の前を笹本さんが歩いている。振り返って私に何かを語りかけ、私はそれに返事をする。

急に全てが実感のないものに思えてきた。何かがおかしい。

何かが、足りない。

この世界には、何かが……。

その感覚は、絶対だと思っていた地面が足元からがらと崩れていくような、現実だと思っていたものが夢の中の出来事だったと気付いた時のような、言い知れない恐怖が伴うものだった。

映画を観ている間中、私は鞆の中に手を入れてお守りに触れていた。映画の内容さえちっとも頭に入って来なかった。

何かがおかしい。私は何かを忘れている。……そうだ、忘れている。

大事な何かを。大切な何かを。忘れちゃいけない何かを、すっぴりと忘れている。だから、足りない。そう感じるのだ。ああ………そっか。

それなら私は、なんでそれを忘れちゃったんだろう。自分にとって大切な事だと思っているのに……。

「やっぱり体調良くなさそうですね。少し休みますか」

はっとして顔を上げて、慌てて両手を振った。

「す、すみません。あ、朝ごはんあんまり食べてなかったから。そろそろお昼にしませんか？」

「……本当に大丈夫ですか？ 食べれますか？」

うたぐるように笹本さんがじっと私を睨みつけた。私は一つ、大きく頷く。

「も、びつくりするくらい食べます。ばりばりむしゃむしゃと」

あはは、と爽やかに笑った笹本さんを見てほっとする。せつかくこうして一緒にいるのだから、あんまり心配かけちゃいけない。楽しく過ごさないと。私は無理矢理にこの「違和感」を頭の片隅に追いやった。

それからパスタ屋さんで遅めのお昼を済ませ、おしゃれな町をぶらついたりして時間が過ぎていった。相変わらず雨は本降りのままだったので、なるべく屋根のある場所を選んで過ごした。

「実はね、俺、今月でコンビニのバイト辞めるんです」

様々なお店が並んでいて賑やかな地下街を歩いている時だった。私は驚いて笹本さんを見る。

「そうなんですか！？ じゃあ……」

「はい。資格、とれたんです。ちなみに職場も見つかって、すぐに働ける事になったんです」

嬉しそうにはにかむ笹本さん。笹本さんはコンビニのアルバイトをしながらずっと専門学校に通っていた。一旦は企業に就職して会社員として働いていたけれど昔からの夢を捨て切れず、保育士になる為にずっと仕事と勉強を両立して生活していたのだ。

「うわあすごい！ おめでとうございます」

「何だか照れくさいな……ありがとうございます」

「じゃあお祝いしないといけませんね。就職祝いです！」

「そんな。今日は唯音さんのお祝いですよ」

「いいえ！ 私のなんて良いんですっ」

「はは。じゃあ一緒にお祝いする事にしましょう」

「はいっ」

私は自分の事のように嬉しくなった。だって夢だった仕事に就けるんだから。それは自分の力で切り開いて、手に入れたものだ。笹本さんが頑張っていた事を知っているの、ここはきちんとお祝いしないと。

そこでまた、例の違和感に襲われた。

あれ。私……どうして笹本さんが保育士を目指しているって知ってたんだろう。

前まではコンビニで挨拶を交わす程度の仲だったはずだ。そしてそこから関係が発展するなんて、人見知りの私には到底無理な事……。あれ。なんで……。

地上へと続く階段がとても長く、永遠に続いているかのように感じる。笹本さんが先を歩き、その階段を昇っていく。私も後に続いて階段を昇る。少しだけ、膝が震えた。

「……唯音さんとはコンビニで会えなくなるけど、これからもうやって会って欲しいんです」

笹本さんの声が遠くに聞こえる。形のないおぼろげな影のような不安が、私の肩にのしかかる。

「そ、それはもちろん……私の方こそ」

「……俺、ずっと……保育士の資格が取れて職場が見つかったら、あの、唯音さんに言おうと思ってた事があって……」

地上に出ると雨はあがっていた。アスファルトはまだ濡れていて黒く光っている。

「……雨、あがったみたいですね」

私はぼんやりとしたまま呟いた。

「うわぁ。唯音さん、ほら見てください。綺麗ですよ」

笹本さんは空を見上げていた。周囲にいる人達もちろはら上を見上げたり指を差したりしている。それにつられるようにして私は空を仰いだ。

「あ……」

冬の水色の空に、濃くはつきりと鮮やかな色彩が浮かぶ。柔らかな曲線を描く……虹。七色の虹。

この世界を包み彩る、鮮明な色。

「綺麗な虹ですね。そういえば前にも一度、こんなに見事な虹を一緒に見ましたね」

ああ……。なんで。

「不思議だなあ。でもきつと空も祝福してくれてるんですね。俺、先越されちゃったな」

なんで忘れていたんだろう。

「唯音さん。誕生日おめでとございます」

なんで……。

「なんで……」

息が震えた。どんどん鮮やかな虹がぼやけて空の水色と混ざっていく。

「唯音さん？」

「さ、笹本さん……ごめんなさい」

「え……」

「ごめんなさい。……私、私……」

涙が頬を伝った。両手で顔を覆って、泣いた。

「好きな人が、いるんです……」

あんなものが嬉しいのか、と不思議そうな表情を浮かべてその人は言った。それで私は、どんなものよりもずっと嬉しい、と答えた。

そうしたら整いすぎる程の美しい顔をくしゃつとさせて、可愛らしい笑顔になった。それは私の、大好きな笑顔……。

覚えていてくれた。

私の誕生日に、と言ったその言葉を、その人は覚えていてくれた……。

「——さん」

思い出した。大切に大事な、私の記憶を。

雨がやんでいたのは、あの美しい虹が姿を見せた数分の間だけだった。

胸が張り裂けそうなくらい苦しい。ぎゅっと傘の柄を持つ手に力を込めて足早に家路を急ぐ。急いで急いで、息がどんどん上がっていく。

私はずっと今まで、無理な現状にまで我を通して何かを主張した事はなかった。そう思っている。

母を病気で亡くしたのも仕方のない事だと思っているし、それで父に引き取られていったのも、間違っていたと思った事もない。おじさんとおばさんは優しくかったからそこにいたいと思ったけれど、迷惑はかけたくないとも思った。

だって仕方のない事なんだから。

母の病気は私が駄々をこねて泣いて嫌だといったら完治するわけじゃない。私は子供だったから、大人の言う事を聞かなければいけなかった。嫌だと言ったって一人で生きていけるわけじゃない。

私はずっと今まで、そうやって色んな事を飲み込んで生きてきた。手を伸ばしても届かない。望んでも得られない。そんなものを前にして、私はずっと、諦めてきた。私には無理なんだと。私なんかには到底手に入らないものなんだと。必死に手を伸ばして何かを望む前に、諦める事で私は自分を守ってきた。

だけど、もう……。

細い路地で足を止めた。肩で息をして雨にけむる通りを見つめる。片手で傘を持ち、空いている手で鞆の中を探り、真っ黒でまん丸の石を取り出した。それを目の高さまでかかげ、じっと睨みつける。

つるりとした表面に、雨がいくつもいくつも落ちて滑っていく。口元が震えた。

生きているうちに一回くらい、とんでもない我が儘を言ったって良い気がしてきた。

「お母さん。……良い？」

これは私の、最初で最後の、最大の我が儘。

両手でぎゅうと丸い石を抱いた。傘が足元に転がってしまったけれど、そんな事には構ってられない。ばらばらと冷たい雨が肩や頭や全身を叩いていく。俯いてぎゅっと目をつぶった。

「お願い……」

お願い。お願い。お願い。

きつと伝わるはずだ。届くはずだ。強い「願い」は、「祈り」そのもの。それにこのお守りは、この漆黒の珠は、あの人のもう一つの命。繋がっている。今でもずっと。

「あ、会いたい……会いたい、会いたい」

冷たい雨に打たれているのに、身体から出て来る涙はあたたかかった。嗚咽をこらえて祈り続ける。

「お願い……会わせて……うっ……あ、会いたい。うっつ。会いたい……お願い、します……どうか」

どうか、私の願いを叶えてください。

たった一つ、一度だけの我が儘だから。もう言わないから……。
だから。

「お願い！ 神様っ！！」

ばしゃっ。

背後の水音に両目を見開く。ぐずぐずに濡れた髪が私の視界を遮っていた。

「……なんなんだ、お前は」

は、は、と浅い呼吸を繰り返す。心臓が止まってしまいそうだった。震えながらゆっくりと振り返る。

「何故……そう、ことごとく……俺に逆らう。記憶を……消したはずだ……何故」

大きな影がゆらりと揺れた。いつか見た、幾重にも重なる漆黒の衣。その生地の美しい事を私は知っている。それがこの世界のものでない事も。両腕にブレスレットをして、漆黒の宝石が埋め込まれた首飾りをしている。私は背の高いその人を見上げて泣いた。

応えてくれた。『漆黒』の守り人様が――。

「うつっ……」

「なんなんだお前はっ！」

肩までの黒髪は雨で濡れ、辛そうに歪んだ表情のまま私を睨みつけている。かみさまは怒っている。喉がひくひくして苦しい。だけど、言わなきゃ……。私だって、怒ってるんだから。

「タ……タ、タロさんの馬鹿ッ！　お、大馬鹿やろっつ」

かみさまはぎゅつと眉間にしわを寄せ、大きな身体から怒りオーラを噴出させた。

「何だと！」

「わたし……頼んでません！　記憶を消してくれだなんて、頼んでませんからっ……！」

「なにいつ」

「どうして勝手に、そんな事するんです！　本人の了承もなしにそんな事するなんて、いくらかみさまだってやって良い事と悪い事があるんですっ」

「な、何も知らんくせに口応えするな！　俺がどんな思いであの男を救ったと思っているんだ！」

「分かってますッ」

「ちつとも分かつたらん！　俺の思いを無駄にするつもりか！？　このど阿呆がつ」

「タロさんこそ、ちつとも分かってないじゃない！」

「なっ……」

肩で息をしながら、ぎりぎりと睨み合う。

分かつてる。どうしてタロさんが私の記憶を消したのか。どうして笹本さんを助けて、私の前から姿を消したのか。

全部全部……私の為。

そうやって世界を守るかみさまは、あっさりと自分を殺す。普段は俺様で傲慢で怒りっぽくて面倒なのに、いざという時に急にかみさまらしい事をする。反則じゃない、そんなの。

「私の大事な記憶なんですっ。タロさんとテル君と一緒に暮らした

事もふーちゃんの事も！ 絶対忘れたくないっ。覚えていたいんです。自分の中のヨーコさんに嫉妬して卑屈になった事も。大切なんです、みんな！」

タロさんは呆然と私を見下ろしている。きつ、と睨み上げると、大きな肩がびくりと震えた。

「全部無かった事にするなんてひどいです……私、私はっ……」
「ユイネ……」

雨と涙のせいで視界が滲む。寒さなのか緊張なのか怒りなのか、がたがたと身体の震えが止まらない。ぐっと両手を握り締める。

「タロさんが好きなんです……タロさんが、好きなんです！」

はっと黒の瞳が見開かれ、それから苦しげに眉根が歪んだ。

「馬鹿を言っな！」
「だって好きなんですっ」

がつ、と強い力で両腕を掴まれる。ぎらぎらと燃え上がる鋭い瞳に射抜かれ、私は息を飲んだ。

「……それ以上言っな。お前は、自分が何を言っているのか分かっていない」

唇が震えた。声を出そうとしたら、ひくつと喉が鳴った。

「……好き」
「よせ」

「好きです」

「やめろっ!!」

大きな怒声にびくつと肩をすくめた。また涙が溢れ出す。歯を食いしばって目を閉じた。

絶対、いやだ。どうしても諦めたくない。一緒にいたい。タロさんと、一緒にいたい。

大きく息を吸った。

「タロさんが好きですっ! わ、私をっ……わたしを、あなたの半身にしてください!」

ああ……。もう、死にそう……。

これ以上は心臓がもたない。止まってしまう。全身から力が抜けて立っているのもやっとだ。それでも駄目だって言われたら、もう無理かもしれない……。立ち直れない。

「……っ」

ひやりと冷たい感触がして、次に全身がほんわりとあたたかくなった。ぎゅっと締め付けられる。

「ユイネ」

息苦しくなってきたけれど、大きな背中に腕を回して力を込めて抱き締めた。震えながら大きく息をつく。

なんてあたたかいんだろう……。

タロさんの優しい気が私の中に流れ込んで、冷え切った身体をあ

たためていく。

「ユイネ」

タロさんが泣いている。背中が小さく震えている。

「ユイネ……」

「はい」

「お、お前は、阿呆だ……大馬鹿者だ」

「はい……」

「俺の……俺の好意をここまで踏みにじるとは……この、無礼者。

……俺は、神だぞ」

「はい。ごめんなさい」

タロさんの大きな身体を、ぎゅうつと抱き締めた。うつ、とタロさんが苦しそうな呻き声を上げる。私の目にじわりと涙が浮かんだ。これは……多分、もらい泣き。

「ユイ……ネ」

「はい」

「お、俺の名を呼んでくれ……俺の、傍にいて、俺の名を……」

「タロさん……ずっと傍にいます。ずっと……」

「ユイネ……俺の……」

唯一の。

たった一人の、ただ一つの愛しい命。

同じ先を見つめ、同じ道を歩む。永劫に似た時を共に生きる。

その孤独な魂をあたため癒す、対なる半身。

やっと見つけた。

私の居場所――。

*

白の法衣をかつちりと着こなし、背筋をびしりと正した姿勢のま
ま数時間が経過している。手元は寸分の狂いもなくさらさらと文字
を綴り、次々に書類を振り分け、机の上に出来上がっていた紙の山
が見る間に切り崩されていく。その様子をちらりと横目に見て、青
年は静かに茶の用意を終わらせた。彼も同様に白の法衣に身を包ん
でいる。

「父上。お茶が入りましたよ」

そう声をかけたのだが、机に向かっている壮年はその手を休める
ことなく、仕事を続けている。青年は相手が自分の言葉を無視した
事にため息をひとつこぼした。

「……大神官殿。茶の用意が整いました」

ぱしりとペンを机上に置いて、大神官セウンリヒはやっと青年
の方へ顔を向けた。

「よろしい」

「まったくかたぶつだなあ。父上は」

青年は両手を腰に当て、父を見やる。彼の父親はぴくりと眉を僅かに上げて静かにカップを手を取った。

「……この場でその呼び名はふさわしくない。きちんと礼節をわきまえなさい」

「では大神官殿。一つ質問がございます」

「何かね」

青年は腕を組み、大きく息を吐いた。その精悍な顔立ちは父親の若い頃と瓜二つだ。

「何故、巫女の選定を再開されないのです？ この件では守り人様から御指示をいただいているとお聞きしました。しかし大神官殿の一存で今もって『漆黒』の守り人様の巫女選定は再開されないままになっております。我らは偉大なる神、守り人様の忠僕。未来永劫子子孫孫、身命を賭してお仕えする身でございます。大神官殿の此度の対応は、守り人様の御意向に添わぬ、職を逸脱した行為ではございませんか」

青年の詰問に、威厳ただよう壮年は目を伏せた。それから何事かを噛み締めるように、口元に柔らかな笑みを浮かべる。

「この私の判断が正しいのか否か、明白な答えは既に目前」

ちりりん。

鈴が鳴り、青年はつと顔を上げた。大神官は一つ頷き、息子を促す。

「『漆黒』の守り人様が、半身を連れてお帰りになられた。丁重にお出迎えを」

（完）

081（後書き）

「孤独な魂　あたたかな軌跡」ご覧いただき、ありがとうございます。

こうして『漆黑』の守り人様は半身を得ました。

ちよつとあつさりした終わり方かとも思いますが、さらつとした方が私が好きなのでこうなりました。

タロさんとユイネはこれからもお互いに足りないものを補い合い、共に歩んでゆく事でしょう。

異世界ガルクループに渡ったユイネはまた様々な問題にぶつかるはずです。

そのたびに一生懸命に悩んで、不器用ながら頑張っていく事でしょう。

きっと大丈夫。タロさんとテル君が、うんと彼女を愛して守っていきます。

タロさんもこれからは神様らしくきちんと仕事をしていくはず……多分。

この物語の最後までお付き合いくださった方々へ、心より感謝申し上げます。

ありがとうございます。

このお話は結構な難産でしたので一人で書いていたら多分完結出来なかったと思います。あなたのおかげで最後まで走り切れました。

最後にひとつ。

一言でも構いません。このお話の感想を聞かせてもらえたら嬉しいです。

では、またお会いできますように……。

082（君と歩む時を）

涼やかな風が流れ、青々とした稜線に細長い雲がかかる。青空の彼方から雲雀の声が降り注ぎ、あたたかな太陽の光が平和な世界を満たしている。

窓際にあるテーブル席で、僕は幸せに満ちた昼下がりの時を満喫していた。背後から何やら不穏な気配を感じるけれど、それは知らんぷりだ。

「うーん気持ち良いなあ！ 最高だよねやっぱり。この神殿も、この湖もさ。とっても綺麗だ」

今までそんな風に感じた事なんてなかったけどね。

「おい、テル。遊んでいるなら出て行け。目障りだ」

さつきから僕に向かってぎらぎらと殺気を放ってくる相手は、この神殿の主だ。肩まである艶やかな黒髪に、男性的な線を描く精悍な顔立ち。力強い光を宿す漆黒の瞳に均整のとれた逞しい身体。黒の衣装を身にまとう、『漆黒』の守り人。異能の力を司る神だ。幅広の立派な卓上には溜まりに溜まった書類がどっさり山を作っている。最近やつと本来の日々の流れに戻ってきたところだ。

ガルクグループに帰ってきてからこっち、今までは本当に嵐のような毎日だった。お祭りやら儀式やら挨拶回りやら、何が何やらな状態でざっとひと月は過ぎただろう。

それでもこの地を統べるガルクグループの神さまには、まだ仕事如山積みみたいだ。とつても不機嫌な相手に向かって僕はにっこり微笑んだ。

「タロちゃんが今までずうつとさぼってたせいでしょ？ 八つ当たりしないですよ」

「……五月蠅い。少しは手伝え」

「あつ。ユイネの勉強が終わる時間だ。じゃあ目障りな僕は消えるでしょう。じゃあねっ」

怒鳴られる前に退散して、鼻歌を歌いながら白い回廊をゆったりと歩く。すぐ前を背の高い女官が一人、こっちに背中を向けて立ち尽くしているのが目にとまった。あれはつい最近、新しくやって来た子だ。

「フエンナ。どうしたの？」

「あつ！ ティエルファイス様……あの、その」

身長は百七十センチ以上はあるだろうか。がっしりとした肩幅に貫禄のあるお尻。真つ白の女官用の法衣が少し窮屈そうに見える。金茶の髪をお団子にして、くりくりとしたちっちな両目にまるつとした鼻。ほっぺたはいつも赤らんでいて、人好きのするとっても良い顔をしている。両手にお茶のセットをのせたお盆を持ったまま、困った表情をして僕を見下ろした。

「ユイネ様にお茶をお届けするように言われたのですが、あの……迷ってしまいました」

大きな身体をなるべくちっちゃくしたいのか、しおしおと肩を落とす。

「ふふ。良いよ、ちょうど僕も行くところだったんだ。おいで、一緒に行きこう」

「も、申し訳ございません……」

僕はフェンナの前を歩きながらくすくすと笑った。ここへ来てひと月。彼女はユイネが半身としてこの神殿にやって来た事によって増員された、女官の一人だ。どうやらまだ緊張がとれないみたい。

「この神殿は回廊が複雑に入り組んで、たくさんの部屋を繋いでる。最初はみんな迷うもんだよ。大丈夫」

「はい……。ありがとうございます。ティエルフェイス様」

「僕の事はテルで良いって」

「あ、申し訳ございません。テル様……」

うーん。すごい緊張状態だなあ。別に誰もとって食いやしないんだけど、まあ無理もないか。守り人が住まう神殿に女官として仕えるというのは、彼女にとつてとてつもない重責に違いない。

この子、タロちゃんに会わなきゃ良いな。あいつなら怒鳴りかねない。可哀そうに。

目当ての部屋が見えてきた時、ちょうど扉が開いて女官長のフティが出て来た。僕を見てきつちりと美しい一礼を寄こす。

「やあお疲れさま。今日の授業はこれでおしまい？」

「はい、テル様。ユイネ様はとも一生懸命にされてらっしゃいます」

フェンナがぎこちない足取りでフティの前を通り過ぎた時、ごく小さな声で女官長は彼女の名を呼んだ。

「フェンナ。背中の中が外れていますよ」

ユイネがここへ来て、タロちゃんの半身になってひと月。そのひと月の間はずっと、色々な行事をこなすので精いっぱいだった。ユイネにとってはすごく大変だったに違いない。何故なら彼女は異世界からやって来たばかりで、半身になったばかりだったのだから。

『漆黑』の珠を受け取り守り人の半身としてこの世界で目覚めた時から、たしかに基本的な知識くらいは身につけている状態だった。守り人の長つたらしい歴史も半身に備わる異能の力も、守り人の珠を自身の核にした時から、永い時を刻む命と同時に備わるものだ。けれどももやっぱりそれだけでは補えない細かい部分が色々と出て来るはずで、ユイネは今女官長のフティを先生にして、この世界の歴史や庶民の生活、万般にわたる様々な事柄を教わっている最中だった。

「はあ。美味しい……」

ユイネはお茶を一口飲んで、フェンナに気の抜けた声でありがとう、と言った。

「ねえユイネ。そんなに急いでたくさん覚える事ないんだよ？ 時間ならいっぱいあるんだからさ」

焦げ茶色の柔らかな髪を束ねて左肩に垂らしている。その髪に触りたいなあと思いつつ僕は頬杖をついてユイネを見つめた。濃すぎない化粧に鮎色の耳飾り。身につけている衣は決して派手でなく、落ち着いた色のもの。ユイネに言わせるとこの衣装は、日本の着物に少し似ているのだそうだ。

ユイネは神の半身になっても、その印象はちっとも変わらない。控えめで穏やかで、人に緊張感を与えない。見ようによつたらぼん

やりしているようにも見える。

「うっん、大丈夫だよ。ありがとう。フティさんの教え方がうまいのかな、すっごく面白いんだよ。勉強なんて学生以来だから、何だか若返った気分」

うふふ、と笑う彼女を、満ち足りた気分で見つめる。

なんだかんだ言ってもユイネは頑張り屋だって事を知っているから、あんまり無理はして欲しくない。半身になったのだという事を、必要以上に気負って欲しくない。だってユイネが悲しむ姿なんて、見たくないんだ。やっぱり帰りたいって言われたらどうしようって、心の片隅でいつもひやひやしてたりもする。やっと大好きな愛しい人と一緒にいられて、とっても幸せなんだけど、それだけじゃない。全く難しいよね人間てさ。あいつは神だけだ。

だからタロちゃんはいつでも、ユイネの傍にいたいと思ってる。ユイネが無理をしないように常に傍にいてあげたいと思ってる。……だけど溜まった仕事を片付けなくちゃセウンリヒが泣くし、そうするとユイネが怒る。どうにもならないジレンマに、僕の主は不機嫌なまま仕事をしているってわけだ。

「じゃ、そろそろ行く？ きつとサーシャが首を長くして待ってるよ」

「うっん」

今日はこの後『白銀』の神殿へ遊びに行く予定になっている。『白銀』の半身であるサーシャは、少し前に元気な男の子を出産した。

「行つてらっしゃいませ。ユイネ様。テル様」

がくん、と腰を折ってフェンナが慌てて一礼をする。

「はい。行つてきます」

ユイネは毎回、律儀に返事をかえす。それはどんな相手に対して
も同じだ。ここに来て彼女はちよつとだけ遅くなった。以前はお
どどとして遠慮がちに口に使っていた言葉を、きつちりと言えるよう
になったのだ。それは自分の為に言っているんじゃない、自分を
大事にしてくれる相手に伝える為に、言葉を使うようになったとい
う事だろう。……タロちゃんも少しは見習って欲しい。

ユイネは顔を上げたフェンナと視線を合わせ、ほによ、としか形
容できないような笑顔を彼女に向けた。

『白銀』の神殿は深い森の中にある。幾重にも重なる様々な緑が生き生きと輝いて呼吸をしている。ユイネは大きく深呼吸をして、いつ来ても素敵だね、と感嘆のため息をついた。

神殿には女官長の力エナントが控えていて、すぐに部屋へと案内してくれた。

「いらつしゃい！ ユイネちゃん、待ってたわよ！」

サーシャがとびつきりの笑顔で両手を広げ、その勢いのままユイネに抱きついた。

「こんにちは。お邪魔します」

「さあ座って！ 最近ずうっとこもりつきりだから退屈しちゃって！」

元気なサーシャに腕を引っ張られ、圧倒されながら笑顔を返すユイネ。

ゆるやかなカーブを描く薄茶色の髪を肩に垂らし、真っ白のサマードレスのような軽やかな装いのサーシャ。彼女と会うのは守り人達が一堂に会した挨拶の時以来だ。

「レイルード君もお元気ですか？」

「ええとっても！ ダーリンにそっくりですっごい格好良いのよ」

「わあ……お昼寝中ですね。可愛い」

ユイネが窓際に置かれたベビーベッドを覗き込んで笑った。僕もその隣に立ち、赤ちゃんの寝顔を見つめる。まだまだ生まれたばかり

りで、手も足も何もかもがちちゃくて可愛らしい。僕は人差し指で赤ちゃんのふくふくのほつぺたをちよんとつついた。

「ね？ この唇なんかダーリンにそっくりでしょ？」

うーん。生まれたてすぎて正直良く分からないなあ。ユイネが楽しそうに笑った。

「そうですね。あ、旦那さんは？」

「出張中よ」

おそらく土地の視察か扉の監視かで留守にしているんだろう。守り人は結構忙しい。サーシャは『白銀』の守り人の半身で、もう九百年以上、守り人を支えながら世界の秩序と均衡を見守り続けている。

そしてそれがあと二十数年で、終わりを迎えようとしていた。

「ねえティエル。どうしてあなた子供の格好のまんまなの？」

お茶とお菓子が用意されたテーブル席について、サーシャが僕に向かつて言った。

「もう戻るでしょ？」

「あ……。そう言えばテル君、本当はタロさんとそんなに変わらないう年格好なんだったよね。すっごく綺麗で美青年で、初めて見た時びっくりしちゃった。もう心臓とまるかと思ったよ」

そう言っ僕を見るユイネに、肩をすくめて答えた。

「こっちのが気に入ってるんだ」

「……ふうん」

目を細めてにやりと笑うサーシャ。

「なにさ。その顔」

「ティエルつてば、やらしいっ!」

別に良いでしょ。男の子のフリしてユイネと手を繋いだり、ユイネに抱きついたりするくらいさ。

「ふふつ。まあ良いわ。やっと愛しの半身を手に入れたんだもんねえ! 気持ちは分かるわよ。タロちゃんなんかきつと興奮して、夜もたいして眠れてないんじゃないの?」

サーシャはそんなタロちゃんを想像して、それから可笑しそうにあははと笑った。……ここに本人がいなくて良かった。遠からず当たってるからね。

「あの、サーシャさん。ありがとうございました」

「ん? なあに?」

「ふーちゃんの事とか、私に力を分けてくれた事とか……本当に、ありがとうございました」

「んふふ。良いのよ。それより私の方こそ、ユイネちゃんになんにも言わないで勝手なこととしてごめんなさいね」

「そんな。良いんです」

「だってね、私、タロちゃんにすっごい怒られちゃったの」
「えっ」

ぽかんとするユイネの顔を見て、サーシャが口元に笑みを浮かべながら身を乗り出した。

「あの子、あなたの事がとっても大切で大好きみたい。『漆黑』ってあんなに可愛かったのね！」

ぽかんとしたまま、ユイネは赤面した。その顔が面白くて僕もサーシャも吹き出して笑った。

「いや〜ん！ らぶらぶよねえっ。素敵っ」

「そ、そそそ、そんなんっ！ そんなこ、ことはっ！」
「ユイネどもりすぎっ」

ユイネは真っ赤な顔のまま難しい表情を作り照れ隠しにお茶を少しずつ飲んで、それを見て僕らはまた笑った。

「……私にはね、分かつちゃってたのよ。あの時にね」

サーシャがユイネのこじんまりとした手に、そっと自分の手を添えた。

「ユイネちゃんならきつと、ふーちゃんの事も乗り越えられるし『漆黑』の事だつて救ってくれる。そう感じたの。だからね、私あの時から、ヨーコちゃんじゃなくてあなたが、『漆黑』の半身になつてくれたらなつて勝手に思ってたの」

「サーシャさん……」

ユイネの瞳がうるうるすると潤んでいく。僕はそれを見て、きゅっと胸が詰まる思いがした。ああ……やっぱ君は、心のどこかでまだ遠慮していたんだ。

本当に自分なんかで良かったのかと不安になっていたんだ。自分なんか神の半身で良いんだらうかって、自信を持てずにいたんだ。

だけど君はそんな事、一度も口にしなかった……。

最初から、ユイネじゃなきゃ駄目だったんだよ。他の何かの代わりなんかじゃない。ユイネだから、好きになったんだよ。

だから、君はここにいて良いんだ。

「もう一度ちゃんと言わせてね。ユイネちゃん、何も心配いらない大丈夫よ。あなたは決して一人じゃないわ。きつとあなたなら、タロちゃんと一緒に歩んでいける」

「サーシャさん。ありがとうございます……。私……。私もいつか、サーシャさんのような素敵な人になりたいです」

「まあ！ うふふつ。嬉しいわっ」

そのあと昼寝から目覚めた未来の『白銀』がわんわん泣き出して、サーシャがお乳をあげて僕とユイネであやして寝かしつけたりして、あっという間に時間が過ぎていった。

「あつ！ そういえばね、いつこどうしてもユイネちゃんに聞いたい事があったのよ」

帰り際、僕と同じくらいの背丈のサーシャが、ユイネを見上げてうふふと笑った。何ですか？ とユイネが首を傾ける。

「タロちゃんのどこが好きなの？」

「……え？」

「やっぱり顔かしら。守り人達はみんな美形ぞろいだもんね！ タロちゃんは背も高いし格好良いわよねっ」

「い、いえ……。どっちかっていうと整ってる人は苦手で……」
「あらっ。そうなの」

その時、ユイネは何かに思い当たったような顔をした。

「あれ……タロさんの好きなところ……え、ええと……」

それからうーんと唸って考え込んでしまったので、僕は慌ててユイネの手を取った。

「じゃあねサーシャ！ また来るから。『白銀』にもよろしくっ」
「えっ！ ちょっとまだ答えがっ」

さっさと帰ろう。ユイネが深く考え込んで、そんなにタロちゃんの事が好きじゃないかもって気付いちゃったら大変だ。だって僕が言うのもなんだけど、僕の主は本当に我が儘だし俺様だし怒りっぽいし、そのくせうんと傷つきやすく寂しがり屋だ。とにかく面倒な奴なんだ。神さまじゃなかったらどうしようもない奴なんだ。それでどれだけ僕が苦労してるか。

……全く世話の焼ける奴だなっ！

083（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
途中ですが少しばかり。

番外編（テル君の苦労話）は残りあと2話です。短いですがお付き
合いいただけたら嬉しいです。

「孤独な魂 あたたかな軌跡」を読んでいただき、本当にありがとう
ございました。

「あ。テル君、一番星だよ」

ユイネと手を繋いで、湖のほとりをてくてく歩く。

僕がすれば神殿までひとつ飛びで帰れるんだけど、今はユイネが新しく手にした力を使う練習をしてる。瞬間で行きたい場所へ移動する為には気の流れを掴み、その鼓動を聞いてイメージを作ってから飛ばなくてはならない。ユイネがやると何故だかいつも神殿じゃなくて、その手前、湖のほとりに飛んでしまう。

「あの一番星って……ガルクールプではリシア・ルウっていうんだよね？」

立ち止まって空を仰いだ。幼い闇が溶ける藍色。白に輝く一つ星。まだ地平線は夕日の赤で染まっている。

「うん。そうだよ」

「綺麗だね」

「……光をもたらす、慈愛のぬくもり。その魂」

僕らの世界ではあれをたとえば「半身」という。

「テル君。私、大丈夫だよ」

穏やかな声に、僕は少し背の高い彼女を見上げた。

「なんかね、すっごくやれそうなのがしてるから」

ユイネはきりりとした顔を作って、片手でどんと胸を叩いた。それから繋いでいる手にきゅっと力がこもる。優しくて柔らかな気が、あたたかい魂の鼓動が僕を満たしていく。

「そりゃあ知らない事もたくさんあるし、何せ私は宇宙人だけど。でも焦ってもいないんだよ」

「ユイネ……」

「やっぱり不思議だね。あのお守りは私が五歳の頃からずっと大事にしたものだから、あの漆黒の珠がいつでも私の居場所を教えてくださいましたから……。ずっと変わらないの。それが今の私の命。だからなんにも怖くないんだ。それに……それにね」

少しだけもじもじして、ユイネは俯いた。ちよつと耳が赤い。

「いつでもタロさんが傍にいてくれるような気がするんだ」
「……うん」

僕はユイネのあたたかな手を、ぎゅっと握り返した。

「そ、それから、半身になって分かった事があるんだよ」
「え？」

「人の命って、すごいんだね。きらきら輝いてて、ぴかぴかで、とっても瑞々しい」

「うん。……ねえ、ユイネ」

少し顔を傾けて僕を見るユイネに向かって、微笑んだ。

「僕、ユイネの事好きだよ」

ありがとう。ユイネ。

「うつ……うつ、うん。あ、ありがとう、テル君」
「なんてどもるの」

笑いながらユイネの手を引いてまた歩き始める。きっとユイネは赤面してる。ユイネが僕の「微笑み」に弱いつて事、僕は知ってるんだから。素直で本当に、可愛いなあ。

——おいっ！ 何をもたもたしている！——

タロちゃんの声が直接響いてきて、僕とユイネは目を丸くして立ち止まった。

「タロさん」

——俺は腹が減ってるんだっ。さっさと帰って来いっ！——

「す、すみません」

それから二人で顔を見合わせて、くすりと笑った。

*

いつも食事の時は三人だけでテーブルを囲むようにしている。給仕やなんかも全て僕がして、この時ばかりは場所がガルクールプの神殿の中でも、ユイネの部屋にいた時と変わらない。もうこれは習慣のようになっていた。

相変わらずタロちゃんは大食らいで、邪魔そうな髪を一つに結わ

えてがつがつと勢い良く食事を進めていく。ユイネは一生懸命に料理と向き合い、もぐもぐと美味しそうに味わう。他愛ない会話を挟みながらテーブルを囲むこのひとときは、何ものにも代えがたい。真摯に料理と向き合うユイネを眺めるのも、僕の密かな楽しみだったりする。

そのあとはお風呂に入って、それぞれ仕事をしたり勉強の復習なんかをしたりして夜が更けていく。今夜は晴れていて綺麗な夜空が見えるから、きっと二人はお酒を呑みたいと言うに違いない。僕は食後の片付けをしてからテラス席に簡単な肴と冷やしたお酒を用意した。ムードのある灯りをテーブルに置いて、腕を組んでひとつ頷く。

「うん。カンペキ」

今夜こそは、二人に少しでも先へ進んでもらわないとね。

「最近妙に気が利いて気色悪いな」

その声に振り返り、Ｔシャツにジャージ姿の背の高い相手を睨みつけた。

「タロちゃんがふがいないからいけないんだろっ。僕ほど主想いの良い奴はいないと思うんだけど！」

「なんだそれは」

言いながらドカッと椅子に腰をおろして、僕の用意したお酒をどぼどぼとグラスについだ。もう少し神さまらしく優雅な物腰でやれないもんだろうか。

実のところタロちゃんはまだ守り人の力を完全に発揮出来ていないわけではない。神と半身、魂の伴侶になったは良いけど二人の関係

はそれ以前とたいして変わっていなかったりする。お互いの気を交換して心も身体も深く繋がる事で、より強い力と固い絆が生まれる。そして何度もそれを繰り返す事で双方の異能の力は精度を高め、意思疎通もスムーズに出来るようになるんだ。

別に焦ってはいないんだけどさ、ユイネの気が変わらないうちに進めておきたいんだよね。

「わあつ。テル君、ありがとう」

スウェット姿のユイネがにこにこしながらこつちに歩いてくる。ユイネってば、お酒を見た時が一番テンションがあがる。

「ちょっと呑みたい気分でしょ？」

「うん。すごいね、良く分かったね」

お風呂上がりのユイネは花の良いにおいがする。スウェット姿でふにやりと笑う彼女に色気が足らないとか、そんなものあいつには関係ない。だって何があってもユイネはユイネで、そんな彼女があいつは大好きだからだ。

「ルーウィってほんとに美味しいですよ。高級な日本酒みたいな味で」

「ふん。あれもなかなか良かったな。ビールもうまかったぞ」

「あは……。そういえばタロさんが発泡酒はいやだっていうから、酒代がかさんで仕方なかった」

「何か言ったか」

「い、いえ」

夜が深まるにつれてお酒もすすんでいく。二人は椅子を隣りに並べて座り、夜空にかかる美麗な月を眺めている。距離はバッチリだ。

だけどさっきから二人の会話、こんなにしつとりとした良い雰囲気なのに色っぽい話になりそうにない。ユイネの学生時代の話とか、ヨーコ（本当はヒロシって名前だけど）の喫茶店の話とか。それはそれで楽しそうにしてるから良いんだけど……うーん。ちょっと違うんだよなあ。どうしたもんかなあ。

「おい」

腕を組んで考え込む僕の目の前に、空になった酒瓶があらわれる。僕はタロちゃんを睨みつけながらそれを奪い取って、おかわりを取りにどすどすと部屋を後にした。

最小限に灯の絞られた回廊は月に照らされて青白く光っている。真つ黒な湖に浮かぶその様はとても幻想的だ。追加のお酒を手にも、今夜も無理そうだなあと諦めのため息を吐いて扉を開いた。

「おいユイネ」

「はい」

「あまり慣れん事をしようとするなよ」

僕は半分開いた扉を、そうつと閉じた。ちょっとだけ開けたままにしておいて様子をうかがう。覗き見は良くないけどさ。

「え？」

ユイネが隣に座るタロちゃんを見上げた。

「お前は阿呆のくせに、自分の器以上の事をしたがるからな」

ああタロちゃんの馬鹿。そんな言い方じゃあユイネにちゃんと伝わらないじゃないか。それじゃ嫌味だよ。

そう思ったけれど、僕の予想に反してユイネはとても嬉しそうに、恥ずかしそうにはにかんだ。

「……はい。大丈夫です。ありがとうございます」

そうか……。僕が心配する必要もないみたいだ。

僕は扉の隙間から二人を見つめて微笑んだ。タロちゃんはある事を行いながらも優しい表情をしていた。ユイネにはちゃん

と、言葉の裏にあるタロちゃんの思いが伝わっているんだ。

「あの……タロさん」

「なんだ」

「あ、あの……」

「だからなんだ。さつさと言え」

ユイネはごによりと何かを呟いて、俯いた。

「ん、おい。もう少し声を……」

「あのつ。タ、タロさんは私のどこが、その、好きなんでしょうか
っ！」

俯いたまま、ユイネは大きな声を出して一気に言い切った。多分
恥ずかしくて顔を上げられないんだろう。そんな彼女を驚いた表情
で見下ろしていたタロちゃんが、ごそりと居住まいを正し、ごぼん
と咳払いをして言った。

「魂だ」

ああ馬鹿。その言い方だとユイネじゃなくて、ユイネの魂が好き
みたいに聞こえちゃうだろ。いや、間違ってないけど、それじゃあ
ユイネには分かりづらいし……ああ難しいな。

「……あ、そうですか……。そうですね、やっぱり……」

心なしかしよくれたユイネの声。ふぬ、とタロちゃんが鼻から
息を吐いた。

「全く、くだらん事を聞く奴だな」

「はい……。すみません」

「馬鹿者っ」

「うっ。ごめんなさい」

「そんなもの、お前だからに決まってる！」

腕を組んで夜空に顔を向けたままのタロちゃんを、ぼんやりとユイネが見上げる。

「お前のどこが、なんてそんなものではないっ。……お、俺はだな、ユイネ。お前がお前だから、好きなんだ！ お前の美しい魂もあたたかな気も、気弱なくせに変に頑固な性格も、地味なくせに味のあつ。その顔もだな、くそっ！」

恥ずかしまぎれに悪態をついて、タロちゃんはまた大きく息を吸った。

「とにかくだ、ユイネ！ お前だから、良いんだ。お前以外にはあり得ない！ お前でなければ意味を為さないっ。お前だから、俺は生きていけるんだ！ お前が、俺の全てだっ！！……ど、どうだつ。これで分かったか！」

僕は絶句した。どうしてこいつは、もつとスマートな言い方が出来ないんだろう。なんて乱暴で強烈で、熱烈な告白なんだろう……。……ただとそれで僕は分かった。

同じ理由で、ユイネもサーシャの質問に答えられなかったんだ。そのユイネは今や両手で顔を覆って俯いていた。

「……おい。人が必死に答えているのにお前は何をしている」

「も、十分です。あの……。う、嬉しすぎて……。その、絶対変な顔してます……。私」

「元々変な顔だろう。どれ、見せてみる。笑ってやる」

ぐ、とタロちゃんがユイネの手首を掴んだ。無理矢理その手を引きはがして顔を上げさせようとする。

「い、いいですっ！　ちょっ、やめっ……」

ユイネを見て、はっとしたようにタロちゃんの動きが止まった。二人の視線が絡み合い、時間が止まってしまったみたいな静寂がおとずれた。魅入られたようにお互いを見つめる。

愛おしさに、心が震えた。

月の光に照らされた二人は、それからゆっくりと近づいていった。僕はそろそろと扉を閉めてその場を離れた。全身がふわりと優しくぬくもりに癒されていく。胸がどきどきして苦しくて、なのにとっても幸せで、嬉しくて嬉しくて仕方ない。じんわりと力が満ちていく。

「ふふっ」

スキップしそうなくらい上機嫌で回廊を歩いていた時、突然タロちゃんの声が響いた。

——おい、テル。何をしている。さっさと酒を持って来い——

……え。キスだけ？　そんな……。

「もうっ！　タロちゃんの意気地なしっ」

仕方なく引き返そうとした時、回廊の先に人影を見つけた。どう

したんだろっ……こんな時間に。

「フエンナ？」

声をかけると大きな影がびくりと震えて、おそろおそろこちらを振り返った。

「あ……テ、テル様」

「どうしたのさ。こんな時間に」

フエンナはしょぼしょぼとまばたきをして、腰を折って頭を下げた。

「申し訳ございません。お茶を淹れる練習をしてまして、それから少しお掃除もしておこうと思って……」

顔を上げずに慌てて説明を始める彼女に近づきながら続きを促す。

「え？ こんな時間までかい？ 誰かに言われて？」

「いいえ！ わ、私が勝手に……。その、いつも失敗ばかりして、あの、ご迷惑をおかけしているので少しでも思いましたっ。そ、それで自分の部屋に帰ろうとして……」

「ああ……」

僕はくすりと笑った。手に雑巾を握り締めて、ひつつめたお団子の髪をとところどころほつれさせている彼女を、どうして怒る事が出来るだろう。

「また迷っちゃったんだね」

「……はい。申し訳ございません……」

「良いよ。フティには内緒にしといてあげる。僕が連れてってあげよう。さ、顔を上げて」

フェンナのちっちゃな両目には涙が溜まっていた。その瞳が、びっくりしたように見開かれる。

「テツ、テル様っ!？」

「うん？」

そこで気がついた。背の高いはずの彼女と、僕の目線とが同じ位置にある。僕は自分の身体を見下ろして、ああ、とため息をついた。

「元に戻っちゃった」

手も足も伸びて、決して子供には見えない容姿。本来の僕の姿。満たされた力のおかげで、僕は青年の姿に戻ってしまっていた。

「まあいいや。おいで、こっちだよ」

「は、はいっ」

一気に緊張が増して真っ赤な顔をしたフェンナを連れて、回廊を歩き始める。

「……ねえフェンナ」

「は、はいっ」

「どうしてお茶を淹れる練習なんかしてたの？」

「あ……。あの、ユイネ様が」

「うん？」

「ユイネ様が、いつも私の淹れるお茶が美味しいと言ってくださいます。いつも私の顔を見て、言ってくださいます」

「ああ、うん」

「……ユイネ様はお優しい方です」

ぴたりとフェンナの足が止まったので、後ろを振り返った。フェンナは両手で雑巾を握り締め、真っ直ぐに立っていた。ぎゅっと結ばれた口元がぶるぶると震え始める。

「……わ、わだすつ。ユイネ様の笑ったお顔が好きなんだず！ だが少しでもお役に立ちたいで、思ってたんだず。一日でも早く仕事に慣れでつ、立派な女官になりたいんだず！」

僕は呆氣にとられてぼんやりとフェンナを見つめた。

「……えーと。すつごいなまつちやってるけど」

「あ！ も、申し訳、ございませんっ」

「あははっ」

フェンナ……。君は知っているんだね。

異世界からやって来て『漆黒』の守り人の半身になったユイネに対して、反発している民達がいる事を。ユイネはとびきりの美人でもないし、人を威圧するような迫力もない。優しくて穏やかなユイネは、敵意を持つ者から見ればすぐになめられてしまう。

だけどそんな事、僕もタロちゃんも決して許さない。

「ふふ……。ありがとう。ユイネは僕の大事な人だから、よろしくね」

「はいっ！」

真っ直ぐなフェンナの気持ち、とても嬉しい。僕は闇に溶ける湖に視線を向けた。湖面がきらりと月に輝いている。

世界はこんなにあたたかいものだなんて、この数百年、ずっと気付かなかった。

「……ねえだけども、焦らなくて良いんだ。フェンナ、君は君のやり方で、進んだら良いんだよ。君にしか出来ない事が必ずあるんだから」

そうだ。焦る必要なんかなかった。急ぐ必要もない。
そうでしょ？ 唯音。

少しずつでもちよつとずつでも、進んでいけば良いんだ。自分のやり方で、自分の速度で。それが正解だ。

焦らなくて良い。誰かと比べて自信をなくす時もあるし、進んでいたのにまた後退してしまう時だってある。評価されない時もあるし上手いかわなくて悔しい時もある。だけど結局は、自分らしく進むしかないんだ。自分の速度で、少しでも前へ進もうと決めて。

フェンナは今にも泣きだしてしまいそうな顔で、けれど強い光を宿した瞳で、僕を見ていた。

「テル様……あ、ありがとうございます。わだす……一生懸命、頑張ります」

「うん。頼もしいね」

大丈夫。これからだ。

僕らの時は、今、これからなんだ。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2760/>

孤独な魂 あたたかな軌跡

2011年5月8日22時55分発行